

# 福岡南バイパス関係

## 埋蔵文化財調査報告

第 3 集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)

1976

福岡県教育委員会

# 福岡南バイパス関係

## 埋蔵文化財調査報告

第 3 集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)

## 序

この報告書は、福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて昭和46年度から49年度にかけて実施した一般国道3号線福岡南バイパス建設路線内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、筑紫郡太宰府町所在の御笠川南条坊遺跡(1)の続編をなすものです。

十分な報告ではありませんが、本報告書を通して年々失われてゆく埋蔵文化財に対し、一層のご理解とご協力をいただければ幸いです。

なお、調査に対してご協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮により本書を刊行することができましたので、ここに心からの感謝を申し上げます。

昭和51年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

## 例　　言

1. 本書は、国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して、昭和47・48年度に実施した御笠川南条坊遺跡の第3次、第4次発掘調査の概要報告です。
2. 調査は九州地方建設局福岡国道工事事務所の委託を受けて、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

### 第3次調査報告

一.	新原正典
二.	新原正典
三.	前川威洋
四.	新原正典
五. 1~10	前川威洋
11~15	新原正典

### 第4次調査報告

一.	新原正典
二.	前川威洋
三.	新原正典
四. 1~5	前川威洋
6~11	新原正典
10	倉住靖彦
五.	前川威洋、新原正典

4. 付録として第5次調査出土木製品の樹種鑑定報告書を収録した。
5. 掲載写真の撮影、実測図の作成および製図は執筆担当者が行なったが、一部は石丸洋・松村登美子氏にお願いした。
6. 本書の編集は前川威洋、新原正典が担当した。

# 第 3 次 調 査

## 本文目次

	頁
一. はじめ	2
二. 調査経過	4
三. 層位	5
四. 造構	6
1. 建物・柱穴	6
2. 溝	6
3. 土塁	8
4. 井戸	12
五. 遺物	13
1. 下層土師器・Ⅰ類	13
2. 上層土師器・Ⅱ類	27
3. 須恵器	48
4. 片口	48
5. 火舎	50
6. 彩釉陶器	50
7. 磁器	51
8. 雜器	57
9. 灰釉陶器, 古瀬戸, 常滑陶器	60
10. 瓦	60
11. 石製品	60
12. ガラス製小玉	62
13. 金属製品	62
14. 銅錢	63
15. 木製品	65

## 図 版 目 次

	本文対照頁
図版 1	4
1. 遺跡全景航空写真.....	4
2. 遺跡全景（北から）.....	4
2	6
1. 上層遺構全景（東から）.....	6
2. 上層遺構全景（西から）.....	6
3	6
1. 上層遺構全景（西から）.....	6
2. 西区上層遺構（北から）.....	6
4	6
1. 下層遺構全景（東から）.....	6
2. 下層遺構全景（西から）.....	6
5	6
1. 東区下層遺構全景（北から）.....	6
2. 西区下層遺構全景（北から）.....	6
6	6
1. SD 301 溝土層.....	6
2. SD 302 溝（南から）.....	6
7	8
1. SK 310 土塹.....	8
2. SK 325 土塹.....	8
8	8
1. SK 317 土塹.....	8
2. SK 318 土塹（右） SK 319 土塹（左）.....	8
9	8
1. SK 323 土塹.....	8
2. SK 333 土塹.....	8
10	8
1. MK 29 区土塹 .....	8
2. SK 309 土塹.....	8
11	6
1. SD 301 溝（左） SD 304 溝（右） 土層.....	6
2. SD 305 溝（左） SD 306 溝（右）.....	6
12	8
1. SK 345 土塹.....	8
2. SK 339 土塹.....	8
13	8
1. SE 301 井戸.....	8
2. SE 301 井戸.....	8
14	12
1. SE 303 井戸.....	12
2. SE 303 井戸.....	12
15	18
SK 339 土塹出土遺物.....	18
16	25
1. SD 305 溝出土遺物（右最上はSK 339 土塹出土）.....	25
2. 白磁（左上），青磁.....	51

圖版17	1. 彩釉陶器.....	50
	2. 彩釉陶器.....	50
18	1. 白磁 2 類, 青磁 1 類.....	51
	2. 白磁 3 類.....	51
19	1. 白磁 4・5 類.....	51
	2. 白磁.....	51
20	1. 白磁 6 類.....	51
	2. 青磁 7 類 (1) .....	51
21	1. 青磁 7 類 (2) .....	51
	2. 青磁 7 類 (3) .....	51
22	1. 青磁 9 類 (1) .....	51
	2. 青磁 9 類 (2) .....	51
23	1. 青白磁.....	51
	2. 高麗青磁.....	51
24	1. 白磁 (SK 312 土塗下部) .....	27
	2. 土師器長頸瓶 (SK 345 土塗), 褐釉瓶.....	48
25	1. 雜器.....	57
	2. 灰釉陶器, 古瀬戸.....	60
26	1. 石製品.....	60
	2. 金屬製品.....	62
27	1. 銅錢.....	63
	2. 下駄.....	66
28	1. 磨書木札 (1) .....	66
	2. 磨書木札 (2) .....	66

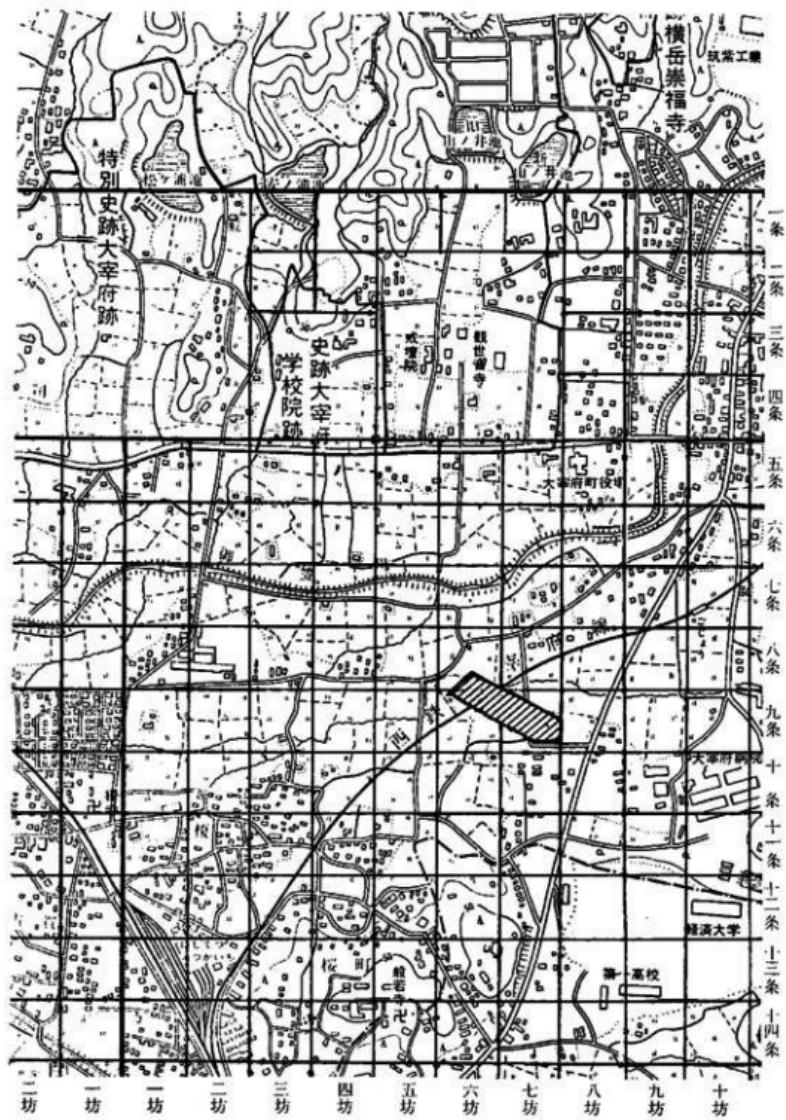
## 挿 図 目 次

	頁
1図 遺跡位置図.....	1
2図 遺跡全図.....	3
3図 E列東西壁・24列南北壁土層図.....	5
4図 上層遺構配置図.....	折込み 7~8
5図 下層遺構配置図.....	折込み 7~8
6図 S E 301 井戸実測図.....	11
7図 S E 303 井戸実測図.....	12
8図 土師器実測図 (S K 341 土塙出土) .....	14
9図 土師器実測図 (M F 35区暗灰色粘質土出土) .....	16
10図 土師器実測図 (S K 339 土塙出土-1) .....	19
11図 土師器実測図 (S K 339 土塙出土-2) .....	20
12図 土師器実測図 (S K 339 土塙出土-3) .....	21
13図 土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、綠釉香炉、白磁実測図 (S K 339 土塙出土-4) .....	22
14図 土師器、黒色土器、瓦器、白磁実測図 (S D 305 溝出土) .....	26
15図 土師器実測図 (S K 312 土塙出土-1) 上一上部、下一下部 .....	28
16図 土師器実測図 (S K 312 土塙出土-2) 上一上部、下一下部 .....	29
17図 土師器実測図 (S K 312 土塙出土-3) 上一上部、下一下部 .....	30
18図 白磁、瓦器実測図 (S K 312 土塙出土) 上一上部、下一下部 .....	31
19図 土師器実測図 (S K 338 土塙出土) .....	35
20図 土師器実測図 (576~585-M I 31・32区 S D 305 溝かぶり 黄褐色粘質土出土、586~588-S K 340 土塙出土) .....	36
21図 土師器実測図 (S K 317 土塙出土) .....	38
22図 土師器実測図 (S K 309 土塙出土) .....	39
23図 土師器実測図 (S K 304 土塙出土) .....	41
24図 土師器実測図 (M F 33区暗茶褐色土(4層)上部出土) .....	42
25図 土師器実測図 (S K 333 土塙出土) .....	43
26図 土師器実測図 (S D 301 溝出土) .....	45
27図 各溝出土土師器実測図 .....	47
28図 土師器実測図 (S D 304 溝出土) .....	48
29図 須恵器、土師器、片口、火舎実測図 .....	49

30図 彩釉陶器実測図.....	50
31図 青磁、白磁実測図.....	52
32図 白磁実測図.....	53
33図 青磁、天目、高麗青磁実測図.....	54
34図 青磁実測図.....	55
35図 雜器実測図.....	58
36図 文字瓦拓影.....	59
37図 石製品実測図.....	61
38図 金属製品実測図.....	62
39図 銅錢拓影.....	64
40図 下駄実測図.....	66

## 表 目 次

	本文対照頁
1表 発掘調査工程表.....	2
2表 土塙一覧表.....	9～10
3表 S K 341 土塙出土土師器計測表.....	15
4表 S K 341 土塙出土土師器の法量.....	15
5表 M F 35区暗灰色粘質土出土土師器の法量.....	17
6表 M F 35区暗灰色粘質土出土土師器計測表.....	17
7表 S K 339 土塙出土土師器の法量.....	23
8表 S K 339 土塙出土土師器計測表.....	24
9表 S D 305 溝出土土師器計測表.....	25
10表 S K 312 土塙下部出土土師器（A類）の法量.....	32
11表 S K 312 土塙上部出土土師器（B類）の法量.....	32
12表 S K 312 土塙下部出土土師器計測表.....	33
13表 S K 312 土塙上部出土土師器計測表.....	34
14表 S K 338 土塙出土土師器計測表.....	35
15表 S K 338 土塙出土土師器の法量.....	36
16表 S K 317 土塙出土土師器の法量.....	37
17表 S K 317 土塙出土土師器計測表.....	38
18表 S K 309 土塙出土土師器の法量.....	39
19表 S K 309 土塙出土土師器計測表.....	40
20表 S K 304 土塙出土土師器計測表.....	40
21表 M F 33区暗茶褐色土（4層）出土土師器計測表.....	42
22表 S K 333 土塙出土土師器の法量.....	44
23表 S K 333 土塙出土土師器の計測表.....	44
24表 S D 304 溝出土土師器計測表.....	47
25表 銅錢計測一覧表.....	65



1図 遺跡位置図 (1/10,000) 続山猛著『大宰府都城の研究』より

# 一、はじめに

御笠川南条坊跡は昭和46年度から昭和49年度にかけて6次にわたる発掘調査を行ない、昭和50年度には第5次調査分の報告として『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集を刊行した。今回の報告はそれに続くもので、昭和47年度第3次調査と48年度第4次調査分についての報告であるが、とくに第4次調査では銅印の出土という成果を上げることができ、九州歴史資料館の倉住靖彦氏に文献面からの考察をお願いした。

また、第5次調査にて出土した木製品の樹種鑑定結果が判明したので併せて報告する。鑑定については九州大学農学部の松本勇、林弘也両先生にお願いした。厚くお礼を申上げる次第である。

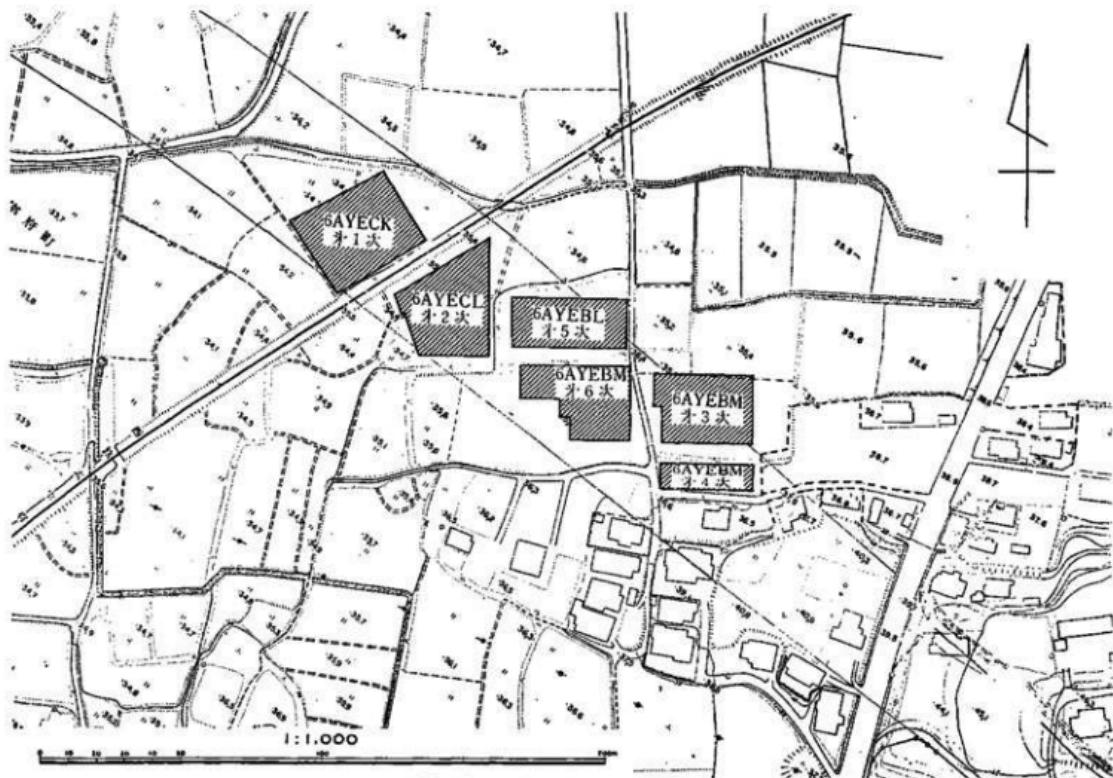
発掘調査関係者は次の通りである。

庶務担当者	福岡県教育厅管理部文化課主査	師 関 清
同	主事	浅 龍 二
同		大 神 新
発掘担当者	同	技師 前 川 威 洋
同		浜 田 信 也
同		新 原 正 典
調査補助員（第4次）		赤 鮎 敏 男
		菊 池 法 信

なお、本書の作成にあたっては松村登美子、土居隆臣、島田光一氏の、発掘作業には地元の方々の協力を得た。厚く謝意を表する。

調査次	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	6 AYECK	2,000m <sup>2</sup>	昭和46年10月11日～昭和47年3月20日 昭和47年8月18日～昭和47年9月12日
第2次	6 AYECL	1,000m <sup>2</sup>	昭和47年9月13日～昭和48年3月17日
第3次	6 AYEBM	1,000m <sup>2</sup>	昭和48年2月10日～昭和48年6月19日
第4次	6 AYEBM	700m <sup>2</sup>	昭和48年9月10日～昭和49年1月10日
第5次	6 AYE BL	1,400m <sup>2</sup>	昭和48年11月22日～昭和49年3月20日
第6次	6 AYEBM	1,050m <sup>2</sup>	昭和49年4月8日～昭和49年8月24日

1表 発掘調査工程表



2図 遺跡全図

## 第3次調査

### 二、調査経過

第3次調査は昭和48年2月10日より6月19日までの期間で6AYEBM区で行なった。

6AYEBM区は前回に報告した6AYEBL区南東の一段高い水田（標高35.6m）で、大宰府政府中軸線より東へ約730mの地点にある。地番は太宰府町大字太宰府字泉水2743-1である。

本発掘に先立ち前年度に耕作土を排除していたので3mグリッドの設定と第2層床土からの発掘作業を行なった。2月19日から3層黒褐色の掘り下げにかかるが、調査区をさらに東側へと拡張するため23日から耕土の移動と耕作土からの掘り下げを行ない、3月5日から3層の発掘にかかる。

3月9日より上層焼土混黒褐色土面の遺構検出作業に入り、かなりの柱穴などが発見されるが同一レベルでの北側では遺構はほとんど検出されない。12日より一部遺構の発掘を行ない、ML29区の長方形土括からは青磁小皿の完形品7枚が出土する。17日にはG列においては東西に延びる溝と、その南側で井戸の掘り方を検出す。23日には東側溝コーナー底面にて「咒咀」墨書き札を発見する。27、28両日は全景及び遺構の写真撮影を行ない、4月3日より上層遺構の実測作業に入る。

4月5日から実測が終了した地区的上層遺構を順次掘り下げる。その日のうちに早くもSD305溝を確認し、12日はSD304溝、20日にはSD306溝と、下層ではこれらの溝を主体とした遺構を検出するが軟弱な青灰色粘質土に掘り込まれているための発掘作業は困難をきわめた。また溝は平面からは十分に見分けられないために、断面を追ながら発掘を進めた。

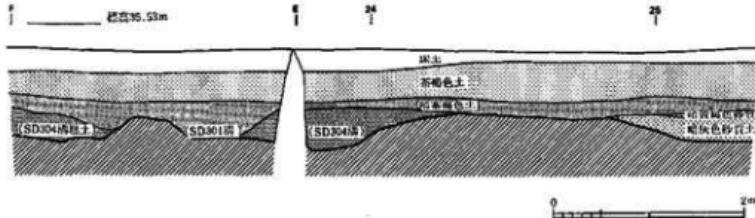
5月9日SE503井戸の写真撮影を行なう。15日にはMK34区でSD306溝と切り合った井戸を検出するが、軟弱な砂層と激しい湧水のため調査続行は危険性を伴い、抜き跡の確認を行なって調査を断念した。26・27日及び30日にかけて写真撮影を行ない、31日より下層遺構の実測を始める。

6月5日に井戸を取り上げてすべての発掘作業は終了するが、実測はひきつづき行なう。なお、実測と併行して次回調査区の表土除去作業をする。17日にて遺構及び土層図の作成を完了。19日に器材を撤収して第3次の調査を終える。

### 三、層位

土層はほぼ水平であるが、部分的に乱れたり複雑になっている部分もある。しかしきくみると、1層は耕土で約10cm程度である。2層は茶褐色の床土で鉄分を多く含んでいて、厚さ約10~15cmである。3層は同じく茶褐色土であるが鉄分を含んでいない、厚さ30~40cmである。遺物を含んでいるが細片が多い。4層は暗茶褐色土で10~20cmの厚さがあり、糸切り底の土師器が多く出土し、完形土器や大形破片も多い。5層は暗黄褐色砂質土層と暗灰色砂質土層で、大きめの糸切り底土師器杯が出土している。6層は暗灰色粘質土でヘラ切り底土師器が出土している。

各層の出土遺物は1・2層は近世の土層で新しい陶磁器類が出土している。3層は鎌倉時代の糸切り底土師器が出土しているが、小さな破片が多く、造構面も認められない。4層はSD301溝や井戸、柱穴、土塙などの遺構があり、糸切り底の土師器、青磁、陶器など多くの遺物が出土している。しかし細部にわたると複雑な層位があり、今後土器型式ともつきあわせて再検討の必要がある。5層は特に北西部で認められるが他の部分では土塙など、遺構として残っているところが多く、大きめの糸切り底土師器、白磁などが出土している。6層は発掘区域の東半の北壁に近い部分に残っているが、溝や土塙としても認められる。出土遺物はヘラ切り底の土師器で高台付続もある。以上のように各層が認められ、地表から地山までの厚さは約1~1.2mである。これらの土層のうち、3・4層を上層、5層は中層とでもよぶべきであるが、6層とともに下層として取扱った。



3図 E列東西壁・24列南北壁土層図

## 四、遺構

第3次調査では上・下の2面において遺構が検出され、上層では東西に延びる大溝と井戸を下層でも溝と井戸を検出している。土塗・柱穴ともに多数みつかっている。

### 1. 建物・柱穴

径20cm内外の柱穴は多数見つかっている。とくに調査区の南側中央部付近で密に見られるが、SD301溝の北側においては検出されていない。建物跡として想定できるものは2棟分確認でき、一つはMM28~30区付近に見られるものと、他はMM35区にて見られるものである。前者は桁行4間（柱間2.0m）梁行2間（柱間2.0m）の東西棟で柱穴内には根石を1~2個据えた比較的大きい建物である。後者は桁行2間（柱間1.8m）梁行1間（柱間1.7m）の南北棟掘立柱建物であるが、南側は調査区外のため更に延びるかどうかは不明である。2ヶ所の柱穴には平坦な根石がみられる。またMJ35区では根石を配した柱穴が3個東西方向に並び、西側より1.8m×1.9mの柱間をもつものがあるが対になる柱穴は検出できなかった。

以上のように検出した柱穴数に比して建物としてまとまるものは少なく、比較的明確なもののみを取り上げたが詳細な検討を加えれば更に建物としてまとまるものは増加するであろうし、併せて構造や規模、尺度の問題など建物については今後解明されるべき点が多い。

### 2. 溝

上層では調査区の北側において東西に延びるSD301とその東端で接するSD302及びSD303溝が、下層では西側において南北に延びるSD304と東西方向に延びるSD305・306・308の5条の溝が検出されている。いずれも素掘りの溝である。

SD301は調査区北側にて検出された大溝で、東西方向よりやや北へ片寄っている。最大幅3.6m、最少幅1.7mで中央部付近にてやや狭くなる。底面は西の方へわずかながら傾く。断面は中央畦部分では幅2.5m、底面幅0.6m、深さ0.45mを測り、ゆるやかなU字状の立ち上がりをなす。また、MG35区の東端にてSD302溝コーナーと続いているが底面は一段高くなつて直接には接続していない。溝内にはほぼ全面に黒土を帯びた暗茶褐色土が堆積し、底面は青灰色粘土層に掘り込まれている。溝内からは糸切り底の土師器を主体とし一部ヘラ切り底土師器も出土しているが溝と切り合った下層土壇のものも混入している。その他に須恵器、青磁、白磁、片口、縁軸、瓦、とりべ、常滑焼、金属片など各種のものが出土している。

SD302はSD303溝東端に溝コーナー部分が接続するもので、調査区の東壁面に接して溝のたち上がり部と思われる地山が確認されており、東西方向から北へと方向を転換する溝西側コーナー部と考えるが、推定では4.5mほどのものと思われ、底面幅も約3mと幅広い大溝であ

る。深さは0.7mで底面は平坦面をもってゆるく立ち上がり S D301溝底面より0.1mほど深い。溝内では上から灰褐色砂質土、明黒褐色腐植土、黒褐色腐植土の堆積が見られ、青灰色粘土層まで掘り込んでいる。溝内には40cm前後の礫や大きな流木がみられ、底面にはりついで「急々如律令」などの咒語を墨書きした木札が10点余り発見されている。糸切り底土師器を主体として須恵器や青磁、白磁、下歎齒、箸などが出土している。S D301溝とほぼ同時期のものである。

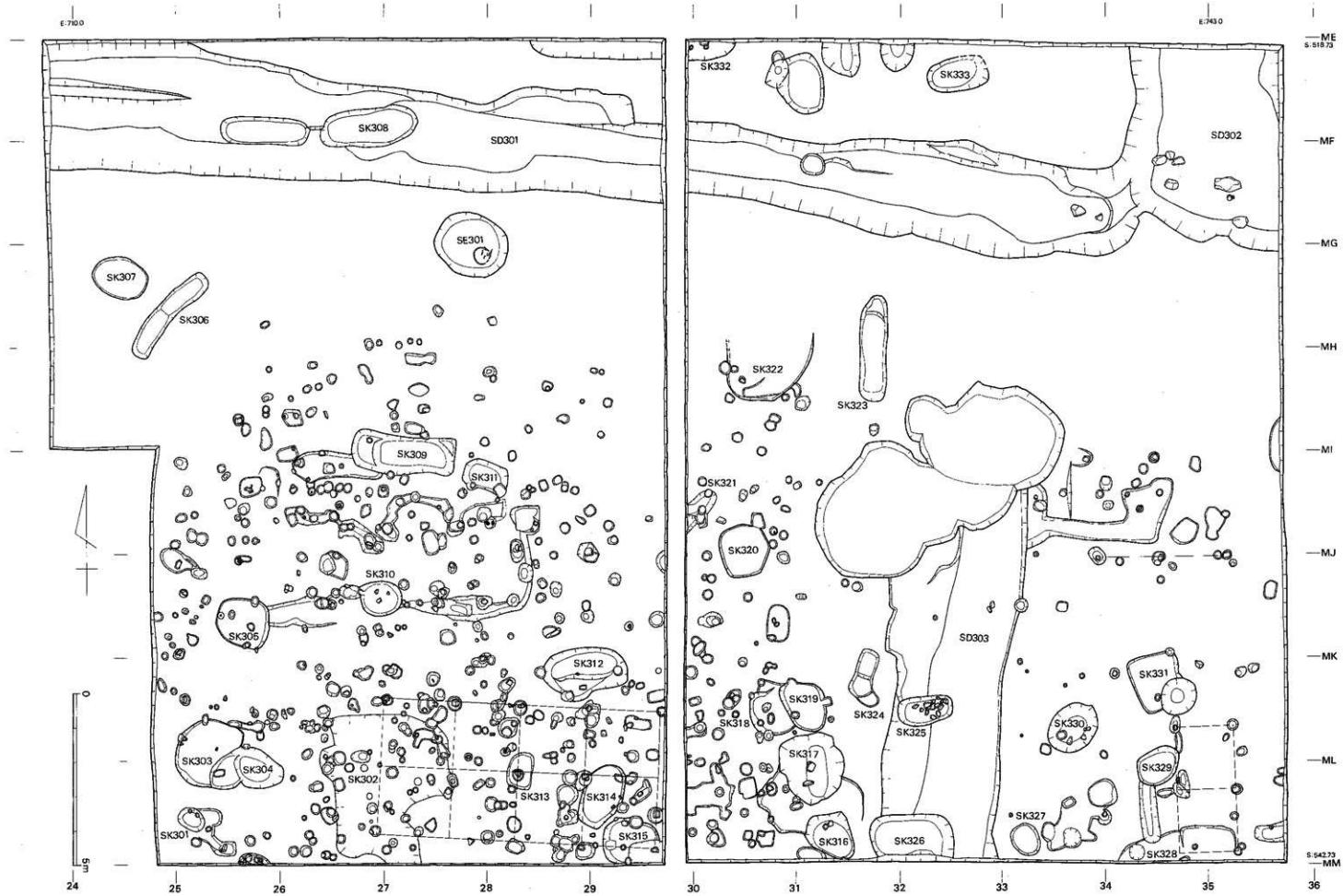
S D303 は南側にて検出された南北溝で、3.5mほどの幅をもつ広いものであるが深さは0.1mと浅くだらだらと底面へとつづくものである。南端は調査区外へ延びるものであるが北端はM J 35区付近にて切られていてそれより北へは延びない。

S D304 は南北方向に延びる溝でやや東へ偏る。幅約1.4m、深さ0.2mの浅い溝で北へと傾斜している。南端にて東から延びる S D305 溝と交わる。灰褐色土の堆積がみられ、ヘラ切り底土師器、黒色土器などやや古い時期のものが多く、瓦類の出土も他の溝に比して多い。なお24列南北壁土層の観察においても S D304溝の埋土の中に S D301溝が掘り込まれて明らかに溝の切り合い関係が認められた。（3図、図版6の1）

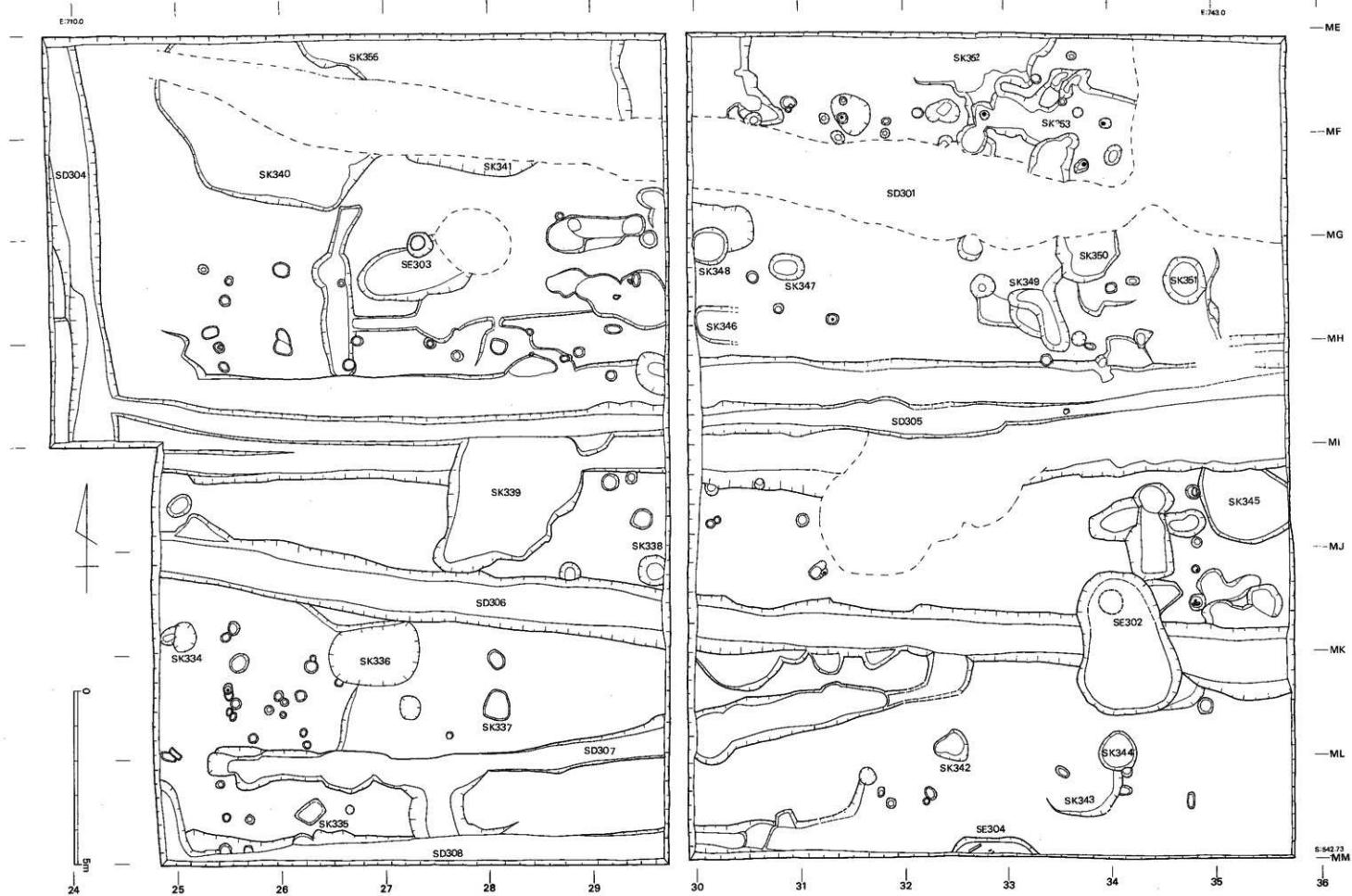
S D305 は中央部をほぼ東西方向に延びる溝で二段に掘り込まれているが1条の溝としてとらえた。溝内から出土する遺物は上段・下段とともにヘラ切り底土師器と糸切り底土師器を伴出するが、下段掘り込みの最下層ではヘラ切り底土師器のみ出土していて両者は区別できるのかも知れない。下段の溝はヘラ切り底土師器の時期まで遡ることは当然である。規模は上段で幅3.5m、底面幅3m、深さ0.2mと浅くて幅広く、下段のものは幅0.9m、深さ0.5mの立ち上がりのつよいV字溝である。上段には褐灰色土、下段上部には暗褐灰色土、下部には暗灰色粘土の堆積がみられ、青灰色砂層の地山面まで掘り込んでいる。西端にて S D304溝と交わるが出土遺物からみて S D304溝の方が先行するかあるいはほぼ同時期の頃のものと考えられる。S D304溝より西へは延びない。東側では下段の掘り込みは浅くなつて上段の底面とほぼ同一となる。西へゆるやかに傾斜している。出土遺物は土師器の他に須恵器、青磁、白磁、黒色土器、瓦、石鍋などが出土している。

S D306 は S D305溝の南にて検出され、西側では接近するが東側ではやや離れる。幅1.8m深さ0.5mのゆるやかなU字状のもので暗灰色粘土の堆積が見られ、西へ傾斜している。東側において S E402井戸により切られている。ヘラ切り底土師器、須恵器、青磁、縁軸、瓦、石鍋、鉄片などが出土している。

S D307、308は南端にて検出された浅い小溝で、ともに東西方向に延びるが両端ともに行き止まる。ヘラ切り底土師器などを出土している。



4図 中層造構配置図 (1/100)



5図 下層遺構配置図(1/100)

### 3. 土 塚

今回検出した土塚は上層で約50基、下層で約30基を数え、形態、規模などの点でそれぞれ差異を示している。

S K303, 305, 310, 318, 327などは円形に近い形をなすものでSK327のように径が1m以下のものからSK303のように2mを越すものまであるが、浅いものが多い。SK318はSK319に切られているが底面に粘りついて銅板、銅製筒金具、鉄片、磁石、轆羽口、とりべなどを出土している。鍛冶関係の遺物が多く見られるが工房跡とは考えられない。

S K301, 304, 307, 316, 322, 329, 330は椭円形ないし不整円形をし、長径と短径の比が比較的大きいものである。SK301のように小形のものやSK322のように大形のものもあるが概して1.5m内外のものが多く、深さも円形のものに比して深く遺物も多く出土している。

S K311, 325, 333など長径1.5m前後、短径1m以下の小形長方形土塚は長軸を東西方向にとるものが多い。SK325は20cm内外の縁を底面に雄然と並らべている。遺物の出土はない。SK333は底面に黒色の灰が堆積し、その上部からは約50枚の多量の土師器が出土している。これら一派の土塚は前回報告した第5次調査でも同様なことがいえ、墓塚的性格をもつものとも考えたが、内から出土する遺物は土師器から瓦、鍛冶関係品まで多種にわたっており、遺物の出土状況からすればそうとは言い切れない。

S K309, 312, 314, 317, 319, 326は長方形土塚でも大きい部類に属するもので、長径は短径のほぼ倍の長さをもつ。深さも比較的深く、多数の遺物を出土する。SK312は灰黒色土の堆積がみられ、完形の土師器約80枚と完形白磁小皿7枚が一括出土している。SK317からも鉄鏃、銅線切りくず、常滑焼など出土している。

S K306, 308, 323などは長径が短径の3倍以上ある細長土塚で、比較的浅く遺物の出土も少ない。

S K320, 331は方形をなすもので、SK320は不整形で青灰色粘土層まで達する深い掘り込みをもつ。

S K332は調査区北壁に接して検出され、大半は調査区外で完掘できなかつたが一辺が6m近くもある大きなもので、深さは0.2mを測る。内には黄褐色砂層をはさんで黒色炭化層が2層にわたって堆積している。炭化層からは土師器とともにとりべが出土している。

下層で検出された土塚の多くは椭円ないし不整円形をなすものが多く、長方形のものはあまりみられなかつた。SK338, 344, 348は径1m内外の円形塚でSK338は埋土に炭化物が含まれ、銅製の帶鉤と銅板切りくず、鉄鏃片などが糸切り底土師器と伴出している。

S K339は4mほどの大きな不整形をな落ち込み状の土塚で、SD305溝と切り合っているが溝に先行する。深さは0.45mほどで北へゆるく傾斜し、灰色砂層の堆積がみられる。やや古

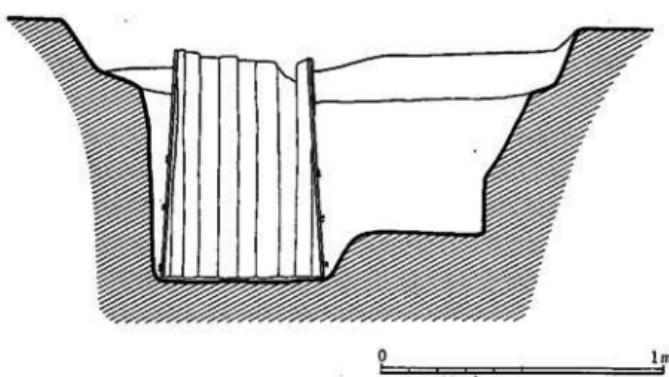
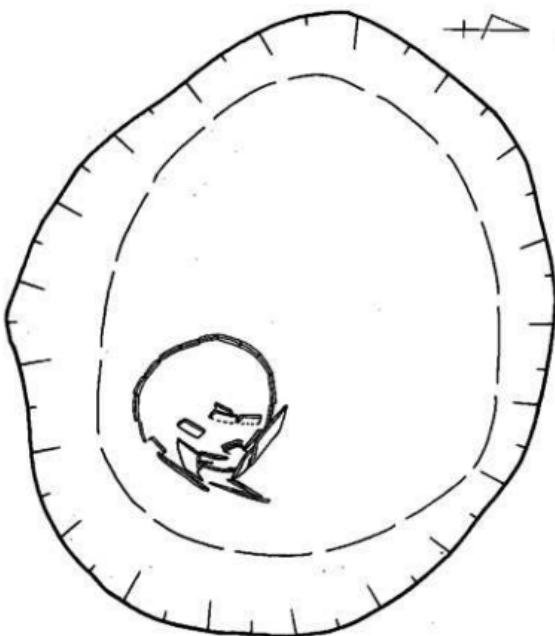
手のヘラ切り底土師器、瓦器焼、「平井」、「佐」などの文字瓦も出土している。SK345も長径3mを測る不整形な土埴で浅いものであるが、土師器の長頸瓶が完形のまま出土している。SK340、SK341も大きな落ち込み状塙でSD301溝に切られている。ともにヘラ切り底土師器を出土。

遺構番号	地 区	旧番号	平面形状	規 模		出 土 遺 物
				長径	短径	
SK 301	MM26	P-1	長円形	0.8 × 0.63 × 0.25		土師器II-4類、磁器7類、雜器7類 瓦、とりべ
〃 302	MM28		不整形	4.1 × 3.8 × 0.1		土師器II-1類、磁器7C・9類、 雜器1類、瓦、支脚
〃 303	ML26	P-3	不整円形	2.03 × (1.7) × 0.12		
〃 304	MM27	P-5 不整円形	不整円形	1.5 × 1.12 × 0.47		土師器II-3類、磁器6・7C・8・9類、 鐵石、片口
〃 305	MK26・27	P-5	円形	1.59 × 1.4 × 0.13		土師器II-4類、磁器7C類、瓦
〃 306	MH25		長方形	3.06 × 0.56 × 0.1		
〃 307	MH25		円形埴	精円形	1.63 × 1.2 × 0.11	土師器I-II類、磁器4・7A・7C類、 瓦
〃 308	MF28 土 塙	MH28 土 塙	長方形	2.84 × 1.11 × 0.58		土師器II類、とりべ
〃 309	MJ28	長方形埴	長方形	2.41 × 1.03 × 0.26		土師器II-4類、磁器3・6・7C・8類、 鐵石、雜器1・7・12類、片口、 滑石製品
〃 310	MK28		円形	1.19 × 1.02 × 0.2		
〃 311	MJ29	長方形埴	精円形	1.37 × 0.78 × 0.3		土師器II-4類、磁器6・7・7C・8類、 雜器7類、瓦、滑石製品
〃 312	ML30	長方形埴	長方形	2.47 × 1.28 × 0.56		土師器II-1類、磁器3・5・9類、 雜器1・7・8類、瓦、石鏡、鉛滓、 滑石製品
〃 313	MM28	P-6	長方形	1.06 × 0.7 × 0.24		
〃 314	MM30	P-4	精円形	1.92 × 1.15 × 0.22		土師器II-4類、須恵器
〃 315	MM30	P-5	円形	1.65 × (1.5) × 0.2		土師器II-3類、須恵器、磁器3・7C・ 8類、雜器1・7類、片口、とりべ
〃 316	MM32	P-1	精円形	1.6 × 1.05 × 0.58		土師器II-3類、石鏡、片口
〃 317	ML32	長方形埴	精円形	2.08 × 1.75 × 0.5		土師器II-2・3類、磁器3・7・8・9類、 鐵器1・7・8・12類、滑石製品、片口、 鐵鋤、鉄切りくず
〃 318	ML32	方形埴	隅丸方形	1.31 × (1.3) × 0.17		土師器II-1・3類、磁器5・9類、 鐵製品、銅板、銅製品、磁石、片口
〃 319	ML32	P-1	精円形	1.5 × 1.16 × 0.18		土師器II-2・3・4類、常滑、 とりべ、瓦、鐵滓
〃 320	MK31		隅丸方形	1.54 × 1.44 × 0.63		土師器II類、磁器3類、雜器7・12類
〃 321	MJ31			0.57 × 0.17		土師器II類、須恵器、雜器7類、常滑
〃 322	M I 31・32	円形埴	不整形	2.32 × 0.1		土師器II-1類、磁器8・9類、常滑、 片口、とりべ、滑石製品
〃 323	MH32	長方形埴	長方形	3.11 × 0.76 × 0.29		土師器II-3類、須恵器、磁器1・6類、 瓦、常滑
〃 324	MH32	長方形埴	長方形	1.4 × 0.56 × 0.2		土師器II類
〃 325	ML33	長方形埴	長方形	1.61 × 0.85 × 0.28		土師器II-2類、須恵器、土鍋、常滑、 とりべ、石鍋、よいご豆口

遺構番号	地 区	旧番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物	
				長径	短径	深さ		
" 326	MM33	P-1 長方形埴	長 方 形	2.45	×(1.5)	×0.49	土師器 I-2・II-3類, 磁器 1類, 瓦, 常滑	
" 327	MM34	P-4 円形埴	円 形	0.94	×0.83	×0.17	土師器 I-2類	
" 328	MM35・36		不 整 形			0.11		
" 329	MM35	P-1	楕 円 形	1.38	×0.98	×0.21	土師器 I-2・II類, 須恵器, 瓦	
" 330	ML34	P-1	椭 円 形	1.54	×1.28	×0.27	土師器 II-2類, 磁器 5類, 雜器 7類, 瓦	
" 331	ML35		方 形	1.66	×1.49	×0.18		
" 332	MF29・30		長 方 形	2.96	×	0.24	土師器 II-3類, 雜器, とりべ	
" 333	MF33		長 方 形	1.78	×0.98	×0.1	土師器 II-5類, 避器 6・9類, 須恵器, とりべ, ガラス小玉, 片口	
" 334	MJ25		不整円形	0.85	×0.64	×0.15	土師器 II類, 須恵器, 瓦	
" 335	MM27	長方形埴	長 方 形	0.81	×0.56	×0.27	土師器 I-4類, 須恵器, 瓦	
" 336	MK27・28	落ち込み	椭 円 形	2.62	×(2.0)	×0.09	土師器 I-2類, 須恵器, 文字瓦, 磁石, 土鍋	
" 337	ML28	円形埴	不 整 形	0.87	×0.76	×0.12	土師器 I-2類, 須恵器, 鉄片	
" 338	MK30	円形埴	円 形	0.87	×(0.85)	×0.17	土師器 II-1類, 磁器 1・4類, 鉄滓, 蒂鉢, 銅板切りくず, 石錐	
" 339	M I・M J 28・29	落ち込み	不 整 形	1.8	+ α	×1.95	土師器 I-2類, 避器 1・3・4類, 羅物, 須恵器, 文字瓦	
" 340	MG 26・27	落ち込み	不 整 形	3.2		×0.25	土師器 I-2, II-1・3類, 磁器 7 D類, 瓦, 須恵器	
" 341	MG28・29	落ち込み		1.93		×0.16	土師器 I-2類, 避器 4・7・7 C類, 羅物 7・8類, 須恵器, 瓦, 片口	
" 342	ML33		不整三角形	1.1	×0.95	×0.34	土師器 I類, 須恵器, 瓦	
" 343	MM33・34	落ち込み	円 形 ?	2.3		×0.31		
" 344	ML34	P-5	円 形	1.5	×1.1	×0.24	土師器 I・II類, 雜器 7類, 片口	
" 345	MJ36	P-7	不 整 形	1.5	×1.17	×0.2	長頸土師器壺, 瓦	
" 346	MH31	P-2	長方形?	1.0	+ α	×1.1	×0.22	土師器 I類, 須恵器, 雜器
" 347	MH32		長 円 形	1.01	×0.75	×0.22	土師器 II類, 磁器 1・7 C類, 土鍋	
" 348	MH31	P-1	円 形	1.1	×1.05	×0.19	土師器 I-2類, 瓦	
" 349	MH34	土 壁	不 整 形	1.96	×0.74	×0.29	土師器 I-2類, 須恵器, 瓦	
" 350	MH34		長円形?	1.83	×1.3	+ α ×0.19		
" 351	MH35	円形埴	円 形	1.37	×1.23	×0.21	土師器 I-2・(I-4)類, 磁器 1類	
" 352	MF33・34	Npit		4.3		×0.1	土師器 I-2・II類, 磁器 1類, 須恵器, 瓦	
" 353	MF34	Spit	不 整 形			0.5	土師器 I-2類, 磁器 1類, 須恵器, 片口, 瓦, 雜器	
" 354	ML31	P-3	円 形	1.62		×0.22	土師器 (I-1) I-2類, 磁器 1類, 鐵物, 土鍋, 瓦, 須恵器	
" 355	MF27~30					0.18	土師器 II-1類, 須恵器, 瓦, 磁器 1・3類	

( ) 内は復元値, 単位m

2表 土 塚 一 覧 表



6図 S E 301 井戸実測図

#### 4. 井 戸

井戸は上層にて1基、下層にて3基の計4基を検出した。

S E301 は上層にみられるもので、S D301溝の南約1mのところで検出された。長径2.2m 短径1.9mの楕円形をなす掘り方の南東隅に寄せて桶側が設置され、深さは約1mで、北側底面は二段による掘り込みである。桶側は長さ80cm、幅8cm、厚さ1.7cmの板材を20枚組み合わせたもので、径約46cmを測り下端はやや開いている。洞中位より下に3ヶ所竹タガによる繋束がみられ、下端は褐色砂礫層に達している。桶側上部にはやはり桶の部材と思われる折損した板が10枚ほど見られ、さらに上段に桶側様のものが据えられたものであろう。前回報告の区分によればDタイプに属する形式のものである。掘り方には暗灰色土の堆積がみられ、糸切り土師器、陶器、片口、瓦を、井戸内からも糸切り底土師器、火舎などを出土している。

S E302 は下層において検出され、

S D306 溝を切って造られている。

長径4.2m、短径2.3mの不整円形掘り方をもつもので、井戸枠は確認されず抜き跡と思われるが、激しい湧水のため調査を断念した。掘り方よりヘラ切り底土師器、糸切り底土師器、青磁、白磁、常滑陶器、綠釉陶器、石鏡、下駄などが出土している。

S E303 は上層のS E301 溝に近接して造られ、径0.7m、深さ0.9mの不整円形を呈する掘り方ほぼいっぽいに曲物が2段据えらている。上の曲物は径40cm高さ22cm、下のものは径36cm、高さ21cmで上の曲物に比してやや小形である。ともに外面は上・下二重にまかれている。曲物の上端には竹タガが残存していて桶側の構築が考えられ、上段に桶側、下段に曲物を据えるCタイプに属するものである。掘り方底面には腐植した木の葉の堆積がみられ、井戸内

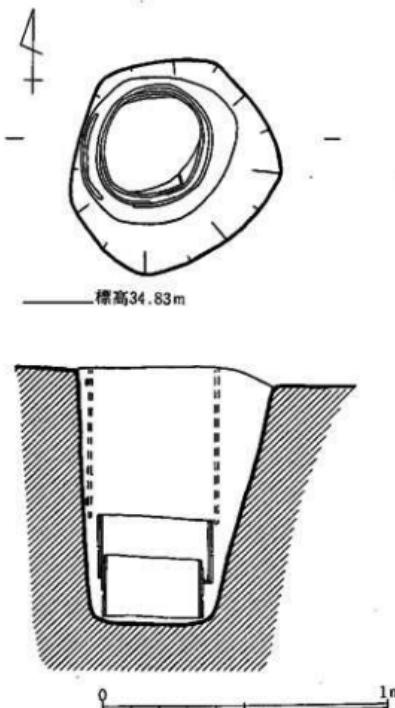


図7 S E303井戸実測図

からは糸切り底土師器、ヘラ切り底土師器、瓦などが出土している。

SE304は調査区南端の壁面に接して検出されたが、大半が調査区外にかかるため確認のみ行った。掘り方からは糸切り底土師器、青磁、片口などが出土している。

## 五、遺物

### 1. 下層土師器・I類(8~13図)

下層から出土したヘラ切り離し底(以下ヘラ切り底)の土師器を総称してI類とした。土師器はおもに溝や「落ち込み」ともいえる大きな土塙内からまとめて出土し、部分的に薄い包含層も認められる。なお他の地点からは、第3~5次調査区出土のものよりも古いと考えられるヘラ切り底をもつ土師器群があるので〔2〕からはじめることにする。

#### 〔2〕

##### SK341土塙(8図、3・4表)

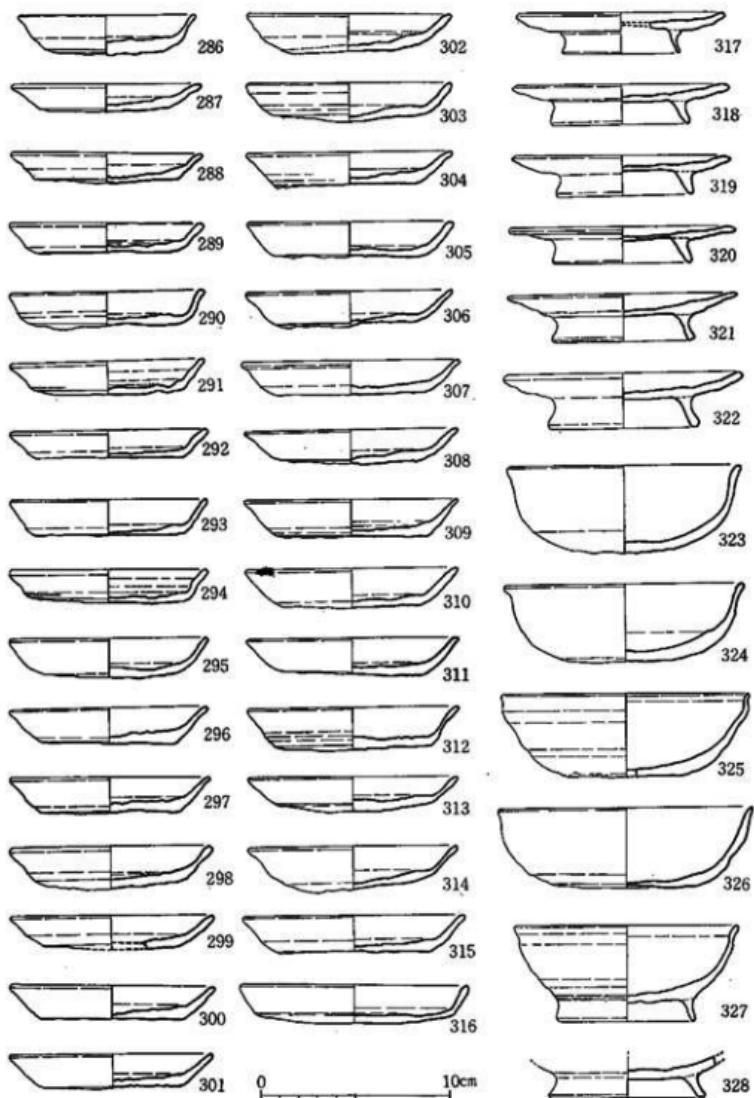
b. 小皿(I-2-b)(287~315) 口径は確実なところでは10.0~11.7cm、底径は6.85~8.5cm、器高1.4~2.3cmで、色調は灰褐色ないし暗灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。器面に横ナデ、内底にはナデがみられ、内底中央に同心円状の渦文がついているものも多い。底面にはヘラ切り痕と板目がついている。口縁はやや外反するものもあり、底部はヘラ切り離しのためか、少し丸味を帯びるものも多い。なお286と316はこのグループから除外した。

f. 高台付小皿(I-2-f)(317~322) 単に小皿に高台をつけたものではなく、皿部分に深みはなく、ほとんど平坦に近い。あるいは茶托のような用途に使用されたものかもしれない。口径は11.4~12.1cm、高台径7.2~7.7cm、器高1.95~2.95cmで、灰褐色ないし橙灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。器面に横ナデが、内底にはナデが、みとめられ、内底中央に渦文がついているものも多い。高台内底面にはヘラ切り痕や板目が残っているものもある。

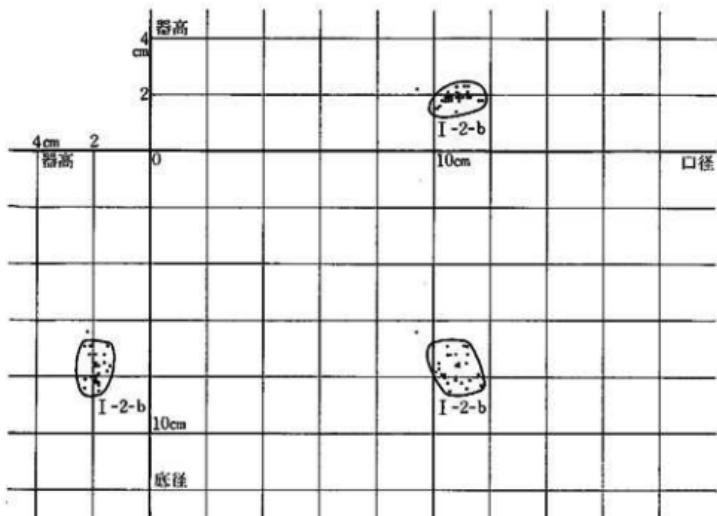
g. 梗(I-2-g)(323~326) 口径12.3~13.4cm、器高4.1~4.65cmで、底部にヘラ切り離し部分はあるが、丸底に近いため、底径は特別に計測していない。口縁はやや外反し、底部は丸底に近い形で、暗灰色ないし灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが内底には渦文とうすいナデがみられる。底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。

i. 高台付梗(I-2-i)(327) 口径11.8cm、高台径7.1cm、器高5.1cmの小梗で、口縁部は外側から力が加えられているため、やや外反している。暗黄白色を呈し、胎土に少量の砂粒を含むが、おおむね良好である。器面に横ナデが、内底には渦文とナデがみうけられる。高台内底面にはヘラ切り痕が残っている。小梗の量はきわめて少ない。

j. 高台付梗(I-2-j)(328) 量は多くないが高台付梗がある。高台径は8.2cmである。



8図 土師器実測図 (SK 341 土塗出土)



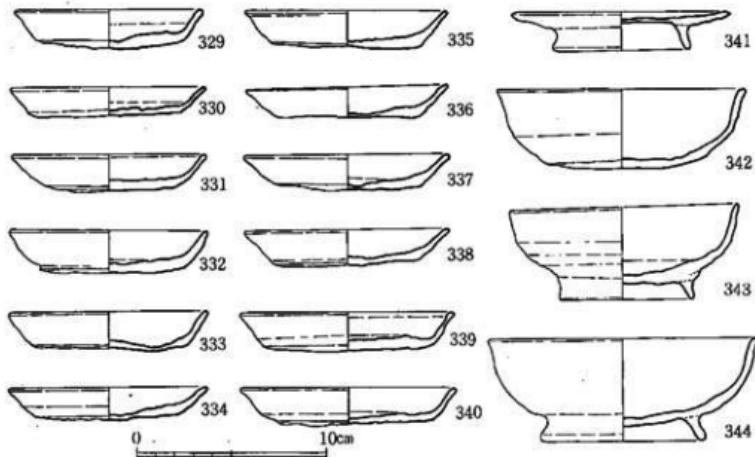
3表 SK341土塙出土土師器計測表

小皿				小皿				高台付小皿			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	高台径	器高
1	(9.4)	6.4	2.15	17	10.8	8.0	2.1	1	(11.0)	6.2	2.2
2	10.0	6.85	1.5	18	10.8	8.1	1.9	2	11.4	7.3	2.1
3	10.05	7.8	1.5	19	10.8	8.1	2.3	3	11.5	7.1	2.25
4	10.2	7.5	1.6	20	(10.9)	(7.6)	1.75	4	12.0	7.2	1.95
5	10.2	7.6	1.6	21	10.9	7.6	1.9	5	(12.1)	7.5	2.5
6	10.3	7.9	1.8	22	11.0	8.2	1.9	6	12.6	8.0	2.9
7	10.35	7.9	1.8	23	11.05	6.9	2.3	椀			
8	(10.4)	(8.0)	1.9	24	11.15	7.5	1.9		口径		器高
9	10.5	6.9	2.1	25	11.2	6.9	2.1				
10	10.5	7.2	1.9	26	11.2	7.2	2.1	1	12.3		4.65
11	10.5	7.8	1.5	27	11.2	8.4	2.25	2	12.6		4.1
12	(10.6)	7.2	1.9	28	(11.3)	(8.1)	1.85	3	(13.1)		4.5
13	10.6	8.5	1.8	29	11.6	7.9	1.8	4	13.4		4.2
14	10.8	7.2	1.85	30	11.7	8.3	1.8	高台付小椀			
15	10.8	7.4	2.0	31	12.0	10.6	2.1		口径	高台径	器高
16	10.8	7.6	1.8					1	(11.8)	7.1	5.1

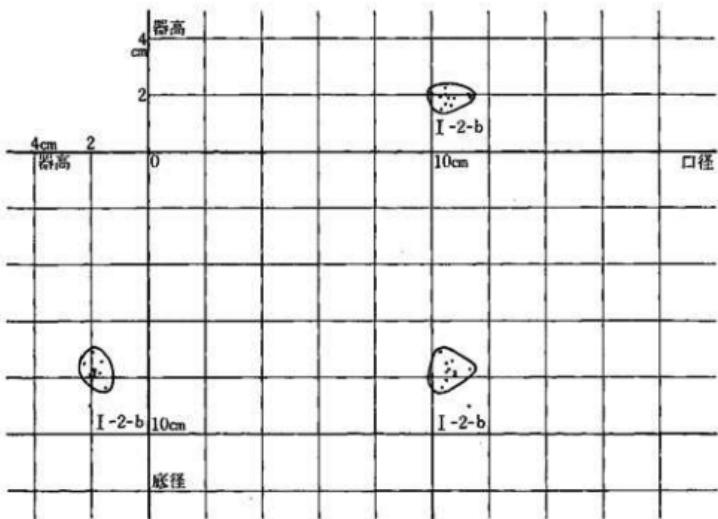
4表 SK341土塙出土土師器計測表

MF35区暗灰色粘質土（6層）（9図、5・6表）

- b. 小皿（I-2-b）（329～340） 口径10.0～11.35cm, 底径7.1～9.0cm, 器高1.5～2.25cmで、暗灰色ないし褐色を呈し少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが、内底にはナデが認められる。内底の中央に渦文が残っているものも多い。底面にはヘラ切り痕と板目がついている。
- f. 高台付小皿（I-2-f）（341） 口径11.5cm, 高台径7.3cm, 器高2.05cmで褐色黃灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。器面には横ナデが内底にはナデがついている。高台内底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。また高台の床付面にも板目が残っている。
- g. 梗（I-2-g）（342） 口径13.1cm, 器高4.2cmで褐色黃灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。器面には横ナデが内底にはナデがみられる。底面にはヘラ切り痕が残っている。
- i. 高台付小梗（I-2-i）（343） 口径12.1cm, 高台径7.1cm, 器高4.9cmで、口縁はややまっすぐである。色調は灰黄色で、胎土は砂粒が少なく良好である。器面には横ナデが、内底にはナデが認められ、高台内底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。
- j. 高台付梗（I-2-j）（344） 口径14.2cm, 高台径8.7cm, 器高5.4cmで褐色灰黄色で胎土は砂粒を多く含み粗い。器面は荒れていて調整ははっきりしないが、高台内底面にヘラ切り痕が残っている。



9図 土陶器実測図（MF35区暗灰色粘質土出土）



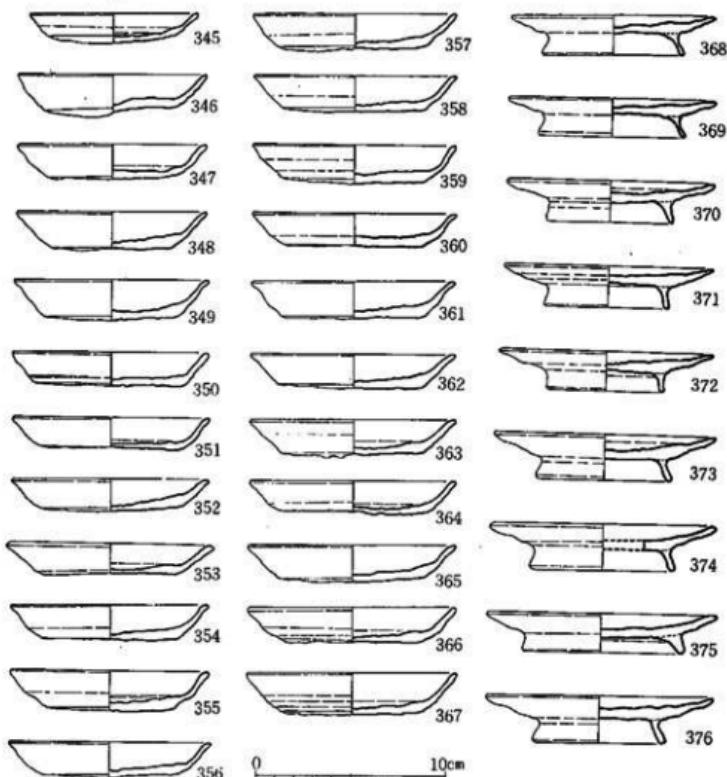
5表 MF35区暗灰色粘質土出土土師器の法量

小皿				小皿				碗			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	高合径	器高
1	10.0	7.9	2.05	9	10.8	7.8	1.9	1	13.1		4.2
2	10.35	8.25	1.5	10	10.8	7.9	1.9	高台付碗			
3	10.3	7.1	1.95	11	11.3	9.0	2.05		口径	高合径	器高
4	10.5	7.5	2.25	12	11.35	7.7	1.95	1	12.1	7.1	4.9
5	10.5	7.8	1.7	高台付小皿				2	(14.2)	8.7	5.4
6	10.5	8.1	2.0		口径	高合径	器高				
7	10.6	7.7	1.9								
8	10.7	7.4	1.65	1	11.5	7.3	2.05				

6表 MF35区暗灰色粘質土出土土師器計測表

S K339土塙 (10~13図, 7・8表)

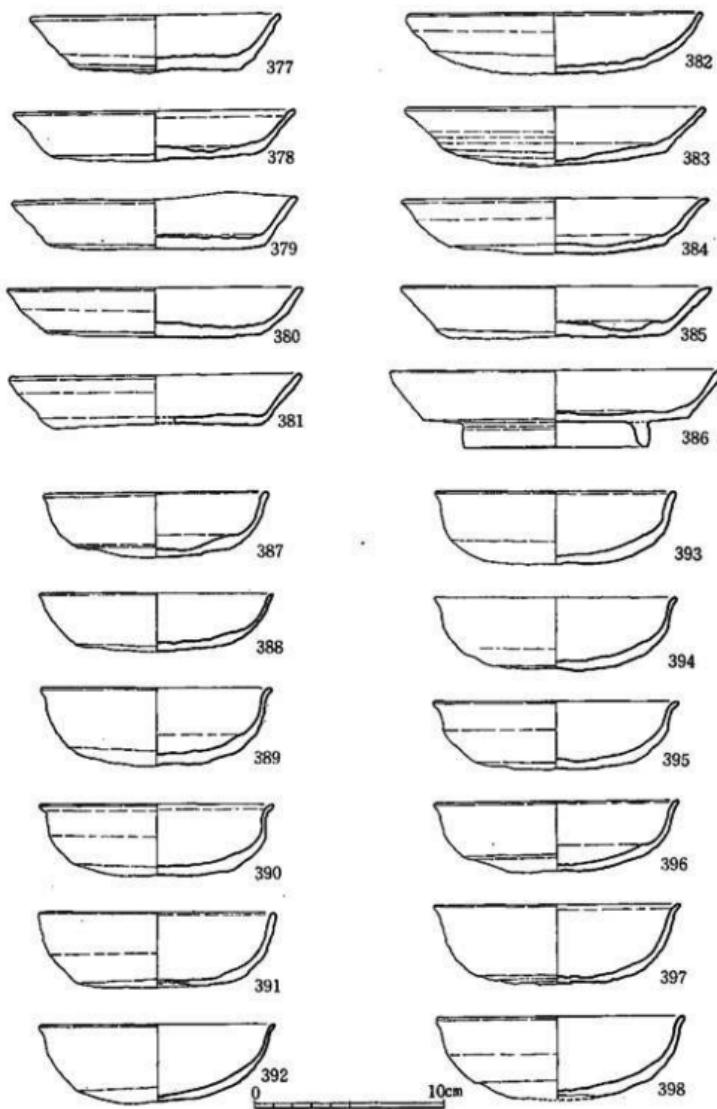
- b. 小皿 (I-2-b) (10図346~367) 口径 10.0~11.0cm, 底径 6.9~8.1cm, 器高 1.6~2.2cm と比較的小範囲にある。色調は灰色ないし褐灰色で、胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが、内底にはナデがみられ渦文のついたものも多い。底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。なお345は同じくヘラ切り底の小皿であるが、このグループからは除外した。
- c. 杯 (I-2-c) (11図378~385) 377は糸切り底の杯で口径13.2cm, 底径 8.2cm, 器高 3.0cm で、明らかに I-3-c に属するものである。378~385は口径14.8~16.3cm, 底径 10.8~12.2cm, 器高 2.6~3.2cm である。このうち381は糸切り底をもち暗灰色を呈し、胎土に少量の砂粒を含んでいる。残りのすべてはヘラ切り底をもつもので、褐灰色を呈し、胎土は精製されほとんど砂粒を含まない。両者とも器面には横ナデが、内底にはナデが施されている。底面には板目がついている。382と383は底部の丸味が強く、とくに382は浦城 I 類に類似し、丸底に近い。これら378~385は S K341土塙や MF 区暗灰色粘質土からは出土していない。S D305溝からこの S K339土塙が切られていることから、これらの杯は S D305溝の遺物が混入したものであろうと解釈し、I-4-c に入れてみたい。
- 高台付杯 (11図386) 口径 17.4cm, 高台径 9.9cm, 器高 4.1cm で、黄灰色を呈し、胎土は精製されて砂粒を含まない。器面には横ナデが、内底にはナデが施されている。杯の底部はおそらく糸切り底と思われ、高台床付面には板目が残っている。前述の杯に伴うものであろう。
- f. 高台付小皿 (I-2-f) (10図368~376) 口径 10.8~12.5cm, 高台径 6.2~8.5cm, 器高 2.05~2.6cm で、小皿より大きめである。色調は灰黄色ないし灰褐色で、胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが、内底にはナデが認められる。高台内底面にはヘラ切り痕が残っている。
- g. 梗 (I-2-g) (11図387~398) 口径 11.9~13.1cm, 器高 3.5~4.2cm で、口縁はやや外反し、丸底である。色調は灰黄色ないし褐灰色の白っぽい感じで、胎土に少量の砂粒を含む。器面には横ナデが、内底にはナデがつけられているが渦文が残っているものもある。底面にはヘラ切り痕と板目がみとめられる。
- 高台付碗形土器 (12~13図) この器形はほとんど同じで口縁がやや外反し、体部中頃で薄くなり、体部下部で厚みを増している。輪積の手法を感じさせるものがあるので、今後検討を要するだろう。器面には横ナデが、内底にはナデがみられる。また内底中央に小さく渦文がついているものもある。高台内底面にヘラ切り痕と板目が残り、高台床付面にも板目がついているものがある。色調は灰白色ないし黄灰色など白味がかったものが多く、胎土は砂粒を含んでいる。これら高台付碗形土器のうち、口径 12cm 前後のものを高台付小梗 (i), 口径 13~15cm のものを高台付梗 (j), 口径 15cm を越えるものを高台付大梗 (k) と便宜的に分けてみたが土器自体が厳密に分かれるものではない。



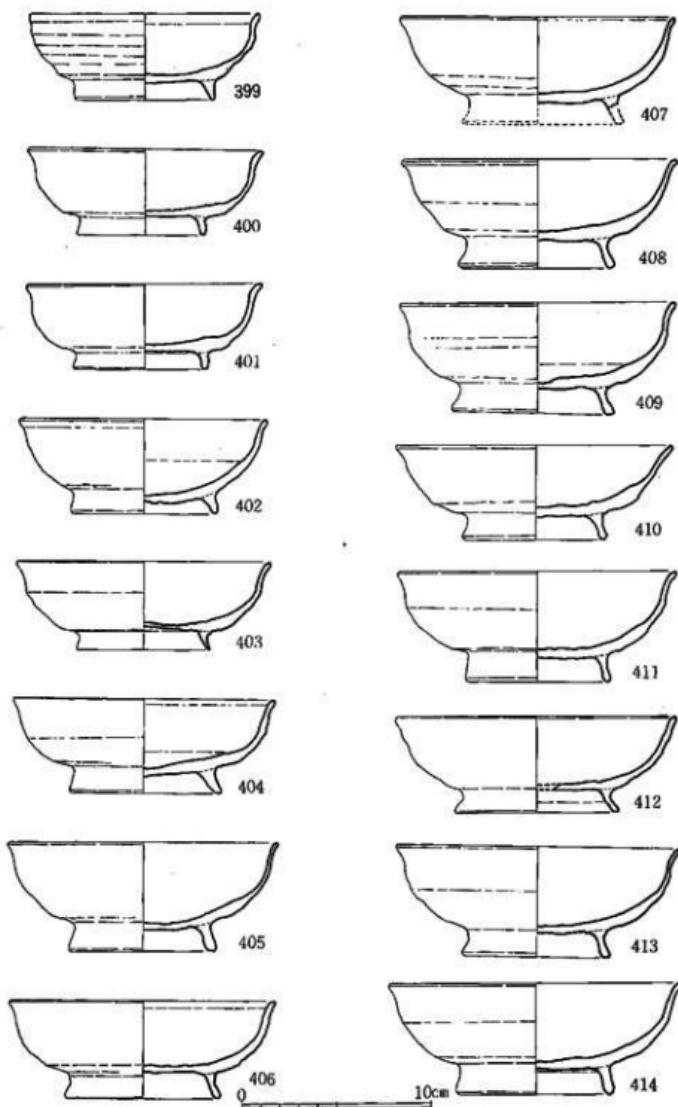
10図 土師器実測図 (S K339土塗出土-1)

- i. 高台付小椀 (I-2-i) (399~401) 口径 12.2~12.4cm, 高台径 6.75~7.4cm, 器高 4.5~4.6cmで、高台部がややまっすぐ立つ傾向がある。
- j. 高台付椀 (I-2-j) (402~413) 口径 13.05~14.9cm, 高台径 7.0~8.8cm, 器高 4.7~5.9cmで、一番普通のタイプであるが、椀よりは大きい。高台はやや開いている。
- k. 高台付大椀 (I-2-k) (414~418) 口径 15.35~16.3cm, 高台径 8.25~8.8cm, 器高 5.9~7.0cmで体部がややふくらんでいる。

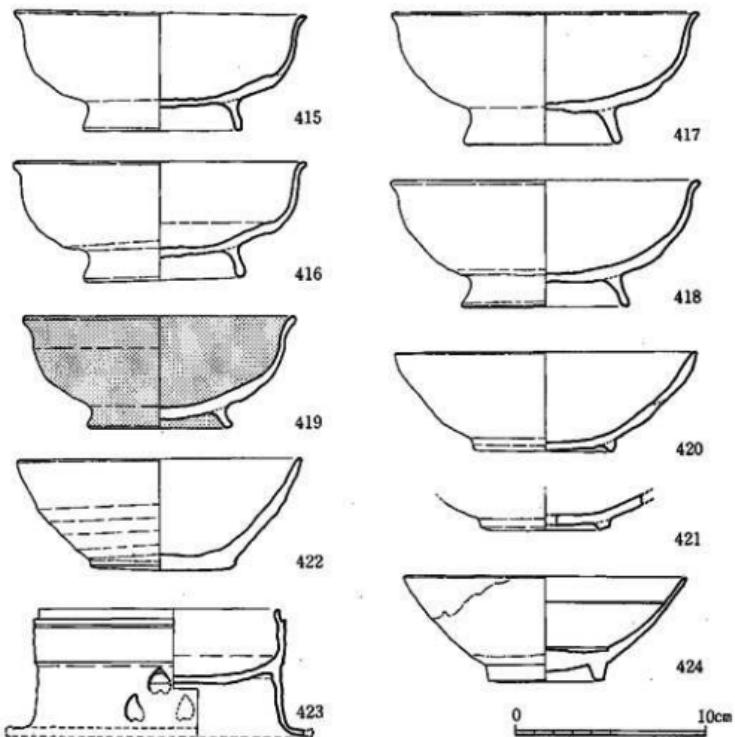
S K339 からは土師器のほかに黒色土器続、瓦器椀、須恵器椀、綠釉香炉、白磁碗が出土している。



11図 土師器実測図 (SK339土塙出土—2)



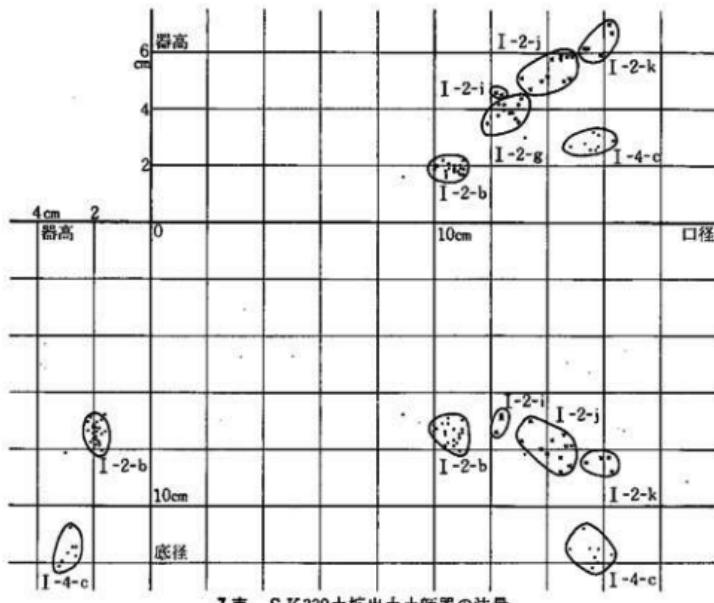
12図 土師器実測図 (SK 339 土塗出土—3)



13図 土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、緑釉香炉、白磁実測図 (SK339土塙出土-4)

黒色土器椀 (419) 口径 14.4cm, 高台径 7.6cm, 器高 5.85cm で、口縁はやや外反し、その下を強くおさえている。器面は黒色で、体部は横方向にいねいにヘラ磨きされ、内底部は二方向から磨かれている。胎土に少量砂粒を含んでいる。高台内底面に板目がついている。

瓦器椀 (420・421) 420は口径17.8cm, 高台径 7.5cm, 器高5.3cmで、内面は灰白色で、外面は黒色である。外面の口縁から三分の二に研磨のあとが認められるが、内面はヘラ状のもので横ナデがしてあり、研磨しているかどうかは不明である。底面と高台床付面に一連の板目がついている。胎土に細砂を含んでいる。421は底部で内面は黒色で研磨はみられない。外面は灰白色である。胎土に砂粒を少量含んでいる。



7表 SK339土塙出土土器の法量

須恵器壺（422）口径15cm、底径7.7cm、器高5.8cmの口の開いた壺で、須恵器質ではあるがそれより明るい灰白色で、瓦や片口の一部にみられる焼きをしている。器面には横ナデがみとめられる。底面にはヘラ切り痕と板目がついている。

縄輪番炉（423）口径12.7cm、器高およそ6.8cmで、口縁に蓋受部があり、その下に1本の沈線がいれられている。高い脚部は裾部で大きく開き、三個一組の透し文様が彫られている。釉は全面にたつぶりとかけられ、風化して灰黒色（鉛色）を呈しているが、一部に深緑色を示す部分があり、本来の色をうかがわせる。胎土は精製され、灰色を呈し、焼成は堅い。平安時代の縄輪番炉は朽木県日光男体山頂や愛知県八事堂跡など数箇所から出土しているが、当遺跡の番炉も破片であるが、なかなかの優品である。なお蓋はまだ出土していない。

白磁壺（424）口径14.9cmで、平縁でやや太めの高い高台がついている。内側には一本の沈線がいれられ、見込みに釉かけ後環状に削り取った部分がある。胎土は白色で黄白色の釉が底部を除いてかけられ、濁黄白色の釉の流れがみられる。なお底部側面に墨書きがあるが、文字はよく読みとれない。

以上のうち瓦器壺、白磁壺は土師器杯とともにSD305溝のものが混同されたものであろう。

小皿				高台付小皿				椀			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径		器高
1	8.9	6.8	1.6	5	11.3	6.2	2.1	9	12.8		3.9
2	(10.0)	7.2	2.0	6	11.7	7.2	2.4	10	12.9		3.7
3	(10.0)	7.35	1.9	7	12.0	7.1	2.5	11	13.0		4.2
4	10.1	7.3	2.0	8	(12.0)	(7.6)	2.4	12	13.05		4.45
5	10.3	7.1	2.2	9	12.1	8.5	2.5	高台付椀			
6	10.4	7.4	1.6	杯					口径	高台径	器高
7	10.4	7.5	1.7		口径	底径	器高	1	12.2	7.4	4.6
8	10.4	7.9	1.8	1	13.2	8.2	3.0	2	12.4	6.77	4.5
9	10.5	6.9	2.1	2	(14.8)	11.5	2.65	3	12.4	6.9	4.5
10	10.5	7.1	1.9	3	15.3	10.8	2.8	4	13.05	7.7	5.5
11	10.5	7.8	2.1	4	15.5	11.5	2.6	5	(13.4)	(7.0)	4.7
12	10.7	7.3	1.8	5	15.55	12.2	3.2	6	13.75	8.0	5.0
13	(10.7)	7.3	1.95	6	15.7	11.8	2.6	7	13.8	8.3	5.6
14	10.7	7.7	1.9	7	15.8	11.5	2.7	8	14.0	8.2	5.2
15	(10.7)	(7.7)	2.0	8	15.8	12.0	3.1	9	14.2	7.7	5.8
16	10.7	7.9	1.9	9	16.3	11.7	2.9	10	14.5	8.25	5.8
17	10.8	7.8	1.8	高台付杯				11	14.5	8.8	5.85
18	(10.9)	7.5	1.95		口径	高台径	器高	12	14.5		
19	10.9	7.6	1.85	1	17.4	9.9	4.1	13	(14.6)	7.5	5.0
20	10.9	8.1	1.7	椀				14	14.65	7.9	5.9
21	11.0	7.0	1.7		口径		器高	15	(14.8)	(8.6)	5.1
22	11.0	7.3	1.85	1	11.9		3.5	16	14.9	7.9	5.85
23	11.0	7.4	2.2	2	12.3		3.1	17	15.35	8.52	6.2
高台付小皿				3	12.3		3.75	18	15.4	8.5	5.2
	口径	高台径	器高	4	12.3		4.2	19	15.9	8.25	5.9
1	10.8	7.5	2.1	5	12.5		4.0	20	16.2	8.3	7.0
2	11.0	6.6	2.2	6	12.5		4.2	21	16.3	8.8	6.7
3	11.0	6.7	2.2	7	12.7		3.9				
4	(11.0)	7.8	2.5	8	12.8		3.9				

8表 S K339土塙出土土師器計測表

## [4]

## S D305溝 (14図, 9表)

425~427は東端のM I 36区出土のもので、小皿の口径は9.1cm、杯の口径は13.7~14.45cmで、いずれも糸切り底をもつていて、II-2類の土師器であり、上層からの混入と考えられる。428~435はM I 28・29区でSK339土塗付近から出土したものであり、I-2類にはいるため、SK339土塗からの混入と考えられる。

c. 杯 (I-4-c) (436~439) 口径14.25~15.7cm、底径11.0~12.7cm、器高2.9~3.25cmである。436・437はヘラ切り底を有し、暗褐色ないし暗灰色で、胎土にほとんど砂粒を含まず、焼成も良好である。底部はやや外へ張り出し気味で、板目が残っている。438・439は糸切り底をもち、灰黄色ないし淡褐色で、胎土に少量の砂粒を含むが焼成は良好である。とくに438は、糸切り底にもかかわらず丸底に近い形をしている。底部には板目がついている。ヘラ切り底の杯、糸切り底の杯両者とも器面には横ナデが、内底にはナデがみられる。SK339土塗出土の杯ともあわせて、ヘラ切り底、糸切り底共伴の時期のものとしてとらえたい。

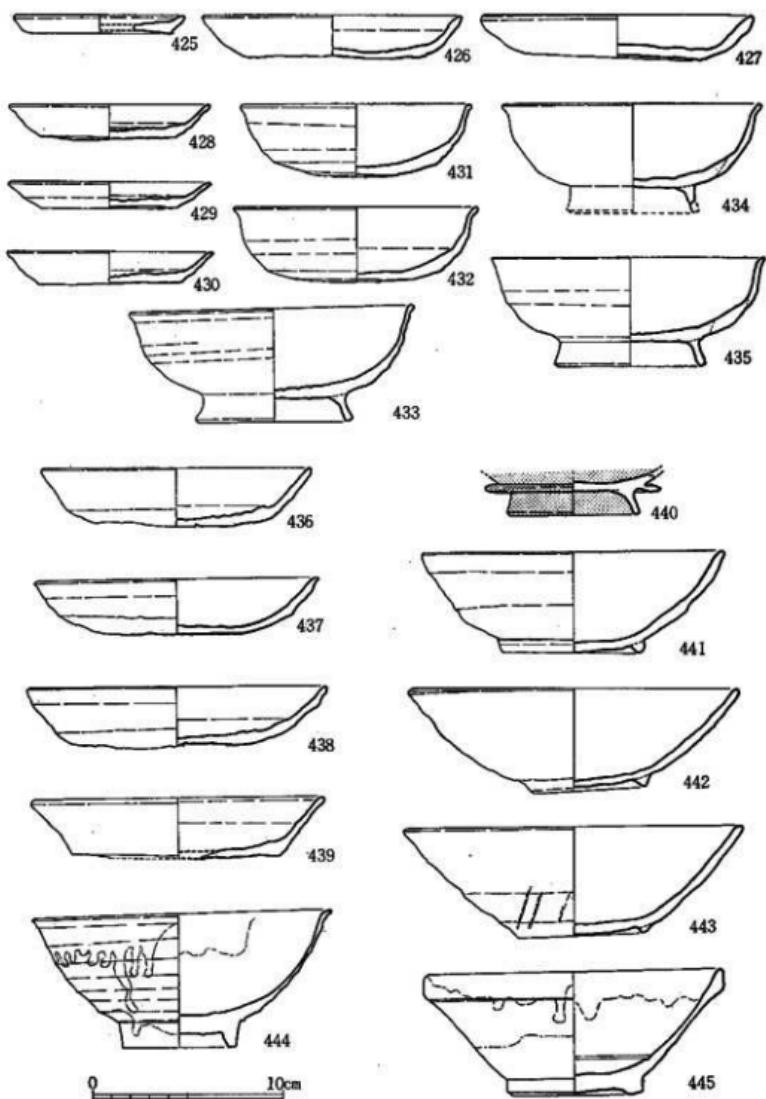
黒色土器 (440) 底部で高台と体部との間に鉛状のものがついている。内外両面とも黒色で、内底は研磨されている。高台内底面には板目がのこっている。I-2類土師器に共伴するものと考えられる。

瓦器塊 (441~443) 完形に近いものが3個出土している。441は口径15.4cm、器高5.3cmで、暗灰色で、外面の口縁から三分の二は研磨が施され、黒色を呈している。高台と底面に一連の板目がついている。442は口径17.4cm、器高5.4cmで、灰色を呈し、口縁部内外面は黒色で光沢がある。内外の器面に研磨がみられる。443は口径17.8cm、器高5.7cmで、暗白灰色を呈し、外面の上半は黒色で、とくに口縁部には光沢がある。外面の上半および内面には研磨の痕がみられる。高台および底面に板目が残っている。また底部近くには板の端で突いたような線が数本ついている。

白磁 (444・445・757) 444はやや胴が丸く、胎土は黃白色で、黃灰色の釉がかかっている。445は玉縁をもち、見込みに沈線がつけられている。胎土は黃味白色で、気泡を多くふくんだ黃白色の釉がかかっている。757は内壁と見込みにそれぞれ沈線がつけられ、白色の化粧土の上に明灰色の釉がかかっている。胎土は黃白色である。

杯			
	口 縄	底 径	器 高
1	14.25	11.4	3.15
2	15.7	12.7	3.15
3	14.9	12.2	2.9
4	15.4	11.0	3.25

9表 S D305溝出土土師器計測表



14図 土師器、黒色土器、瓦器、白磁実測図 (S D305溝出土)

## 2. 上層土師器・II類 (15~28図)

上層から出土した糸切り底の土師器をII類と総称したが、遺構面では一部下層から出土したものもある。土師器は包含層や溝、土塗から多量に出土している。なお〔2〕以降の分類は前回の報告に従った。

### [1]

#### S K312土塗 (15~18図, 10~13表)

土塗内遺物は下部と上部とに分けて取り上げてあり、土師器にも相違点が認められるので、下部の代表的なものをA類、上部をB類とした。

b. 小皿 (II-1-b A) (470~480) (446~451) 口径8.9~9.8cm, 底径6.4~7.4cm, 器高0.7~1.1cmの薄手の小皿で、ほとんどが淡橙色で胎土・焼成ともに良好である。器面には横ナデが、内底には渦文とナデがみとめられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

(II-1-b B) (452~469) (481) 上部の小皿は口径8.4~9.8cm, 底径6.7~7.9cm, 器高0.9~1.3cmで、口径は下部のものと変わりないが、器高がやや高く、器壁も少し厚くなっている。色調は黄灰色で胎土に砂粒を少しふくんでいる。内底に渦文が少數に残っているのみで、他の器面調整は下部のものと変わりない。なお下部からは耳皿が1個出土している。482はII-3類の小皿で、混入と考えられる。

c. 杯 (II-1-c A) (533~547) (531~532) 下部の杯は口径14.5~16.8cm, 底径10.0~11.7cm, 器高2.3~3.2cmで、器壁は薄く、外面の底部近くは整形時のロクロ痕が残っている。器面には横ナデが、内底にはナデがついていて渦文が残っているものも少數ある。底面には糸切り痕と板目がつき、底面中央が外にふくらむものもある。

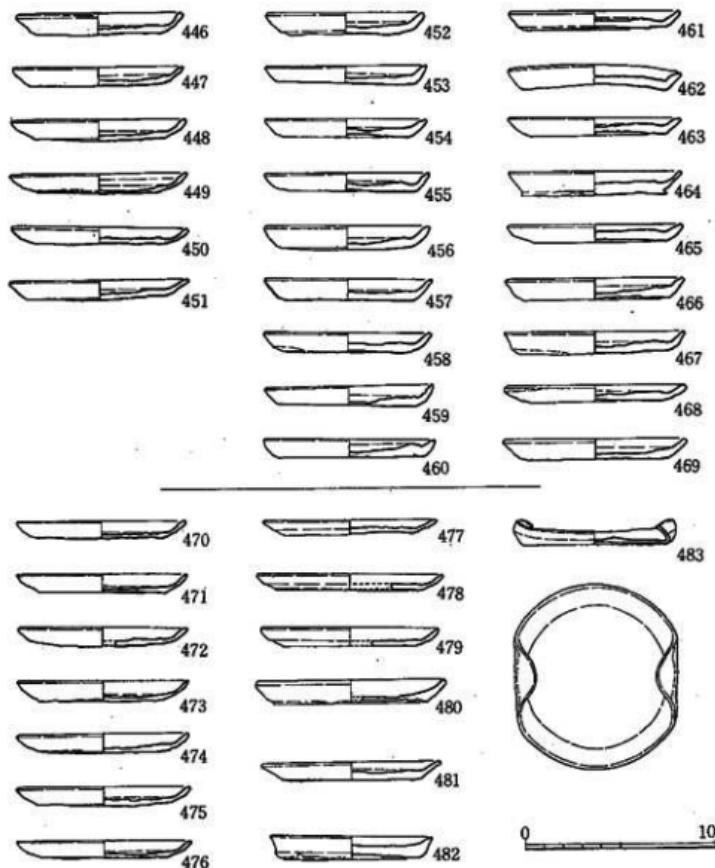
(II-1-c B) (527~530) 上部の杯は口径15.4~16.6cm, 底径10.5~11.65cm, 器高2.5~3.0cmで、下部のものにくらべ器壁は厚く、口縁部も厚ぼったい。黄灰色で胎土に砂粒を少量含んでいる。器面の調整は下部の杯と同じである。

なお523・524はII-4類、525はII-2類に属するものである。526・549はあるいはII-1-c Bに属するものかもしれないが、体部の中頃がくびれる特徴が525に似ているため、II-2類に含めた。

高台付杯 (548) 下部の杯に高台をつけたものである。

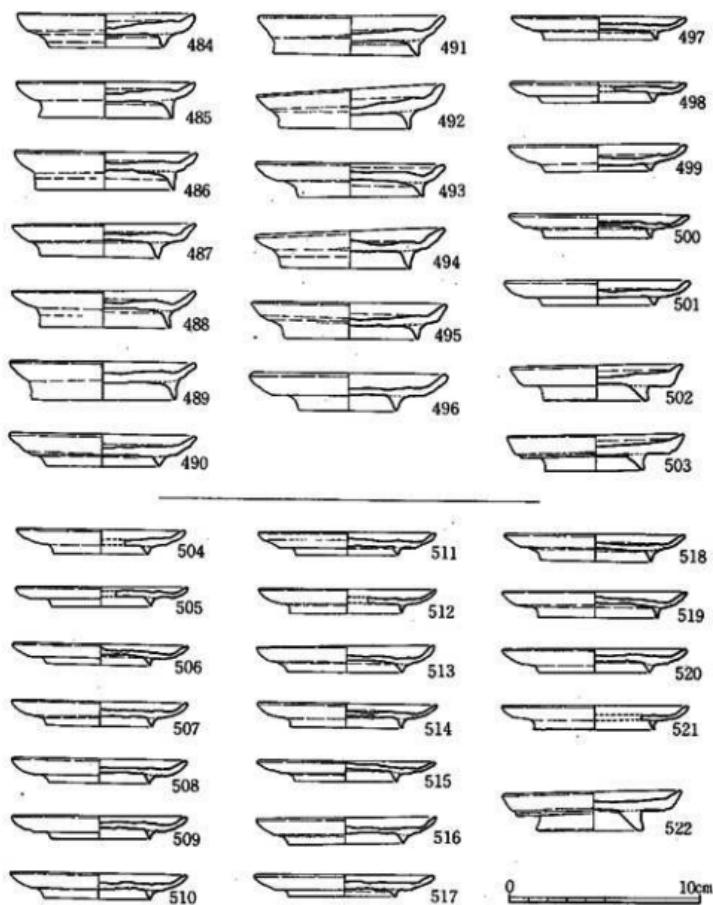
f. 高台付小皿 (II-1-f A) (504~521) (497~501) 下部の高台付小皿は口径9.0~9.8cm, 高台径5.0~6.4cm, 器高1.1~1.45cmで、小皿と口径はほとんど変わらず、高さ4~5mm、断面三角形の小さな高台を小皿につけただけのものである。

(II-1-f B) (484~496) 上部の杯は口径9.4~10.3cm, 高台径5.9~7.7cm, 器高1.7~2.1cmで、口径は同じ上部の小皿よりやや大きめである。高台は、径は下部のものより大き

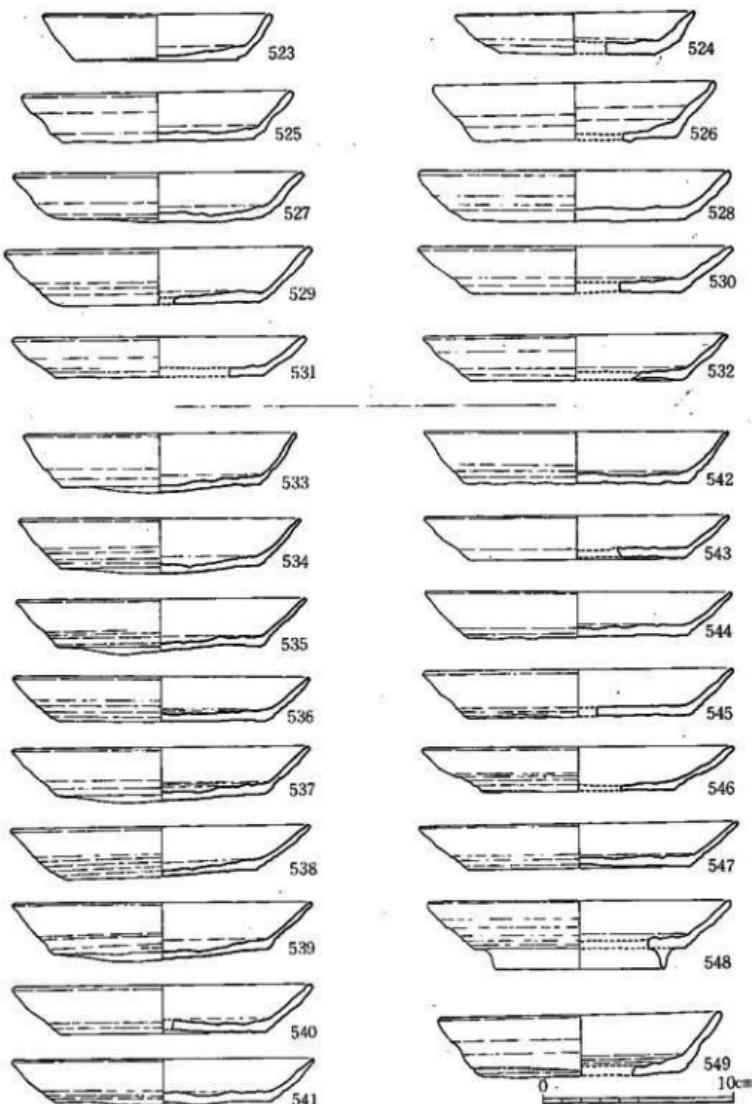


15図 土師器実測図 (SK 312土塗出土-1) 上一上部, 下一下部

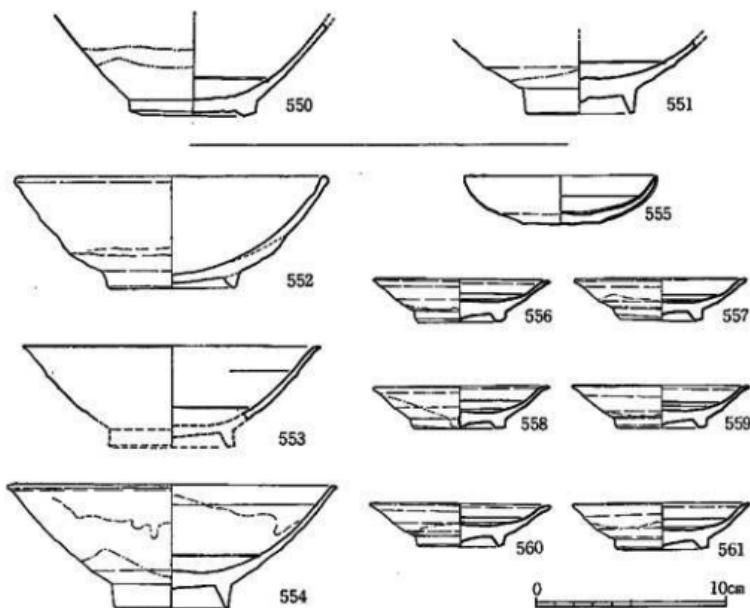
く、高さも8~9mmと、下部のものより高い。淡灰褐色ないし灰黄色を呈し、胎土に砂粒を少量含んでいる。496の高台径は小さい。なお502・503・522はⅡ-3類の高台付小皿であり、混入と考えられる。



16図 土師器実測図 (SK312土塗出土-2) 上一上部、下一下部



17図 土師器実測図 (SK312土塗出土-3) 上一上部, 下一下部

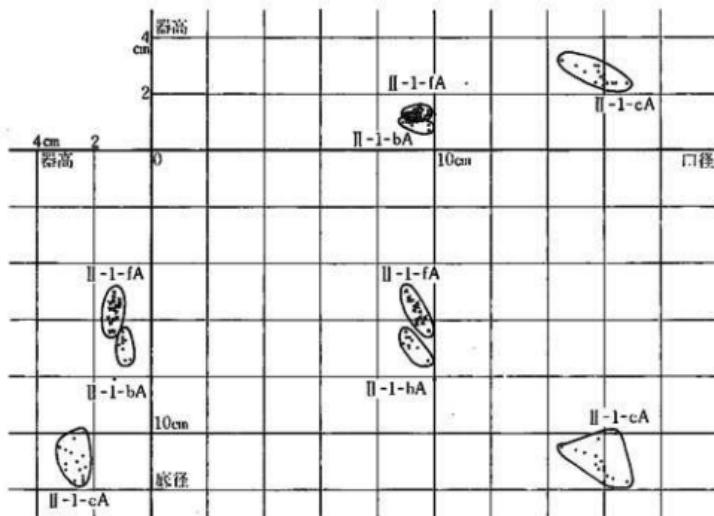


18図 白磁、瓦器実測図 (SK312土塙出土) 上一上部、下一下部

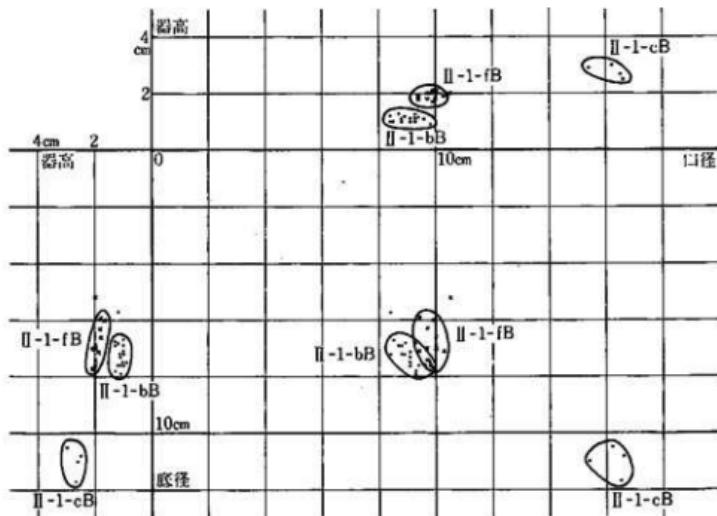
白磁 (18図550～551, 553～561) SK312 土塙からは白磁 (磁器3・4・5類) のみが出土している。上部の550は玉縁の白磁碗底部で、白色の化粧土の上に明灰色の釉がかかっている。551には白灰色の釉がかかっている。下部からは553や554の白磁碗のはかに、小形の白磁が一括して完形のまま出土した。このことは、この土塙には土師器とともに祭祀関係などに使用されたものが一括して捨てられた可能性が強い。555は内側に1本の沈線がめぐり、全面に淡緑灰色の釉が全面にかけられ、底面だけ削りとられ、胎土は灰白色を呈している。556～561は高台が削り出された小皿で、内側に1本の沈線があり、見込み部分に、釉かけ後環状に削りとった痕がある。胎土は灰白色で、やや綠味を帯びた淡灰色の釉がかかっている。

瓦器碗 (552) 下部から出土したもので、口径16.7cm、器高5.9cmで、灰白色を呈しているが口縁部のみ黒色である。内外面に研磨の跡が認められるが、詳細は不明である。

以上のように土師器や白磁を下部と上部に分けてみたところ、土師器については、明確に分離するが、今のところ一つの土塙内のことであり、大きな時代差はないものと考えられ、ここでは一応両者をⅡ-1類に含めて取り扱いたい。



10表 S K312土塙下部出土土師器（A類）の法量



11表 S K312土塙上部出土土師器（B類）の法量

小皿 (A類)				高台付小皿 (A類)				杯 (A類)				
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高	
1	9.0	6.6	1.0	1	9.0	5.0	1.3	1	(14.5)	10.5	3.2	
2	9.05	6.6	1.0	2	9.1	5.3	1.1	2	15.0	10.6	2.95	
3	8.9	6.8	1.0	3	9.2	5.2	1.2	3	15.3	10.7	2.8	
4	9.0	6.4	1.1	4	9.2	5.4	1.25	4	(15.7)	10.8	2.4	
5	9.1	6.9	1.05	5	9.2	5.6	1.3	5	(15.7)	11.1	3.0	
6	9.1	6.95	1.0	6	9.25	5.6	1.4	6	(15.8)	10.2	2.65	
7	9.15	6.7	0.9	7	9.3	5.5	1.1	7	15.8	11.3	3.0	
8	9.2	6.7	1.0	8	9.4	5.4	1.1	8	(15.9)	(11.0)	2.6	
9	9.4	7.0	1.0	9	9.4	5.5	1.2	9	(16.0)	11.2	2.3	
10	9.8	7.4	0.9	10	9.4	5.6	1.4	10	(16.0)	(11.3)	2.5	
11	10.0	8.1	1.3	11	9.4	6.0	1.3	11	(16.0)	(11.7)	2.7	
12	9.8	7.4	0.7	12	9.5	5.7	1.15	12	(16.1)	11.5	2.4	
小皿 (B類)				13	9.5	5.8	1.45	13	(16.3)	(11.6)	2.4	
	口径	底径	器高	14	9.5	6.0	1.3	14	(16.4)	10.0	2.85	
1	9.5	7.1	0.95	15	9.6	6.1	1.4	15	(16.8)	11.7	2.35	
小皿 (その他)				16	9.7	5.9	1.2	杯 (その他)				
	口径	底径	器高	17	9.7	6.3	1.4		口径	底径	器高	
1	8.5	7.1	1.25	18	9.8	6.4	1.3	1	(15.0)	(11.2)	3.2	
高台付小皿 (その他)					高台付杯 (A類)					口径	底径	
	口径	高台径	器高			口径	高台径	器高		1	(16.0)	9.0
	1	9.4	5.7	2.1						1	(16.0)	3.6

12表 S K312土塗下部出土土器計測表

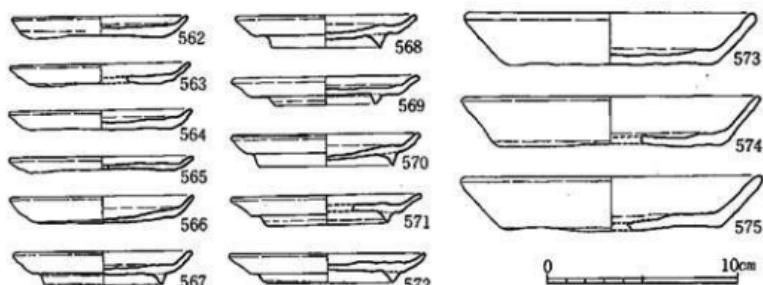
小皿(A類)				小皿(B類)				高台付小皿(B類)			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	高台径	器高
1	(8.95)	6.4	1.15	16	9.3	7.9	1.1	12	10.3	7.05	1.95
2	9.0	7.0	1.0	17	9.4	7.6	1.2	13	10.5	5.2	2.0
3	9.2	6.7	1.15	18	9.8	7.5	0.9	高台付小皿(その他)			
4	9.45	6.6	1.1	高台付小皿(A類)					口径	高台径	器高
5	9.3	6.85	0.9		口径	高台径	器高	1	9.0	5.6	1.85
6	9.5	7.4	1.05	1	9.2	6.0	1.25	2	9.3	5.25	1.9
小皿(B類)				2	9.3	6.0	1.3	杯(A類)			
	口径	底径	器高	3	9.4	5.6	1.4	口径	底径	器高	
1	8.4	5.7	1.15	4	9.5	5.7	1.3	1	(15.5)	(11.0)	2.1
2	8.4	7.2	0.95	5	9.8	6.0	1.3	2	(16.0)	11.2	2.4
3	8.5	6.7	1.0	高台付小皿(B類)				杯(B類)			
4	8.7	6.9	1.3		口径	高台径	器高	口径	底径	器高	
5	8.75	6.9	1.0	1	9.35	5.9	1.8	1	15.4	11.0	2.6
6	8.8	7.2	1.05	2	9.4	7.7	1.9	2	(16.2)	(10.5)	3.0
7	8.9	6.8	1.15	3	9.6	6.3	1.75	3	(16.5)	(11.65)	2.7
8	8.9	7.2	1.1	4	9.6	7.9	2.0	4	(16.6)	(10.8)	2.5
9	9.05	7.6	1.0	5	9.65	7.0	2.0	杯(その他)			
10	9.1	7.1	0.95	6	9.8	7.7	2.05	口径	底径	器高	
11	9.1	7.3	1.1	7	9.9	7.7	2.1	1	(12.2)	8.7	2.5
12	9.1	7.5	1.0	8	9.95	6.0	1.7	2	12.6	8.2	2.2
13	9.3	6.8	0.95	9	9.95	7.0	2.1	3	(14.3)	10.0	2.6
14	9.3	7.6	1.1	10	10.0	6.6	1.8	4	(14.8)	10.7	3.0
15	9.3	7.8	1.3	11	10.0	6.9	2.0				

13表 SK312土塗上部出土土師器計測表

S K338土塙 (19図, 14・15表)

- b. 小皿 (II-1-b) (562~566) 口径 9.2~9.8cm, 底径 6.7~7.6cm, 器高 0.8~1.4cm で、S K312 土塙下部の小皿とくらべるとやや厚手である。黄灰色ないし暗灰色で、胎土・焼成とも良好である。器面には横ナデと内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。
- c. 杯 (II-1-c) (573~575) 口径 15.4~15.9cm, 底面 10.7~11.6cm, 器高 2.65~2.9cm である。灰黄色ないし暗灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好である。器面には横ナデが、内底にはナデがみとめられる。底面には糸切り痕と板目がついている。
- f. 高台付小皿 (II-1-f) (567~572) 口径 9.5~10.3cm, 高台径 5.3~7.05cm, 器高 1.5~1.8cm で、高台は S K312 土塙下部のものにやや似ているが上部のものに近く、しかしながら高台は上部のものほど高くはない。

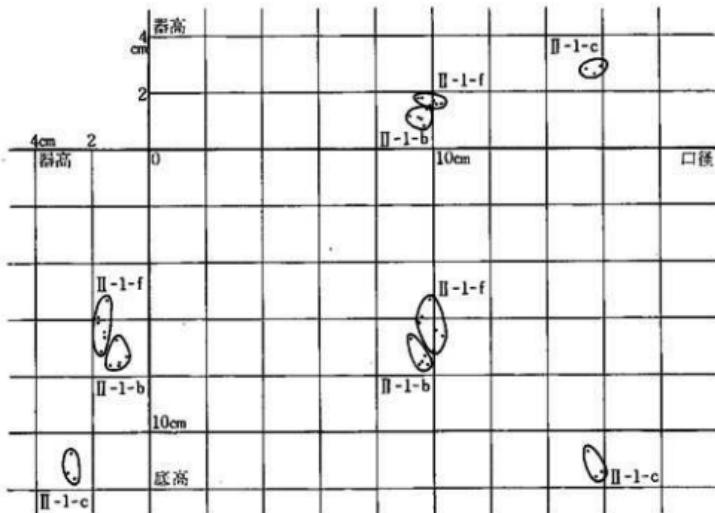
以上 S K338 土塙の土師器は S K312 土塙の下部のものと上部のものとの中間的な様相を示すが、どちらかといえば上部のものに近い。



19図 土師器実測図 (SK338土塙出土)

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	9.2	6.7	1.15	1	(9.5)	6.1	1.8	1	15.4	10.7	2.8
2	(9.5)	(7.6)	1.1	2	(9.6)	5.9	1.75	2	15.7	11.6	2.65
3	9.6	7.6	1.05	3	9.9	5.3	1.5	3	15.9	11.4	2.9
4	(9.7)	(7.3)	0.8	4	(10.0)	(7.05)	1.7				
5	9.8	7.6	1.4	5	(10.05)	(6.4)	1.55				
				6	(10.3)	(6.6)	1.55				

14表 SK338土塙出土土師器計測表



15表 SK 338土塙出土土師器の法量

M I 31・32区 S D 305 溝かぶり黄褐色  
粘質土 (20図576~585)

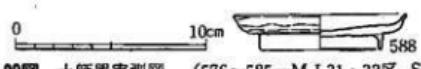
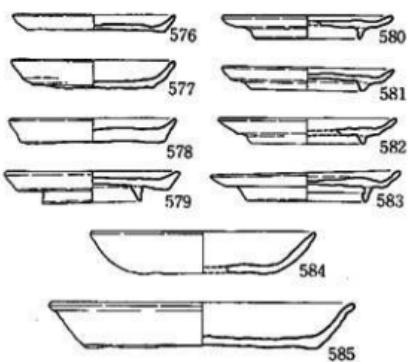
e. 杯 (II-1-c) (585) 口径16.1  
cmである。

f. 高台付小皿 (II-1-f) (580~  
583) 口径9.0~9.9cmの薄手の土器で、  
小さな高台がついている。

このように、この土器の主体はII-1  
類で、小皿である576・577もII-1類に  
含まれるものかもしれない。578・579は  
II-3類の土器であり、584は口径11.  
9cmでII-4類の土器である。

S K 340土塙 (20図586~588)

高台付小皿 (587~588) は口径9.1~  
9.2cm、高台径6.4cm、器高1.9cmで、



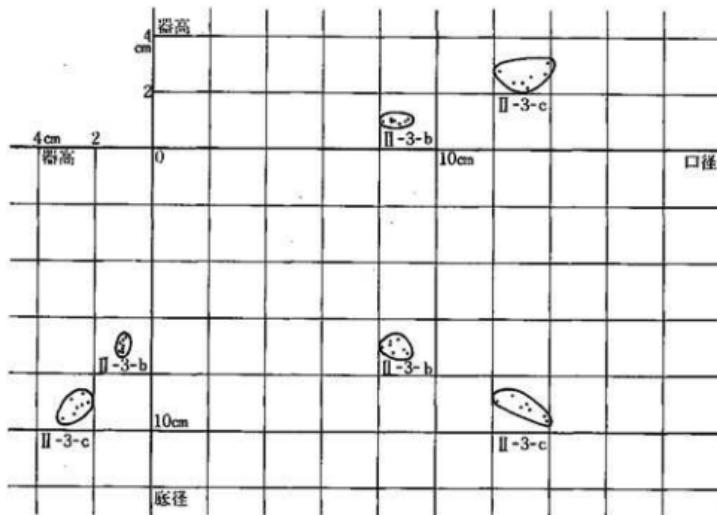
20図 土師器実測図  
(576~585-M I 31・32区 S  
D 305溝かぶり黄褐色粘質土、  
586~588-S K 340土塙出土)

小皿部の外側はヘラなどで強くナデたような痕があり、やや深めで、高台は高さ9mmで高めであるが、器壁は薄い。やや特異な高台付小皿であるが、II-1類に含められるだろう。

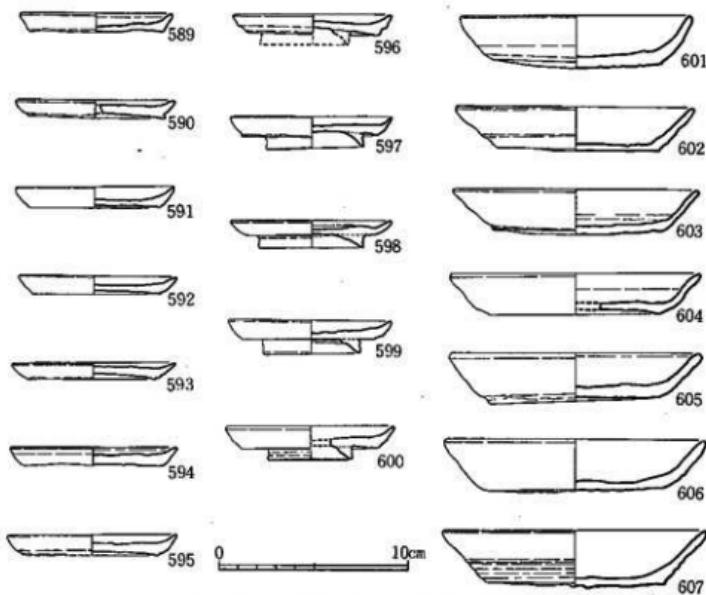
[3]

S K317土塙 (21図、16・17表)

- b. 小皿 (II-3-b) (589~595) 口径8.1~9.0cm, 底径6.7~7.2cm, 器高0.85~1.1cmで、灰黄色ないし淡橙色を呈し、胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが、内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。口縁端はやや尖り、底部が厚く、深みはあまりない。
- c. 杯 (II-3-c) (601~607) 口径12.2~13.9cm, 器高2.2~3.05cmで、赤褐色ないし灰黄色を呈し、胎土に少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが、内底にはナデがみられ、底面に糸切り痕と板目が残っている。
- f. 高台付小皿 (II-3-f) (596~600) 口径8.4~8.9cm, 高台縦4.5~5.4cm, 器高1.45~1.8cmで、小皿に高台をつけたもので、高台は粘土紐を環状にして貼りつけたような簡単なもので、しかも底面中央からずれることが多い。



16表 S K317土塙出土土師器の法量



21図 土師器実測図 (S K317土塙出土)

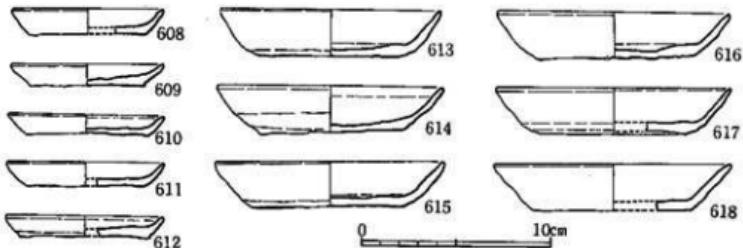
小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	(8.1)	(7.0)	1.0	1	8.4			1	12.2	8.9	2.8
2	8.4	6.8	1.0	2	8.5	5.2	1.7	2	12.7	8.7	2.4
3	8.4	6.9	1.1	3	(8.5)	5.6	1.45	3	13.0	9.1	2.4
4	(8.5)	(7.2)	1.0	4	8.65	5.4	1.8	4	(13.2)	9.0	2.2
5	8.65	6.7	0.85	5	(8.9)	(4.5)	1.8	5	(13.25)	9.2	2.55
6	8.9	7.1	0.95					6	13.8	2.7	9.4
7	9.0	7.2	1.1					7	(13.9)	9.6	3.05

17表 S K317土塙出土土師器計測表

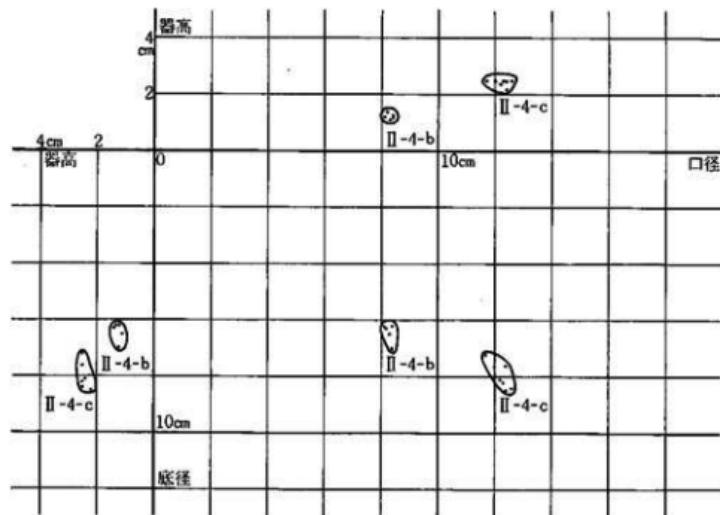
[4]

S K309土塙 (22図, 18・19表)

- b. 小皿 (II-4-b) (608~612) 口径8.1~8.4cm, 底径6.2~7.0cm, 器高1.1~1.4cmで褐灰色ないし黄灰色を呈し, 胎土に少し砂粒を含むものもある。器面には横ナデが, 内底にはナデがみられ, 底面に糸切り痕と板目が残っている。
- c. 杯 (II-4-c) (163~168) 口径11.7~12.6cm, 底径7.2~8.5cm, 器高2.2~2.5cmで灰褐色ないし淡褐黄色を呈し, 胎土に少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが, 内底にはナデがみられ, 底面に糸切り痕と板目がついている。



22図 土師器実測図 (SK309土塙出土)



18表 SK309土塙出土土師器の法量

小皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	(8.15)	6.3	1.4	1	(11.7)	(7.2)	2.5	6	(12.6)	(8.4)	2.5
2	8.1	6.2	1.2	2	12.0	7.6	2.5	7	(12.4)	(8.5)	2.2
3	8.3	6.5	1.1	3	12.2	8.1	2.4				
4	(8.4)	(6.2)	1.3	4	12.3	8.2	2.5				
5	(8.4)	(7.0)	1.2	5	(12.4)	(7.6)	2.45				

19表 SK309土塙出土土師器計測表

〔5〕

## SK304土塙（23図、20表）

この土塙からは時期が異なる二群の土師器が出土している。いかなる理由で混在するのか不明であるが、時期の新しいII-5類を重点的に記述したい。

a. 特小皿（II-5-a）(626) 口径7.5cm, 底径5.0cm, 器高1.6cmで、小皿にくらべ深め

特小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	7.5	5.0	1.6	1	7.6			10	(12.8)	7.5	2.75
小皿				2	(7.9)	5.7	2.1	11	12.8	7.5	2.8
	口径	底径	器高	3	(8.6)	(5.0)	1.9	12	12.8	8.3	3.15
1	7.05	5.5	0.9	4	(8.7)	(5.2)	1.8	13	13.0	7.8	3.05
2	7.1	4.5	1.05	5	8.95	6.8	2.55	14	13.0	9.4	2.4
3	7.35	5.7	1.15	杯				15	(13.1)	(9.4)	3.0
4	7.4	5.1	0.95	口径 底径 器高				16	(13.2)	7.5	2.8
5	7.45	5.1	1.2	1	12.2	7.2	2.85	17	(13.2)	8.1	3.2
6	7.6	5.7	1.35	2	12.2	7.6	2.9	大杯			
7	7.75	6.6	1.05	3	12.4	8.4	2.85	口径 底径 器高			
8	(7.9)	(6.4)	1.05	4	12.4	8.5	2.8	1	15.1	8.9	3.65
9	(8.4)	(6.5)	1.1	5	(12.5)	7.2	2.95				
10	(8.4)	(6.8)	0.95	6	(12.5)	7.5	2.8				
11	(8.7)	6.8	0.9	7	(12.6)	(7.7)	2.85				
12	(8.9)	(7.6)	0.95	8	12.6	8.2	2.9				
13	(9.7)	(8.5)	1.2	9	(12.75)	7.8	3.0				

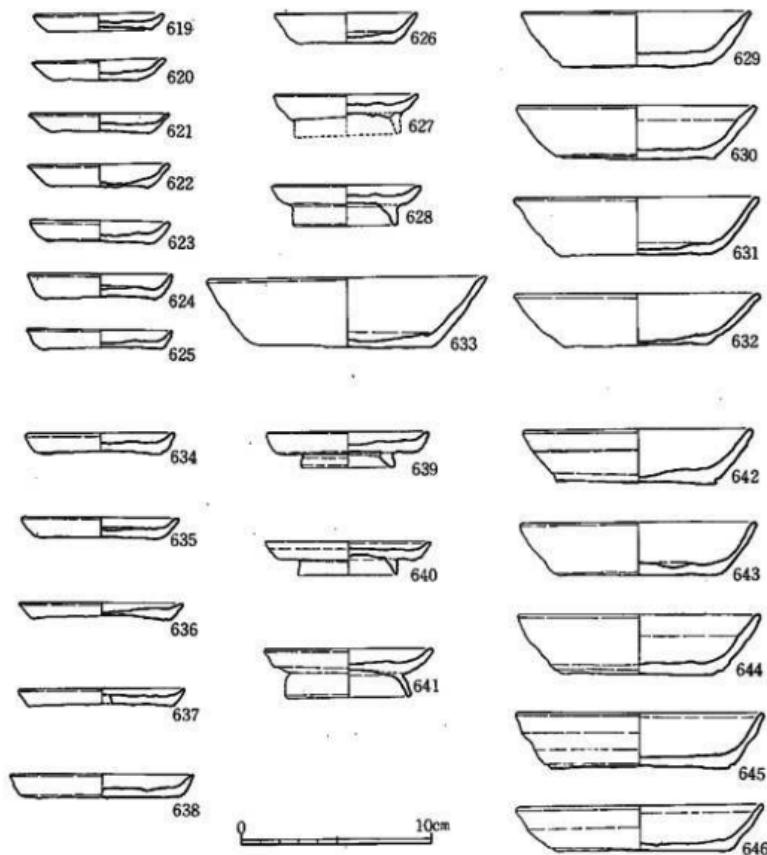
20表 SK304土塙出土土師器計測表

である。量はきわめて少ない。

b. 小皿 (II-5-b) (619~625) 口径7.05~7.75cm, 底径4.5~6.6cm, 器高0.9~1.35cmで、今までの小皿のうちでは一番小さい。

c. 杯 (II-5-c) (629~632) 口径12.2~13.0cm, 底径7.5~8.0cm, 器高2.8~3.1cmであり、底径がおよそ8cm以下である。

d. 大杯 (II-5-d) (633) 口径15.1cm, 底径8.9cm, 器高3.65cmで、杯よりひとまわり



23図 土師器実測図 (SK304土塙出土)

大きくなっている。

f. 高台付小皿 (II-5-f) (627・628) 口径 7.6~7.9cm で小皿と同じである。高台径は 5.7cm, 器高 2.1cm で、高台の高さは 1.1cm である。

以上の SK 304 土塙出土の土師器は、特小皿がまだ少ないとから、II-5 類の中でもやや古い方に属するものであろう。

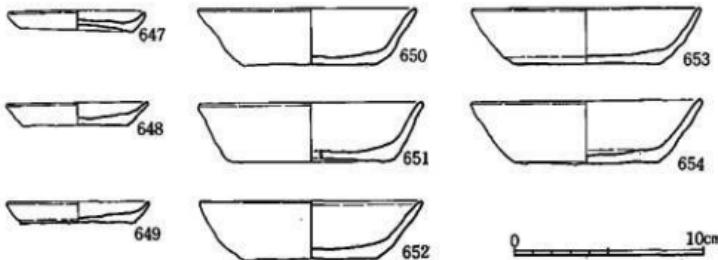
なお 634~638 の小皿は口径 7.9~9.7cm, 642~646 の杯は口径 12.4~13.2cm で、底径は 8.1~9.4cm である。高台付小皿 (639~641) を含めて、634~646 は II-3 類に属するものと推測される。

#### MF 33 区暗茶褐色土 (4 層) 上部 (24 図、21 表)

次の SK 333 土塙と位置が近く、層位も同一である。

b. 小皿 (II-5-b) (647~649) 口径 7.3~7.6cm, 底径 5.6~6.1cm, 器高 1.1~1.2cm である。

c. 杯 (II-5-c) (650~654) 口径 11.7~12.3cm, 底径 7.0~7.5cm, 器高 2.8~3.3cm である。



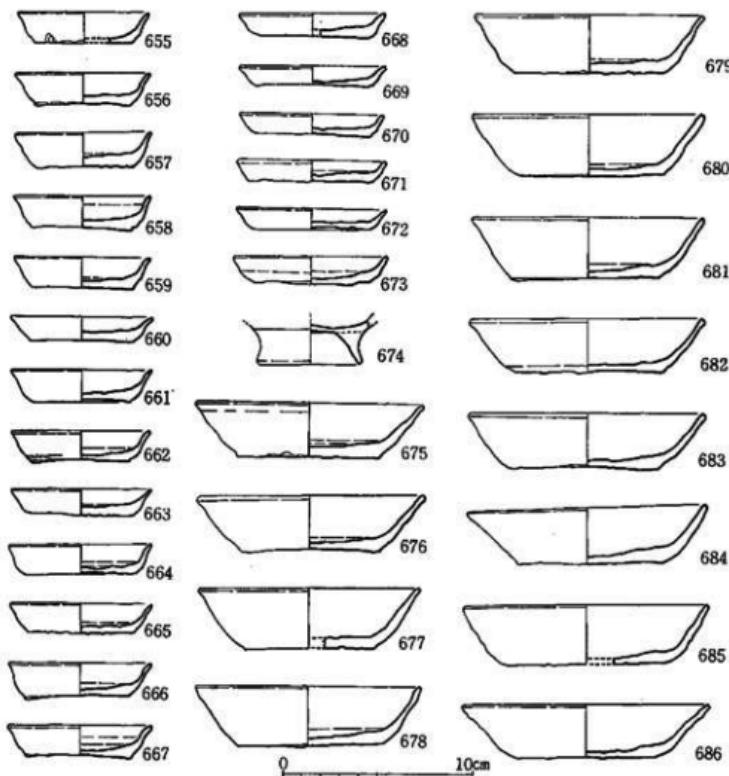
24図 土師器実測図 (MF 33区暗茶褐色土(4層)上部出土)

小皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	7.3	5.95	1.1	1	(11.6)	7.6	3.0	4	(12.2)	7.7	3.0
2	7.55	5.6	1.25	2	(11.8)	6.9	3.1	5	12.25	7.5	3.35
3	7.6	6.15	1.2	3	(11.9)	(8.3)	3.15				

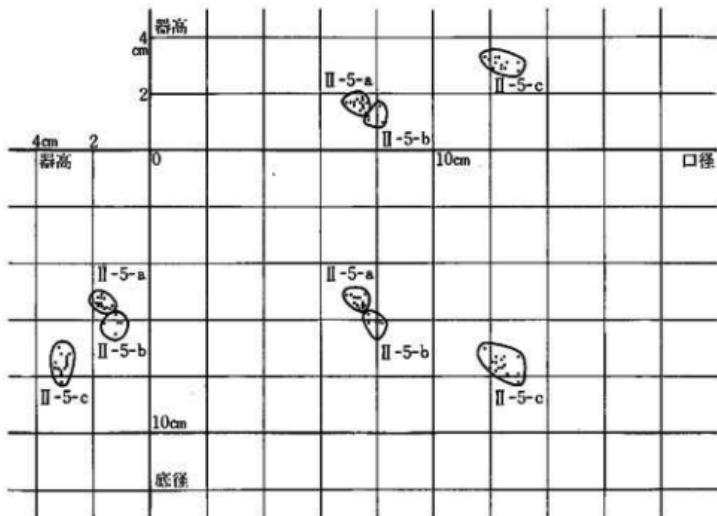
21表 MF 33 区暗茶褐色土 (4 層) 上部出土土師器計測表

S K333土塙 (25図, 22・23表)

- a. 特小皿 (II-5-a) (655~667) 口径6.9~7.6cm, 底径5.1~5.6cm, 器高1.3~1.85cmで、小皿にくらべ口径、底径が小さいが、器高が高くなっている。黄灰色ないし暗灰色を呈し、焼成はあまり堅くない。胎土には砂粒を少量含んでいる。器面には横ナデが、内底にはナデがあり、底面に糸切り痕と板目がついている。
- b. 小皿 (II-5-b) (668~673) 口径7.7~8.15cm, 底径5.8~6.5cm, 器高1.0~1.55cmで、黄灰色ないし暗灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。器面には横ナデが、内底にはナデがつけられ、底面に糸切り痕と板目が残っている。



25図 土師器実測図 (S K333土塙出土)



22表 SK333土塙出土土師器の法量

特小皿				小皿				杯			
	口徑	底径	器高		口徑	底径	器高		口徑	底径	器高
1	6.9	5.1	1.7	1	7.7	5.8	1.2	1	11.8	7.0	3.2
2	7.1	5.1	1.65	2	7.7	6.1	1.1	2	12.0	7.7	3.2
3	7.2	5.2	1.55	3	8.0	6.1	1.1	3	12.1	7.5	2.9
4	7.2	5.4	1.65	4	8.0	6.5	1.15	4	(12.2)	7.3	3.05
5	7.25	5.2	1.8	5	8.1	6.1	1.55	5	12.2	7.5	3.3
6	7.3	5.5	1.75	6	8.15	6.1	1.0	9	12.2	7.8	3.1
7	7.4	5.2	1.7	高台付小皿				7	12.3	7.7	3.25
8	7.4	5.6	1.4		口徑	高台径	器高	8	12.4	7.7	3.0
9	7.5	5.4	1.85	1		5.55		9	(12.5)	7.6	2.85
10	7.5	5.5	1.65					10	12.6	7.9	3.05
11	7.5	5.6	1.5					11	13.0	7.3	2.8
12	7.5	5.6	1.6					12	13.0	8.2	3.1
13	7.6	5.5	1.3								

23表 SK333土塙出土土師器計測表

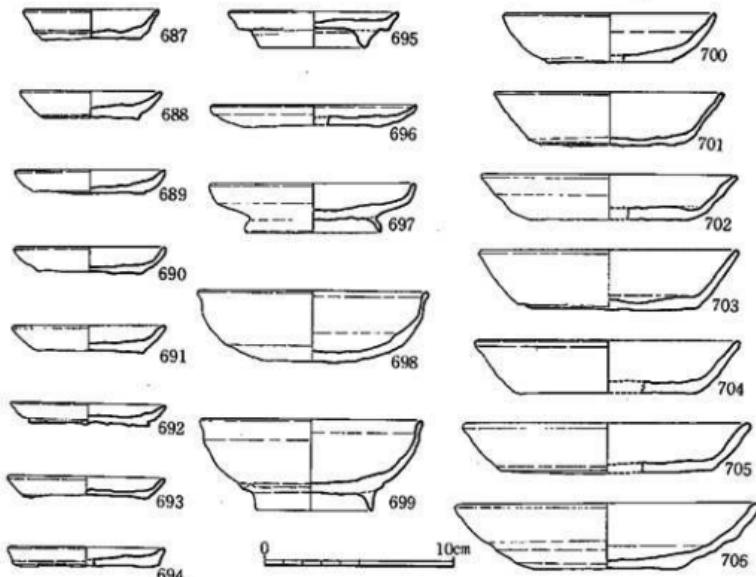
e. 杯 (II-5-e) (675~686) 口径11.8~13.0cm, 底径7.0~8.2cm, 器高2.8~3.3cmで  
II-4類の杯とくらべて口径, 器高は大きいが底径が小さくなっている。褐灰色ないし暗灰色  
を呈し, 胎土に少量の砂粒を含む。器面には横ナデが, 内底にはナデがみられ, 底面に糸切り  
痕と板目がついている。

f. 高台付小皿 (II-5-f) (674) 底部だけであるが, 高台径5.55cmで, 高台の高さは  
1.7cmである。

第5次調査ではわからなかった高台付小皿が, II-5類にも存在することは確かで, しかも  
SK304土塙やSD302溝出土の高台付小皿をも考えに入れると, 数種類ありそうであり, その  
出現のしかたに今後注目したい。

いずれにせよこのSK333土塙出土の土師器は, II-5類の典型的なものである。

なお重要な遺構である溝から出土した土師器は次のとおりである。SD305溝はすでに述べ  
たので, ここでは省いている。



26図 土師器実測図 (SD301溝出土)

#### S D301溝 (26図)

上層の溝で、糸切り底を有する土師器が多く、各類のものが出土している。  
687・688はII-5類の特小皿である。694はII-3類の小皿と思われる。688-693はII-4類かII-5類の小皿であろう。695はII-3類の高台付小皿に近いものと考えられる。696はヘラ切り底をもつ浅い皿で、口縁端がやや内側に折れていて、杯蓋状をしている。697は特異な高台付小皿で、ヘラ切り底をもつ土師器に伴うものであろう。698・699はI-2類の土師器で、下層からの混入と考えられる。700-706の杯はすべて糸切り底を有し、700はII-4類、701はII-5類にはいるものと思われる。また702-704はII-3類に、705はII-1類に属するものであろう。706は口径15.9cm、器高3.4cmと大きいのにくらべ、底径は7.7cmと小さく、特異な杯である。以上のように溝から出土する土師器の主体はII-3類からII-5類にかけてのものである。

#### S D302溝 (27図707-724)

707-717は溝上部、718-724は溝下部からの出土である。707と708はII-5類の特小皿と小皿で、709はII-4類かII-5類の小皿であろう。710-714はII-5類にともなう高台付小皿で二つのグループに分かれれる。その一つは710-711で、口径7.1-7.8cm、高台径5.2-6.3cm、器高1.6cmで、低く小さな高台がつき、高台の高さは5-8mmである。小皿部の深みもあまりない。他のグループは712-714で、口径8.0-8.4cm、高台径6.0-6.4cm、器高6.0cmで、高台の高さ1.2-1.5cmあり、高台が高く、小皿もやや深い。715はII-4類、716はII-5類の杯で、717の口径は18.2cmである。下部の719-724の杯はおよそII-4類に属し、小皿の718もほぼ同類にはいるものと思われる。このことからS D302の下部はII-4類が多く、上部はII-5類が多いことがわかる。

#### S D304溝 (28図、24表)

733-737の小皿は口径10.7-12.1cmで、同じI-2類のSK339土塗の小皿よりやや大きめである。738-742は同じくI-2類の高台付小皿であり、738はやや小形である。そのほかに高台付椀、黒色土器が出土している。

#### S D306溝 (27図725-727)

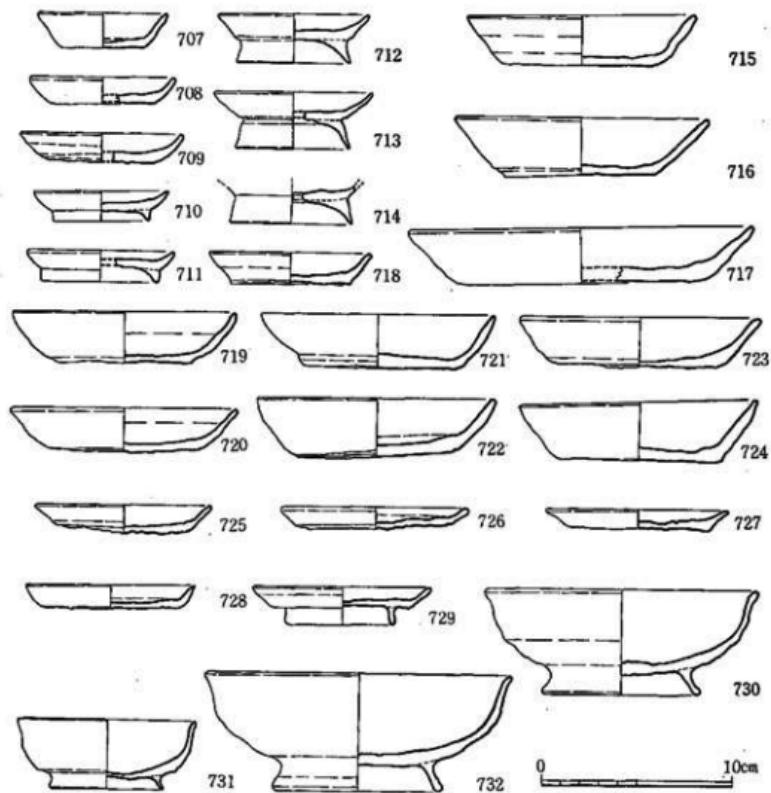
いずれもヘラ切り底をもつ小皿で、口径9.3-9.95cm、底径7.1-8.3cm、器高1.0-1.5cmで、I-2類の小皿より小さい。おそらくI-3類かI-4類の小皿であろう。

#### S D307溝 (27図728-730)

728はII-1-3類の小皿であり、729はII-1類の高台付小皿である。730はI-2類の高台付椀であり、溝の時期もI-2類土師器の時期にしてよいのではなかろうか。

#### S D308溝 (27図731-732)

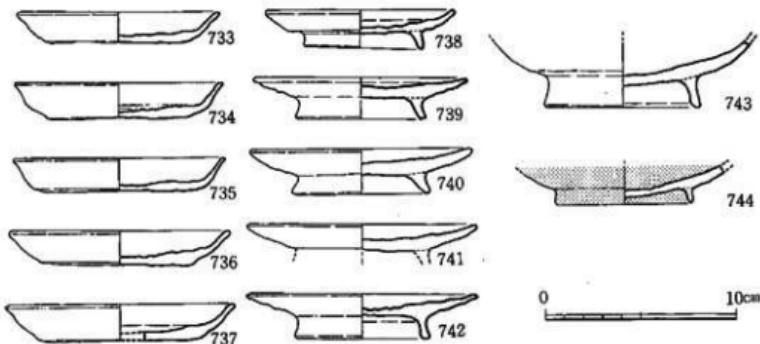
731は口径9.4cm、高台径6.1cm、器高3.65cmで、高台付特小椀(1-2-h)である。732は同じくI-2類の高台付大椀である。



27図 各溝出土土師器実測図

小 直			高 台 付 小 出			高 台 付 挽					
	口 径	底 径	器 高		口 径	高 台 径	器 高		口 径	高 台 径	器 高
1	(10.7)	7.7	1.6	1	10.0	6.6	2.1	1			8.2
2	11.05	7.3	1.9	2	(11.5)	6.9	2.1				
3	11.2	9.0	1.75	3	11.8	7.3	2.4				
4	(11.7)	(8.1)	1.8	4	12.15						
5	12.1	8.4	1.95	5	12.2	7.1	2.4				

24表 S D 304溝出土土師器計測表



28図 土師器実測図 (S D 304溝出土)

土師器にはこのほか土鍋・長頸瓶などがある(29図)。

**土鍋**(734) 口縁部が外へ屈折したもので、内面の屈折部より下は細かい刷毛目がつき、それより上は横ナデがみられる。外面には煤が厚く付着している。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。上層からの出土である。

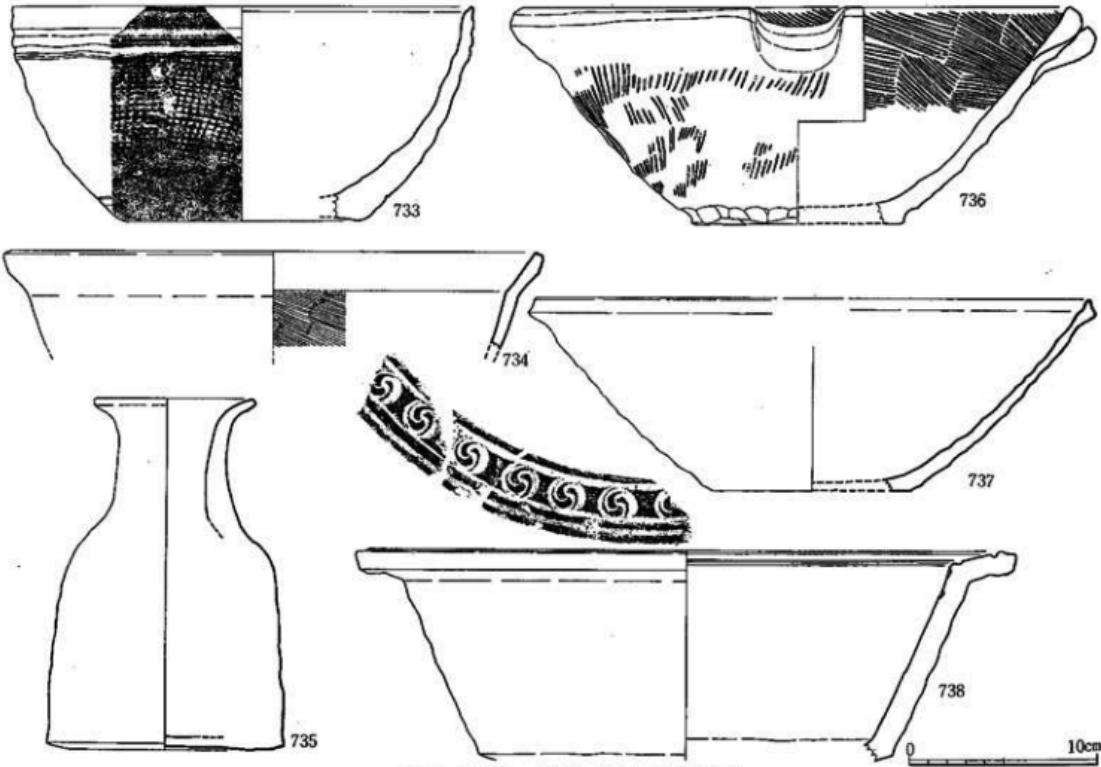
**長頸瓶**(735) 口径8.3cm、底径12.3cm、器高18.5cmで、器面に横ナデが認められる。色調は黄白色で、胎土に砂粒を含む。SK346土塗からの出土である。

### 3. 須 恵 器 (29図733)

今回の調査でも、古墳時代、奈良時代の須恵器片が多く出土しているが、報告は省略した。  
**鉢**(733) 口縁部に2本の沈線が施され、その下に格子目状のタタキがあり、底部近くはナデている。内面には横ナデが、内底にはナデがみられる。やや青味がかった灰色を呈している。下層からの出土である。

### 4. 片 口 (29図736・737)

片口も第5次調査時と同様に多くが出土している。736は外面は暗灰色で、内面は灰白色である。胎土はよく精製されている。内面のなかばより上に、横ないし斜方向に刷毛目があり、これより下は横方向に研磨されたあとが残る。外面は、口縁部が横ナデで、底部近くまでハケ目のあとをナデていて、底部には指圧痕がついている。上層からの出土である。737は同じく上層から出土したもので、器壁が薄く、全体的に灰色を呈すが、口縁部は灰黒色である。内面なかほどより底にかけて、研磨したあとがみられる。片口部は不明である。



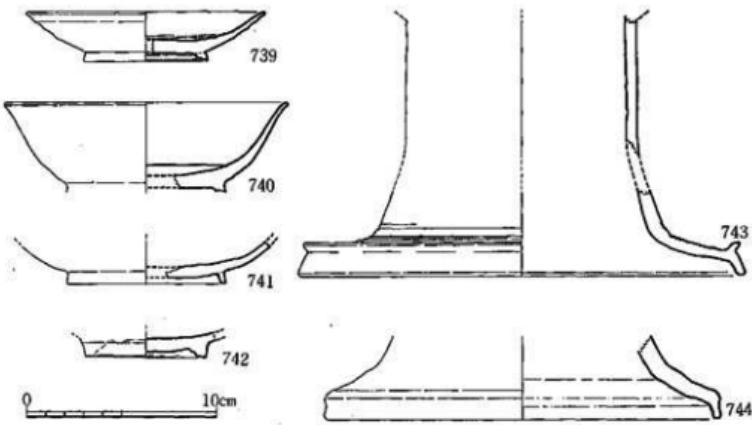
29図 須恵器、土師器、片口、火舍実測図

## 5. 火 舎 (29図738)

火舎も多く出土しているが、738は口縁が外に開き、その上面に巴の印文を押捺してある。そのすぐ下の内面には四菱の印文が押捺されている。黄白色を呈し、胎土に砂粒を含む。底部は欠損していて、脚部は不明である。

## 6. 彩 精 陶 器 (30図)

S K339土塙出土の綠釉番壺のほかにも、彩釉陶器がかなり出土している。釉は綠釉のみのものが大部分であるが、綠釉と黄味褐色釉がかかっている二彩釉陶器もある。胎土は白色軟質のものと、暗灰色硬質のものがある。739は下層から出土した高台付皿で、見込みに二本の沈線がまわり、高台内底面に糸切り痕が残っている。胎土は明灰色で、緑色の釉がかかっているが、高台内は薄くかかる程度である。340は碗で、見込みに一本の沈線が入れられている。胎土は暗灰色で硬く、深緑色の釉が、やや厚くかけられている。高台は破損していて、その内面にも薄い釉がかかっている。下層からの出土である。741はM F26区のS D301溝から出土したもので、薄い高台がついている。胎土はやや橙味をおびた白色で、軟質である。灰黄色の釉が全面にかかっている。742はS D306溝出土のもので、胎土は内面は暗灰色で、外面は褐色である。灰黒色の釉がかけられているが、高台の外側は部分的にしか釉がついていない。ヘラで高台が削り出されたものらしく高台内部にヘラ削り痕がつき、部分的に薄く釉がかかっている。743は下層から出土したもので、破片で復元したものである。高い脚部らしく、円筒形で



30図 彩 精 陶 器 実 測 図

底部が大きく開いている。胎土は白色でやや軟質である。釉は内外両面にかかっているが、緑色を主体とし、部分的に黄味褐色の釉がかかった二彩である。744は下層からの出土で、花瓶かなにかの脚部であろう。胎土は灰味白色であるが焼成は硬い。全面に黄味緑色の釉がかかっている。その他口縁に爪形を二段に押しならべた、胎土灰白色の緑釉陶器も出土している。

## 7. 磁 器 (31~34図)

第3次の調査でも青磁、白磁、青白磁、天目などの磁器類が多量に出土している。とくに今回は時代的に白磁のみを出土する溝、土塙、土階が多くいたため、土師器や瓦器とともに白磁を総合的に理解することが出来た。すなわちヘラ切り底を有するI-3類(浦城1類)土師器の時期から、糸切り底を有するII-1類の時期まで、3類、4類、5類の白磁のみが共伴することがわかった。6類の白磁はそれ以降に出現するものであろう。磁器の分類は第5次の報告に従った。

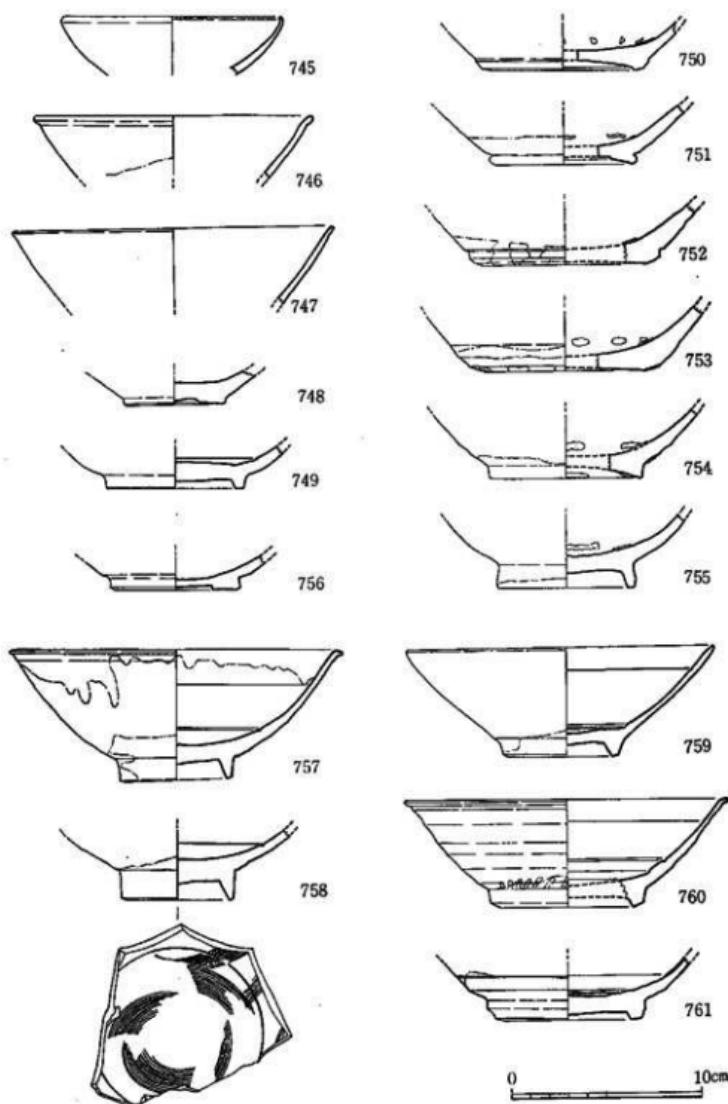
1類 (31図745~755) 深緑色ないし褐味灰緑色の釉が薄くかかった青磁で、胎土は白灰色ないし灰色を呈するものが多い。745~747は口縁部で器壁が薄く、745は口縁端が内湾している。748~755は底部で、幅広い高台をもつもの(748)、高台をもつもの(749・755)、低い高台をもつもの(750)、底部が丸味をおびて外にはりだすもの(751)、ヘラ削りで底部をつくっているもの(752)、底部のかどをヘラ削りしているもの(753)、ややあげ底のもの(754)などがある。ほとんどの底部の床付部と見込みに目あとが数箇所ついている。量はやや多く、下層のものが大部分である。いわゆる越州窯製とよばれているものである。

2類 (31図756) 白磁で、胎土は白色で、釉はやや黄味をおびた白色で、釉の厚くなつた部分ではやや青味をおびる。幅広い高台をもち、高台の床付面は釉かけの後、釉を削りとっている。MF28・29区の下層の最下部付近からの出土である。

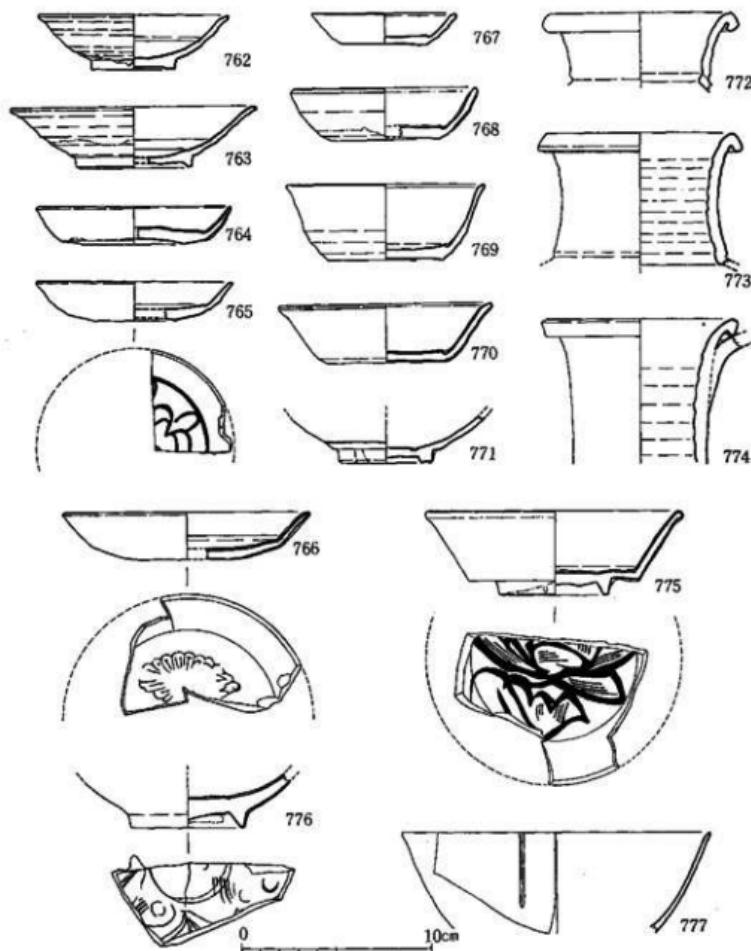
3類 (31図757・758・762) 白磁で、口縁部がやや外へ張り出し、薄手の高い高台をもつ碗で口縁内側と見込みの部分に沈線が入れられている。白い化粧土の上に釉がかけられたものも多い。内面に描描文が描かれているものもある(758)。また762のような高台付小皿もある。このほかにSD305溝、SK312土塙などからも出土している。

4類 (31図759・761・763) 見込みの部分に、焼成前に環状に釉をかきとった跡をのこすもので、平線と3類同様に口縁がやや外へ張り出すものがある。底部は3類にくらべてやや太く低い。口縁内側に沈線が入れられたものや、さらに見込みにも沈線が入れられたものがある。この類に属する高台付小皿が、SK312土塙下部から6個まとめて出土している。763は器形は同じであるが口径は大きい。4類の碗はほかにSK339土塙からも出土している。

5類 口縁が折り返したようになった、いわゆる玉縁をもつ白磁で、底部は低い高台になっている。SD305溝の445やSK312土塙の550もこの5類の白磁である。

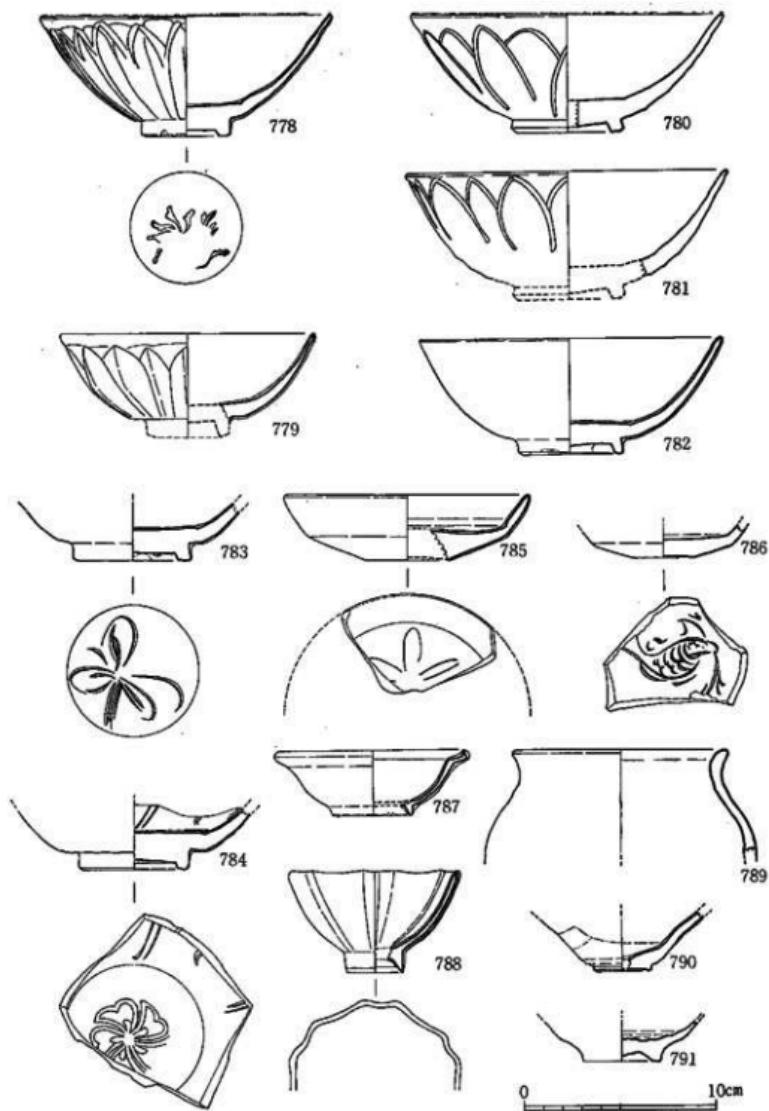


31図 青磁、白磁実測図

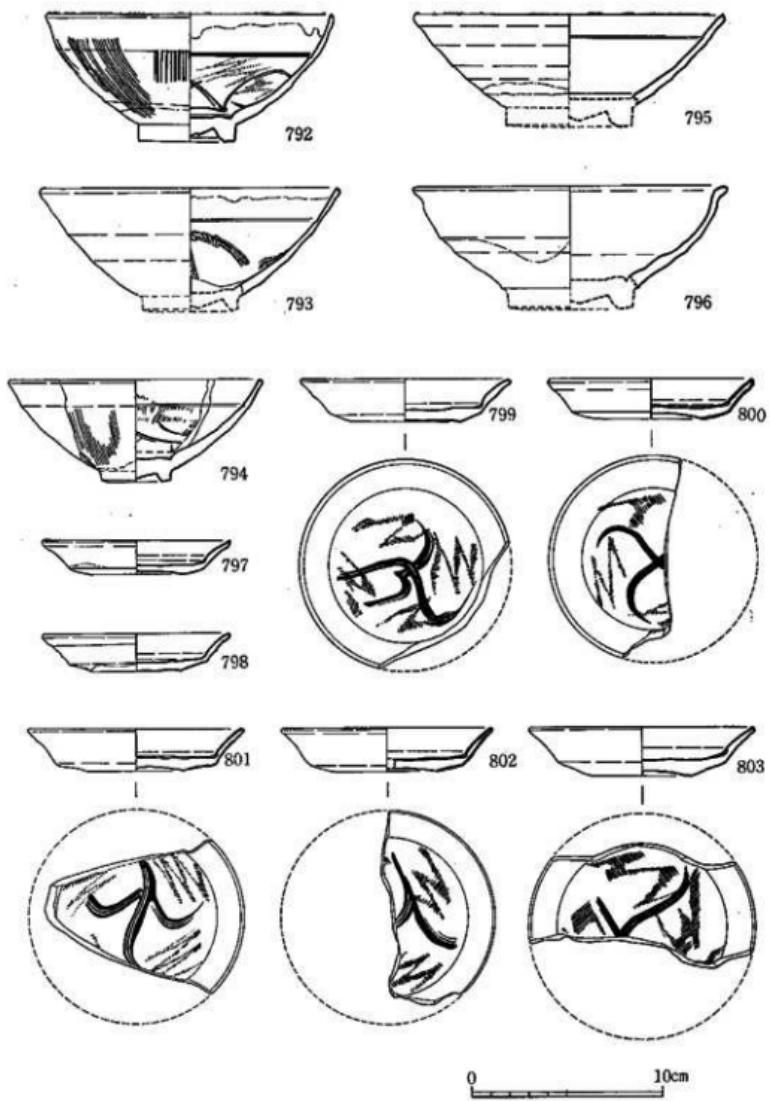


32図 白磁実測図

6類 (32図762～771) いわゆる口禿の白磁で、焼成前に口縁先端の釉が削りとられている。皿形と高台がついた挽 (771) がある。底部には釉がかからないか、かかっていても極めて薄い。



33図 青磁、天目、高麗青磁測定図



34図 青磁実測図

そのほか白磁には次のようなものがある。

b (764～766) 口縁と底部との境に弱い屈折部をもつ白磁小皿で、口縁は尖っている。底面は焼成前に釉をかきとっている。764はSK311土塙出土で、胎土は白色で、薄い青色の釉は底部まではかかっていない。765の胎土は黄褐色で灰白色の釉がかかっている。底面は焼成前に釉をかきとっている。見込みに沈線による文様を描いている。766の胎土は白灰色で、黄色味をおびた薄緑灰色の釉がかかり、見込みに型押しの花文がついている。SK315土塙出土。

c (772～774) 白磁壺の口縁で、774は頸部が長く把手がついている。いずれも上層出土。

そのほかに次のような白磁がある。775はSK326土塙およびSK317土塙から出土したもので、見込みに沈線と櫛齒文で花文が描かれている。胎土は灰白色で、黄灰色の釉がかかっている。776は内面に細かい沈線と櫛齒文で文様を描いていて、胎土は灰白色で、透明な淡緑色の釉がかかり、貢入がみられる。あるいは青白磁にはいるかもしれない。777は薄手で、器壁を押して形をつくった輪花碗で、胎土は灰白色で、薄い灰緑色の釉がかかっている。下層からの出土である。

7類 (33図778～784) 低い高台を有し、腹部はやや丸味をおびた青磁で、数種に分けられるが、底部で見るかぎりあまり差はない。

A (784) 外側は無文で、内側に二本の線で区切られた空間に、飛雲文が描かれたもので、784は見込みに花文の型押しがあり、胎土は灰色で、釉は緑灰色である。

B (783) 外側は無文で、内面にヘラによる花文が描かれているもので、783は見込みにも花文が描かれている。胎土は白灰色で、釉は淡緑色である。

C (778～781) 外面に蓮弁文が割り出されたり、沈線によって蓮弁が描かれたものである。778は見込みにボタンの花文が型押しされ、胎土は灰白色で、釉は深緑色である。779はSK305土塙出土で、胎土は灰色で、釉は薄緑色である。780は胎土が灰色で、釉は風化して緑灰色である。781は胎土白黄色で、釉は黄灰色である。

D (782) 無文のもので、胎土は淡灰色で、釉は灰黄色を呈し、部分的に細かな貢入がある。

なお7類に伴う小皿としては次のようなものが考えられる。

d (785) 口縁と底部との境が屈折し、見込みにヘラによる花文が描かれている。底面は焼成前に釉がかきとられている。786は見込みにヘラで魚文が描かれ、底面は焼成前に釉がかきとられ、三箇所に目あとが残っている。胎土は灰白色で、釉は褐緑色である。

789は青磁の壺で7類によく似ている。

8類 (287・288) 厚く釉がかかり、高台は薄く、床付部分は尖り、釉は焼成前に削りとられ、褐色を呈している。いわゆる竜泉窯系といわれているものである。787は胎土が灰白色で釉は薄緑色である。788は輪花小碗で、胎土は白色で、釉は青緑色である。

9類（34図792～803） いわゆる珠光青磁とよばれるもので、櫛齒による文様が特徴的である。胎土は灰色ないし灰白色で、灰緑色ないし灰黄色の釉がかかっている。792～794は碗で、内面の口縁下に沈線があり、その下に櫛齒による文様が描かれ、792・793の外面にも櫛齒による条線がひかれている。795・796は無文の碗である。797～803は小皿で、釉は底部までかかっていないものもあるが、焼成前に底面の釉をかきとったものもある。800はSK317土塗出土。

10類（33図790） いわゆる天目とよばれるもので、790の胎土は灰色で、暗赤褐色の下ぬりの上に、黒色の釉が底部を除いてかけられている。

11類（図版23の1） 青白磁で、碗、皿などもあるが、やはり一番多いのは瓶の破片である。胎土は白色で、薄青色ないし薄緑色の釉がかかっている。

12類（33図791） 高麗青磁とよばれるもので、791の胎土は灰色で白色の粒が混じり、やや透明な薄灰青色の釉がかかっている。高台の床付面には目あとがついている。

## 8. 雜 器（35図）

明瞭な青磁・白磁などの磁器のはかに、色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないが、ここでは一応雑器としてまとめ、分類は第5次調査の報告に従った。

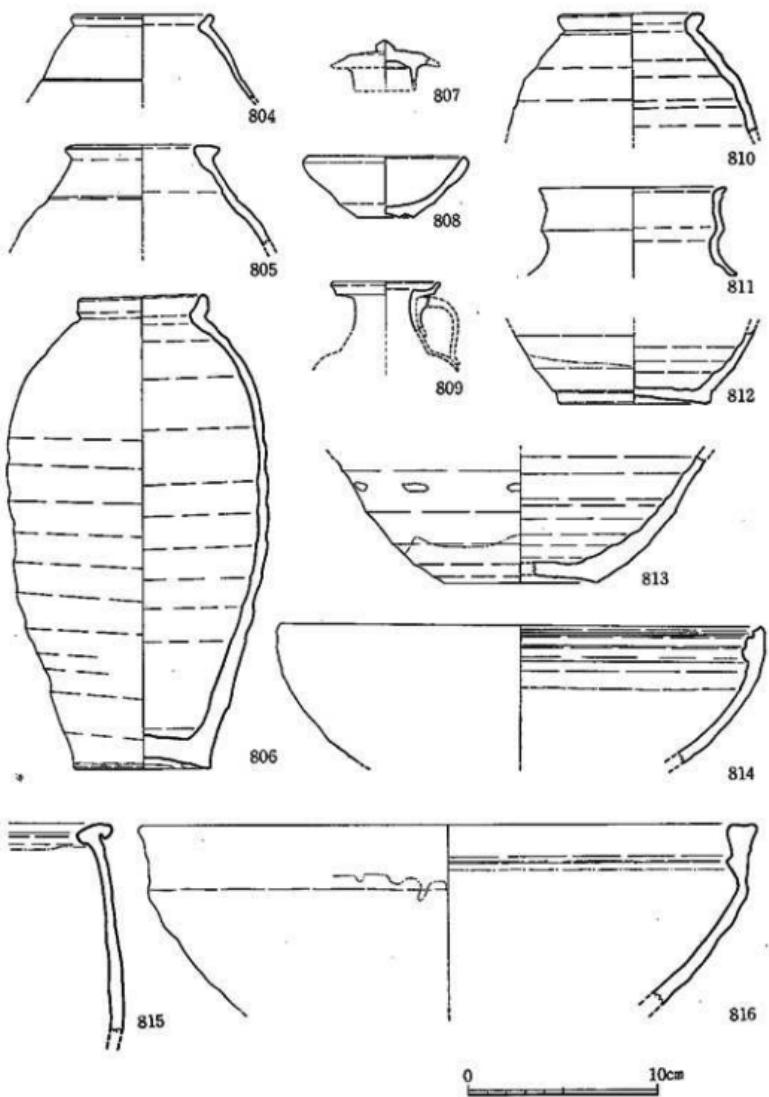
1類（804） 短い口縁がやや開き、器壁はやや薄く、肩部に沈線がめぐっている。底部には低い高台がつくものと思われる。804は胎土が褐灰色で釉は風化して濁緑色を呈している。

3類（805・806・810） 短い口縁をもち、黒褐色を呈する瓶ないし臺で、底部はやや上げ底である。806の口縁は横にまがり、上面は平坦である。胎土は紫灰色で、黒褐色の釉がかかり底面に三箇所の目あとが認められる。810は胎土が白灰色で磁器質であり、内面には紫褐色の薄い釉がかかり、外面には緑灰色の釉がかかっているが風化がはげしい。口唇部に目あとが部分的についている。

5類（808） 小皿で、暗褐色の薄い釉の上に、緑味褐色の釉をかけている。胎土は灰色を呈している。

7類（815） 口縁が外に張り出す鉢形のもので、大きな底部をもつ。見込みには褐色の文様が描かれたものもある。815はSK301土塗出土で、内面の口縁下から灰緑色の釉がかかり、外面は紫褐色で釉はない。胎土は明灰色である。

8類（814・816） 口縁内側に二段の凸帯をもつ鉢で、内面下半部はよく研磨されている。胎土には白い砂粒を含み、焼成は硬い。814はSK312土塗上部からの出土で、暗茶褐色を呈している。816はSK341土塗出土で、この8類にはいらないかもしれない。内側に1段の凸起があり、口縁部は厚く、上端は平坦になっている。口縁部内外面に灰白色の釉がかかり、他の部分は黒褐色である。



35図 錐器実測図



36圖 文字瓦拓影

11類 (809・812・813) 暗褐色の釉がかかったいわゆる褐釉陶器で、胎土は紫灰色、暗灰色、赤褐色などである。809は把手が付き、口縁は皿形に開く。水注の口縁であろう。812はSK322土塗出土で、小形壺ないし水注の底部である。813はやや大きな底部で、胴下部に目あとがついている。

そのほか807はSK309土塗出土で、蓋の上面に緑色の釉がかかり、胎土は灰色の、綠釉陶器である。811は器壁が薄く胎土は灰色ないし紫灰色で、綠味褐色の釉がかかっている。

## 9. 灰釉陶器、古瀬戸、常滑陶器 (図版25の2)

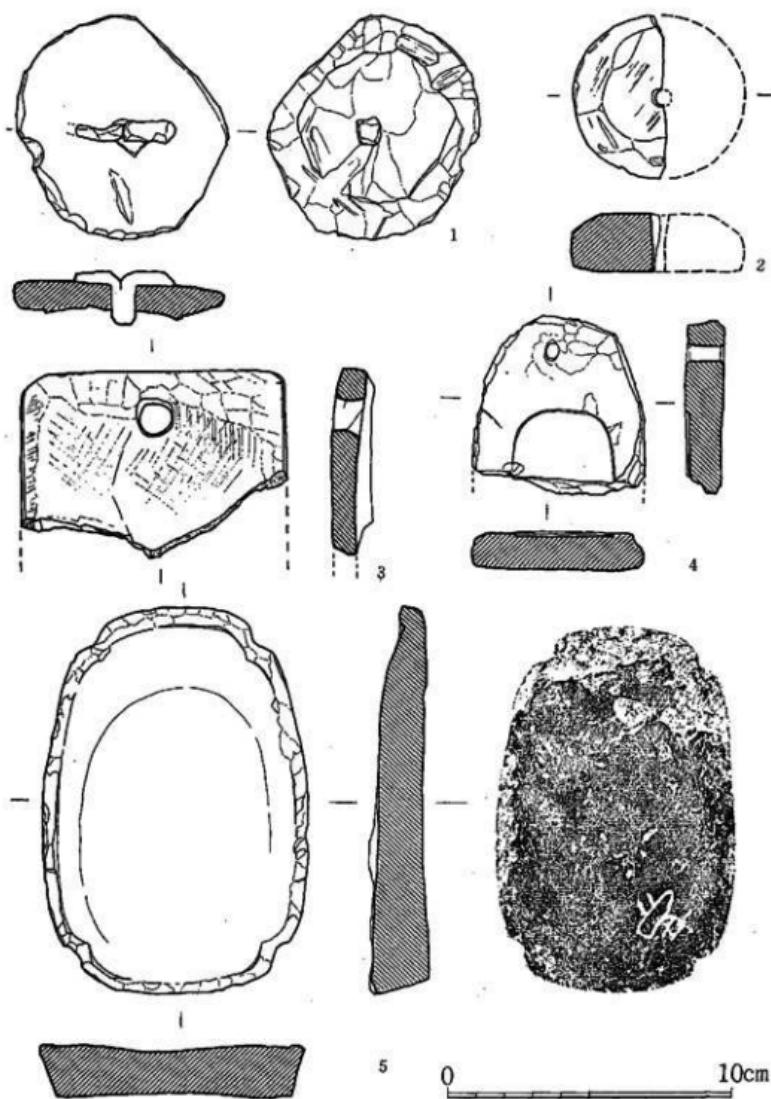
灰釉陶器は、皿や平瓶の取手など少量が出土している。古瀬戸は今回初めて、それとわかるものが出土している。胎土は灰白色で、薄緑色の釉がかかっている。文様は唐草文や点で構成した葉状文、横沈線文などで、器形は瓶形がほとんどである。いずれも上層からの出土である。常滑陶器も第5次調査時と同様に多く出土している。押印の文様もほぼ同じである。

## 10. 瓦 (36図)

瓦は多量に出土しているが、いずれも細片で、造構と結びつくものはない。ほとんどが平安時代のもので、文字瓦には「平井」「平井瓦」「筑」「口前」「安」「賀」「賀茂」「佐」「之」「小ト瓦」？「四王」？などがある。

## 11. 石製品 (37図、図版26の1)

1は長径8cm、短径7.5cm、厚さ1.2cmをはかる滑石製品で不整円形をなす。中央部に孔をあけ半折した鉄片を片面から挿入して鉤状に残し、他面に出た2片を両側へと折り返していく。鉄片の断面は方形をなす。両側に折り返しのある面は火気を受けて黒灰色に変色し、つまみのある面は周縁からの削りにより梢円形状に一段高く造り出されている。中央部はやや回む。下層茶褐色土出土。2は径6.1cm、高さ2.1cmの円形をなす滑石製有孔円板で、孔より半折している。周縁は多面体に削り出して円形とし、断面はほぼ台形をなしてやや周縁よりに稜をつくる。孔は円形で上面で6mm、裏面で4mmの断面ロウト状をなす。表裏ともに条痕がみられる。3層出土。同様なものが4次調査でも出土しており鋤鎌車と思われる。3は滑石製石板で、下端部を欠損する。幅9.4cm。体部はやや湾曲し、孔径1.1cmの両面穿孔である。図示した面の右上から左下へ幅1mm間隙で櫛目条痕がほぼ全面にわたってみられる。裏面にも不定方向の条痕がみられる。SK309土塗出土。4も滑石製で下半部は半折している。現存長6.4cm、幅6.1cmの長円形状をなし厚さは1.4cmを測る。周縁部は縦方向の削りによる整形で、上端部に径4mmの円形孔を有する。表面には深さ1mmほどの浅い隅丸形をなす凹みをつくるが、この底面は滑らかではない。観であろうか。5は鼠色を呈した石材を使用する観で周縁部を欠損



37図 石製品実測図

するがほぼ完形品である。長径 13.6cm、短径 9.3cm、高さ 1.9cm をはかり方形に近い長円形をなし、四隅に抉りを配する。陸は海部との境に稜をつくり中央部は周辺より 3mmほど凹む。裏面はやや上げ底をなし下端右側に花押状の線刻が見られる。

3次の調査で出土した石製品は上部の他に滑石製石鍋片が10余点あり、銅をめぐらさないものが1点みられる。滑石製加工品は石鍋の鉗部周辺を方形に面取りしたものがある外はあまり出土していない。黄岩質の硯小片1点と輝緑凝灰岩の長方形に整形した石板状のものが2点出土している。これは4次調査でも出土していて硯の石材となるものであろう。

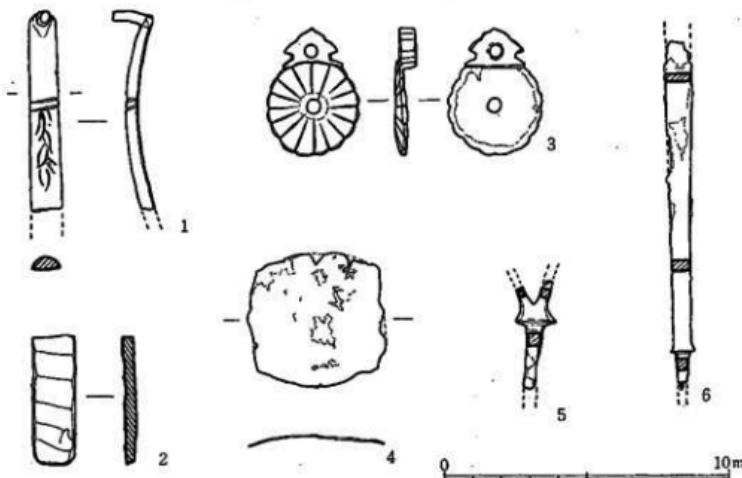
## 12. ガラス製小玉

ブルーのガラス製小玉が1個出土している。高さ 4.65mm、径 3.55mm、孔径 1.0mm の小さい玉である。巻き上げて作った状態がよくわかるもので、両端が糸状に延びて体面脇に突出している。SK333土塙出土。

## 13. 金属製品 (38図、図版26の2)

3次の調査では金属製品の出土は少ないが、特色ある遺物が出土している。

1は銅製の帯鉤で、一端を欠損するが現存長 7.05cm、最大幅 1.1cm、厚さ 0.42cm を測る。



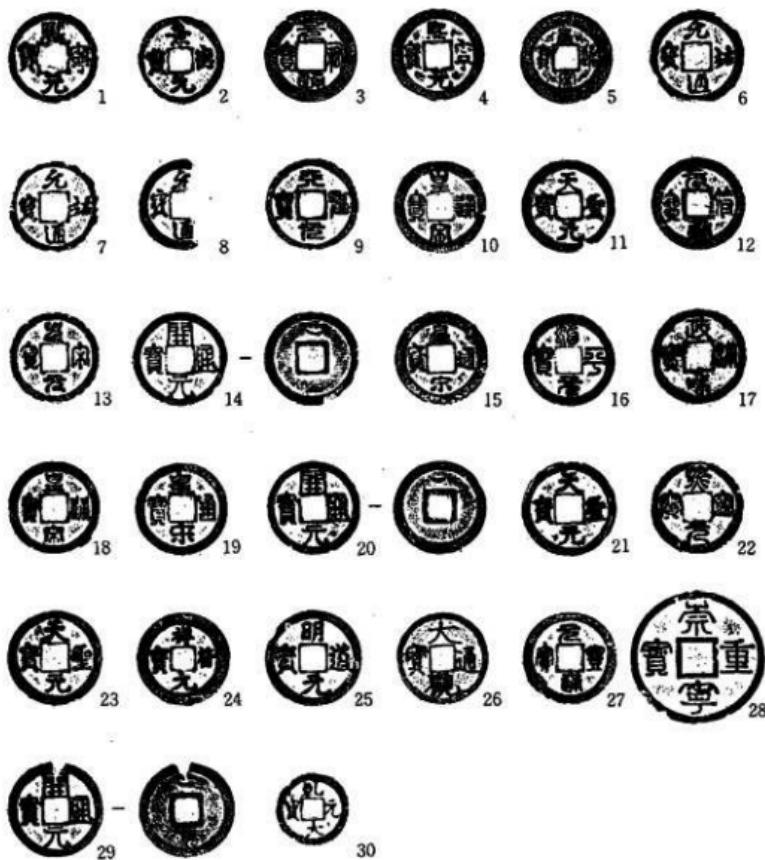
38図 金属製品実測図

断面かまぼこ形をなすが裏面は平坦ではない。先端部は薄く扁平になり長さ1.1cm、径0.4cmのやや内湾する柱状の鉤を挿入している。体部には中位に2条の沈線を配し草花を思わせる文様を彫り込んでいる。SK338出土。なおこの土塙からは他に長さ51cm、断面方形をなす柱状鉄片や鉄錠片が出土している。2は赤銅色を呈する銅で、いわゆる「あかがね」である。長さ4.6cm、幅1.5cm、厚さ0.45cmを測り薄板状をなす。重さは22gである。図示した上面は削りとられたような波状の面をなすが、裏面は平坦面をつくる。SD301溝底面出土。3・4はともにSK318土塙からの出土で、他に柱状の鉄片も出土している。3は鶴頭状の鉤を有する銅製品で、全長4.5cmを測る。鶴頭部は高さ1.2cm、幅1.8cm、厚さ6.5mmで径4mmの孔を有する。胴部は径3.6cm、厚さ2.45mmで、径5mmの円形孔を中心に放射状に16区画に分けて單弁の菊花紋をつくり出している。放射状に延びた線は等角度をなさず乱れており、直線状にならない。鋳出後の手書きによる陰刻だと思われる。鉢と胴部の間に横幅2.1cmの肩部をつくり、胴部裏面の上端に鉢の上面がつづき、鉢と胴部には一段の段がつく。裏面は特別な形状はなさない。飾金具様のものであろうか。4は厚さ0.4mmの薄い銅製薄板製品で、一辺4.7cmの方形をなし、周縁は四稜を形づくっている。中心部は周縁より4mmほど高くなつて盛り上げている。表裏ともに緑青をふいているが、孔などの加工などは見られない。用途不明。5・6は鉄製鐵で、5は現存長3.3cmの小片であるが上端が二段に分かれており、いわゆる「雁股式」に属する形式のものであろう。茎は断面5mmの方形、先端部は3mmの方形をなす。葉被きは円形をなす。SK317出土。6は現存長12.4cmで先端部を欠損するが、厚さは1.3mmを測る。棒状部は4mmの長方形・茎は5mmの方形断面をなす。上層ML～MM28区落ち込み出土。

その他に金属鋳造に関係ある遺物として鉛錠、とりべ片20余点、輪羽口數点、土製鉢型片、焼土塊、それに柱状をなすものやU字状に曲がる鉄片などの用途不明鉄製品も多数出土している。特に今回は報告できなかったが「水瓶」の鉢型と思われるものも出土していて、当遺跡において金属製品の製造が行なわれていたことが明らかとなった。

#### 14. 銅 錢 (39図、図版27の1)

第3次の調査では判読不明のもの1枚を含めて16種30枚の銅錢が出土している。最も多く出土しているのは皇宋通宝で5枚、ついで天聖元宝の4枚、熙寧元宝・開元通宝・元祐通宝が各3枚ずつ出土している。北宋銭がほとんど、他に唐銭や皇朝十二銭最後の鋳造になる平安時代の乾元大宝も出土している。またM132区の4層からは8枚「さし」の状態で発見されておりこれには唐の開元通宝(621年)から北宋の政和通宝(1111年)までのものが含まれていて、年代幅をもつ銭貨が流通していたことがわかる。層位的には上下関係の出土はみられるが、年代的にはばらつきがあり下層から出土するものが必ずしも古いとは言い切れない。ただ11世紀



39図 銅 錢 拓 影 (%)

から12世紀初期のものに集中していることはある程度の目安とすることができよう。

8は右の部分を欠損しているが、「祐」、「豈」「符」のいずれかがあてられよう。14・20・29の開元通宝は背面穿孔に卯月形をした「～」の鋳印がみられる。

图版 番号	錢貨名	外 径		外縁厚さ	出 土 地 点		初 銄 年	備 考
		水 平	垂 直		地 区	層 位		
1	熙寧元宝	24.02	4.05	1.75	排土中	宋 神宗 1068		方孔に4カ所切り込みあり
2	景德元宝	23.12	3.25	1.65	MJ28	3層	宋 真宗 1008	
3	元祐通宝	24.7	24.6	1.15	ML26	3層	宋 哲宗 1086	
4	熙寧元宝	24.8	24.5	1.55	MJ28	3層	宋 神宗 1068	
5	皇宋通宝	24.55	24.65	1.2	ML35	3層	宋 仁宗 1039	
6	元祐通宝	24.7	24.6	1.3	ML35	3層	宋 哲宗 1086	} 銘著
7	元祐通宝	24.2	24.25	1.25	ML36	3層	宋 哲宗 1086	
8	元祐通宝	24.25		1.3	ML35	3層		
9	天聖元宝	24.6	24.25	1.35	ML35	3層	宋 仁宗 1023	
10	皇宋通宝	24.75	24.5	1.35	ML35	3層	宋 仁宗 1039	
11	天聖元宝	24.8	24.6	1.45	MF31	3層	宋 仁宗 1023	
12	元符通宝	24.7	24.95	1.3	ML35	3層	宋 哲宗 1098	
13	聖宋元宝	24.0	24.0	1.3	MM33	3層	宋 徽宗 1101	
14	開元通宝	25.51	25.1	1.35	MM32	3層	唐 高祖 621	背面上方に仰月「一」の銘印あり
15	皇宋通宝	24.7	24.8	1.3	MJ34	3層	宋 仁宗 1039	
16	治平元宝	24.45	24.7	1.55	MM32	3層	宋 仁宗 1064	
17	政昭通宝	24.7	24.8	1.5	M132	4層	宋 徽宗 1111	
18	皇宋通宝	24.15	24.3	1.1	M132	4層	宋 仁宗 1039	
19	皇宋通宝	24.4	24.3	1.45	M132	4層	宋 仁宗 1039	
20	開元通宝	24.85	24.75	1.5	M132	4層	唐 高祖 621	背面「一」銘印 8枚銘着
21	天聖元宝	25.05	25.1	1.25	M132	4層	宋 仁宗 1023	
22	熙寧元宝	24.3	24.35	1.1	M132	4層	宋 神宗 1068	
23	天聖元宝	25.1	25.15	1.4	M132	4層	宋 仁宗 1023	
24	祥符元宝	24.9	24.95	1.2	M132	4層	宋 真宗 1008	
25	明道元宝	25.65	25.6	1.35	MM26落ち込内		宋 仁宗 1032	S D308溝
26	大觀通宝	24.3	24.25	1.45	MM26落ち込内		宋 徽宗 1107	S D308溝
27	元豐通宝	24.75	24.9	1.45	ML29	柱穴	宋 神宗 1078	
28	崇寧重宝	35.8	35.9	2.4	MJ29長方形弧		宋 畫宗 1106	S K311土城
29	開元通宝	25.35	25.25	1.45	MJ30	柱穴	唐 高祖 621	背面「一」銘印
30	乾元大宝	19.4	19.5	1.3	M1列溝内上層		日本朱雀 938	S D305溝

(単位 mm)

25表 銀 錢 計 測 一 覧 表

1の熙寧元宝には方孔の四辺に切り込みが加えられている。

今回の出土銅錢で注目すべきことは、下巻 S D306 溝内上層から出土した乾元大宝である。平安時代前期以来朝十二銭の流通は停滞して貨銭の鋳造も減少し、その質量も鉛が多くなって劣悪軽小となり、鋳造技術も疎懶粗雑となって不完全なものが多くなるが、今回出土の乾元大宝も径 1.94cm と小形で穴があいていて粗雑なつくりであり、色調も宋銭などに比して青味がかかっている。貨銭流通停滞の中で造られた乾元大宝が、地方である大宰府へも将来されたことは経済史の立場からも大変興味深いものである。

また平安時代の銅錢は初めての出土であり、S D306 溝とともに当遺跡の確実な年代を知る上で一つの上限が決められよう。なお、これら銅錢の中には私銭（錦銭）も混在しているかもしれないが、現段階では判別できず、今後詳細な検討が必要とされる。

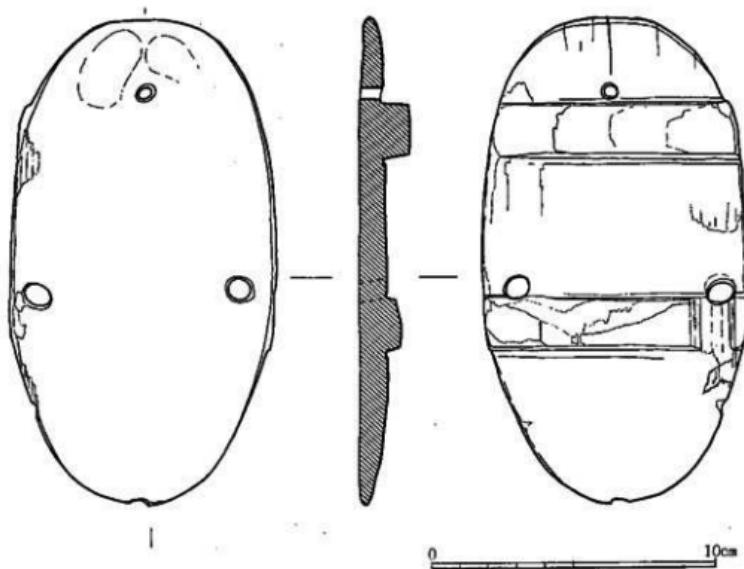
## 15. 木 製 品 (40図、図版27の2, 28)

3次の調査では木製品を多く包含する井戸・溝などの検出が少なかったため、数点が発見されたに過ぎないが興味ある資料が出土している。S D302 溝から墨書き木札と箸などが出土している。墨書き木札は溝底面に貼りついで発見され、12点出土している。長さには長・短の二種類があり、上端に切り込みを有するものもある。うち1点には「急々如律令」と墨書きされておりその上部には「咒咀」も記されている。「物忌札」の一種であるが、第3次調査でも「急々如律令」と土師器蓋に墨書きしたものが出土しており、改めて報告する予定である。なお、静岡県の伊場遺跡<sup>註1</sup>や宮城県の多賀城跡<sup>註2</sup>からも「急々如律令」墨書きの木筒が出土している。

下駄が S E302 井戸掘り方埋土より出土している。台長 17.2cm、台幅 9.4cm、台厚 1.0cm、高さ 1.8cm で小児用の連歯下駄である。長楕円形をなし鼻緒孔は前のものが径 0.5cm ではば垂直に、後のものが 0.8cm で斜めに穿孔されている。前歯・後歯とも歯上端より幅 2mm、深 1mm の切り込みを 2 本ずつ有する。歯を台部から造り出す際の鋸引きの鋸目痕であろうか。台部上面先端足指の痕と後歯の磨耗の状態により右足に履かれたものである。

註1. 「伊場遺跡出土文字集成（概報）」伊場遺跡調査團 昭和46年

註2. 「多賀城跡—昭和49年度発掘調査概報—」宮城県多賀城調査研究所年報1974 昭和50年

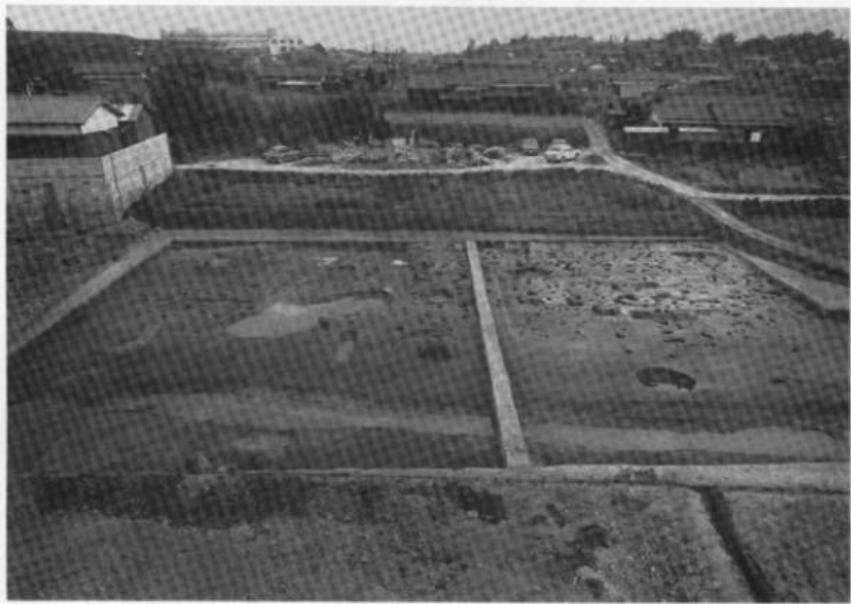


40図 下歯 実測図

# 図 版



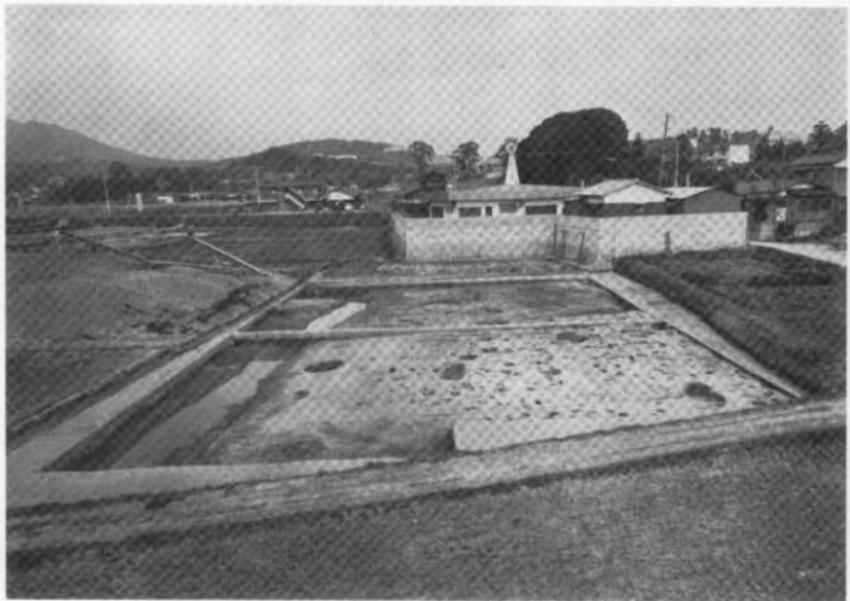
1. 遺跡全景航空写真



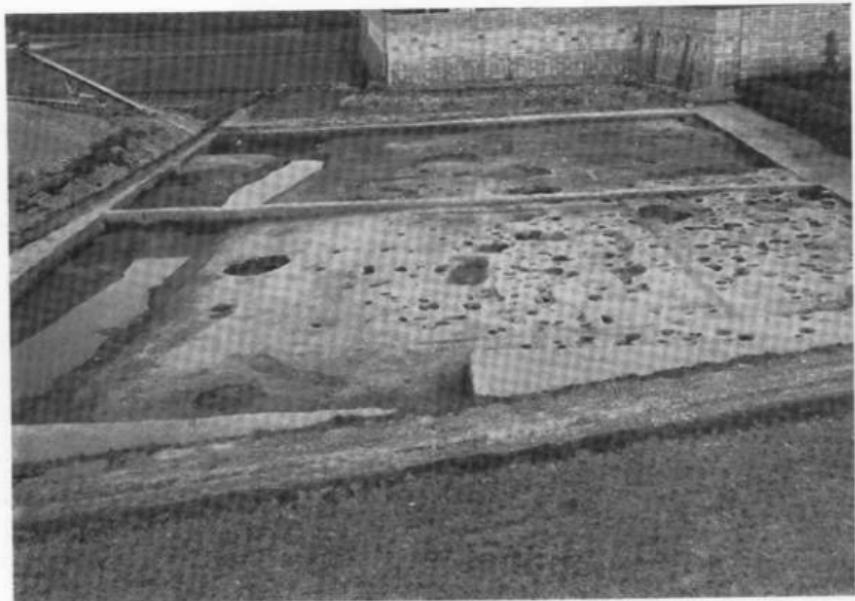
2. 遺跡全景（北から）



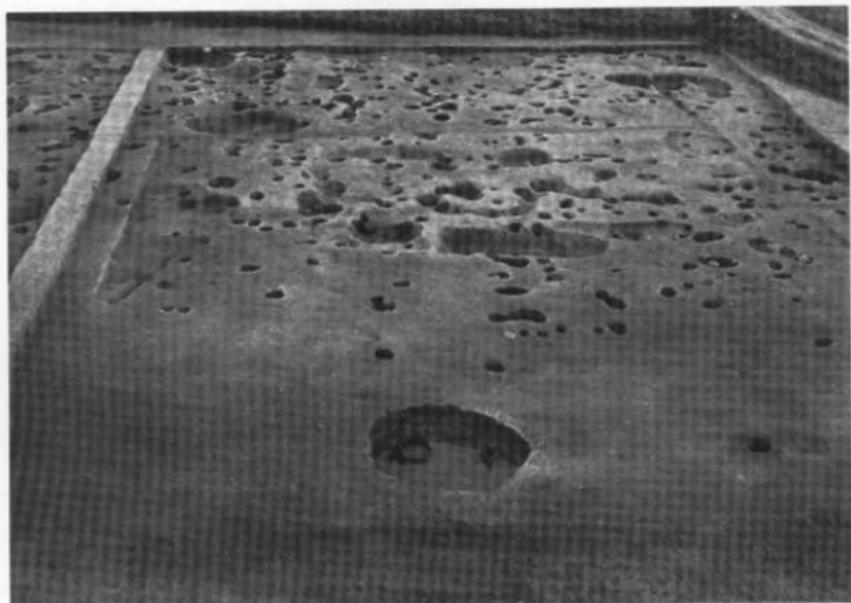
1. 上層遺構全景（東から）



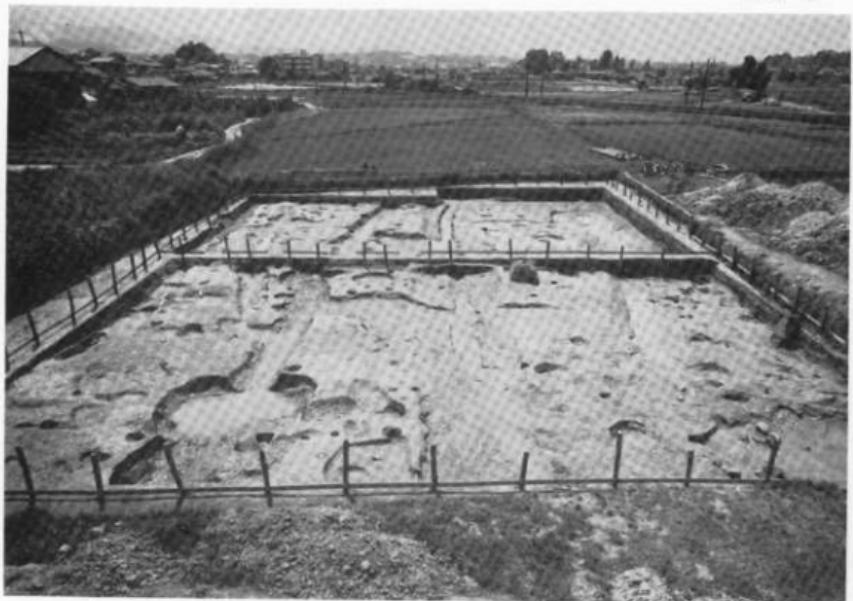
2. 上層遺構全景（西から）



1. 上層造構全景（西から）



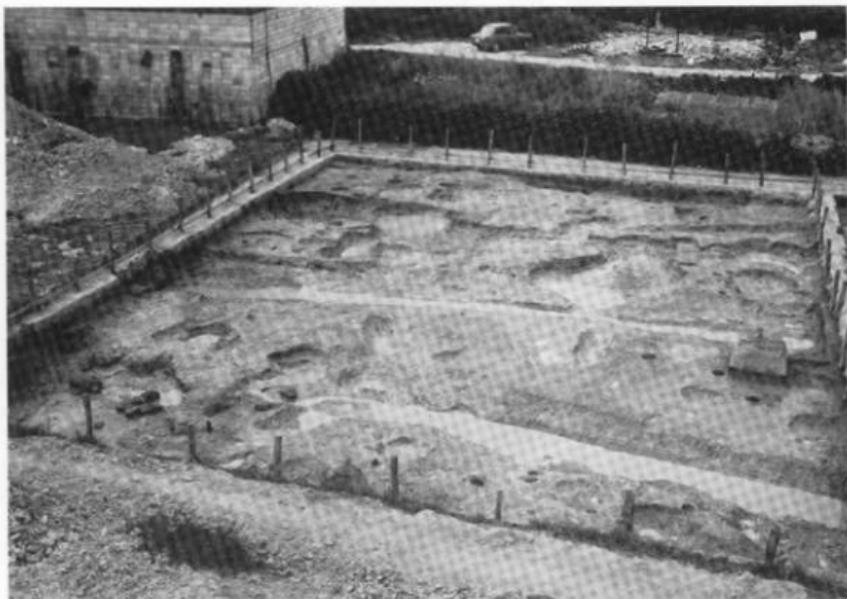
2. 西区上層造構（北から）



1. 下層遺構全景（東から）



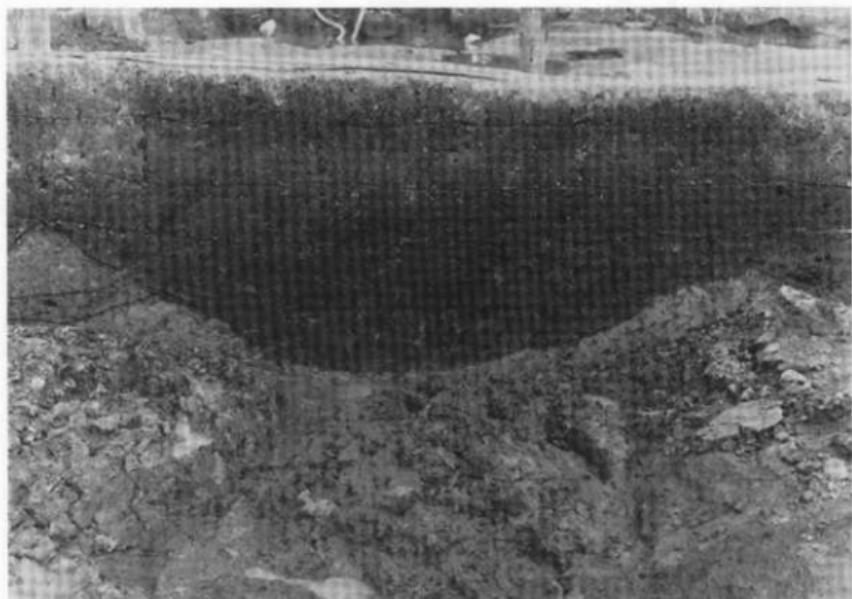
2. 下層遺構全景（西から）



1. 東区下層造構全景（北から）



2. 西区下層造構全景（北から）



1. S D301溝土層



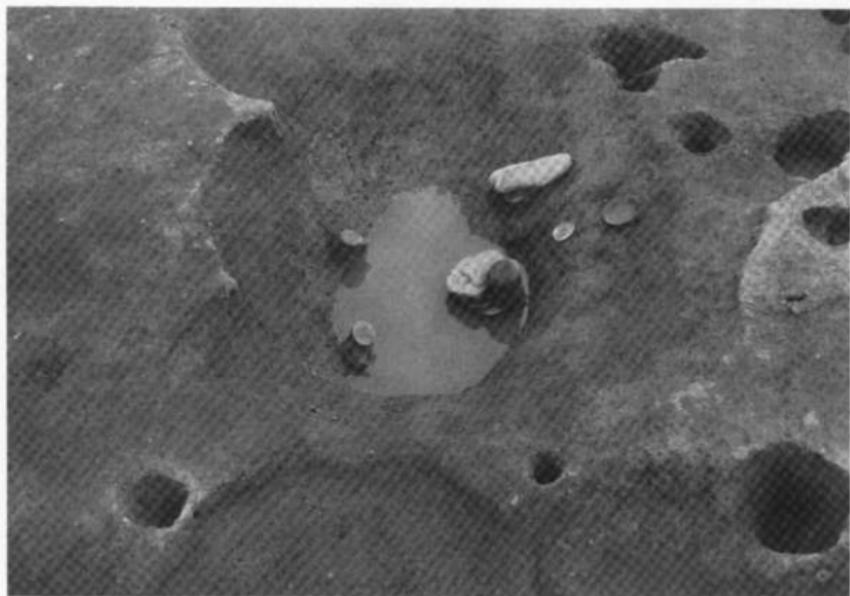
2. S D302溝（南から）



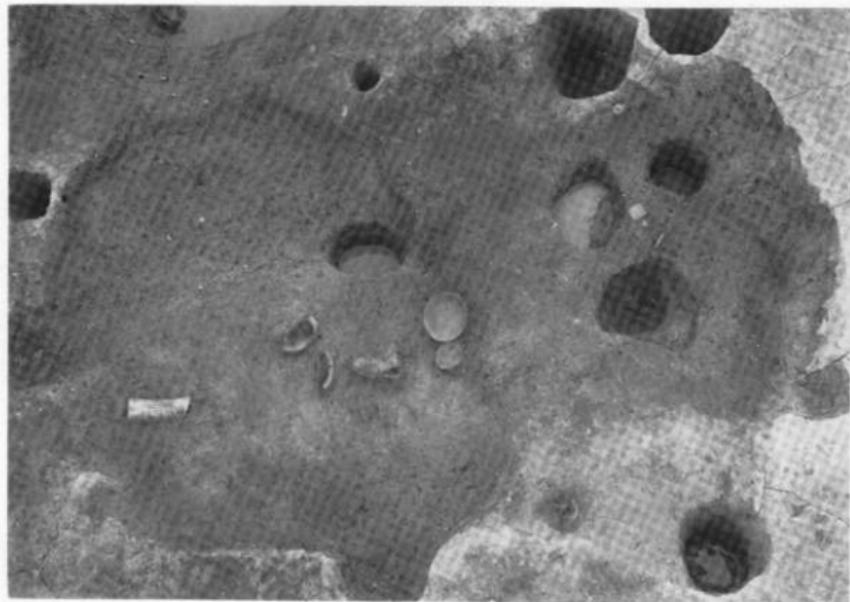
1. SK310土壤



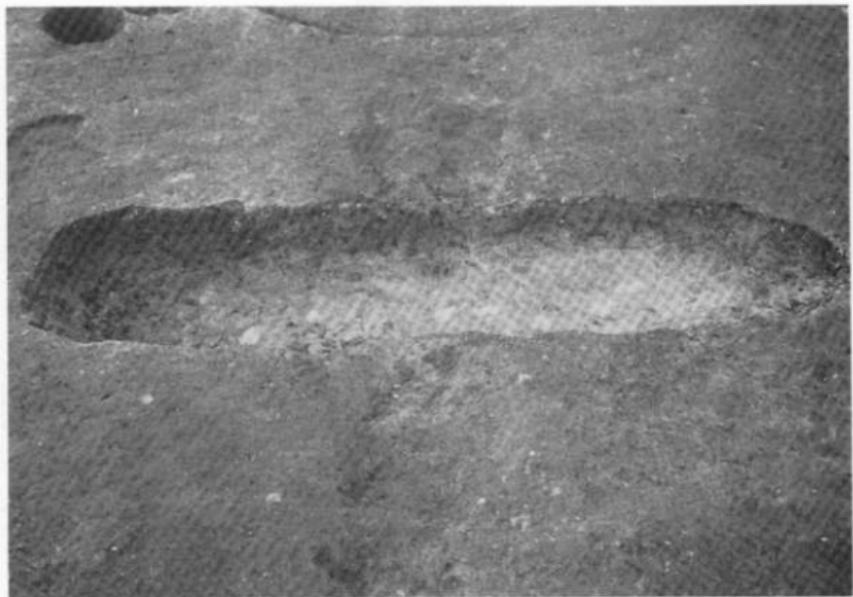
2. SK325土壤



1. SK317土塙



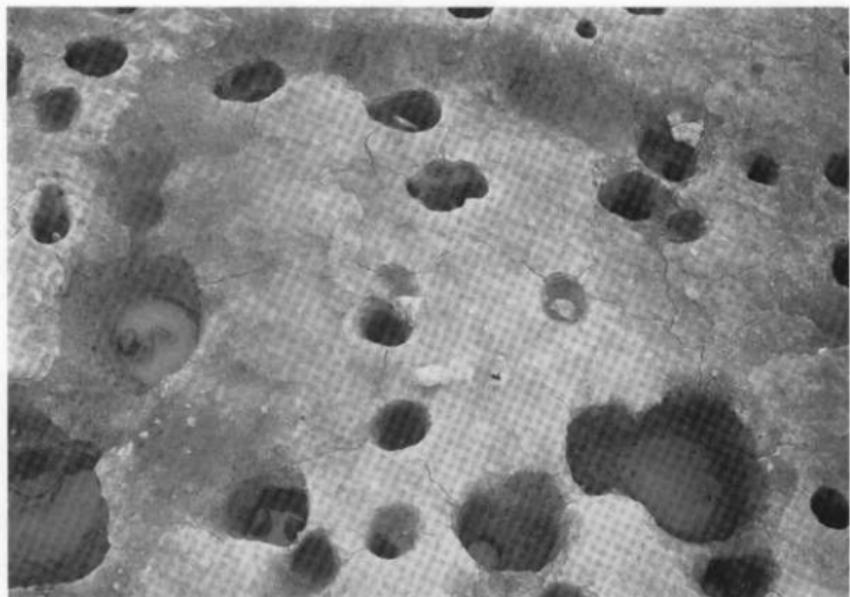
2. SK318土塙 (右) SK319土塙 (左)



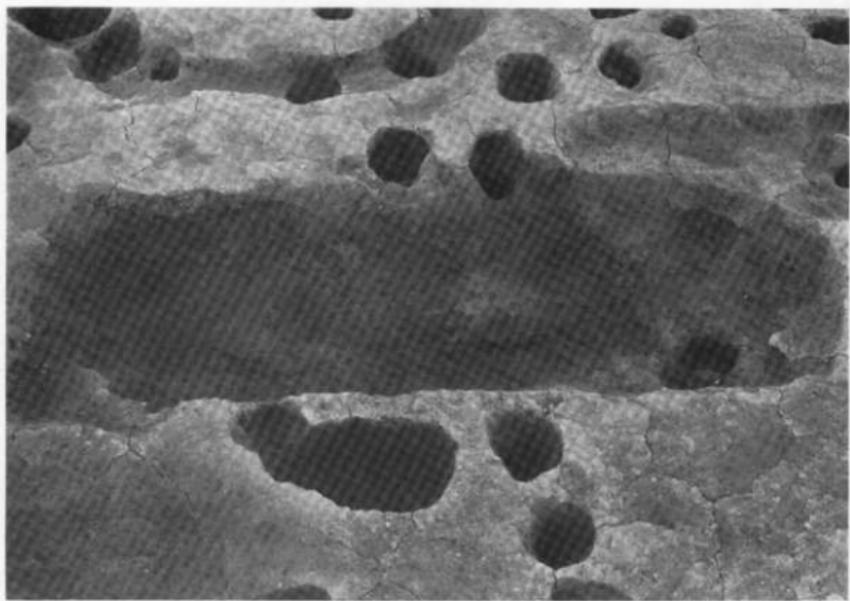
1. SK323土塙



2. SK333土塙



1. MK29区土塚



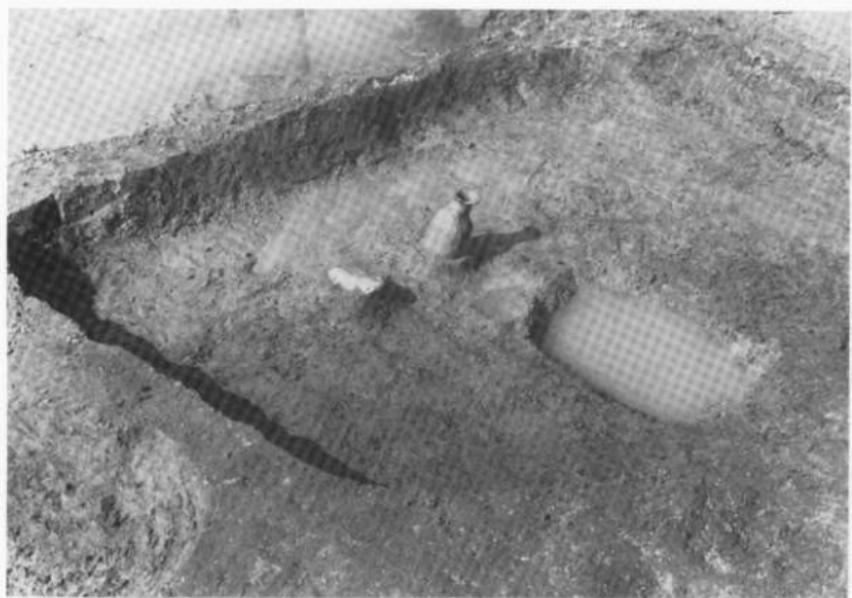
2. SK309土塚



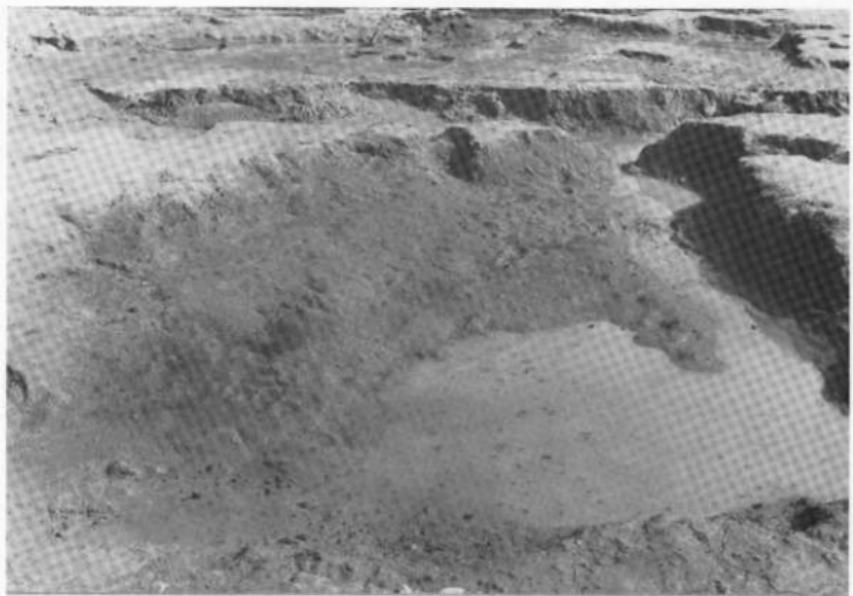
1. SD301溝（左）・SD304溝（右）土層



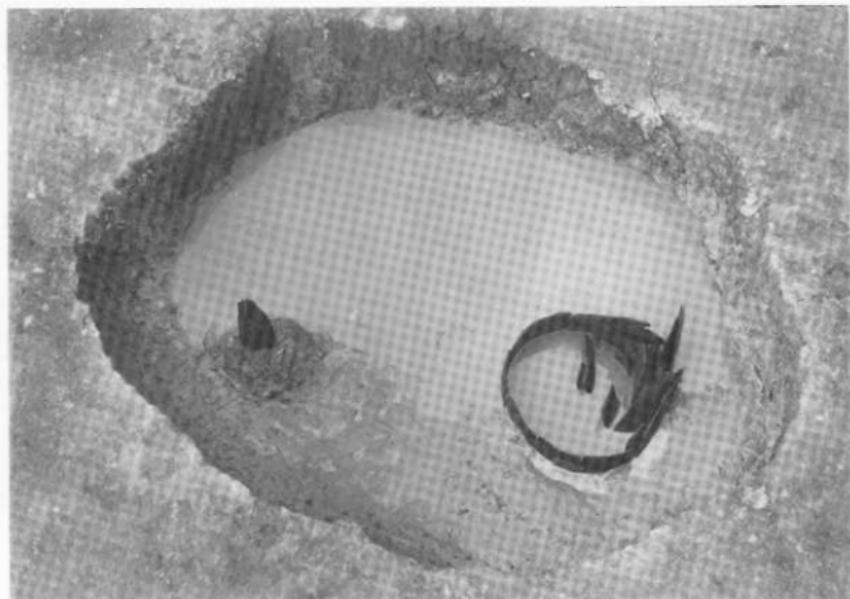
2. SD305溝（左） SD306溝（右）



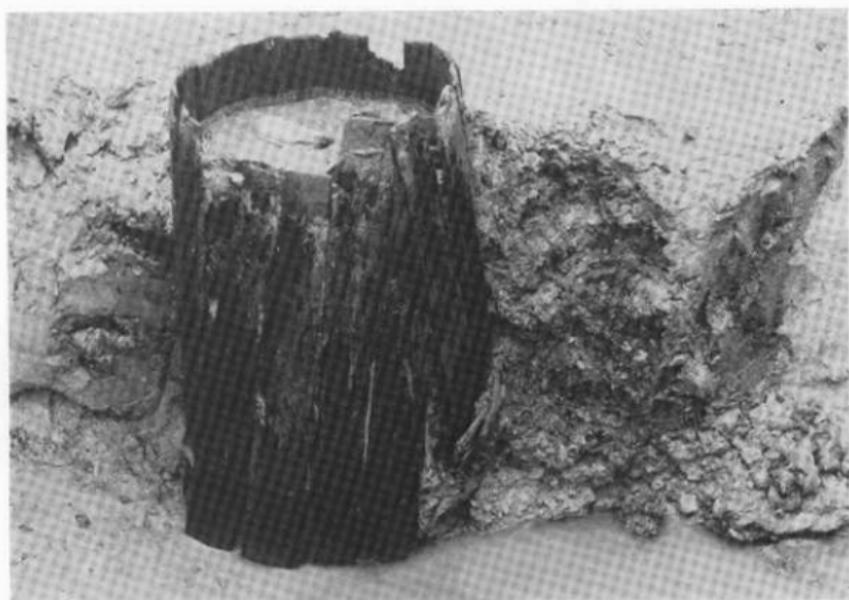
1. SK345土壤



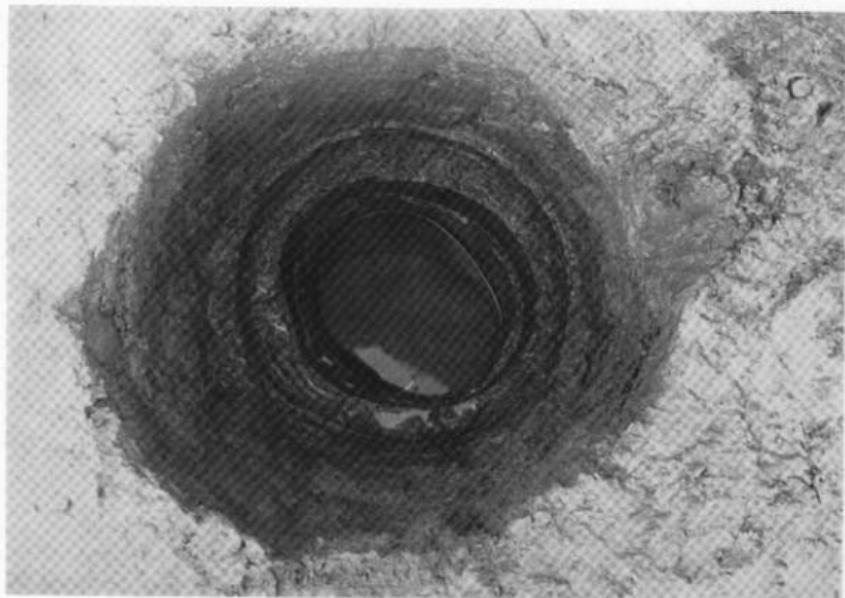
2. SK339土壤



1. S E301井戸



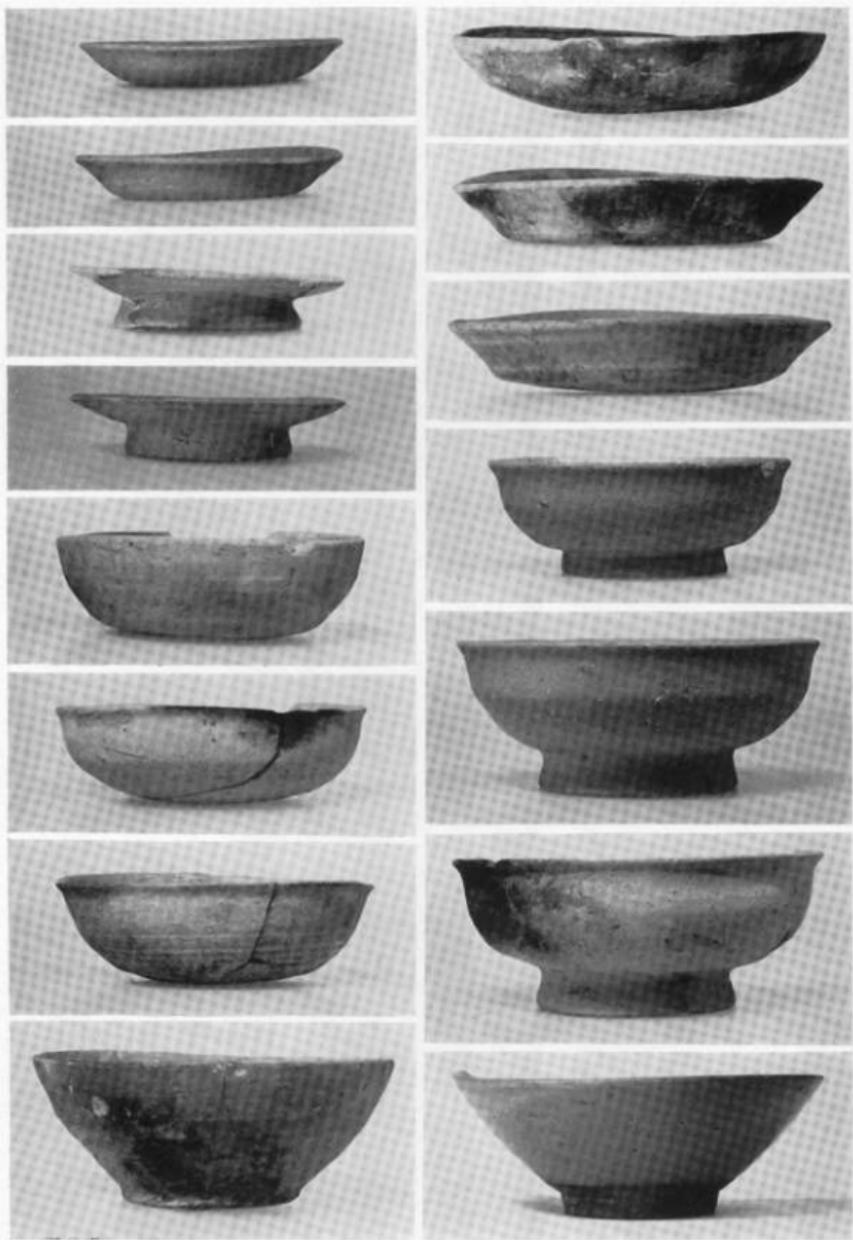
2. S E301井戸



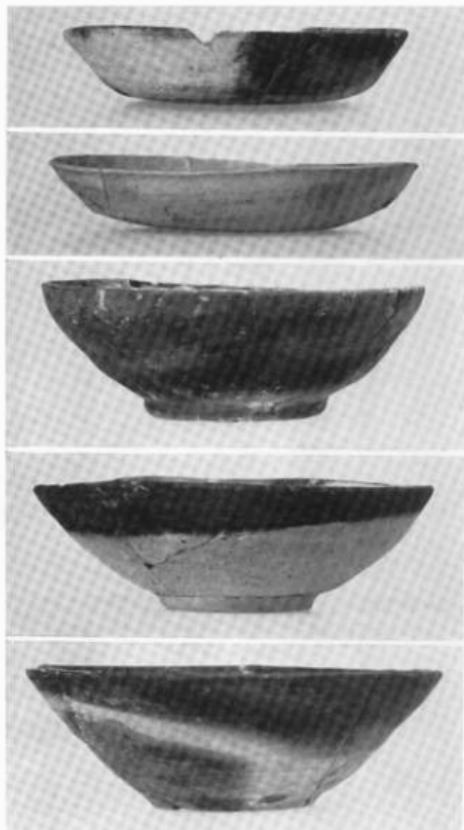
1. S E303井戸



2. S E303井戸



S K339土塚出土遺物



1. S D305溝出土遺物



(右最上は SK339土塙出土)

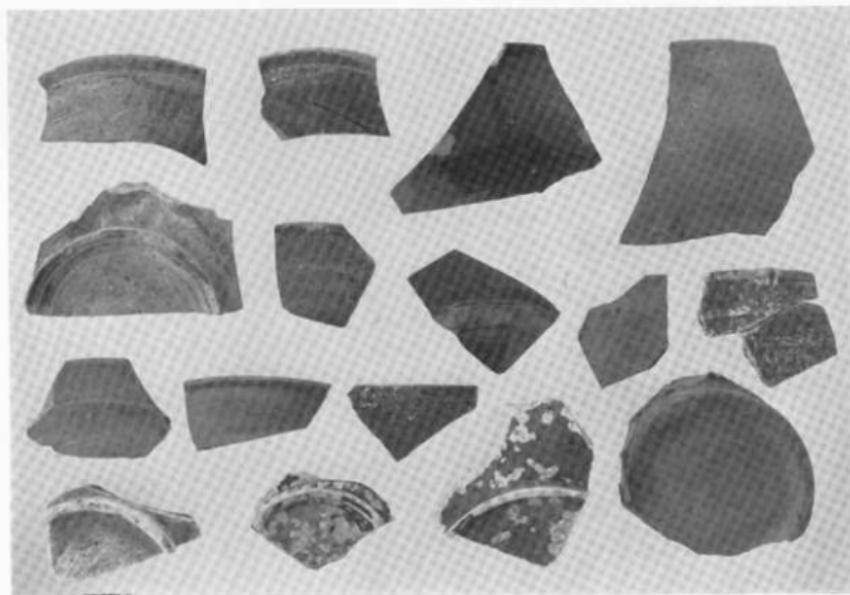


2. 白磁 (左上), 青磁

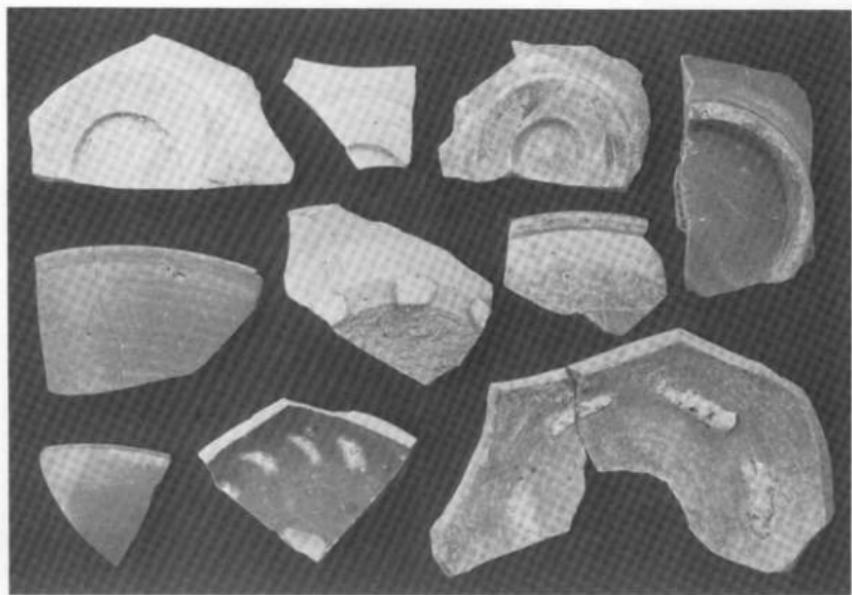




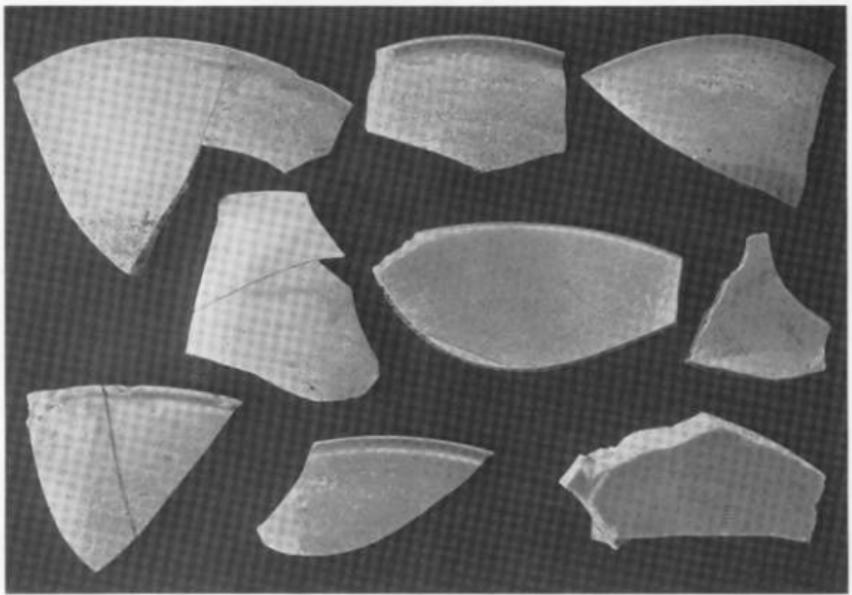
1. 彩釉陶器



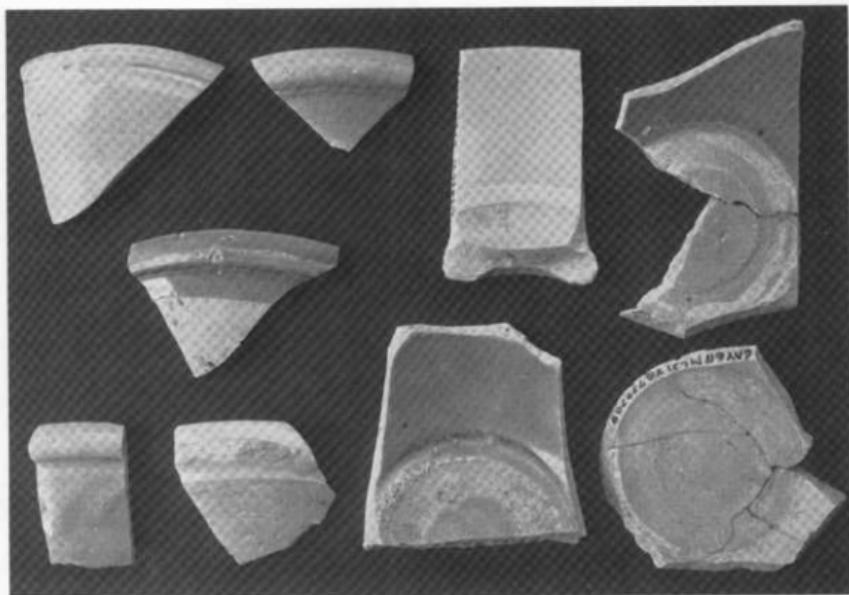
2. 彩釉陶器



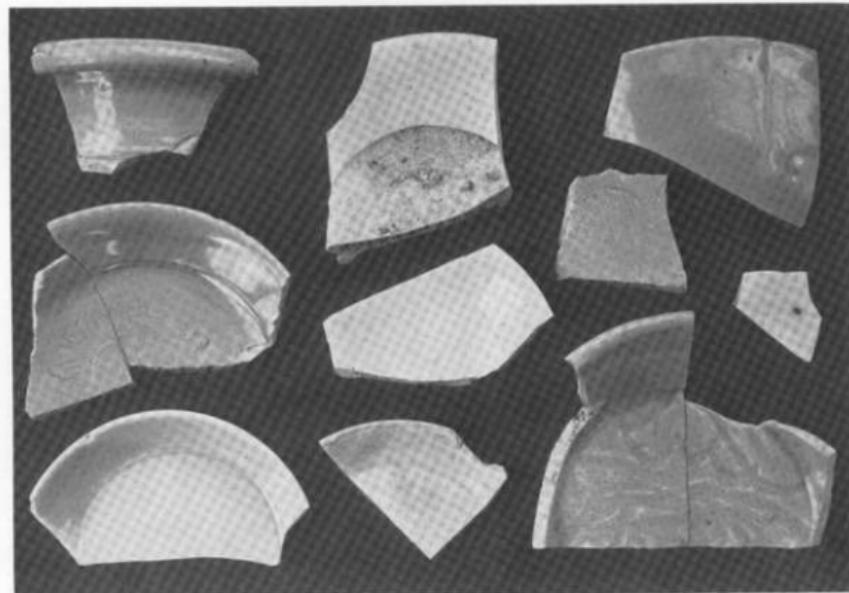
1. 白磁 2類 青磁 1類



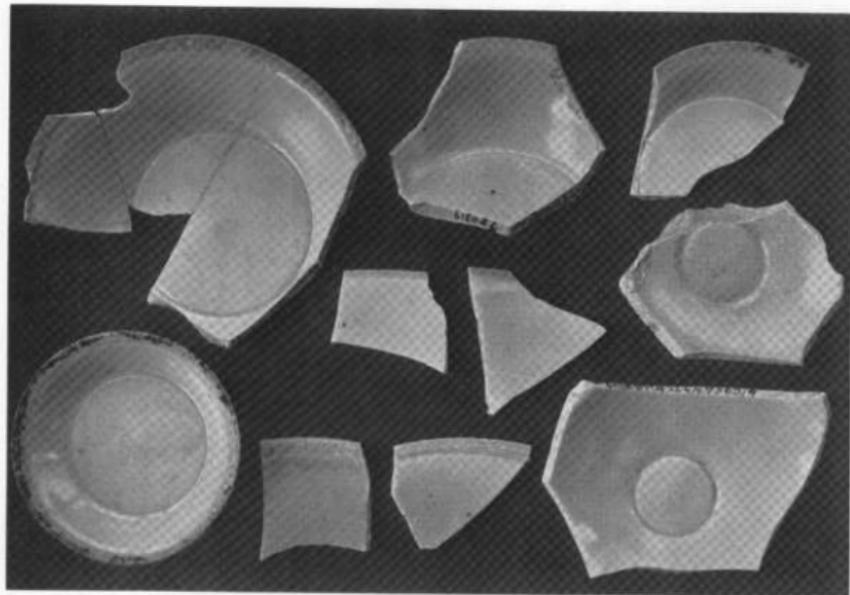
2. 白磁 3類



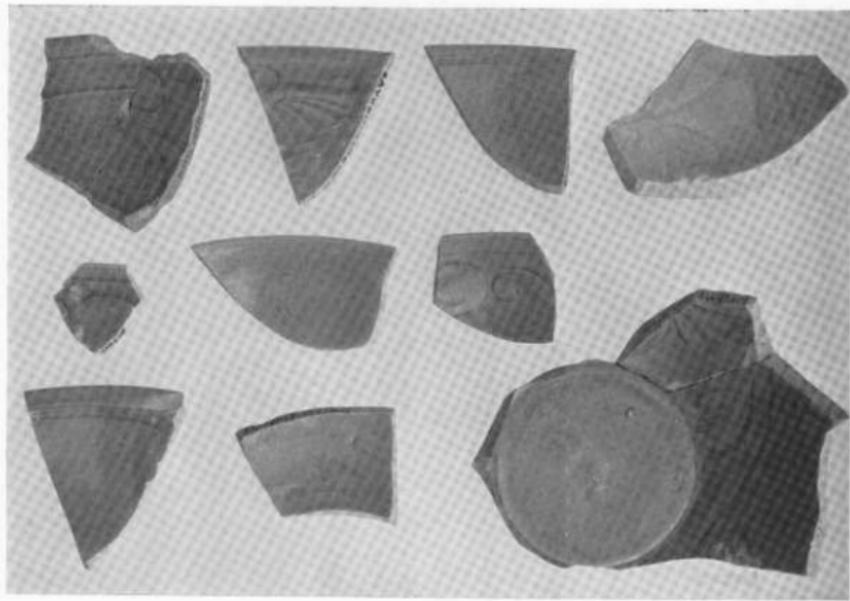
1. 白磁 4・5類



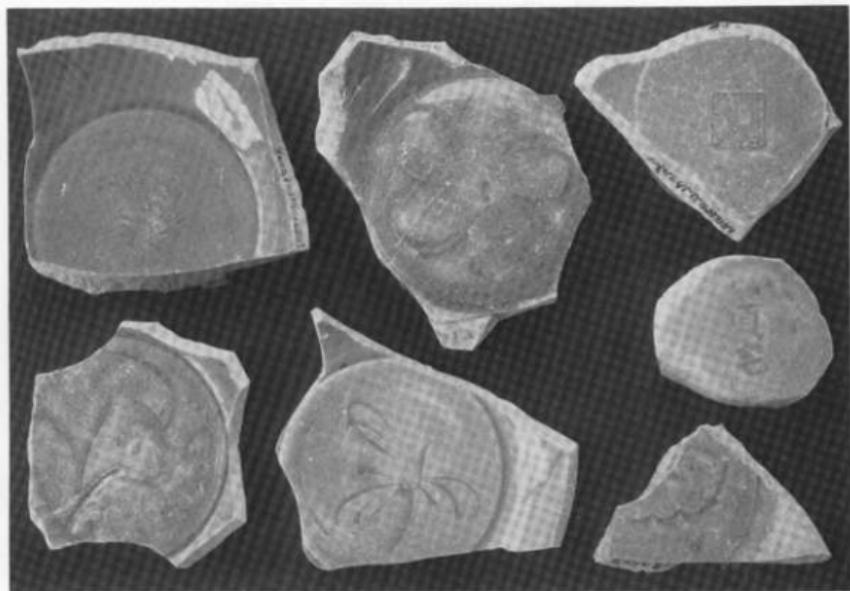
2. 白磁



1. 白磁 6 類



2. 青磁 7 類 (1)



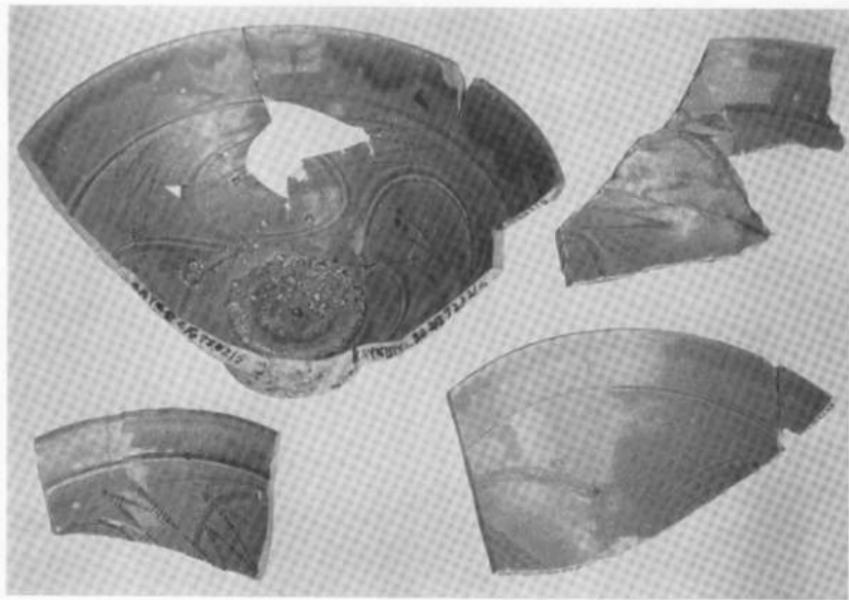
1. 青磁 7類 (2)



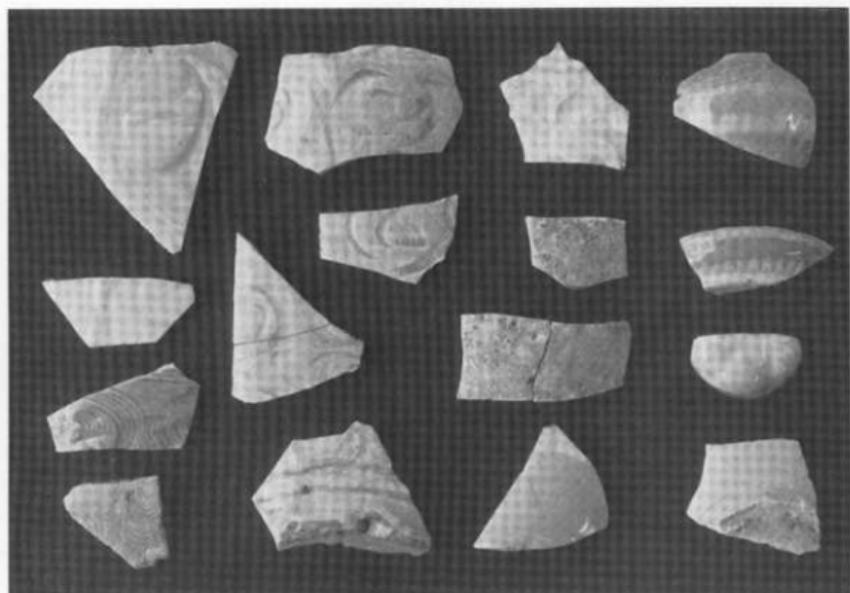
2. 青磁 7類 (3)



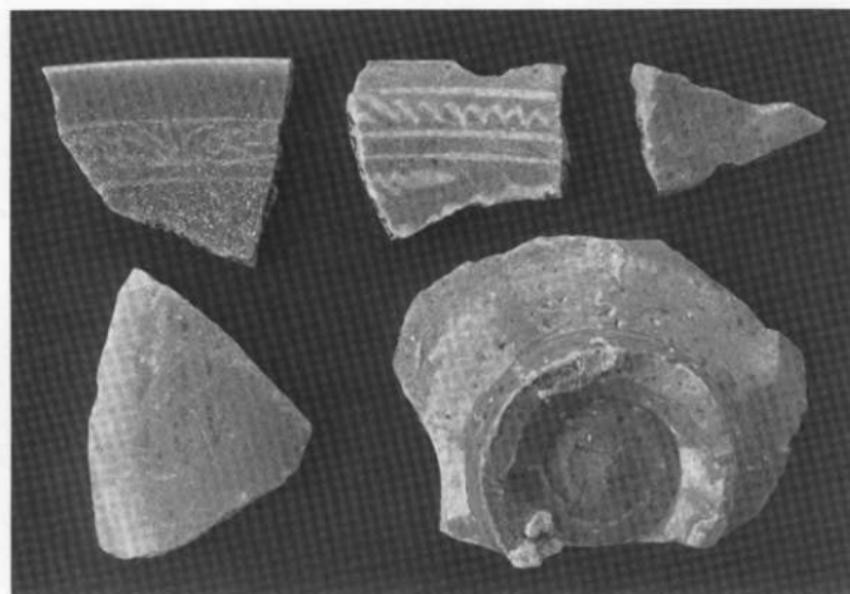
1. 青磁 9類 (1)



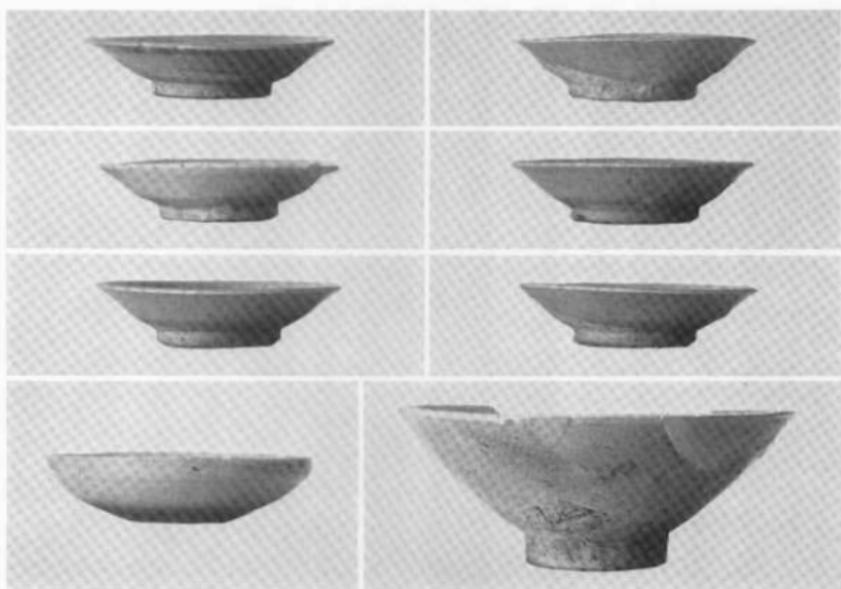
2. 青磁 9類 (2)



1. 青白磁



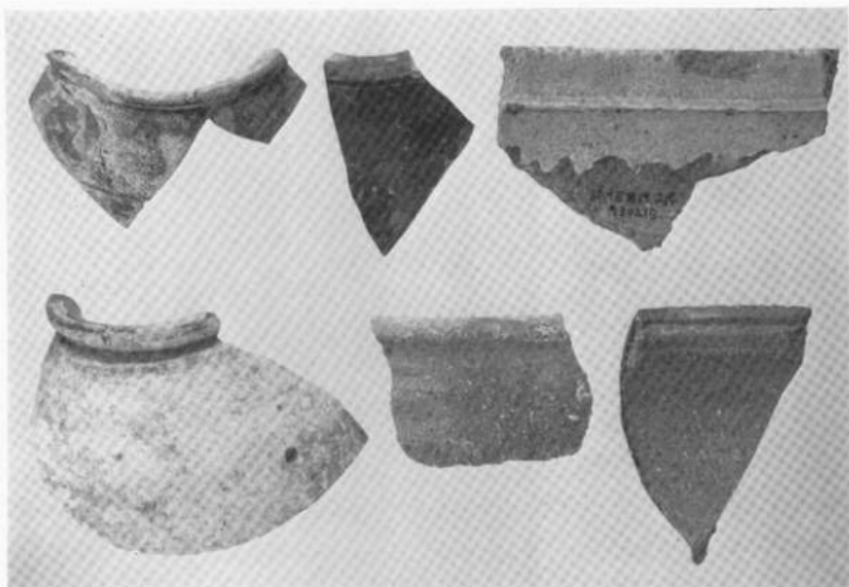
2. 高麗青磁



1. 白磁 (SK312土城下部)



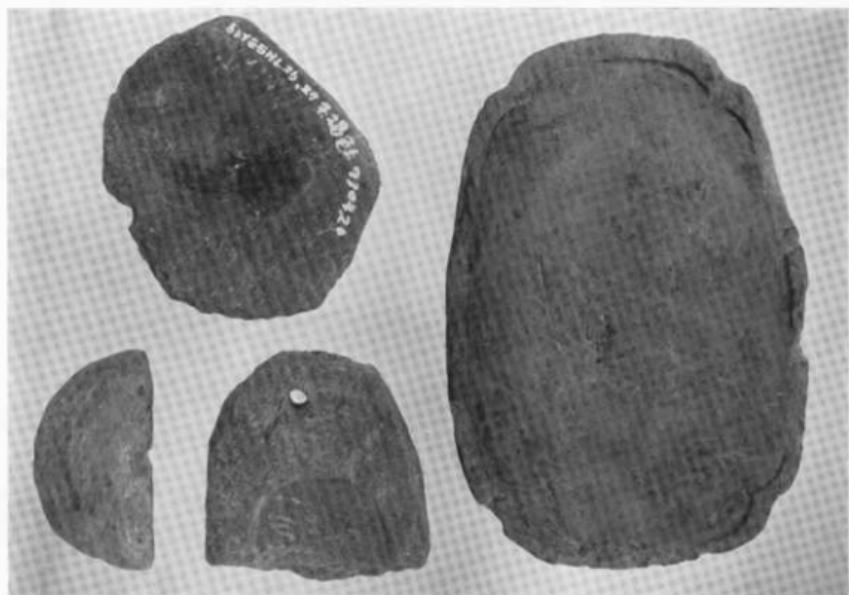
2. 土師器長頸瓶 (SK345土城), 褐釉瓶



1. 雜 器



2. 灰釉陶器, 古瀬戸



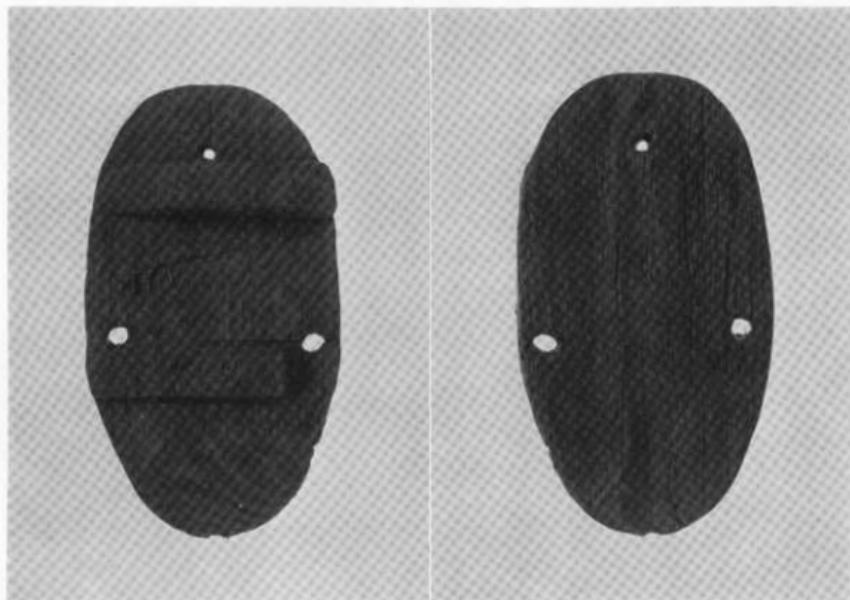
1. 石 製 品



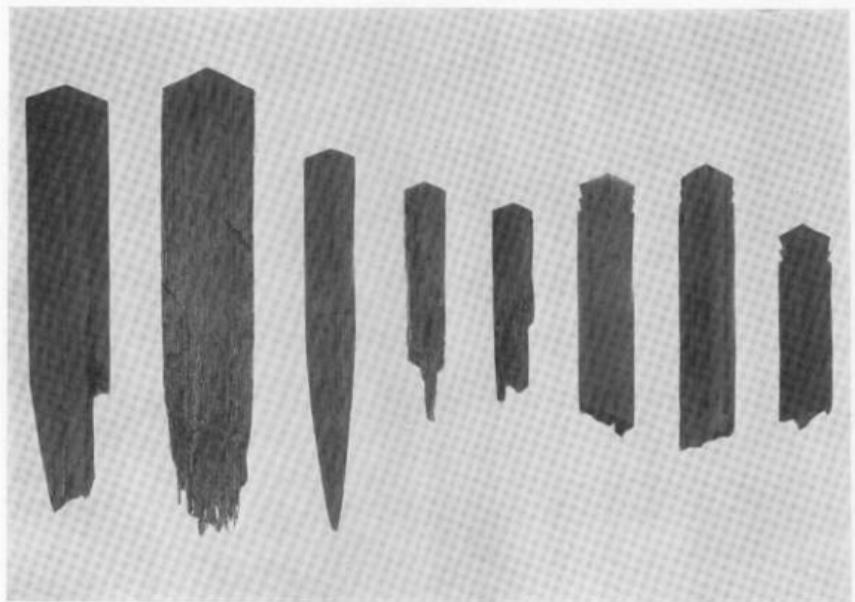
2. 金屬製品



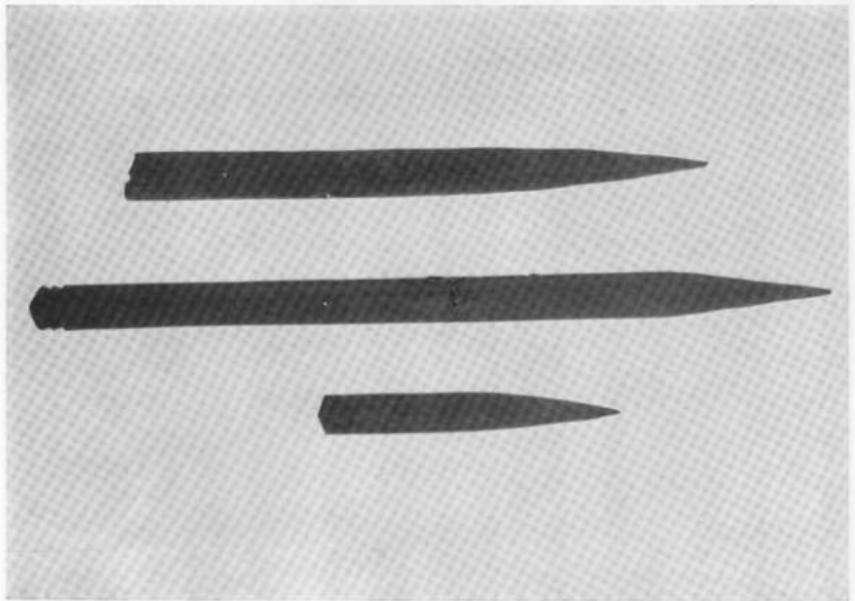
1. 銅 錢



2. 下軸 (実大)



1. 墨書き木札 (1)



2. 墨書き木札 (2)

## 第 4 次 調 査

## 本文目次

	頁
一. 調査経過.....	68
二. 層位.....	69
三. 遺構.....	70
1. 建物・柱穴.....	70
2. 溝.....	71
3. 土塙.....	71
4. 井戸.....	73
四. 遺物.....	75
1. 中層土師器・Ⅰ類.....	75
2. 上層土師器・Ⅱ類.....	81
3. 磁器.....	85
4. 雜器.....	88
5. 瓦.....	90
6. 石製品.....	90
7. 土製品, 磨石.....	97
8. ガラス製小玉.....	99
9. 金属製品.....	99
10. 銅印.....	102
11. 銅錢.....	105
五. おわりに.....	107

## 図 版 目 次

	本文対照頁
図版 1 1. 遺跡全景（北から）	68
2. 最上層建物遺構（北から）	69
図版 2 1. 上層全景（西から）	69
2. 上層全景（東から）	69
図版 3 1. 中層東区全景（西から）	69
2. 中層西区全景（東から）	69
図版 4 1. 下層全景（西から）	69
2. 下層東区全景（北から）	69
図版 5 1. SK401 土塙土器出土状態	71
2. SK404 土塙土器出土状態	71
図版 6 1. SK407 土塙	71
2. SK414 土塙	71
図版 7 1. SK425 土塙	71
2. SK427 土塙	71
図版 8 1. SE401 井戸	73
2. SE401 井戸	73
図版 9 1. 銅印出土状態	102
2. ガラス製小玉出土状態（SK427）	99
図版10 1. 輪羽口出土状態（上層）	101
2. 巴瓦出土状態（SK407）	71
図版11 1. 土師器（SE401井戸出土）	75
2. 青磁8類（上）、白磁3類（下）	85
図版12 1. 青磁1類	85
2. 白磁3類	85
図版13 1. 白磁4類	85
2. 白磁5類	85

## 本文対照頁

図版14	1. 白磁 6 類	85
	2. 青磁 7 類 (1)	85
図版15	1. 青磁 7 類 (2)	85
	2. 青磁 8 類	85
図版16	1. 青磁 9 類	85
	2. 高麗青磁, 青白磁	85
図版17	1. 軒丸瓦	90
	2. 銅印 (実大)	102
図版18	1. 石製品	90
	2. 滑石製品 (1), 砥石	90
図版19	1. 滑石製品 (2)	90
	2. 滑石製品 (3)	90
図版20	1. 石鍋	90
	2. 金属製品	99
図版21	1. とりべ, 蕎羽口	101
	2. 鉄滓塊	101
図版22	1. ガラス製小玉 (実大)	99
	2. 銅錢 (実大)	105

## 挿 図 目 次

	頁
1図 R列東西壁土層図	69
2図 最上層遺構配置図	70
3図 上層遺構配置図	折込み71~72
4図 中層遺構配置図	折込み71~72
5図 下層遺構配置図	折込み71~72
6図 S E401 井戸実測図	74
7図 土師器、白磁実測図 (S E401井戸出土)	75
8図 土師器、瓦器、白磁実測図 (暗褐色粘質土出土)	78
9図 土師器実測図 (SD401 溝塙出土)	79
10図 土師器実測図 (SK407 土塙出土)	81
11図 土師器実測図 (MR27区黒褐色土出土)	82
12図 土師器実測図 (SK424 土塙出土)	84
13図 青磁、白磁実測図	86
14図 青磁、天目実測図	88
15図 雜器実測図	89
16図 石製品実測図	91
17図 滑石製品実測図 (1)	92
18図 滑石製品実測図 (2)	94
19図 滑石製品実測図 (3)	95
20図 滑石製品、石鍋実測図	96
21図 土製品、砥石実測図	98
22図 ガラス製小玉実測図 (SK427 土塙出土)	99
23図 金属製品、鞴羽口、とりべ実測図	100
24図 銅印実測図 (実大)	103
25図 銅錢拓影 (2/3)	105

## 表 目 次

	頁
1表 土塙一覧表.....	72
2表 S E 401井戸出土土師器の法量.....	75
3表 S E 401井戸出土土師器計測表.....	77
4表 暗茶褐色粘質土出土土師器計測表.....	78
5表 S D 401溝出土土師器計測表.....	79
6表 S D 401溝出土土師器の法量.....	80
7表 S K 407土塙出土土師器計測表.....	80
8表 S K 407土塙出土土師器の法量.....	82
9表 M P 27区黒褐色土出土土師器の法量.....	83
10表 M P 27区黒褐色土出土土師器計測表.....	83
11表 S K 424土塙出土土師器計測表.....	84
12表 S K 424土塙出土土師器の法量.....	85
13表 ガラス製小玉計測表.....	99
14表 銅錢計測一覧表.....	106
15表 土師器分類と遺構対照表.....	108

## 第4次調査

### 一、調査経過

第4次調査は前回第3次調査区の南側の一段高くなつた畠地（標高35.9m），地番は太宰府町大字太宰府字泉水2791-7で，昭和48年9月10日より昭和49年1月10日の期間をかけて行なつた。

9月11日から発掘作業に入るが，前回の調査時に既に表土を除去していたので2層の発掘作業から行なう。17日，造構の検出が終つた段階で第3次調査の方眼基準に従つて調査区のグリッドを設定する。造構は中央土層観察用唯より以東（東区）においては石列などが検出されるが西側（西区）については同一レベルでは確認されない。18日，MQ36区の東壁面暗茶褐色粘質土中より銅印を発見し，その日のうちに写真撮影を行なつて取り上げる。MQ28区の石列より西には焼土混褐色土が拡がるが，東では認められない。25日に焼土面石列の写真撮影及び造構の実測を行なう。28日から石列と焼土面の掘り下げ，及び西区の暗黒褐色土の掘り下げを続行する。

10月3日，東区の全景写真撮影。西区は造構検出作業に入る。15日，MR26，27区にて根石を有する柱穴を多數確認，掘立柱建物の一部であろう。16，17の両日上層造構の全景及び部分写真撮影を行なう。18日より造り方杭打ちを行ない22日より11月6日まで上層造構の実測作業にかかる。その間，次回調査6AYEBM区の表土除去作業も併せて行なう。

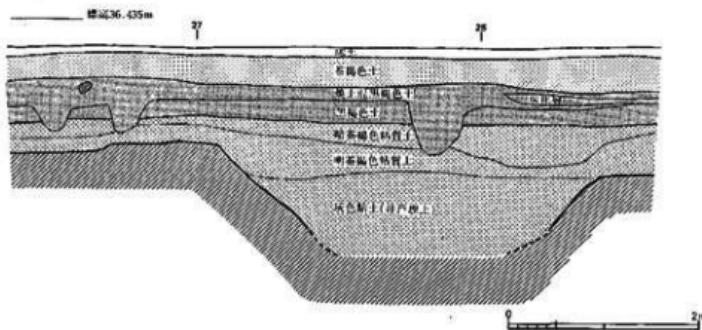
11月7日より上層造構面の掘り下げを開始する。MR30～31区にかけて浅い溝を，またMP26，27区では井戸跡を検出する。15日，西区の造構写真撮影を行ない，実測に入る。東区は検出作業を続行する。17日には東区の写真撮影を行ない，実測を開始するが12月1日までの中層造構実測作業中次回調査区の床土排土を行なう。

12月3日より7日まで中層造構面の掘り下げを行ない，北側にて東西方向に延びる3条の構を検出し発掘する。11日～14日まで井戸の実測及び写真撮影を行つて井戸側を取り上げる。17日に下層造構の全景写真撮影を行ない，その後27日まで実測作業に入る。

1月7日，実測再開。土層図の作成と細部の点検を併せて行ない，1月10日にてすべての作業を終了する。

## 二、層位

今回の調査では、包含層はかなり複雑であり遺構面も4面にわたった。また南側東半分はカットされたものらしく包含層は薄く、東側部分では包含層は厚いが、二次堆積のものが大部分であると考えられた。1層は耕土で約10cmの厚さがある。2層は床土で、3層は茶褐色土および明黒褐色土である。次の4層上部である焼土混黒褐色との境に石列と柱穴が検出された。4層は上部に焼土を多く混入した黒褐色土で、遺構を多く含んでいる。5層は暗茶褐色粘質土・茶褐色粘質土・暗茶褐色土でこれも遺構を含んでいる。6層は明茶褐色土・黄灰色砂質土などである。1～2層は近世の陶磁器を含んでいる。3層からは糸切り底の土師器が出土している。4層も同じく糸切り底土師器や青磁が出土していて、最も多く、破片も大きい。5層にはS E 401や土塙が存在し、大きめの土師杯や白磁が出土している。6層は溝が主体で遺物は多くない。このうち3層は最上層、4層を上層、5層を中層、6層を下層として取扱った。しかしこの地区の層位は前にものべたように複雑であり、再検討を要する。



1図 R列東西壁土層図

## 三、遺構

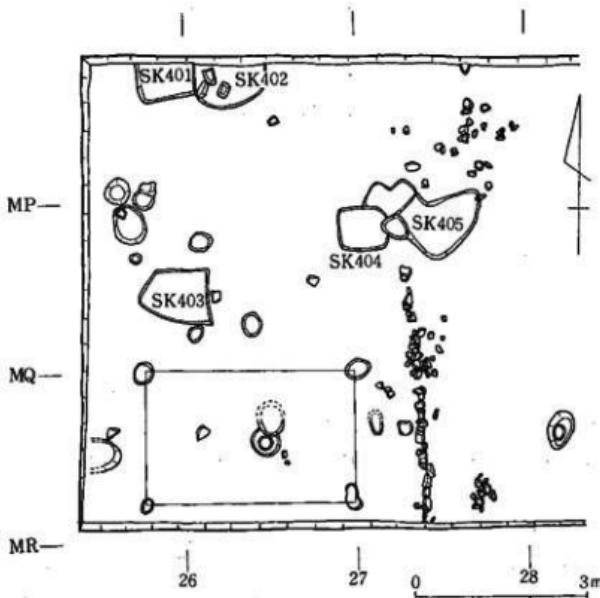
第4次の調査では4層にわたって遺構面が確認され、それぞれ上から最上層・上層・中層・下層と呼んで区別している。

最上層では石列と建物一棟を、上層では多数の柱穴と土塙、それに建物一棟を、中層では井戸1基、溝1条、下層では溝3条を検出している。

## 1. 建物・柱穴

最上層から下層まで径 20cm 内外の柱穴が多数検出されているが、特に上層において顕著である。そのうち建物としてまとまるものは最上層と上層にて確認されている。

最上層のものはMR27区付近にて表土下 60cm の浅い所にて検出されている。建物は掘立柱で柱穴は焼土混り黒褐色土に掘り込まれている。柱穴間南北 2.4m、東西 3.7m の 1 間四方ではほぼ南北方向に一辺をとる。この建物跡から 1.2m 離れた東側に石列がみられ、石列は一段の一列に並べただけの簡単なものであるが東側に石面をあわせていてほぼ南北方向に 4.5m ほど延びている。焼土混黒褐色土はこの石列付近までにみられ、整地層と考えられる。石列は方向などからして掘立柱建物に伴なうものであろう。また石列は南側壁面にもみられ更に南へ延びるものと思われる。それに伴ない建物の規模も大きくなる可能性がある。なお、最上層の建物跡と同一レベルの中央畦西側においては遺構は確認されなかった。



2 図 最上層造構配図

上層の建物は最上層造構面の焼土混黒褐色土下において検出され、柱間は南北2.1m・東西2.0mの2間×2間の掘立柱建物で、柱穴には根石が据えられている。南北棟と思われるが西へ10°ほど偏している。なお、この建物跡はSK407土塙と切り合っているが、土塙の方が先行するものである。その他上層にて29列付近に南北方向に1.2mの間隔で柱痕を残す柱穴を4箇分検出するが対となる柱穴は確認できない。柵列であろうか。

## 2. 溝

溝は中・下層にて4条検出され、いずれも東西方向に延びる素掘り溝である。

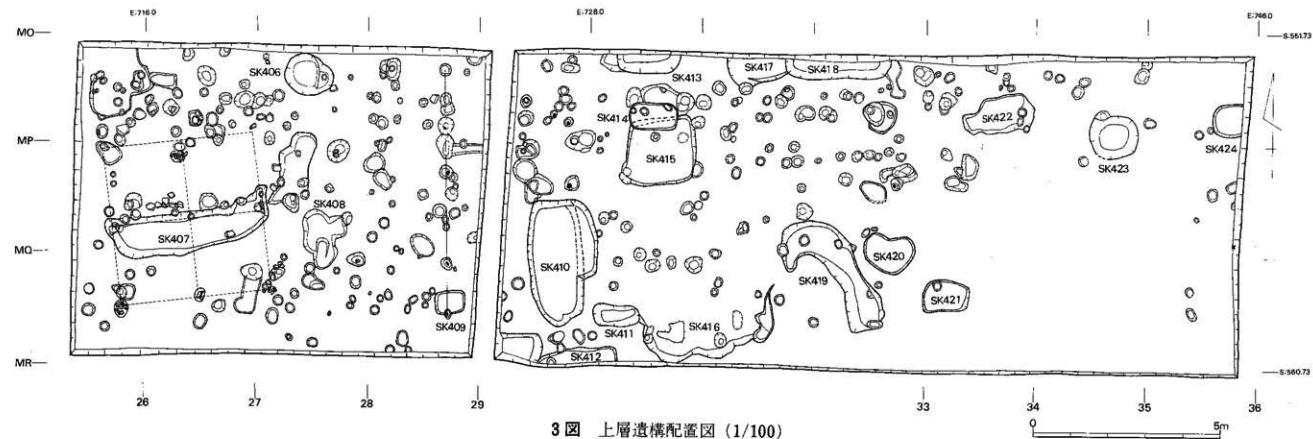
SD401は中層にみられるも、調査区東側を北東から南西へと対角線上にまっすぐ延びる溝である。断面は浅いU字状をなし、幅は広いところで1.03m、狭いところで0.48mと東側の方で狭くなる。深さも東側の方で浅くなり、MP35区付近にて北側肩部はなくなる。溝底面は西へわずかに傾斜している。溝内からは糸切り底土師器、須恵器、青磁などが出土している。

SD402、403、404は下層にて検出された溝で、ともに北側に片寄っており、青海色砂質粘土の地山に切り込んでいる。いずれも幅・深さも一定しておらず流路も複雑で入り組んでいる。3条の溝ともやや南へ偏しながら東西方向へ延びるが、両端にて落ち込み状のものに流れ込んでいる。SD402溝からはヘラ切り底土師器、須恵器、瓦などが出土しているが須恵器が特に多い。SD403溝は少量であるが糸切り底土師器を出土しているが須恵器が多い。

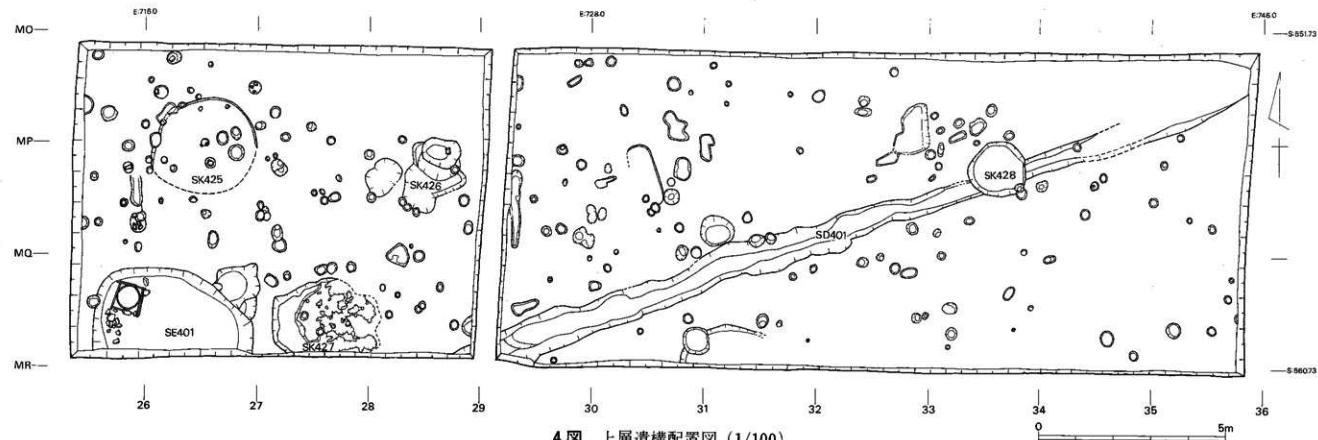
## 3. 土 塙

各層から検出されているがとくに上層と中層に多くみられる。代表的なものについて述べると、最上層にみられる土塙は他の土塙と切り合っていて不整形なものが多い。SK401は多数の土師器と完形青磁器碗、釘と思われる鉄片2個を、SK403は北宋錢の聖宋元宝を、SK404は鉄片（釘か）2個、SK405は鉄刀子1個を出土している。

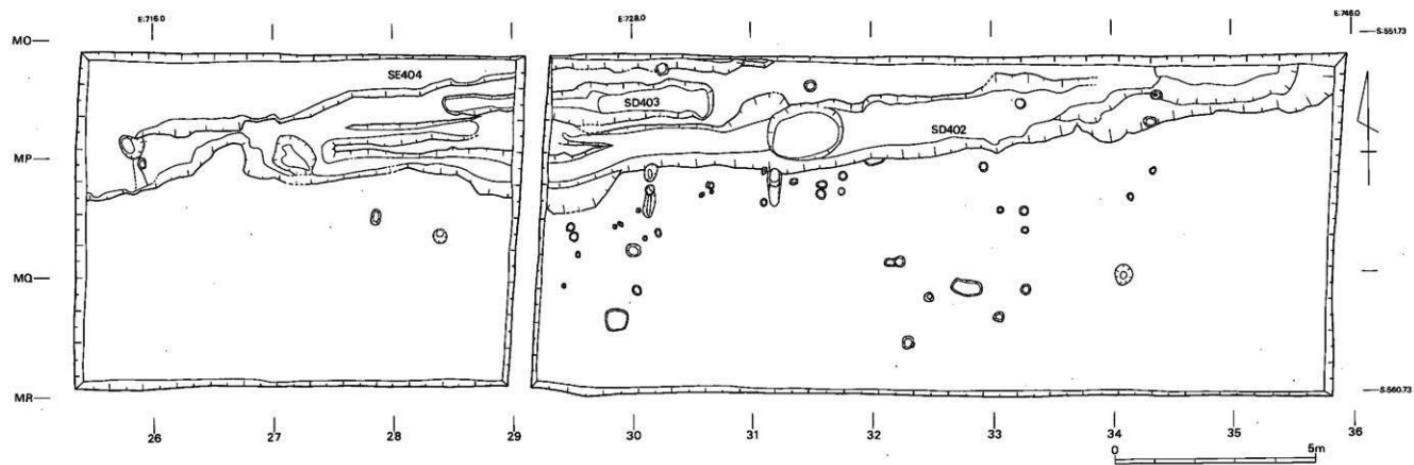
上層は最も多くの土塙が検出され20基余りを数え、平面プランも各種のものがみられる。SK407は細長い長方形塙で、長径4.2m、短径1.03m、深さ0.24mを測る。土塙内には炭化層の堆積がみられ、糸切り底土師器、巴文の軒丸瓦などが出土している。これに類似した土塙にSK419があるが他の土塙と切り合っていて正確な規模はつかめない。SK410は東側を切られているが隅丸の長方形をなし、長径3.2m、短径1.6m、深さ0.31mの大きなもので、中には焼土が堆積しているが周壁は焼けていない。糸切り底土師器・青磁、石鍋などを出土している。SK409、411、414、421などは長方形をなす土塙で、長軸を東西方向にとるものが多い。いずれも各種の遺物を出土しているが、SK414からは完形土師器が出土している。前回報告した区分によればCグループに属するものと思われる。SK415はSK414に切られているが1辺約



3図 上層遺構配置図 (1/100)



4図 上層遺構配置図 (1/100)



5図 下層遺構配置図

造構番号	地 区	旧番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物
				長径	短径	深さ	
SK 401	MP26	P-11	方 形 ?	0.95 + $\alpha$ × 0.75 + $\alpha$ × 0.06			土師器 II 類, 磁器 5・6・7 C 類, 片口, 鉄片
" 402	MP27	P-1		1.31 × 0.8 + $\alpha$		× 0.06	
" 403	MQ26・27	P-2	不整方形	1.23 × 0.94 × 0.06			土陶器 II-3 類, 須恵器, 雜器 7 類, 須恵器
" 404	MQ28	P-3	方 形	0.9 × 0.75 × 0.06			土師器 II-4 類, 鉄片
" 405	MQ28	P-5	不 整 形	0.73 × 0.56 × 0.15			土陶器 II 類, 磁器 4・6・7 C 類, 鐵刀子, 須恵器
" 406	MP28	P-5	円 形	1.11 × 0.92 × 0.38			土師器 II 類, 磁器 7 C・9 類, 雜器 1 類 須恵器, 鉄片, 鋼津, 土鍋
" 407	MQ27	P-6	長 方 形	4.18 × 1.09 × 0.23			土師器 II-3 類, 磁器 3・5・7 A・7 C・ 9 類, 雜器 6・7 類, 片口, 須恵器, 瓦, 鉄片
" 408	MQ28	P-7	長 円 形	1.18 × 0.86 × 0.15			土師器 II 類, 須恵器, 瓦
" 409	MR29	P-2	長 方 形	0.82 × 0.62 × 0.36			
" 410	MQ・R30	P-7	長 方 形	3.2 × 1.44 × 0.23			土師器 II-3 類, 磁器 3・5・6・7 A・ 7 C・9・10 類, 雜器 6・7・8 類, 常滑, 石鍋, 石製品
" 411	MR31	P-9	長 方 形	1.25 × 0.56 × 0.44			土師器 II 類, 磁器, 雜器 1・6 類, 須恵器, 支脚
" 412	MR30・31	P-11	長方形?	2.14		× 0.08	土師器 II-3 類, 磁器 9 類, 須恵器, とりべ, 清石製品
" 413	MP31	P-13	長方形?	1.68		× 0.3	土師器 II-2 類, 雜器 1 類, 清石製品, 片口, とりべ
" 414	MP31	P-10	長 方 形	1.72 × 0.71 × 0.12			土師器 II-3 類, 磁器 3・5・7 A・9 類, 須恵器, 雜器
" 415	MP・Q31	P-17	隅丸方形	1.9 × 1.8 × 0.12			土師器 II-3 類, 雜器 1 類
" 416	MR30・31	P-8	不 整 形	1.75		× 0.17	土師器 II-2 類, 磁器 9 類, 常滑, 瓦, 支脚, 蝶線織灰岩
" 417	MP32	P-16		1.5		× 0.06	土師器 II 類, 磁器 7 B 類, 雜器 6 類, 瓦, 須恵器
" 418	MP32・33	P-15	長 方 形	2.6 × 0.5 + $\alpha$		× 0.27	土師器 II-2 類, 磁器 3・9 類, 雜器 1・ 8 類, 常滑, とりべ, 須恵器
" 419	MQ・R 31・32	P-6	不 整 形	1.6 × 0.88 × 0.2			土師器 II-1・2 類
" 420	MQ33	P-2	不 整 形	1.32 × 0.84 × 0.1			土師器 II-2 類, とりべ
" 421	MR33	P-12	長 方 形	1.25 × 0.84 × 0.13			土師器 II-2 または 3 類, 雜器 2 類, 須恵器, 瓦, とりべ
" 422	MP34	P-18	不 整 形	1.95 × 0.95 × 0.14			土師器 I・II 類, 遊器 7 C 類, 須恵器, とりべ
" 423	MP35	P-20	円 形	1.3 × 1.15 × 0.43			
" 424	MP36	P-19	長 方 形	0.82 + $\alpha$ × 0.91		× 0.17	土師器 II-4 類, 須恵器, 白磁
" 425	MQ27・28	P-1	円 形	2.77		× 0.09	土師器 II-1・I 類, 磁器 1・3 類, 鐵クズ, 雜器 1 類, 石鍋, 鉄滓, 鋼津, とりべ, ふいご羽口
" 426	MQ29	P-3		0.96		× 0.1	土師器 II 類, 須恵器, 瓦
" 427	MR28	P-8	不 整 形	2.9 × (2.2) × 0.3			土師器 I-3・II 類, 磁器 3・5 類, 片口, 瓦器碗, 石鍋, ガラス盤小玉, 鐵片
" 428	MQ34	円形狀	円 形	1.5 × 1.5 × 0.23			土師器 II-2・3 類, 磁器 6 類, 土鍋, 鉄片, 常滑

( ) は復元値, 単位 m

1表 土 塚 一 覧 表

1.8mの方形である。SK406, 423はともに径1.1~1.3mほどの円形塗で深さも0.5m前後とや深い。SK406からは銅津、鉄片、焼土塊などが出土している。SK424は完掘していないが楕円形状のもので土師器を多く出土している。

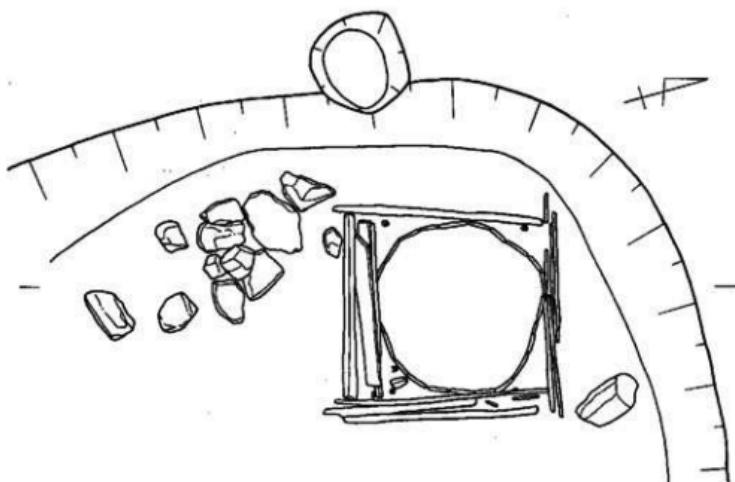
中層では数は少ないが特色ある土塗が検出されている。SK425は周壁が半分しか残っていないが埋土の状況からほぼ円形の土塗になるものである。径約2.8mと広いものであるが深さは0.07mと非常に浅く上部を大半削平されている。表面は炭化層に覆われ、内からは轆羽口、とりべ、鉛津、焼土塊など鍛冶に関係ある遺物が多く出土している。なおこの土塗には特に焼けた面や附属施設となるような掘り込みなどは何ら認められないが、鍛冶に関連する遺構であろうか。SK427は不整円形のもので、底面は一定せず多数の小さな窪みを有し、炭化層が薄く堆積するが炭化物の多い部分から表面が風化したガラス製小玉が26個まとまって出土している。下層からは特に顯著な土塗は検出されていない。

前回の報告では土塗は、A. 円形ないし楕円形のプランをなし土師器などの遺物を多量に包蔵するもの、B. 3mを越える大形円形のもの、C. 長方形プランをもつもの、D. 径1mほどの円形で深さの深いもの、の4つに大別したが今回の調査ではそれと著しい差異を示す土塗の検出はなかった。ただ出土遺物から鍛冶に関連するような土塗もあり、単に形態だけからの類別ではなく、出土遺物との組み合せによる詳細な検討が必要とされる。

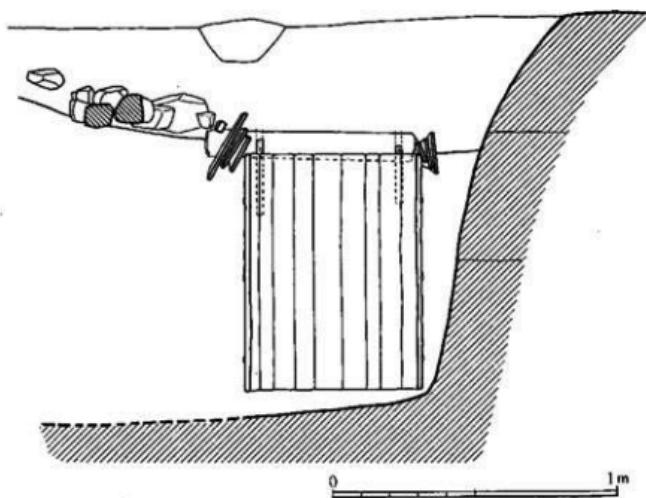
#### 4. 井 戸

4次調査では中層より1基が南西隅にて検出されている。SE401は長径4.3mほどの大きな楕円形状掘り方の北西隅に寄せて設置された井戸で、下端部は茶色克沙の湧水層に達している。掘り方上面の黄白色粘土層より約1.3mの深さを測る。井戸枠は上・下2段にわたるもので、上段は長さ0.7m、幅0.1m内外の板材を四隅に立てた丸杭を内側にして横に渡し、方形に囲んだもので、下段は長さ0.84m、幅0.1mの板を22枚組み合わせ、3ヶ所を竹のタガで繋束して作った径0.6mの桶側を掘えたものである。上段の方形枠組みは横板がずり落ちていて上半部の構造は分からぬ。

掘り方埋土上部には20cm前後の礫を使った石敷き状のものがみられるが、足場のためのものであろうか。掘り方埋土より土師器、須恵器、青磁、常滑焼・瓦などを、井戸内より完形の糸切り底土師器、須恵器などを出土している。それに今一つ奇怪な事に、人間のものと思われる大腿骨を1本検出している。井戸内埋土より出土していて井戸が廃棄させてから投げ入れられたものであろうが、人々の生活と切り離せない神聖視されるべき井戸にこのような行為がなされているのには、現代の我々の感覚からしても理解しがたいものがある。なお、今回検出の井戸は前回報告の際に行った4つの区分には該当しない形式のものである。



標高35.335m



6図 S E 401井戸実測図

## 四、遺物

### 1. 中層土師器・II類

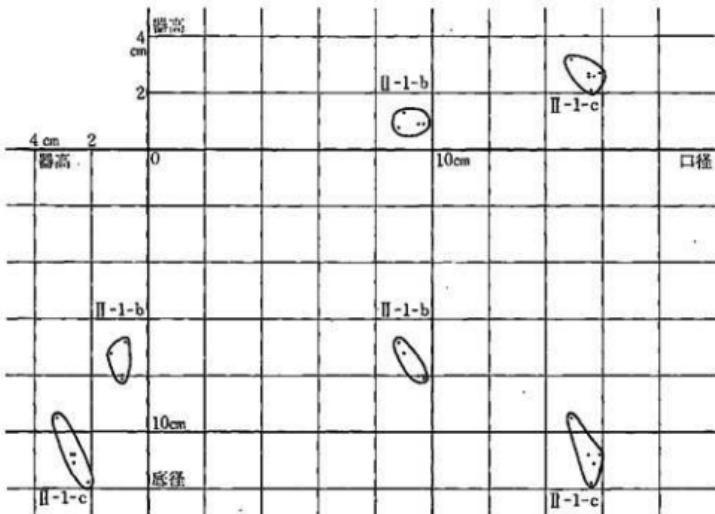
中層からは糸切り底（II類）をもつ比較的大きな杯が出土している。なおSK427土塙からは、ヘラ切り底と糸切り底の土師小皿が共伴している。土師器の分類は従来どおりである。

#### [1]

SE401井戸およびその上部をおおう暗茶褐色粘質土から多く出土している。

SE401井戸（7図、2・3表）

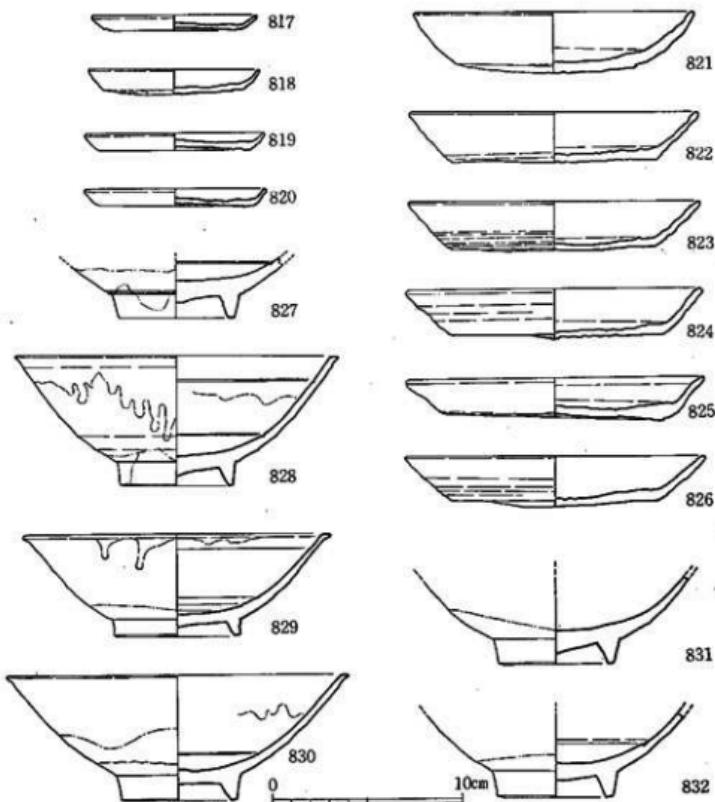
- b. 小皿（II-1-b）(817~820) 口径8.8~9.7cm, 底径6.8~8.1cm, 器高0.8~1.3cmで淡褪灰色ないし褐色で、胎土に少量の砂粒を含んでいる。やや薄手の小皿で、器面には横ナデが、内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。
- c. 杯（II-1-c）(821~826) 口径14.9~15.9cm, 底径9.5~11.75cm, 器高2.1~3.2cmである。このうち821は糸切り底であるにもかかわらず、丸底に近い形をしていて、底径も少さい。この821を除けば、他は口径15.5~16cm, 底径10.8~11.8cmの範囲にはいる。色調は橙味灰白色ないし灰黄色で、胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが、内底には渦文とナデ



2表 SE401井戸出土土師器の法量

がみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

このSE401井戸内出土の土師器には、高台付小皿はみあたらないし、土師器自体は第3次調査区のSD305溝のI-4類土師器によく似ている。しかし、いまのところヘラ切り底を有す土師器はみつかっていない。またこのSE401井戸をおおう暗茶褐色粘質土からは、次に述べるようにII-1類土師器が出土しているので、層位的にもSE401井戸出土の土師器はII-1類より古くなることになる。それで本来はSE401出土の土師器はI-4類とII-1類との間におくべきかもしれないが、類例がすくないため、今回はII-1類に含めておきたい。



7図 土師器、白磁実測図（SE401井戸出土）

小皿				杯			杯				
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	8.8	6.8	0.8	1	14.9	9.5	3.2	5	15.65	11.1	2.55
2	9.0	7.2	1.3	2	15.5	10.75	2.6	6	15.9	10.8	2.7
3	9.5	8.0	0.9	3	15.5	10.8	2.65				
4	9.7	8.1	0.9	4	15.55	11.75	2.1				

3表 S E401井戸出土土師器計測表

白磁（827～828） S E401井戸からは白磁のみが出土している。827・828は3類の白磁で、828は見込みと口縁内側に沈線がはいり、胎土は灰白色で薄灰黄色の釉がかかっている。829～832は井戸の掘り方から出土した白磁で、井戸内と時期的には変らない。829は4類の白磁で、高台がやや低く、見込みに焼成前に釉を環状に削り取った跡がみられ、見込みと口縁内側に沈線がいれられている。胎土は白灰色で、暗灰色の釉がかかっている。830は3類の白磁で胎土は灰色で薄灰緑色の釉がかかっている。

#### 暗茶褐色粘質土（8図、4表）

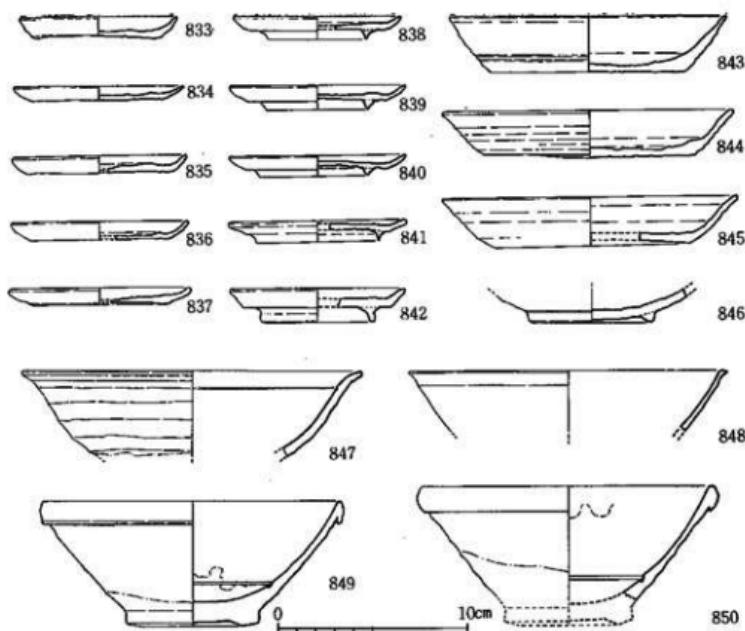
S E401井戸をおおう土層から出土した土師器で白磁碗・瓦器碗が伴っている。

- b. 小皿（II-1-b）（833～837） 口径8.3～9.6cm, 底径6.5～7.5cm, 器高0.9～1.2cmで、833はやや小形で深く、他は口径9cm台、底径7cm台である。薄手の小皿である。
- c. 杯（II-1-e）（843～845） 口径14.7～15.6cm, 底径10.2～11.2cm, 器高2.5cm～3.0cmで、灰黄色ないし橙黄色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。
- f. 高台付小皿（II-1-f）（838～842） 口径8.9～9.5cm, 高台径5.2～6.6cm, 器高1.1～1.8cmで、高台部は小さい。第3次調査区のSK312土塗下部の高台付小皿（II-1-fA）に近い。

瓦器碗（846）底部で、内面は灰白色、外面は灰色味のある黒色である。

白磁碗（847～850） 847・848は3類の白磁で、848は口縁が少し開き、その内側に沈線が一本はいつている。胎土は灰白色で、半透明の薄黄褐色の釉がかかっている。849～850は5類の白磁で、玉縁をもち、見込みに沈線が一本はいっている。849の胎土は黄白色で、釉は青灰色である。850の胎土は灰味白色で、半透明の黄味灰白色的釉がかかっている。

なお同じ暗茶褐色粘質土からは931・942・943が出土していて、931は4類の白磁で、口縁は平縁で、口縁内側に沈線がつけられ、見込みに焼成前に釉をかきとった跡が環状に残っている。胎土は淡灰色で、半透明の黄味明灰色の釉がかかっている。942は口縁端が外へ開き、内部の屈折部に沈線らしきものが走っている。胎土は明灰色で、半透明の青味灰色の釉が、内面は



8図 土師器、瓦器、白磁実測図（暗茶褐色粘質土出土）

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	8.3	6.5	1.2	1	8.9	5.2	1.2	1	(14.7)	(10.2)	3.0
2	9.05	7.0	0.8	2	(9.3)	6.2	1.8	2	(15.2)	11.2	2.5
3	9.25	7.7	0.9	3	(9.4)	5.35	1.3	3	15.6	10.25	2.6
4	9.3	7.3	1.0	4	9.4	5.75	1.1				
5	9.6	7.5	0.9	5	9.5	6.6	1.2				

4表 暗茶褐色粘質土出土土師器計測表

白色化粧土の上に、外面は直接体部上半にかかっている。943は口縁端がやや開き、ヘラで削り出された太めの高台をもっている。胎土は灰白色で、半透明の黄灰色の釉が、内面は白色化粧土の上に、外面は直接に高台近くまでかかっている。942・943は第5次、第3次調査の

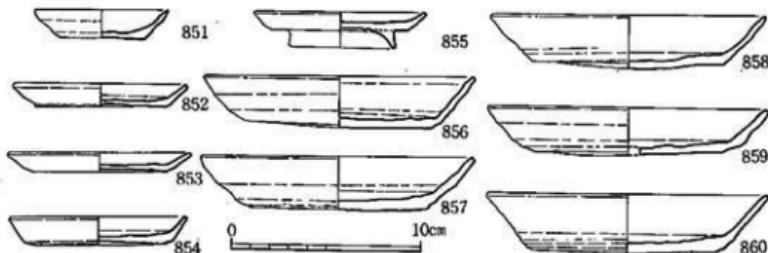
報告まで、底部の形から9類に含めて考えてきたが、白磁と考えて時代もさかのぼらせることできそうである。底部も9類の青磁よりは、やや太めである。今後この種の磁器の出方に注目したい。

## [2]

### S D401溝 (M R32区) (9図, 5・6表)

- b. 小皿 (II-2-b) (852~854) 口径9.2~9.4cm, 底径7.0~7.3cm, 器高1.05~1.5cmで、白黄色ないし灰黒色で、器面に横ナデが、内底にナデがみられる。底面に糸切り痕と板目がついている。なお851は特小皿とでもよぶべきであるが、II-5類の特小皿とはやや異なる。
- c. 杯 (II-2-c) (856~860) 口径14.3~14.9cm, 底径9.5~10.0cm, 器高2.7~3.0cmで、白黄色ないし黄褐色で、胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが、内底にナデがみられる。底面に糸切り痕と板目がついている。

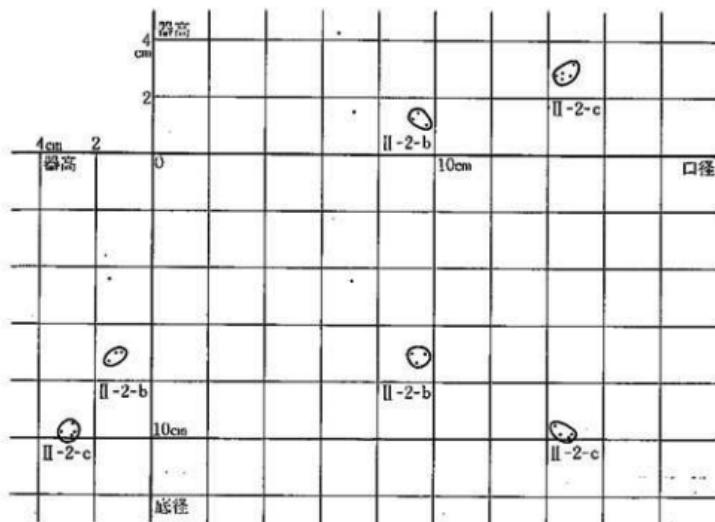
855はII-3類の高台付小皿で、混入したものであろう。



9図 土師器実測図 (S D401溝出土)

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	7.1	4.4	1.5	1	9.1	5.6	1.9	1	14.3	9.5	2.8
2	9.2	7.0	1.25					2	14.5	9.8	2.7
3	9.4	7.3	1.5					3	14.5	10.0	2.9
4	(9.7)	(7.0)	1.05					4	(14.8)	9.9	2.8
								5	(14.9)	9.8	3.2

5表 S D401溝出土土師器計測表



6表 SD401溝出土土師器の法量

小皿				高台付小皿				杯			
	口 径	底 径	器 高		口 径	高台径	底 径		口 径	底 径	器 高
1	8.0	6.5	1.0	1	8.25	5.1	1.6	3	(12.6)	(8.9)	2.3
2	8.2	6.75	1.0	2	8.7	5.8	1.6	4	(12.7)	(8.2)	2.4
3	8.2	6.95	0.95	3	8.8			5	13.0	8.0	2.4
4	8.3	6.8	1.1	4	9.0	5.1	1.6	6	(13.0)	(8.9)	2.1
5	8.4	6.9	0.95	5	9.1	4.9	1.7	7	13.8	9.2	2.0
6	8.5	6.95	1.0	6	9.6	5.7	2.05	盤			
7	8.6	7.1	0.9	杯					口 径	底 径	器 高
8	8.6	7.25	0.8		口 径	底 径	器 高	1	(19.0)	14.5	2.5
9	8.8	7.1	1.0	1	(12.5)	8.0	2.25	2	(22.6)	(16.4)	2.85
10	9.2	7.25	1.25	2	12.5	8.1	2.3				

7表 SK407土塗出土土師器計測表

## 2. 上層土師器・Ⅱ類

[3]

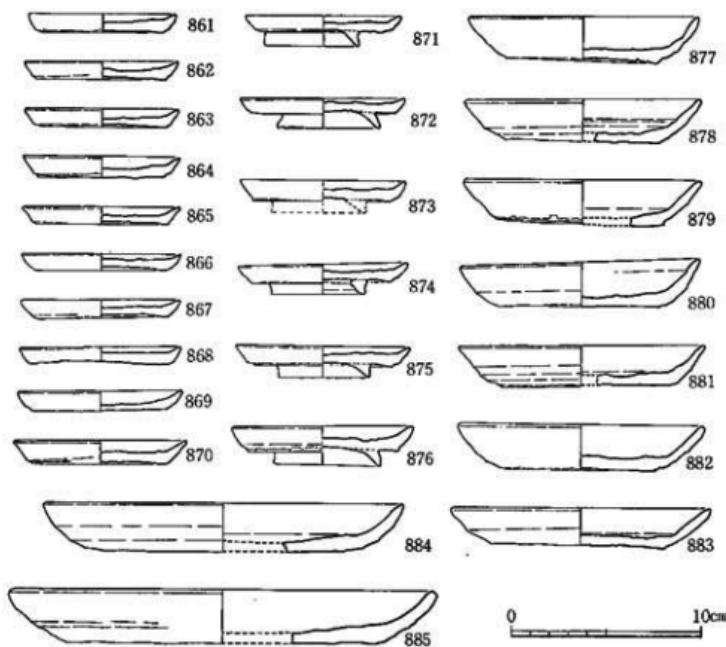
SK407土塚 (10図, 7 + 8表)

b. 小皿 (II-3-b) (861~870) 口径 8.0~9.2cm, 底径 6.5~7.25cm, 器高 0.8~1.25cm である。

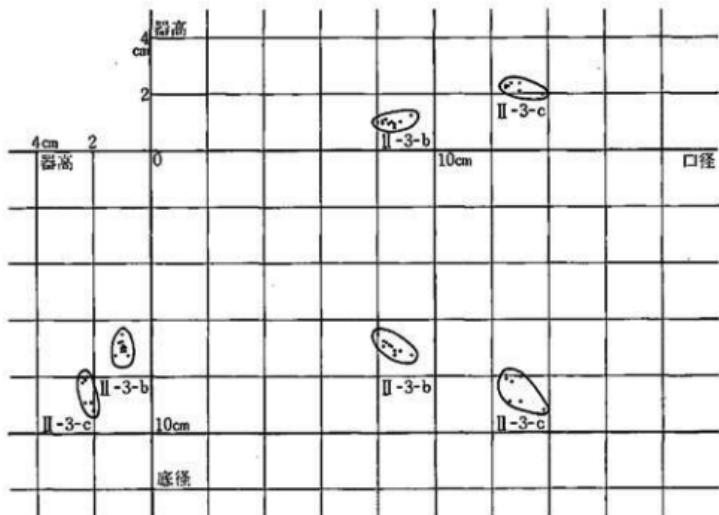
c. 杯 (II-3-c) (877~883) 口径 12.5~13.8cm, 底径 8.0~9.2cm, 器高 2.0~2.4cm で, 883だけが口径が特に大きい。底径は 8cm と 9cm との二つに分かれる傾向がある。

f. 高台付小皿 (II-3-f) (871~876) 口径 8.25~9.6cm, 高台径 4.9~5.8cm, 器高 1.6~2.05cm で, 粘土紐を環状にして貼りつけたような簡単な高台がつき, しかも底面中央から離れてることが多い。

土師器盤 (884・885) 口径 19.0cm と 22.6cm との二つがある。



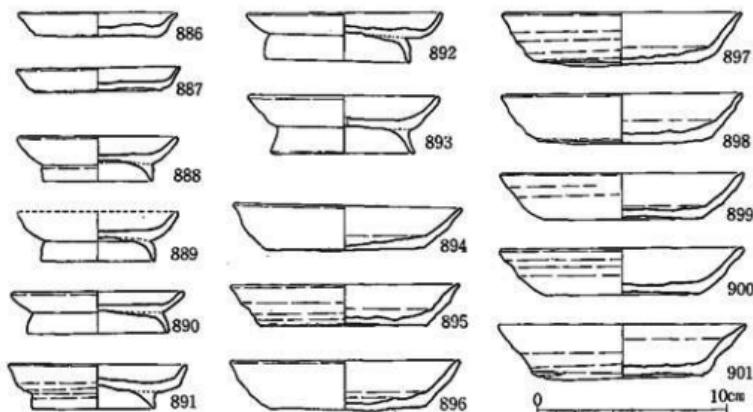
10図 土師器実測図 (SK407土塚出土)



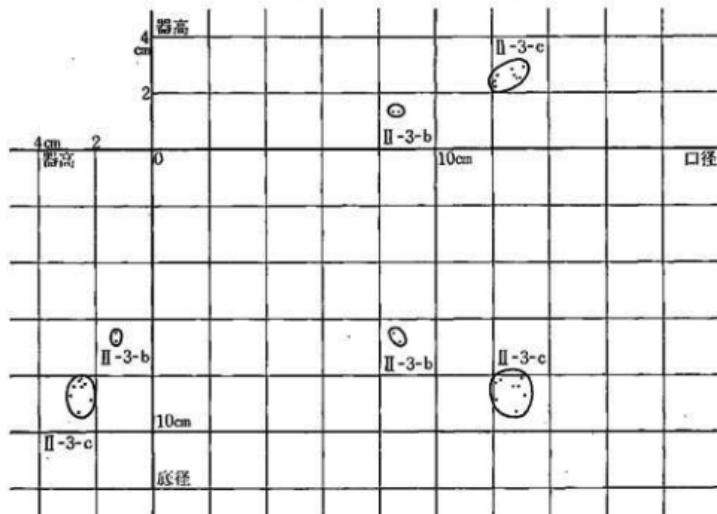
8表 SK407土塙出土土師器の法量

MR27区黒褐色土（4層）（11図、9・10表）

b. 小皿（II-3-b）（886～887） 口径8.5～8.7cm, 底径6.5～6.8cm, 器高1.3cmで、SK407土塙の小皿にくらべて薄い。



11図 土師器実測図（MR27区黒褐色土出土）



9表 MP 27区黒褐色土出土土器の法量

c. 杯 (II-3-c) (894~901) 口径 12.1~13.1cm, 底径 8.1~9.3cm, 高さ 2.2~2.9cmである。

f. 高台付小皿 (II-3-f) (888~893) 口径 8.5~10.3cm, 高台径 5.8~7.7cm, 器高 2.2~3.1cmで、高台は薄手で、ていねいにつくられ、外湾する傾向がある。893は底部中央に、焼成前にあけた孔がある。同じII-3類でもSK407土塙の高台付小皿とは異なる一群の高台

小皿			高台付小皿			杯					
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	8.5	6.5	1.3	4	9.4	7.05	2.4	3	12.15	8.2	2.6
2	8.7	6.8	1.3	5	10.1	7.7	3.1	4	12.7	8.4	2.8
高台付小皿			6	10.3	7.7	2.5	5	12.8	9.3	2.6	
							6	12.9	8.4	2.5	
							7	13.0	8.1	2.5	
1	8.5	5.8	2.4				8	13.1	8.7	2.85	
2		6.0		1	12.1	8.3	2.4				
3	9.1	7.5	2.2	2	12.1	8.9	2.2				

10表 MP 27区黒褐色土出土土器計測表

付小皿である。杯の口径もやや小さくなる傾向があり、II-3類の中でもやや新しい時期のものかもしれない。

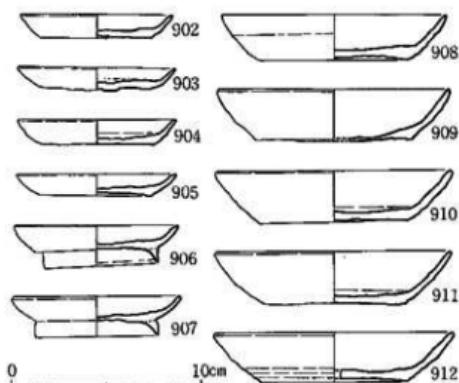
#### [4]

##### S K424土塙 (12図, 11・12表)

b. 小皿 (II-4-b) (902~905) 口径 8.1~8.4cm, 底径 5.8~6.05cm, 器高 1.15~1.3cm である。

c. 杯 (II-4-c) (908~912) 口径 11.8~12.7cm, 底径 7.1~8.3cm, 器高 2.4~2.8cm である。

f. 高台付小皿 (II-4-f) (906~907) 口径 8.65~9.0cm, 高台径 5.6~6.55cm, 器高 2.1~2.15cm である。

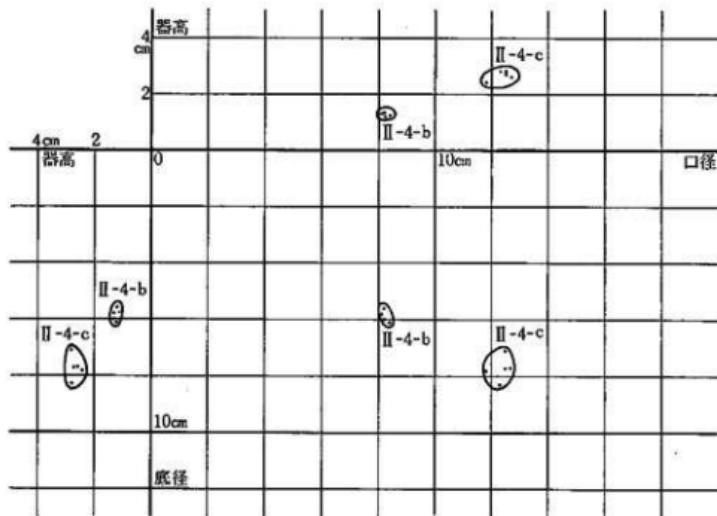


M P27区黒褐色土のII-3類の土師器とくらべるとあまり大差がなく、将来はSK424土塙のものとあわせて別に1類を設定すべきかもしれないが、今回は従来の分け方に従った。SK424土塙の土師器は、M P27区黒褐色土出土の土器にくらべ杯の口径はかわりないが、底径は小さくなっている。また小皿も小さくなっている。高台付小皿は高台部が低くなる傾向がある。

12図 土師器実測図 (SK424土塙出土)

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	8.1	5.8	1.25	1	8.6	6.0	2.15	1	11.9	7.8	2.4
2	8.2	5.6	1.2	2	9.0	6.4	2.1	2	(12.3)	(8.3)	2.8
3	8.3	6.0	1.3					3	12.5	7.1	2.8
4	8.4	6.05	1.15					4	12.5	7.7	2.1
								5	12.7	7.7	2.6

11表 SK424土塙出土土師器計測表



12表 SK424土塙出土土師器の法量

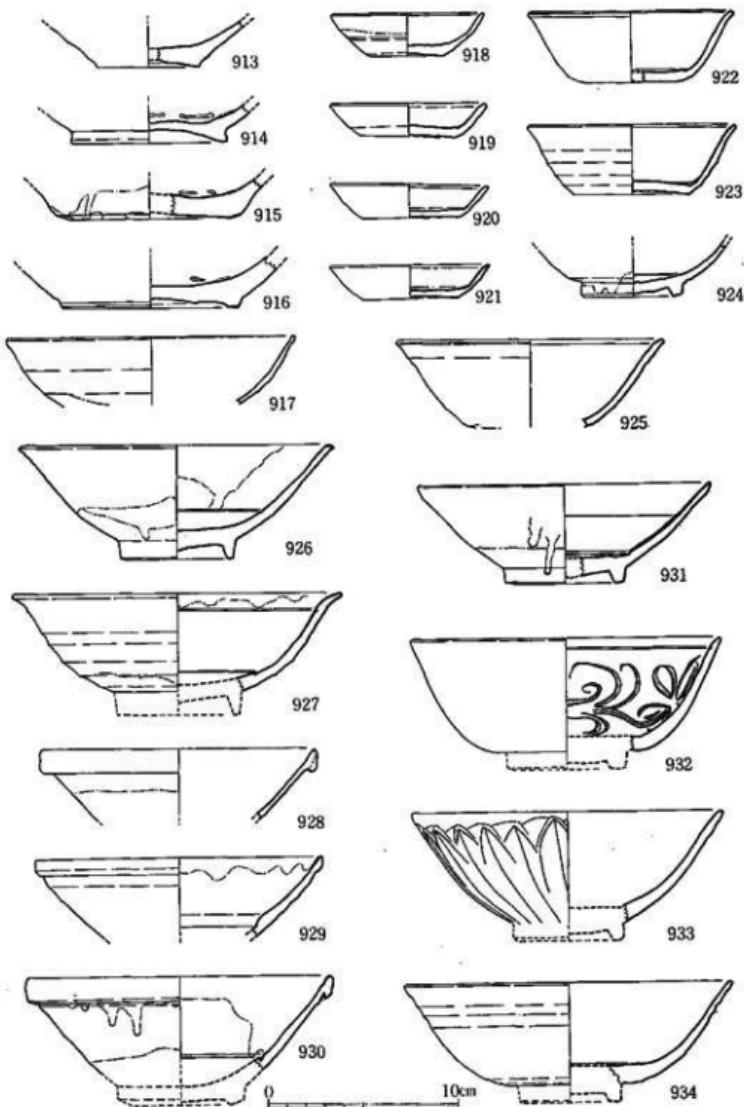
以上のように土師器をみてみると、中層からはII-1類とII-2類土師器、上層からはII-3類とII-4類の土師器が出土している。最上層はII-4類が主体であるが、II-3類土師器もある。

### 3. 磁 器 (13・14図)

第4次の調査でも、青磁、白磁などの磁器類が多く出土した。とくにSE401井戸や中層である暗茶褐色粘質土からは白磁が多くみつかった。なお分類は従来通りである。

1類 (13図913~917) 深緑色ないし褐味灰緑色の釉が薄くかかった青磁で、見込みと底面に目あとが残っているものが多い。913は巾広い高台をもつもので胎土は灰黄色を呈し、緑味黄色の釉が全面にかかっている。914は胎土は灰色で、釉は灰黄色である。SK425土塙出土915は胎土は黄味灰色で、釉は風化して淡茶灰色を呈している。916は低い高台がつくもので、胎土は黄味淡灰色で、釉は灰黄色である。917は薄手で、胎土は明灰色で、釉は風化して灰白色を呈している。SK427土塙出土。

3類 (926・927) 白磁で、薄く高い高台をもつ瓶で、見込みと口縁内側に沈線を入れたものが多い。926は口縁の先端が外に張り出し、口縁頂部は平坦である。胎土は青味灰白色で、白い化粧土をかけた上に、緑灰色の釉がかかっている。SK425土塙出土。927は口縁が外反し、



13図 青磁、白磁実測図

胎土は灰白色で、釉は半透明の黄灰色である。

4類（829・931）見込みの部分に、焼成前に、環状に釉を削り取った跡がある白磁で、高台はやや低く、原味がある。

5類（849・850・928・930）口縁が折り重ねたような玉縁を持つ白磁で、見込みの部分に沈線がいれてある。928の胎土は白色で、体部上半と内面に灰白色の釉がかかっている。930はSK427土塙から出土したもので、胎土は黄白色で、緑灰色の釉がかかる。929は第3次出土。

6類（918～925）口の部分の釉が、焼成前に削り取られている白磁で、皿と碗がある。922は11図の土師器に伴うもので、923もほぼ同一の唐から出土したものである。925はSK401土塙出土で、胎土は明灰白色で、灰白色の釉がかけられた楕形のものである。

7類（932～934）低い高台を有し、胴部はやや丸味をおびた青磁で、数種に分けられるが、底部で見るかぎり大差はない。

A. 外側は無文で、内側に二本の沈線で区切られた空間に飛雲文が描かれたものである。

B（392）外側は無文で、内面にヘラによる花文が描かれたもので、392の胎土は黄味灰白色で、釉はやや風化して明緑灰色を呈している。

C（933）外面に蓮弁文が削り出されたり、沈線で描かれた青磁で、933の胎土は青灰色で釉は薄緑色である。

D（934）器形は同じで、無文のものである。934の胎土は暗灰色で、暗灰緑色の釉がかかっている。

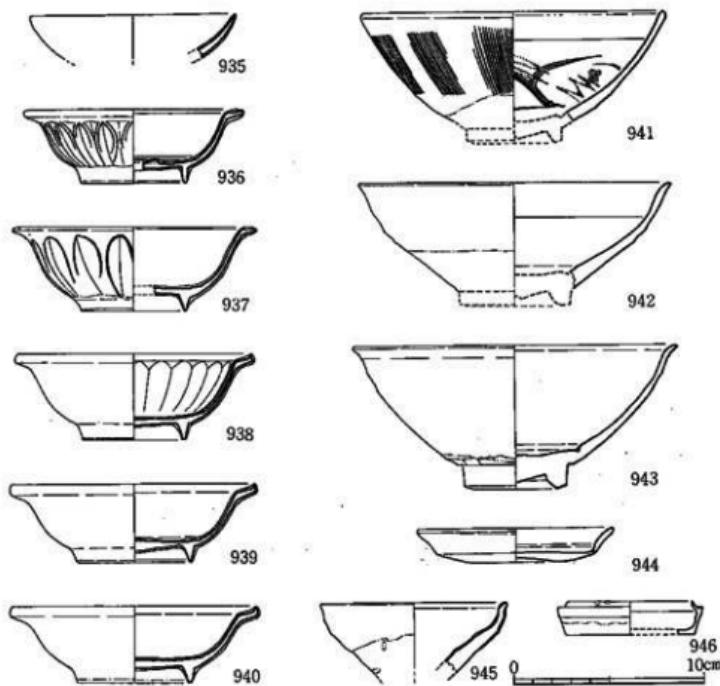
8類（14図935～940）厚く釉がかかり、高台は薄く、床付面は焼成前に釉が削り取られ、褐色を呈している。今回は口縁が横に張り出した楕形の良好な資料が多い。936は外面に蓮弁文が彫られ、見込みに双魚文がある。胎土は白色で、釉は薄緑色である。937は同じく外面に蓮弁文があり、胎土は灰白色で、釉は緑色である。938は11図の土師器に共伴したもので、内面に蓮弁文が削り出され、胎土は灰白色で、釉は緑色である。940はSK401土塙から出土した完形品で、胎土は白色で、釉は緑色を呈す。

9類（941・944）いわゆる珠光青磁とよばれるもので、模倣による文様が描かれ、外面にも条線がひかれたものが多い。941は胎土が明灰色で、釉は灰黃色である。944は無文の小皿で、胎土は白灰色、釉は灰緑色で、底面は焼成前に釉をかきとっている。

10類（945）いわゆる天目とよばれるもので、945の胎土は灰色で、暗褐色の釉が厚くかかっている。

11類（図版16の2）薄い青色の釉がかかった青白磁で、花文をもつ極めて小さな小皿や、魚の浮文がつけられた皿などがある。

12類（図版16の2）高麗青磁の陶枕の破片が出土している。胎土は灰色で、灰青色の釉がかかっている。文様は白色の文様が象眼され、円内に黒と白で花文が象眼された優品である。



14図 青磁、天目実測図

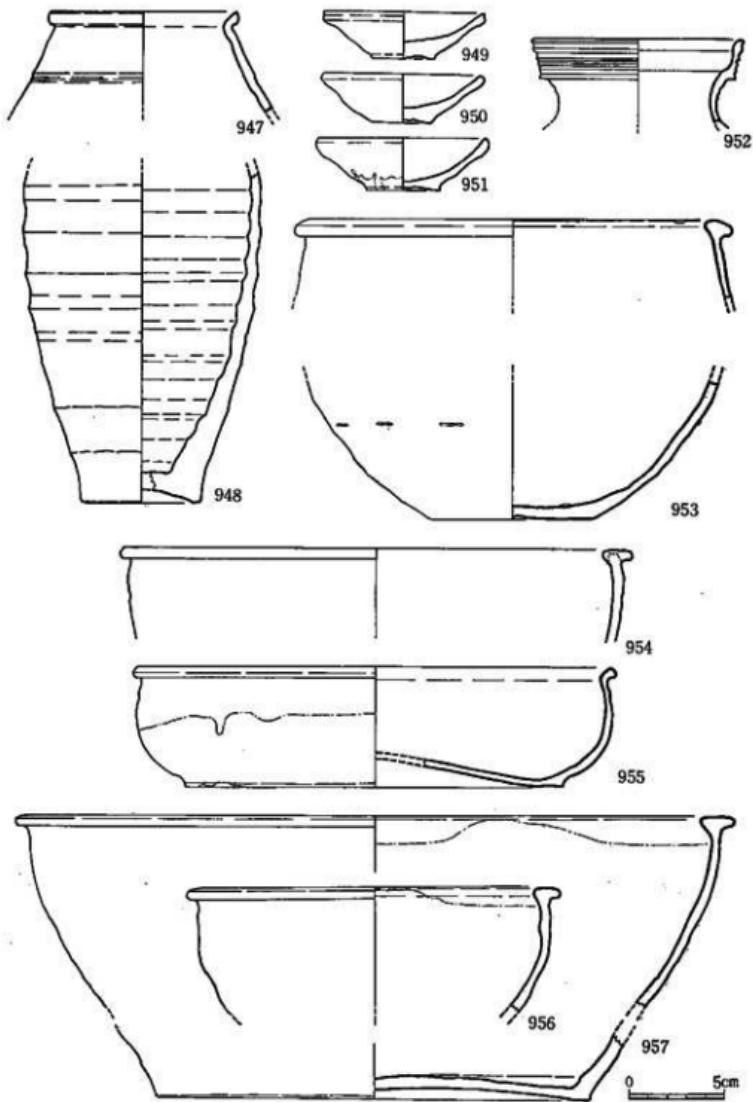
このほかに946のような合子の身がある。これも11図の土師器に共伴したもので、胎土は黃灰色で、蓋受部と底部とを除いて、灰緑色の釉がかかっている。

#### 4. 雜 器 (15図)

明瞭な青磁・白磁などの磁器のほかに、色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないが、ここでは一応雜器としてまとめた。

1類 (947・948) 短い口縁がやや開いたもので、947はSK418土塙出土のもので、肩部に沈線らしきものが二本走り、胎土は灰色で、釉は風化して灰白色を呈している。948は瓶形の下半で、胎土は明灰色で灰緑色の釉がかかり、内面にも薄く釉がかかっている。SK425土塙からの出土である。

5類 (949~951) 小皿で、暗褐色の薄い釉の上に、黒褐色の釉をかけたものである。



15図 雜器実測図

6類 (952) 薄手で、灰黒色を呈し、胎土は茶褐色である。口縁に数本の沈線がいれられている。

7類 (954～957) 口縁が外に張りだす鉢形のもので、大きな底部をもつ。黄味をおびた釉がおもに内面にかけられ、褐色の絵が見込みに描かれたものもある。954は11回の土師器に共伴したもので、胎土は粒子が荒く、黄灰色を呈し、釉は暗黄色で内面と口縁端にかかる。外面に釉はなく灰褐色を呈している。955は丸味をおびた口縁が外に折れ脚部はふくらみ、底部は大きな上げ底である。見込みに褐色の絵が描かれている。胎土は黄灰色で粒子が荒い。縁味をおびた黄褐色の釉が内面にかかる。口縁上端を除いた体部上半にもかけられている。956は胎土は暗灰色で、黄味灰緑色の釉が内面と口縁端にかけられている。外面は素褐色である。957はやや大形品で、SK410土塙からの出土である。胎土は素灰色で、縁味灰黄色の釉が内面にかけられ、外面は青紫色である。

11類 (953) 暗褐色の釉がかかった、いわゆる褐釉の陶器で、953は鉢形で、横に張り出した口縁の上端には釉ではなく、内側に目あとが残っている。また脚下部と見込みにも目あとがついている。胎土は赤褐色で、黒褐色の釉がかけてある。

## 5. 瓦 (図版17の1)

瓦は細片が多く出土したが、まとまったものはすくない。いずれも平安時代のものである。軒丸瓦としてはSK407土塙出土の素文縁三ツ巴文の瓦(左)と素文縁単弁十二弁連華文の瓦(右)がある。

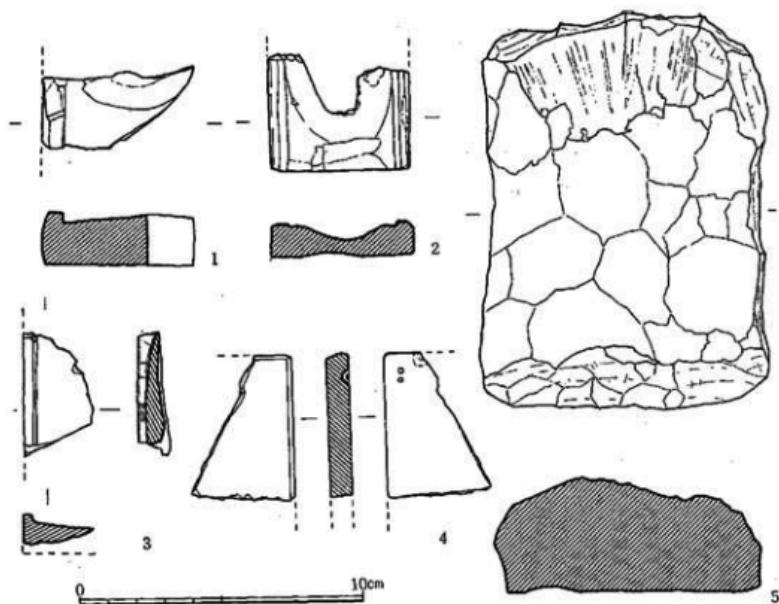
## 6. 石製品 (16～19回、図版18、19、20の1)

石製品は滑石製品がほとんどで、他には硯・砥石などがわずかに見られる程度である。

1～3は硯で、1は明灰色をなす石材を使用しており、凝灰岩質のものであろうか。現存するのは小片で全容は不明であるが、側面肩部高1.9cmを測り比較的大型のものであろう。最上層焼土内出土。2は小型のもので、下端部の肩が作り出されていない。長期間使用されたらしく陸部の磨耗が著しい。なお、硯が折損した後、陸部側面に抉状の切り込みをした痕跡がみられる。左右肩部には1条の線刻がなされている。灰黒色をした黄岩である。上層暗茶褐色土出土。

3は輝緑凝灰岩製で裏面は剥落している。海部をわずかに残し深さは7mmまで測ることができる。暗茶褐色土(2層)出土。

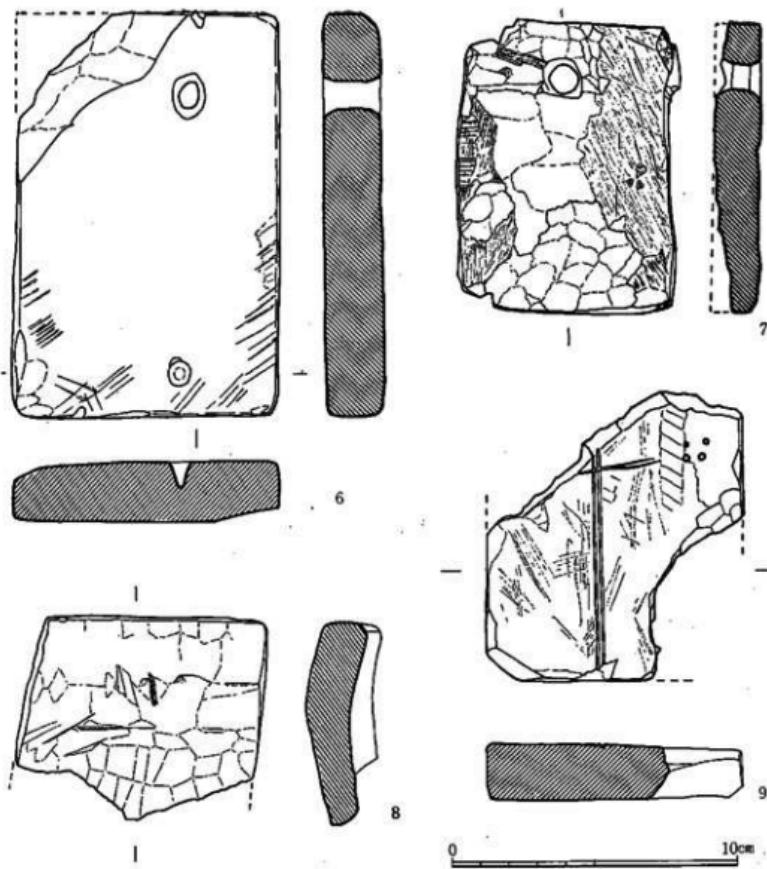
4は石帯で蛇紋岩製である。現存長4.1cmを測り8mmの厚さをなす。裏面に径2mm弱の2孔を1対とした潜り孔をあけている。本来はこれを四隅あるいは三方にあけたものである。上層暗茶褐色粘質土出土。5は輝緑凝灰岩の石板で、粗削により周縁を整えて長方形とし、一面は横からの打裂を加えて面としている。打裂面には一部分研磨された個所がみられる。裏面



16図 石製品実測図

は全面研磨されて平坦面をなす。輝緑凝灰岩は別名「赤闇石」とも呼ばれ、山口県厚狭郡地方に産し硯の石材として利用されているが、今次の調査でも輝緑凝灰岩製の硯が発見されており、5の輝緑凝灰岩は硯の素材となるもので、その製作過程を示すものであろう。なお輝緑凝灰岩は飯塚市笠置山でも産出し、このものは弥生時代の石庖丁の石材として利用されているが、今回出土の輝緑凝灰岩はどちらのものが搬入されたかは不明である。SK416出土。

6～9は滑石製石板で、6は灰色がかった白褐色の滑石を使用し、長方形の中央よりやや縁よりの上端と下端に孔を有し、上端のものは両面より穿孔されていて貫通孔であるが、下端のものは貫通しておらず9mmほどの円錐形をなす孔である。長辺14.3cm、短辺9.3cm、厚さ2.1cmを測り、一端を欠くがほぼ完形のものである。裏面は裏表とともに研磨されているが、両面周縁部近くに細い線条痕が一定方向に走っている。上層暗褐色土出土。7は石鍋の底部を利用したものであろうか片面は黒灰色にくすんでいる。上部に両面穿孔を有し、長辺は横方向の研磨がみられる。長辺10.2cm、短辺7.6cm、厚さ1.7cmを測る。裏面端には刃物による線条痕が深さ2～3mm、長さ6cmにわたってみられる。SK410出土。8は石鍋の鉗付近を利用して、口縁部に交わって鉗により2辺を切り出し、鉗の部分を削り落している。下半部は



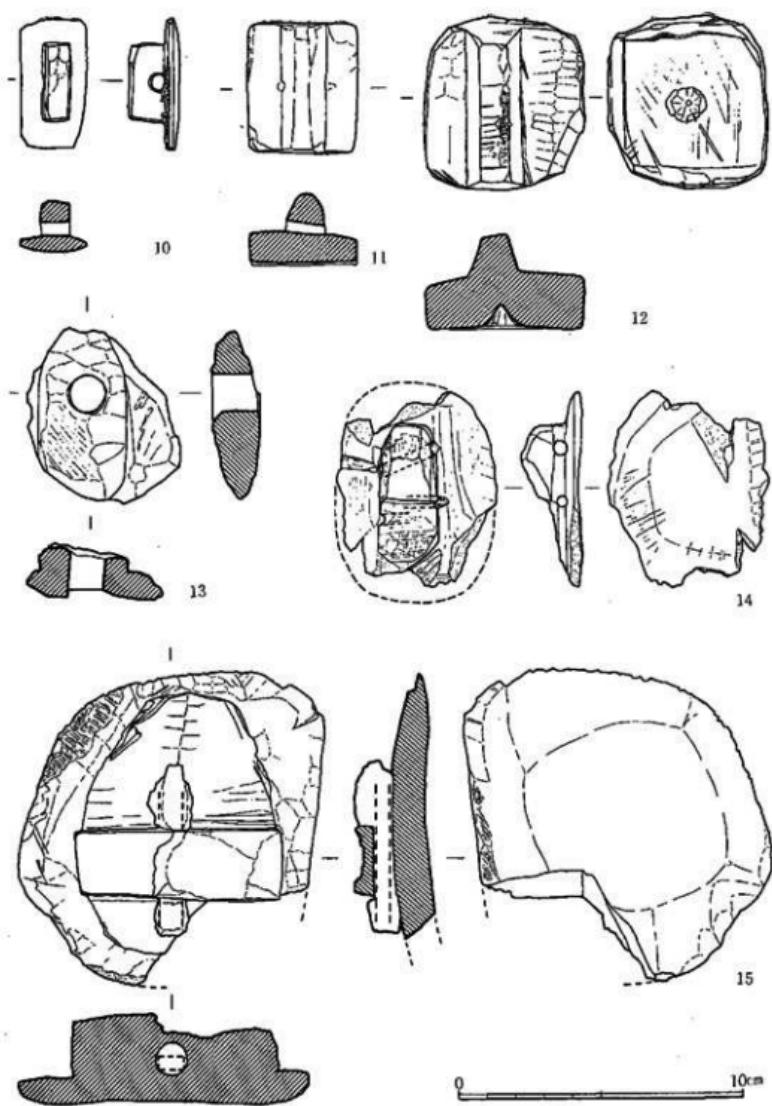
17図 滑石製品実測図（1）

半折しており、表面は一部黒く変色し、側面は湾曲を残したままである。SK413出土。9は雲母を含むような銀灰色滑石を利用しておあり、全体的に黒く変色して一部分にはススの付着がみられる。片面の中央よりやや左よりに2条の線条痕が長辺方向に刻まれ、上部ではそれと直交する線条痕が走っている。孔の有無は半折しているため不明であるが、線条痕のある面には4ヶ所深さ4mmほどの小孔が穿たれている。長辺10.2cm、短辺9cm、厚さ1.8cmで上層暗黒褐色土出土。

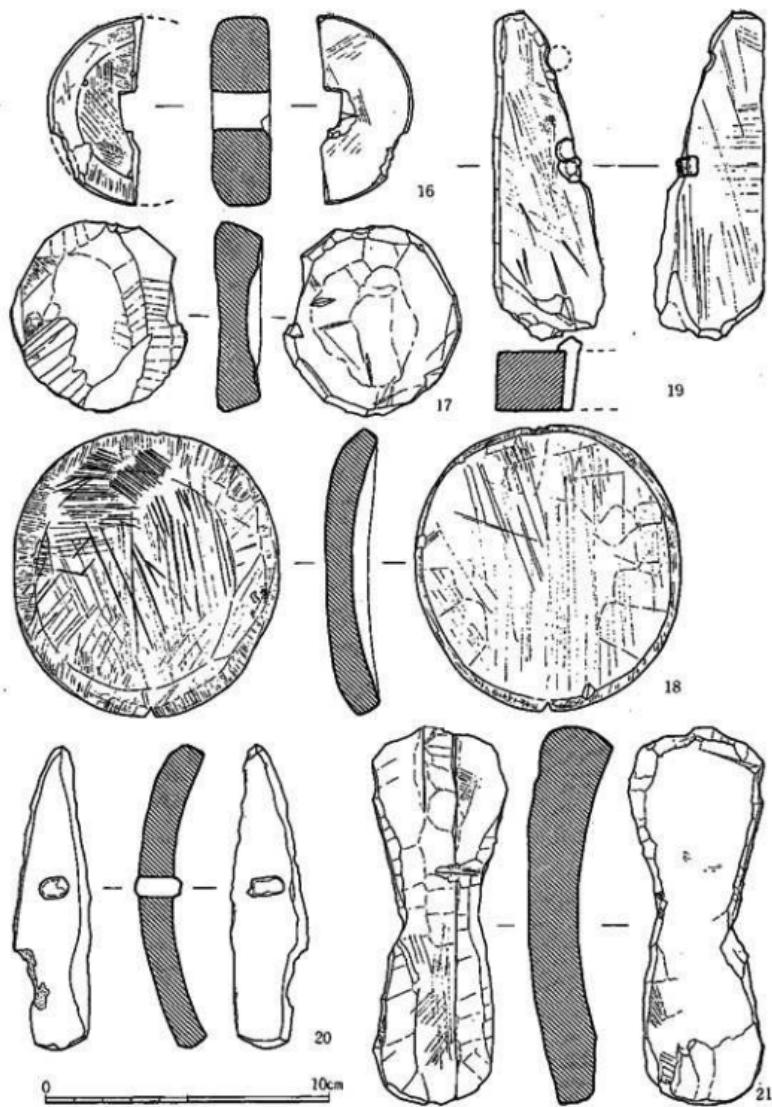
10~15は「つまみ」あるいは把手状のものを有する滑石製品で、長方形、方形、梢円、不整形と各種の形態がある。10は長辺4.6cm、短辺2.3cmの体部に長さ2.8cm、巾1.1cm、高さ1.3cmのつまみ部をつくり径6mmの貫通孔があけられている。底面は滑らかでやや外湾する。全面に媒が附着している。SK427出土。11は石鏡の鏽を利用してしたもので、鏽と直交して径4mmの孔をあけている。長辺4.6cm、短辺3.9cm、高さ2.5cm。上層暗茶褐色粘質土出土。12も鏽部を利用した方形をなすもので、長辺6cm、短辺5.5cm、高さ3.4cmを測る。加工に際しては石鏡の内面に方形の輪郭を刀物で形どりし、それに沿って面取りしたもので、裏面中央には深さ8mm程の削り出しによる穿孔がみられる。上層焼土出土。なお、これと全く同一なものが福岡市の蒲田遺跡でも出土しており、特殊な形態を示すものではないことがうかがわれる。註 13は周縁部を欠損するが長さ6cm、幅3.1cm、高さ0.9cmの削り出しを有し、径1.3cmの貫通孔をもつ。裏面は一部研磨される。上層出土。14も鏽部分を利用したものでつまみ左側面にはススの附着がみられる。鏽を長方形のつまみ状に2段に削り残し、それに上・下の2ヶ所両側面より穿孔をほどこしている。図示した上方の孔は斜めに貫通しているが下方のものは中央部付近にいくつも穿孔している。裏面は多少の凹凸はあるが滑らかに研磨されている。一部周縁を欠くが復元すれば8cmほどの長円形を呈するものであろう。上層焼土下出土。15は長径10.7cm、短径10.4cmの不整形をなし、高さ3.2cmを測る。周縁は一部欠損する。長さ7.1cm、幅2.4cm、高さ2.3cmの長方形把手のまわりを梢円形状に残して外縁を削り出し、梢円形部分は黒く変色して一部煤が附着している。把手のはば中央部に側面より径1cmほどの貫通孔をあけ、それに約5cmの断面長方形をした鉄片を挿入している。裏面には顯著な痕跡はみられないが周縁部近くは薄く削り出されている。中層褐色土出土。

16~18は円形をなす滑石製品で、16は半折するが径3.3cm、厚さ2.0cmのもので中央に1辺1.3cmの方形孔を有する。表面は外縁よりに一段稜をつくり、3ヶ所に径2mmの小孔が深さ5~9mmで穿たれている。裏面は平坦で周縁部には周縁方向に使用痕状のものがみられる。上層暗茶褐色粘質土出土。17は長径6.8cm、短径6.2cm、厚さ1.6cmで上下方向の削りによる縁取りがなされている。表面には工具痕が残り、裏面は不定方向から削り出して凹みを作る。特に使用痕状のものはみられない。下層柱穴内出土。18は長径10.1cm、短径9.3cm厚さ中央部で0.9cm、高さ1.8cmを測り、皿状をなすものである。器面は滑らかであるが一面には不定方向に細かい線条痕が走っている。これは整形のためのものとは考えられず使用痕であろう。周縁は縁取りの研磨で滑らかにしてあるが、その上を縦・横に線条痕が残る。上層暗茶褐色土出土。

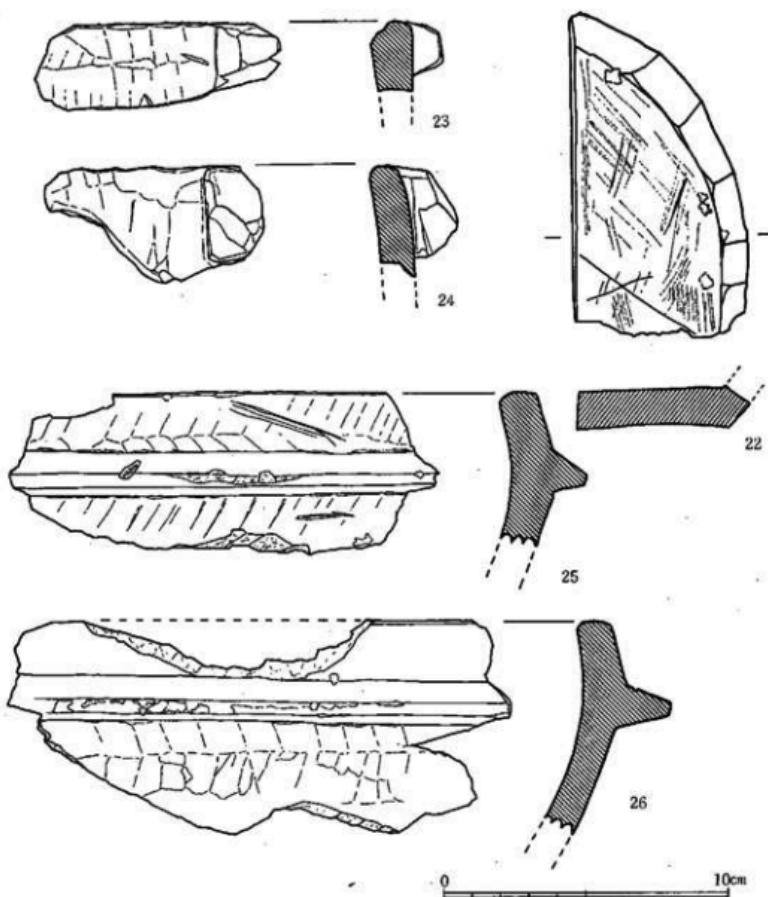
19は現存長11.6cm、幅3.9cm、厚さ2.1cmのもので中央部より半折している。上半部に径8mmほどの円形孔を2ヶ所あけ、下の孔には角釘を挿入している。釘は裏面にて折損している。本来は方形をなすもので角釘は石板を固定するためのものと思われる。上層暗茶褐色土出土。20も19と同様に鉄を挿入するものであるが、両端ともに完結している。石鍋の割部で一面はス



18図 滑石製品実測図 (2)



19図 滑石製品実測図（3）



20図 滑石製品、石錠実測図

スケティング。上層暗黒褐色土出土。21は鉗部分を利用して鉗部の痕跡は両端にて認められる。長さ13.4cm、幅4.7cmで中央部にて折り込まれ2.7cmと狭くなる。裏面は石錠本来の器面を残している。上層出土。22は石錠底部で脣下部を打ち欠いて扁平とし、他側面は縦による切断面を有する。裏面は黒く変色し、一部スヌの付着がみられる。上層暗黒褐色粘質土出土。他にも縦による切断面をもつ石錠再加工品が1点出土している。

23~26は石鍋で23、24は方形こぶ状把手を有するもの、25・26は全周する鋸を有するもので復元口径約24cmを測る。他にも10数点出土している。

註. 『蒲田追跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集. 福岡市教育委員会. 1975

## 7. 土製品、砥石 (21図、図版18の2)

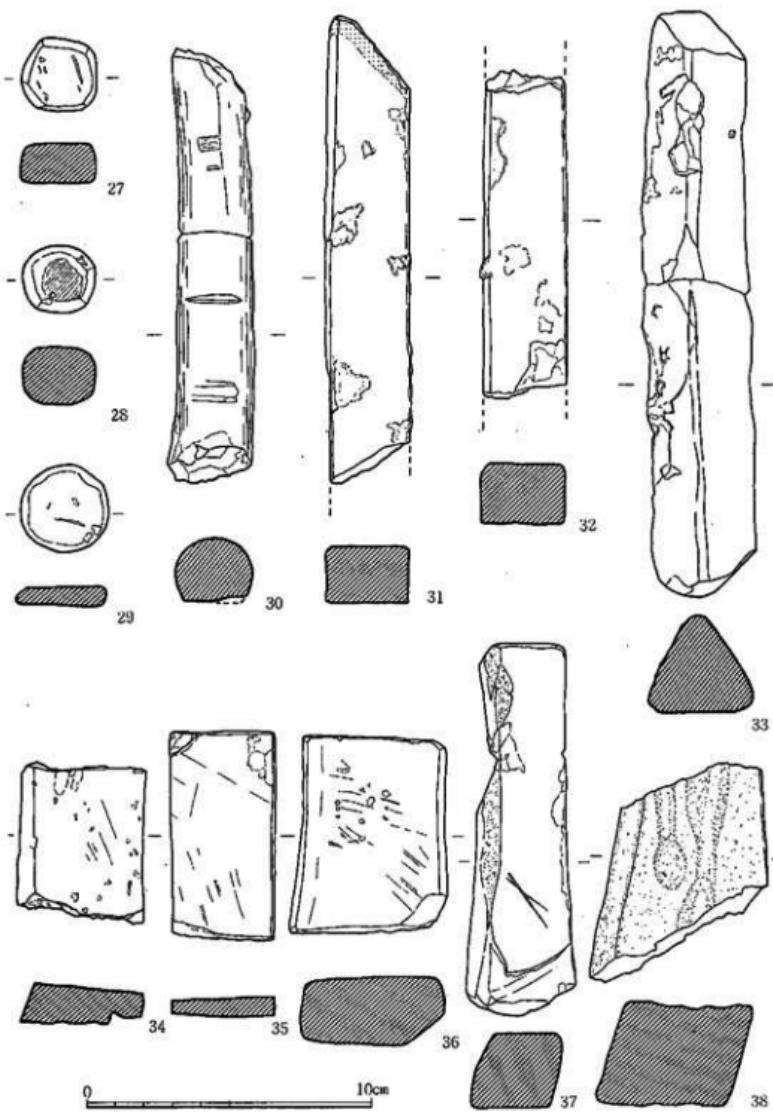
今回出土した土製品は円板状のものと柱状土製品のみである。

27~29は土製円板で27・28は瓦、29は土器片を円形に加工したものである。瓦を加工したものは他に5個出土しているが、いずれも径2.5cm内外のものばかりである。29は長径3.14cm、短径3.12cm、厚さ0.64cmをはかる扁平なもので、瓦を利用したものは多く発見されているが土器片を利用したものは少ない。各層より出土している。

その他に鍛冶に関連するものと思われる焼土塊が多数出土している。胎土にスサや土器片、あるいは鉄片などを混入したものや、径0.7~1.4cmほどの棒状のものに巻きつけた痕跡を有するものなどがある。色調は褐色を呈するが片面が灰黒色の火気を受けたような面をもつものもある。これら焼土塊は今後さらに詳しい分析を必要とする。

30~33は柱状土製品で、30は白灰色を呈し大粒の砂を含む。現存長15.3cm、径2.7cmを測り、一面は平坦となって断面器高の高いかまぼこ形となる。この平坦面は他面に比して灰色が付いていて、両端は剥離状の面を有する。上面には幅5~6mmの板状圧痕が2ヶ所、断面V字状をなす抉りが1ヶ所みられ、中央折損部にも割れとは異なる稜が2本みられることからここにもU字状の抉りが入れられたものであろう。上層柱穴出土。31は下端を欠損するが上端は長辺に対し約50°の角度をもって尖っており、小口面は剥離したような面をなし、二次的火熱によるものか灰黒色に変色している。褐色で大粒の砂粒を含み粗粒も混入している。所々に二次的粘土の附着がみられ、断面3.0×2.0cmの方形をなす。上層出土。32も断面方形をなすもので両端を欠損する。上層出土。33は断面3角形をなすもので方形のものに比して例は少ない。黄褐色を呈し、両端の小口部は完結で体部とは異なった肌合いをし、剥離したような面をつくる。両端は1cmほどの巾でわずかに黒変し、左側面には粘土の付着がみられる。上層焼土内出土。これら柱状土製品は他にも数点出土しており、ほとんどが断面方形をなすもので、形状も同じものが多い。いずれも上層MQ・MR32区付近に集中して出土しており、やはり付近からは鉛渾やとりべなど鍛冶に関連する遺物が多く出土しており、柱状土製品もこれに関係ある遺物と思われる。

34~38は砥石で、34・35は第3次調査出土のものである。34は黄灰色の硬質石材でやや荒い仕上げ砥用のもの。35は黄灰色の粘板岩質のもので一面のみ使用されている。仕上げ砥用。SD301溝内出土。36は白黄色砂岩のものでいわゆる「天草砥石」といわれるものであろう。4面とも使用している。上層暗黒褐色土出土。37も36と同材質のもので断面方形をなし各面とも使用している。上層出土。38は硬質の砥石で両端欠損する。図示した面に2条の、裏面には3条の凹みを有している。玉類を磨くための玉砥石として使われたような痕跡を残す。上層焼土下出土。なお、これと同種のものが第5次調査(砥石No.36)でも出土している。



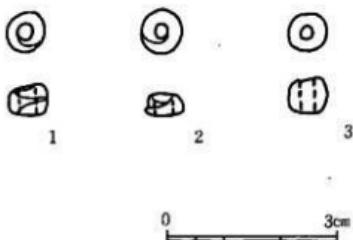
21図 土製品、砥石実測図

## 8. ガラス製小玉

(22図、図版22の1)

中層 SK427 不整円形土塗より一括出土したガラス製小玉で26個を数える。いずれも風化が著しく灰白色をなしている。本来の色調は分からぬ。長径7.5mmから5.55mmの小さいものまであり、6mm内外のものが最も多い。

1・2に見られるように、巻き上げ痕が明瞭に残されているものと、3のように消されているものがある。計測値はつぎのとおりである。



22図 ガラス小玉実測図

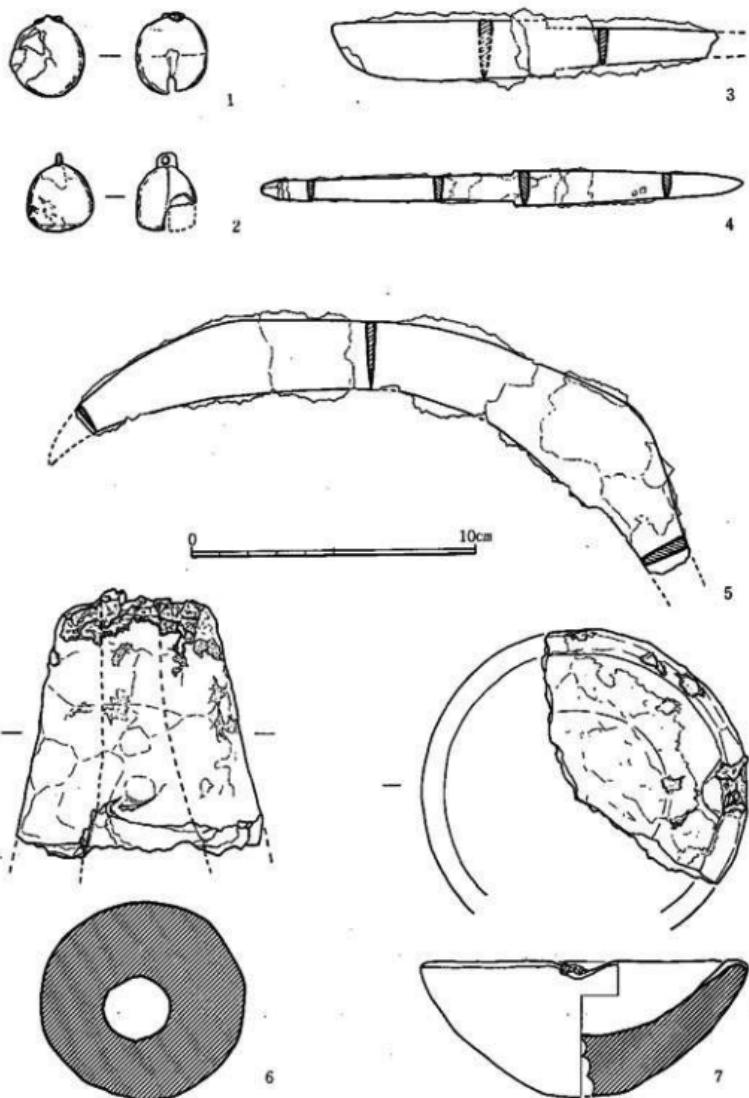
	高	径	孔 径		高	径	孔 径		高	径	孔 径
1	5.25	6.85	3.0	10	4.8	6.7	3.15	19	3.75	6.2	2.85
2	3.9	7.1	2.95	11	4.05	7.1	3.1	20	4.05	6.0	2.8
3	6.2	7.0	2.45	12	4.4	6.35	3.0	21	4.35	6.05	2.65
4	4.6	6.8	2.9	13	4.35	6.6	3.05	22	3.95	6.0	2.4
5	4.35	6.1	2.7	14	4.2	7.0	3.15	23	4.4	6.0	2.3
6	4.55	6.9	3.05	15	4.4	6.6	3.0	24	5.2	6.0	2.35
7	3.9	7.5	3.35	16	4.45	5.55	2.55	25	4.0	5.8	2.25
8	4.4	6.4	2.8	17	4.25	6.15	2.8	26	4.05	6.05	2.35
9	4.9	6.5	2.65	18	4.6	6.35	3.1				

13表 ガラス製小玉計測表 (SK427土塗出土)

(単位mm)

## 9. 金 属 製 品 (23図、図版20の2, 21)

今次の調査では比較的多くの金属製品が検出されているが、主なものだけについてみると、1・2は青銅製釣物鉈で、1は全長2.85cm、胴部最大径2.48cmを測り長円形をなす。切口のところを一部欠損する。釣手部は高さ2mmほどの「耳形」をなし、釣手部には貫通孔がみられず、釣手の下の胴頂部に孔があげられてそこに鉄片が挿入されたものである。体内には土が固着して「丸」が入っているかどうかは分からぬ。上層暗茶褐色粘質土出土。2は全長2.74cm、胴部最大径2.3cm、釣手部幅6.7mm、厚さ1.25mmを測る。胴上半部は長円形で底面は平坦面をつくる。片側の切口から体部にかけ一部欠損し、「丸」はみられなかった。胴部厚さは一定しておらず、薄い所で1.2mm、厚い所で1.95mmをはかる。切口を中心に釣手部まで接合の跡がみられる。中層褐色土出土。3は鉄製刀子である。銛頭がひどく刀部と茎部の区別



23図 金属製品、輪羽口、とりべ実測図

や釘穴等は不明で、茎部先端を欠き現存長13.6cmをはかる。刃部は厚手で背で5mmの厚さをもち幅も2.1cmと比較的大型のものである。SK405土塙出土。4も鉄製刀子で、出土時は全面にわたって鏽が固着していたが鏽を除去するとはほぼ完形をなしていた。全長17cm、刃部8.2cmで幅は中央部で1.31cm、背の厚さ3.75mmをはかる。茎部には目釘穴などはみられず、断面は長方形で、片側は平坦面をなすが他面はやや湾曲する。上層暗茶褐色土出土。

5は鉄製鎌で切先部と茎部を欠損し、鏽化が著しい。現存刀部は17.4cmで復元では19cm内外のものと推定される。刃部最大幅は2.4cm、背は3mmのやや薄手の鎌である。茎部断面は背で5mm、刃部側で3mmの長方形をなし、目釘穴などは分からぬ。上層暗黒褐色土出土。

6・7は金属製品ではなく、土製品に含まれるものであろうが、鍛冶に関連する遺物なのでここで取り扱うこととした。6は円筒形をなす羈羽口で現存長9cm、先端部孔径2.1cmを測り下端部はやや開く。胎土は粗砂粒を多量に含み、下半部は二次的火熱を受けないので素焼き本来の褐色を呈するが、上半部は灰黒色に硬く焼けしまっていて内面も暗赤灰色をなす。灰黒色と褐色器面の境目付近には黄色の粘土附着がみられる。中層暗茶褐色土出土。他にも1点破片が出土している。7は各種の溶かした鉱物をるつぼから流し出して受け、鋳型へ注入する「とりべ」で、復元口径11.5cm、高さ4.8cm、厚さ口縁部で0.9cm、底部で2.1cmを測る。胎土には粗砂粒を含み手づくねによる成形で、内面は暗灰色を呈しほぼ全面に黄白色の固着物が薄くこびりつき、多数の気泡をもつ。外面は二次的火氣を受けておらず暗灰色の地肌をなす。口縁部一端に幅2.4cm、深さ0.2cmの片口状そそぎ口を有し、この部分には暗赤灰色の固着物がみられる。SK425出土。なおこの土塙からは銅と思われる綠青をふいた固着物がついたとりべ片や鉄滓・銅滓なども出土している。その他にMP26区の最上層焼土面上にて分鋳型をなす鉄製品が出土しているが、腐蝕して脆く、取り上げ後、こわれて原形をうかがうことはできないが、出土時では空洞状をなしていた。鉱物製であろうと思われる。とりべは他にも小片が30点ほど出土していて特にMP29区、MP31区付近に多く見られ、銅滓・焼土塊・釘状鉄製品などもここに集中している。

3・4次の調査において金属鋳造に關係する遺物が多く出土しており、特に3次調査区南側から4次調査区北部にかけて集中している。鋳造と直接結びつくような遺構は何ら検出できなかったが、土製鋳型・羈羽口・とりべ・焼土塊・銅滓・鉄半製品・銅板切りくず・磁石など各種のものがみられる。

30点ほど出土している用途不明の鉄片は半製品と思われ、長さ5cm内外の柱状をなすものがほとんどで、断面も方形・円形・三角形とあり、その他にU字状に曲がるものや扁平なものもあるがとくに釘状をなすものが多い。銅滓には鉄滓と綠青をふいた銅滓があり、鉄滓の方が多く、表面が粗雑で多孔質なもの、飴状の平滑な面をなし気泡がみられるもの、径5~8cmの円形をなす扁平な鉄滓塊ともいえるべきものも数点出土している。

これらのことから、鉄に関しては「鍛冶」が行なわれていたことは確実で、鍛冶には鉄素材を鍛錬する「大鍛冶」と農工具や武器などを加工する「小鍛冶」とに分けられるが、当遺跡においては鉄鋤や半製品状のものからして小鍛冶による鉄製品の製作が行なわれていたものと考えられる。また、3・4次調査あわせて20点ちかくの釘状鉄片が出土しているところから釘の製作が集中的に行なわれていた可能性もある。

さらに、第3次調査では「水瓶」の鋳型片も出土していて、銅製品の鋳造も行なわれていたことが確実となった。

文治5年(1185)に大宰府銅物師平井宗明が源頼朝より九州銅物師政所職に補された旨の記事が『真継文書』<sup>註</sup>に見えるが、それとほぼ年代を同じくする当遺跡の銅製品鋳造の問題とを考えあわせると大変興味深いものがある。

いずれにせよ、鉱洋・半鉄製品・焼土塊・とりべの固着物など金属器の鋳造に関する遺物の観察は門外漢によるものであり、今後専門的分野からの詳しい資料の分析と研究が必要とされるものである。

註『大宰府・太宰府天満宮史料』巻7所収・太宰府天満宮 昭和46年

## 10. 銅 印 (24図、図版17の2)

印文 「佐 伯 万 善」

総高 2.98

印面 縦2.94 橫3.00

印台高 1.00

印合周縁高 0.65~0.68

鉢最大幅 1.80

鉢厚(鉢孔部) 0.63

鉢孔径 0.58

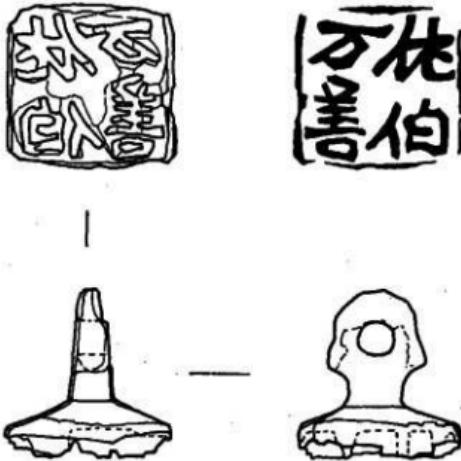
(単位 cm)

今回の調査にて銅印一顆を検出した。銅印は印面を上にし、MQ26区壁に半分ほど食い込んだ状態で発見され、表土より約50cm下の暗茶褐色粘質土中から出土しているが、銅印に伴なう遺構などははら確認できなかった。

この暗茶褐色粘質土は東区東南部よりみられるもので、この付近は遺構はほとんどみられず遺構面は削平されてしまっている。暗茶褐色粘質土はその上に堆積した層で、銅印と伴出した遺物には土師器・黒色土器・陶器・瓦などがある。土師器は第3次調査で出土したSK339土塗の土師器に類似したヘラ切り底土師器と、糸切り底土師器をも含んでいるがヘラ切りのものが多い。しかし今回検出した銅印がこれらの土器のいずれに確実に共伴するものかどうかは不明確である。

(新原正典)

銅の材質はかなり脆弱であり、そのため現状は鉢頭部および印面の周縁部において損傷が顕著である。それは使用に起因する磨耗ではなく、銅質そのものが欠落したものである。印面



24図 銅印実測図（実大）

の四周には輪郭が施されており、また印文の彫りもかなり深いが、周縁部に近づくほど欠落している。鉢には直徑 0.58cm の鉢孔があり、鉢頭部の左右には突起状の痕跡がわずかながらも認められるので、この印の本来の鉢形はいわゆる鶴頭鉢（蒼鉢）であったと推定できる。また現状では実測値に若干の差異は認められるが、本来の印面はほぼ方形であり、総高をも含めてそれぞれ 3.00cm すなわち 1 寸であったと推定される。

現存するものあるいは古文書所載の押印などによって知られている古印の数は少なくはないが、その性格は大きく官・公印と私印とに分けられている。前者では、「某々印」あるいは「某々之印」というように、印文には必ずと言ってもいいほど「印」字が付けられ、寸法等についても一定の規格があるなどの特徴を示している。これに対して、私印の場合は、貞觀 10 年 6 月 28 日の太政官符によって封家に使用の認められた印は 1 寸 5 分をもってその限となされた以外には印文・規格などについては際立った制限は加えられていない。特に個人印である一字印の名印のように、印文・形状などはきわめて自由であったと推察され、さらに印の使用が盛行するにつれて種々のものが出現したのである。

さて、この印文の「善」字は「善」字の異体字であるが、「佐伯万善」という印文全体の解釈は必ずしも容易ではない。「佐伯」は言うまでもなく氏名であり、古代における佐伯氏は大伴氏から分かれた軍事関係の大族であった。これに対して、「万善」については、それを個人名とみなすかあるいは何らかの意味を有する成句と解するかはにわかに判定できない。もし後者と解するならば、万・善ともに好字であり、天平勝宝8年に東大寺に献納された光明皇后の自筆と伝えられる「社家立成」に押印された「積善藤家」の方印と同質の意義が想定される。ともあれ印文についての解釈は容易でなく、印自体も佐伯万善という個人にかかるものかあるいは佐伯氏の数世代にわたって使用されたものかは判定できないが、少なくとも印の性格としては佐伯氏にかかる私印と判断でき、またその時代についても、出土層から見て鎌倉時代以降に下るものではなく、平安時代中期頃までさかのほる可能性も十分に想定できる。

次にこの印の使用者である佐伯氏について若干述べておこう。この佐伯氏がいわゆる一般庶民階層に属する者ではなく、一定の身分、地位あるいは勢威を有する者であったことは推察に難くないことであろう。たとえば、大宰府政府あるいは鎌倉時代の大宰府守護所と言うような権力機構に所属する者と考えることもでき、また大宰府郭内に何らかの関係を有する者であったと考えることもできる。特に、大宰府は西海道の政治・文化の中心地であり、当代の郭内においては報世音寺や安楽寺というような在地の有力寺院のほかに、宇佐八幡宮も進出しており、かなり殷繁な状況を呈していたと推定され、佐伯氏もかかる状況の中で生活していたのである。

平安・鎌倉時代の関係史料によると、九州に關係する佐伯氏は10数名が所見され、その分布もほぼ九州全域に及んでいるが、特に豊後國の佐伯氏は有名である。このうち、大宰府關係では、永承6(1051)年に大監に任命された「佐伯国辰」(除目大成抄)、永長2(1097)年には監代として大宰府政府所牒案に審判した「佐伯」(平安造文1357号)という府官のほかに、治暦2(1066)年に報世音寺において法華經書写に結縁した府官人および左右両邦の男女等の中に見える「佐伯光時」(報世音寺文書)などの名が知られる。また筑前國關係では、貞観10(868)年の筑前國牒案に見える「権大目佐伯造」(平安造文157号)、元慶1(877)年に一切経を書写して報世音寺に納めた「権大目正六位上佐伯連春緒」(報世音寺資財帳)などが知られる。しかし彼らの本貫地は明らかでなく、銅印の佐伯氏と直接に連関させることは妥当でないが、在地豪族の府官あるいは國衙の下級官人への進出が顕著になる平安時代中期以降、佐伯氏の場合も例外ではなく、そうすることによって郭内に一定の基盤を有するようになったことは十分想定できる。

このほか、式内社である那珂郡住吉社の神官家にも佐伯氏が見え(吾妻鏡治承4年7月条)また史料的には検討の余地を残しているが、嘉承2(1107)年に僧類源解に証判した「大分宮大宮司佐伯」(平安造文1679号)も筑前國穂波郡に鎮座した大分八幡宮の神官と推定される。

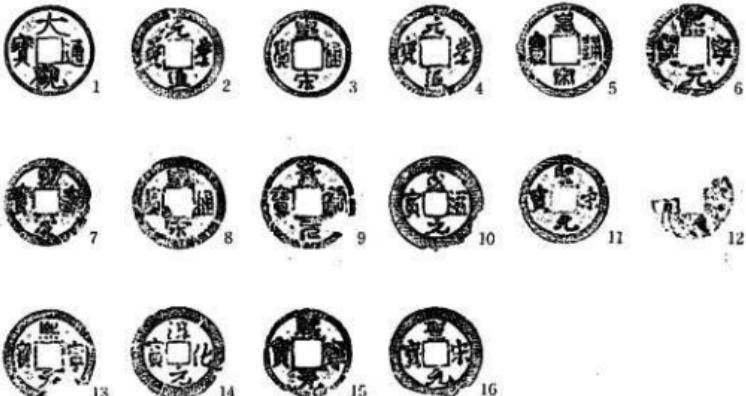
大分八幡宮は宇佐八幡宮を勅請したものであり、その大宮司佐伯氏と銅印の佐伯氏との関係は明らかでないが、このことに関連して注目されるのが、銅印出土地が「府中宇佐町」に近いことである。府中宇佐町は永保2(1082)年に典代大中臣有助が八幡宇佐宮大宮司公則宿禰に沽却したものであり(八幡宇佐宮御神領大鏡)，爾来宇佐宮領として第内における宇佐宮の根拠地とも言うべきものであった。現在かかる地名は遺存していないが、字君畑付近と推定されており、銅印出土地とはほぼ隣接しているのである。従って特に確証があるわけではないが、十分考慮すべきことと考えられる。

以上銅印について述べてきたが、現時点ではほとんど明らかにおし�ておらず、また銅津やとりべなどの工房関係の遺物も出土しているので、いわゆる鋳物師との関係から考察する必要もあり、今後の検討を要する点が少なくはない。

(倉住靖彦)

### 11. 銅 錢 (24図、図版22の1)

第4次の調査では計23枚出土している。そのうち、MQ26区の暗褐色土からは熱気を受けたために6枚が変形固着したものと、折損したもの2枚があるので判読できるものは8種15枚となる。すべて北宋錢で、ほぼ11世紀から12世紀初頭にかかるものが多い。このことについては他の調査区についてもほぼ同じ傾向を示している。個別的には熙寧元宝が4枚、皇宋通宝が3枚と群をなしている。確実な遺構からの出土は11の聖宋元宝のみで、SK403土塙から土師器などと共に伴っている。また最上層の焼土面からは6~9までのものが出土している。中・下層からの出土はない。



25図 銅 錢 拓 影 (%)

錢版 番 號	錢貨名	外 徑		外 緣 厚 さ	出 土 地 点		初 鑄 年	備 考
		水 平	垂 直		地 区	層 位		
1	大觀通寶	24.1	24.35	1.4		表 土	宋 徽宗 1107	
2	元豐通寶		24.3	1.3		表 土	宋 神宗 1078	
3	皇宋通寶	23.15	23.1	1.35		表 土	宋 仁宗 1039	
4	元豐通寶	25.0	24.55	1.55		表 土	宋 神宗 1078	
5	皇宋通寶	25.5	25.1	1.4	MQ28	暗茶褐色土	宋 仁宗 1039	
6	熙寧元宝	24.8	24.5	1.5	MR27	燒 土 内	宋 神宗 1068	
7	熙寧元宝	23.6	23.65	1.55	MQ27	燒 土 内	宋 神宗 1068	
8	皇宋通寶	24.85	25.0	1.6	MQ27	燒 土 内	宋 仁宗 1039	
9	景祐元宝	25.3	25.0	1.6	MQ27	燒 土 内	宋 仁宗 1034	
10	至道元宝	25.35	25.35	1.45	MQ	柱 穴 内	宋 太宗 995	
11	聖宋元宝	24.15	24.05	1.65	MQ26	pit 2	宋 徽宗 1101	S K403 土坡
12					MR28	暗茶褐色粘質土		
13	熙寧元宝	24.9		1.75	MR28	暗茶褐色粘質土	宋 神宗 1068	
14	淳化元宝	24.95	24.95	1.25	MQ28	暗茶褐色粘質土	宋 太宗 990	
15	熙寧元宝	23.75	24.1	1.2	MQ27	4 層	宋 神宗 1068	
16	聖宋元宝	25.25		1.75	MQ27	暗黑褐色土	宋 徽宗 1101	
17					MQ27	燒 土 内		
18					MQ27	暗褐色土		6 枚 变形 固着 錢種不明

(单位 mm)

14表 銅 錢 計 測 一 寫 表

## 五、おわりに

今回の報告は3・4次調査のもので、昨年の5次調査分につぐものである。3・4次の調査成果と問題点をあげてまとめとしたい。

3次の調査にて数条の溝が検出され、うちSD304溝は南北方向に延びるものである。調査区の西端に接して南北方向の農道が走るが、第5次調査ではこの農道の西側にてやはり南北方向に延びるSD501溝が検出されており、現農道をはさんで両側に2条の溝が平行に走っていることが確認された。

大字府庁中軸線からの距離はSD501溝中心線で約701.34m、SD304溝中心線で約715.34mを測り、両溝間の西肩と東肩部の幅は約12mでその中心線は708.34mである。この側溝間を道路敷とすれば条坊の地割線上から約半町ずれるところから坊間道路と考えられる。ただ、SD501溝からは糸切り底土師器が、SD304溝からはヘラ切り底土師器が出土して両者間に時間的存隔があり、溝の築造及び廃絶の問題をも含めて今後更に検討されるべきである。

出土遺物では「急々如律令」墨書き木札と「佐伯万喜」銘の銅印の発見が特筆される。「急々如律令」は第2次調査でも土師器壺に記されたものが出土しており、中世民衆の信仰形態を考える上で貴重な手掛りとなるものである。銅印の考古学的調査による発見はきわめて珍らしいが、それに関連する構造や年代の基準となるような遺物の共伴が見られなかつたのは残念である。また、文献面からの考察もなされたが、現時点での解明されるものはほとんどなく、今後に残された問題である。

土師器については、第5次調査時には解明できなかつた、ヘラ切り底を持つ土師器や、ヘラ切り底の土師器から糸切り底土師器への移行、古い糸切り底土師器の形態など、概略ながら把握できたことは、ひとつの成果といってよいであろう。

このように土師器の大まかな分類や編年の成果から、今後はさらにこれらを充実させるとともに、これに青磁、白磁、陶器類、瓦器、片口、綠釉陶器、灰釉陶器、古窯戸、常滑などの土器類の共伴関係や量を内づけするとともに、鑄型、フイゴ羽口、とりべ、鉄鋤、銅滓などの生産遺物を結びつけ、日常生活の木器類、下駄、櫛、石鍋、硯、砥石、箸や、信仰関係の木札木偶、墨書きなどを加えることによって生活の復元をし、さらに井戸、柱穴、溝、土塙などの遺構との関連を理解するなど、横の組み合わせと変化をみつめることができ、今後の整理報告の大いな課題となるであろう。この報告書が、そのひとつの手がかりともなれば望外の喜びである。

なお最後ではあるが、土師器分類の基礎となった各遺構の関連を表としてあらわした。すべての遺構についても明確にしたいが、まだそこまでは整理が進んでいないのが残念である。年代については全くの推測であり、あまり根拠のあるものではない。将来確実な資料で訂正されるべきものである。

土器分類	推定年代	第3次	第4次	第5次	共伴土器
I-2類	11世紀	S K341土塙 MF35区暗灰色粘質土 S K339土塙 S D304溝			綠釉香炉 黑色土器 須恵器碗
I-3類 (浦城I類)	11世紀後半~12世紀初頭				白磁5類 瓦器碗
I-4類	12世紀前半~12世紀中頃	S D305溝			白磁3・4・5類 瓦器碗
II-1類	12世紀中頃~12世紀後半	S K312 土塙下部 S K312 土塙上部 S K338土塙	S E401井戸 暗茶褐色粘質土		白磁3・4・5類 瓦器碗
II-2類	12世紀末~13世紀初頭		S E401溝	S K520土塙	青磁7類 瓦器碗
II-3類	13世紀前半~13世紀中頃	S K317土塙	S K407土塙 MP27区黒褐色土	S E505井戸 S E514井戸	雜器 7類, 合子 磁器 6・8類
II-4類	13世紀中頃~13世紀後半	S K309土塙	S K424土塙	S K501土塙 S K513土塙	
II-5類	13世紀後半~13世紀末	S K333土塙		S D502溝 S E516井戸	

15表 土器分類と遺構対照表

# 図 版



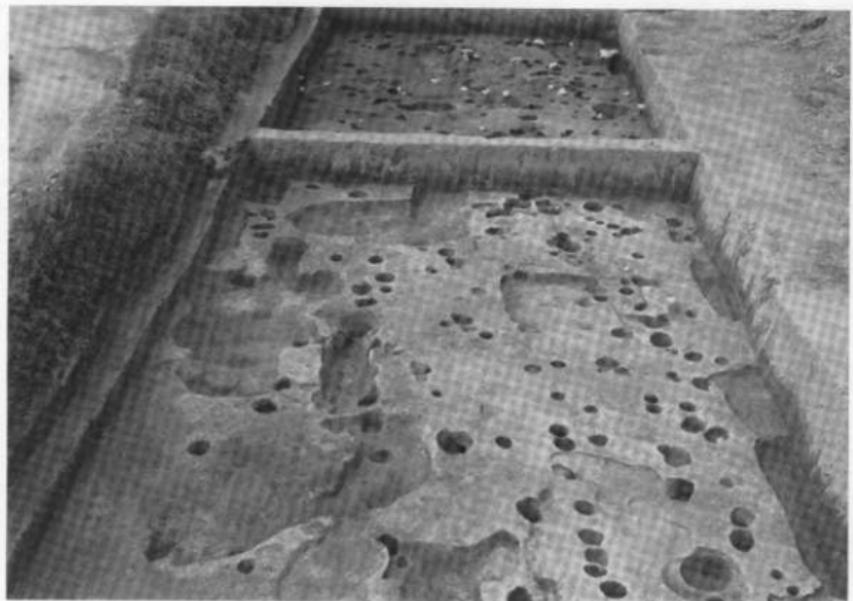
1. 遺跡全景（北から）



2. 最上層建物造構（北から）



1. 上層全景（西から）



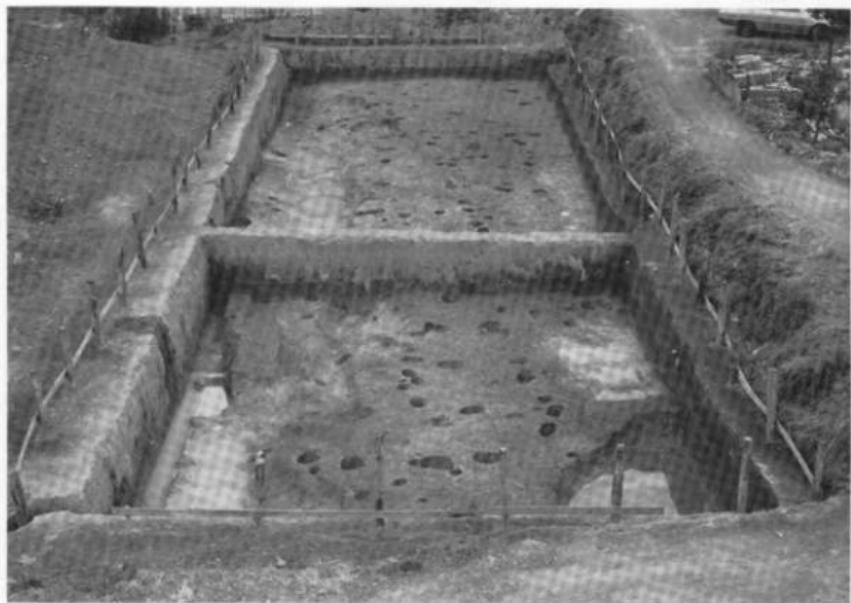
2. 上層全景（東から）



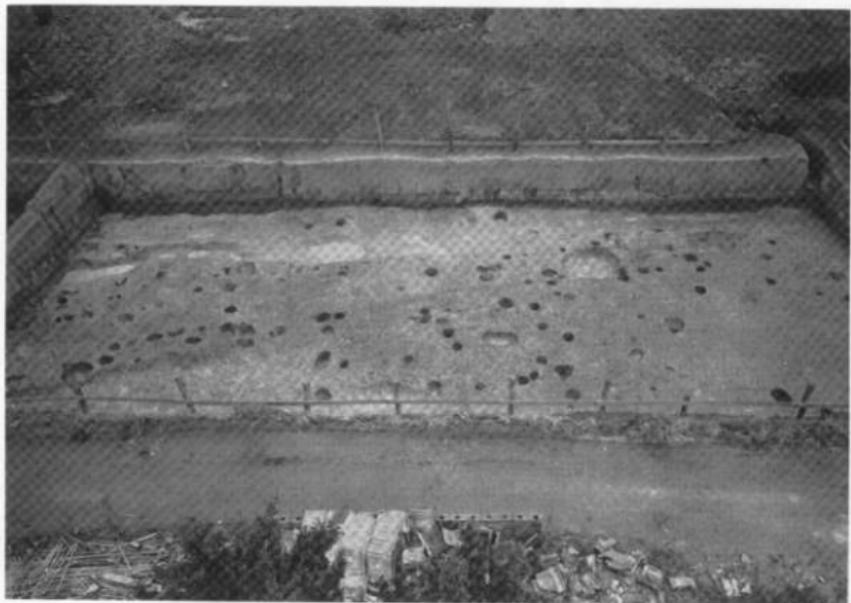
1. 中畠東区全景（西から）



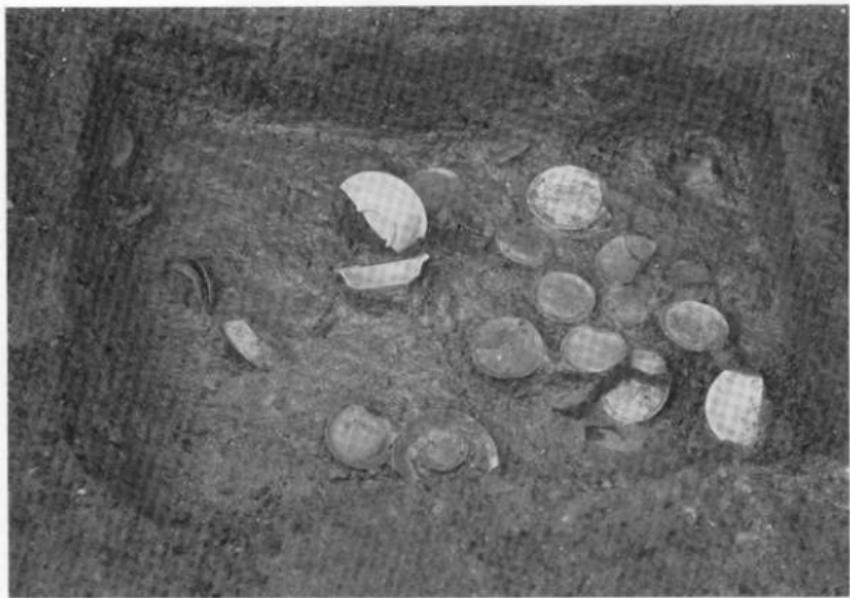
2. 中畠西区全景（東から）



1. 下層全景（西から）



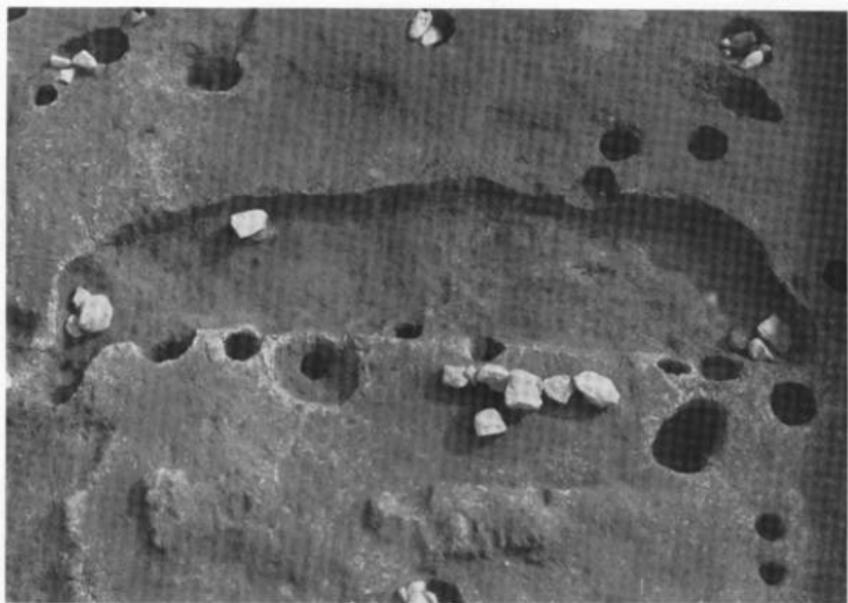
2. 下層東区全景（北から）



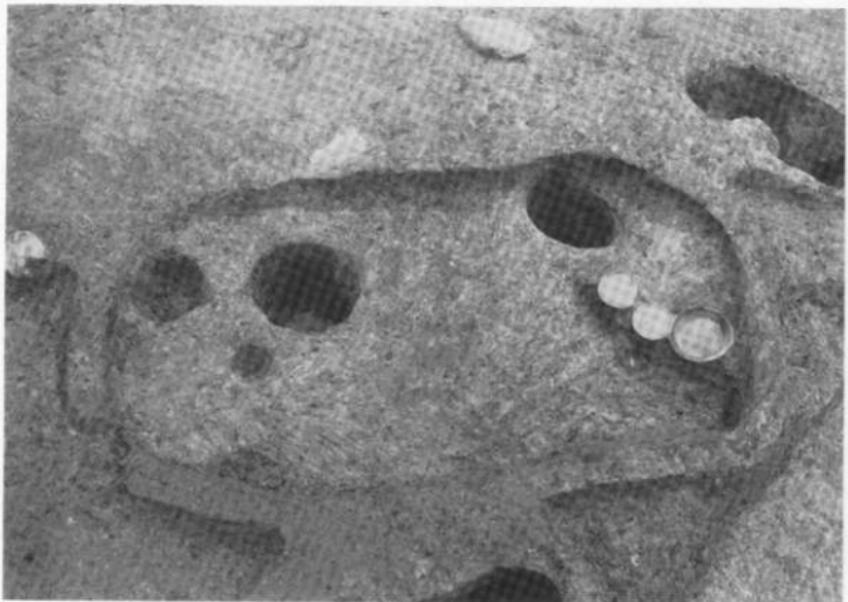
1. SK 401土坡土器出土状態



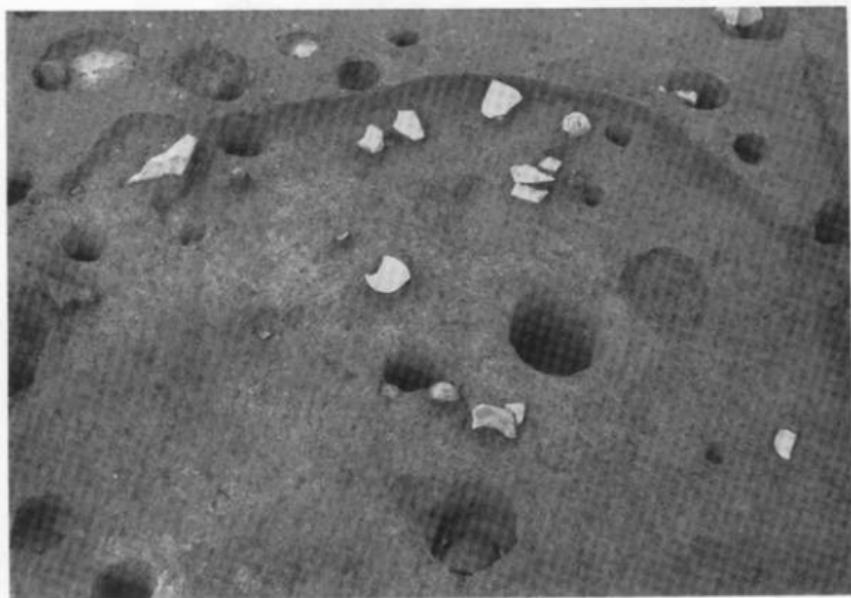
2. SK 404土坡土器出土状態



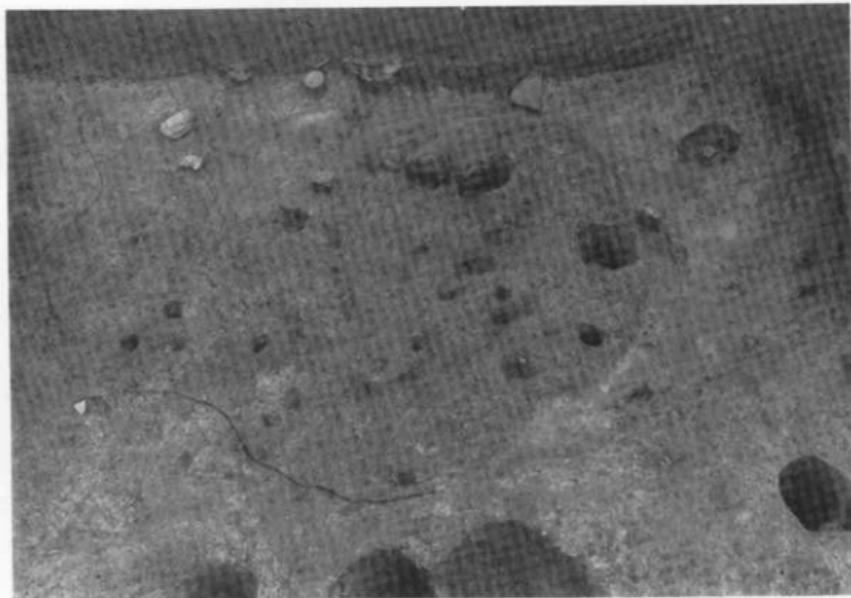
1. SK407土壌



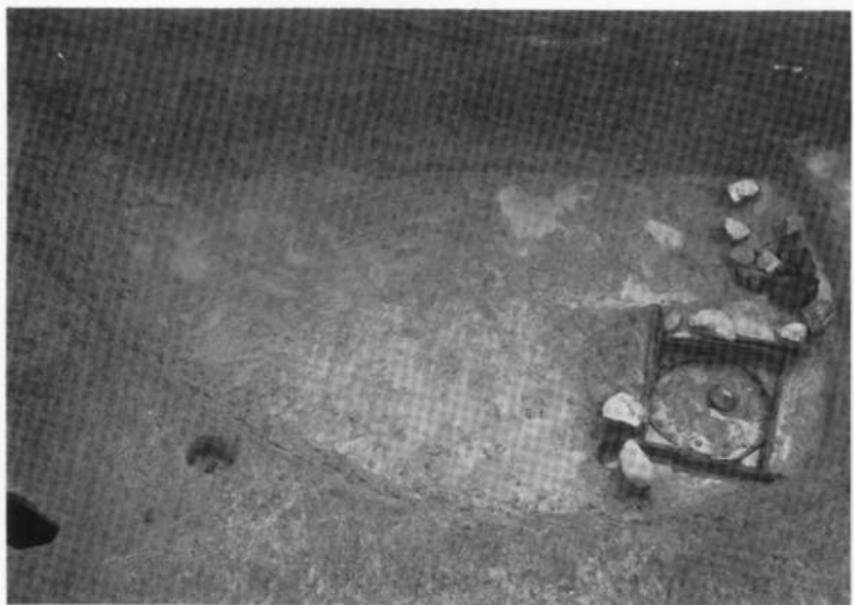
2. SK414土壌



1. SK425土塚



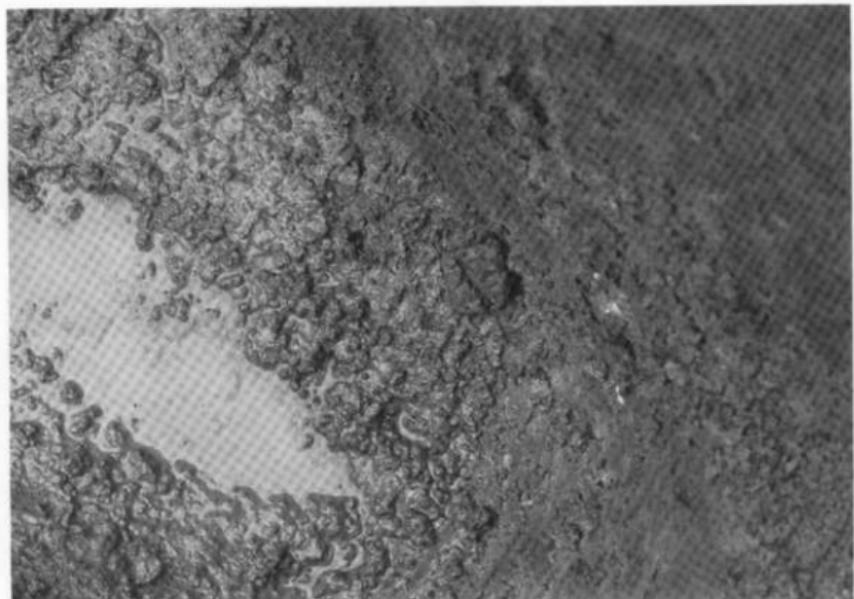
2. SK427土塚



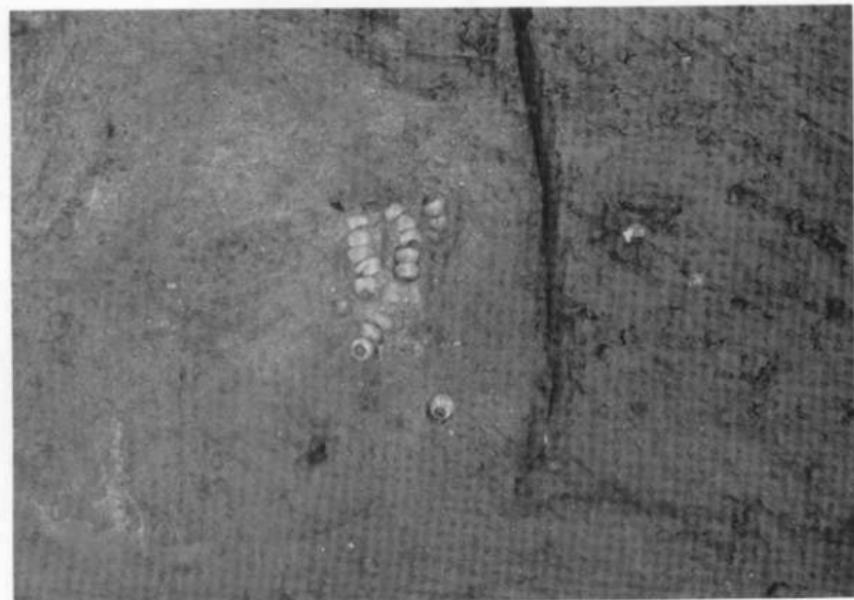
1. S E401井戸



2. S E401井戸



1. 銅印出土状態



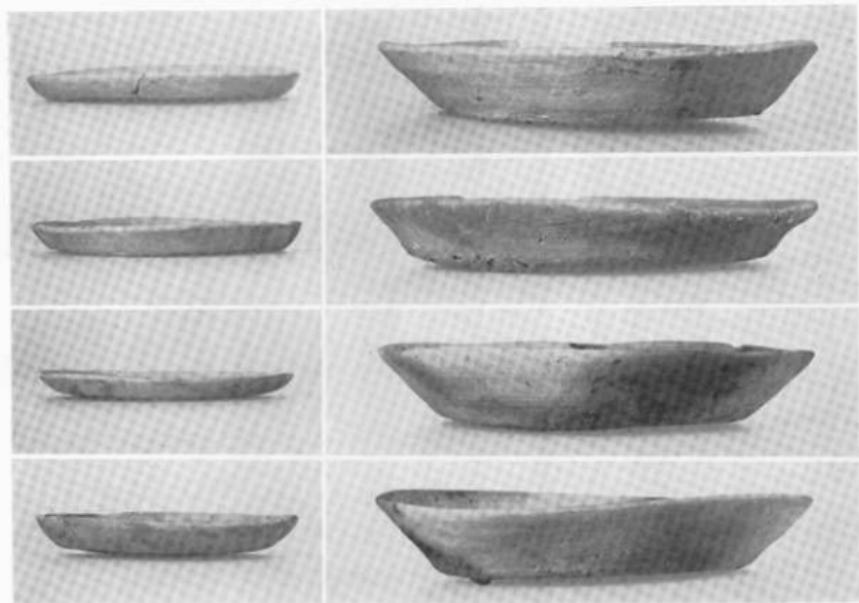
2. ガラス製小玉出土状態 (SK 427)



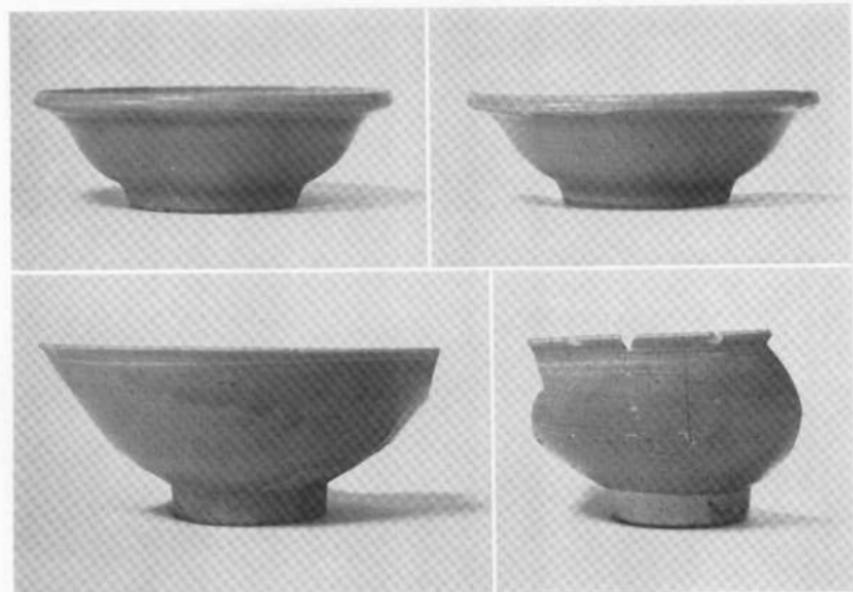
1. 鞍羽口出土狀態（上層）



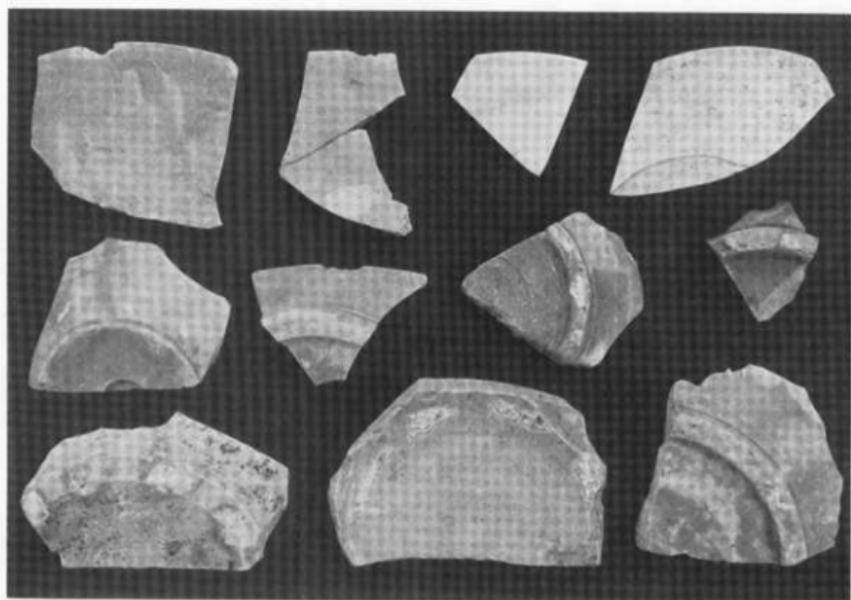
2. 巴瓦出土狀態（S K407）



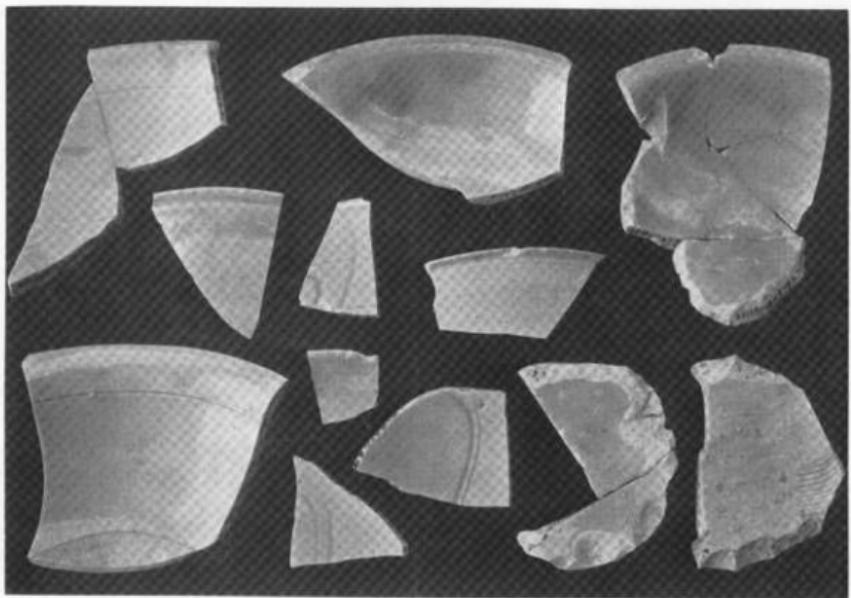
1. 土師器 (S E401井戸出土)



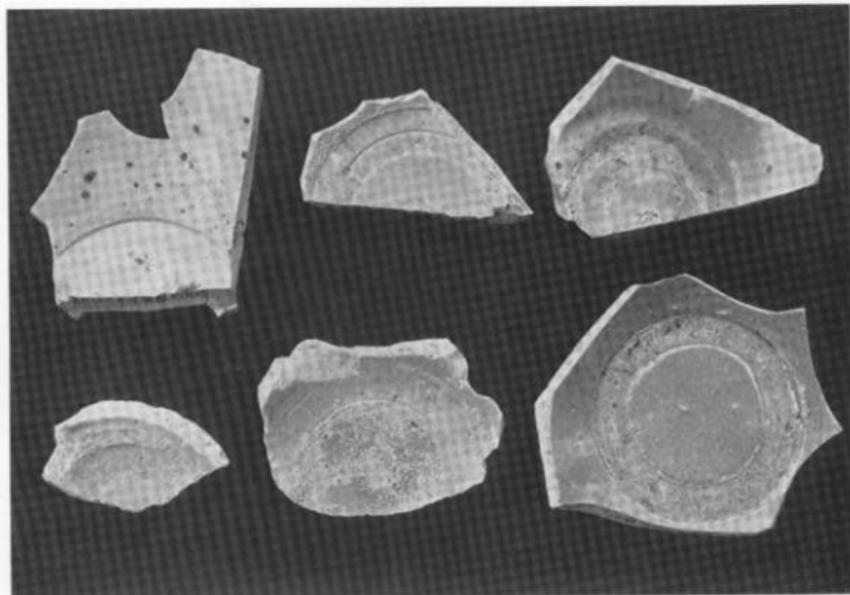
2. 青磁 8 類 (上), 白磁 3 類 (下)



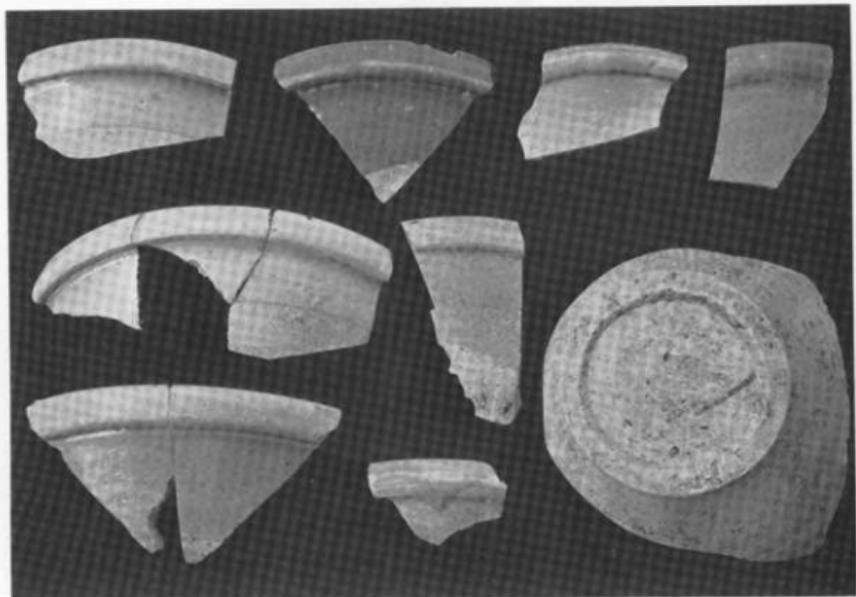
1. 青磁 1類



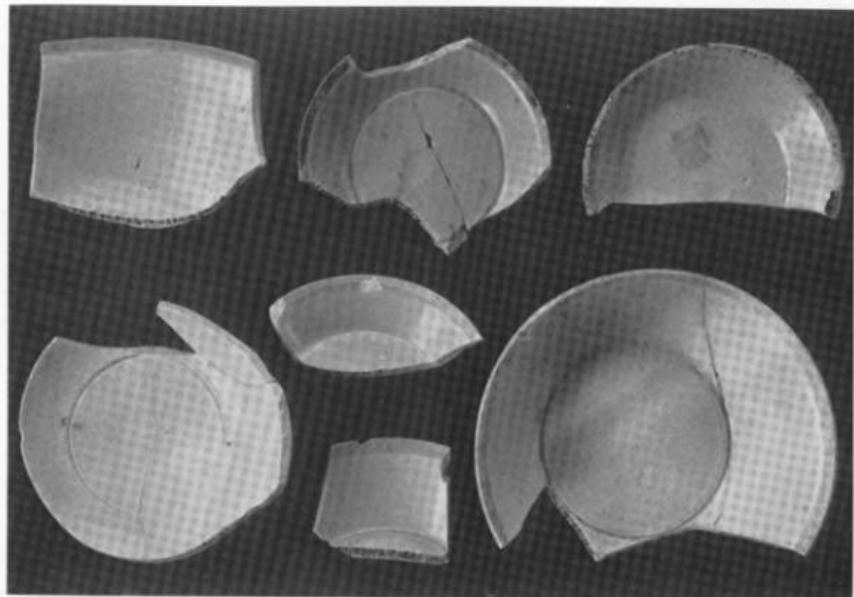
2. 白磁 3類



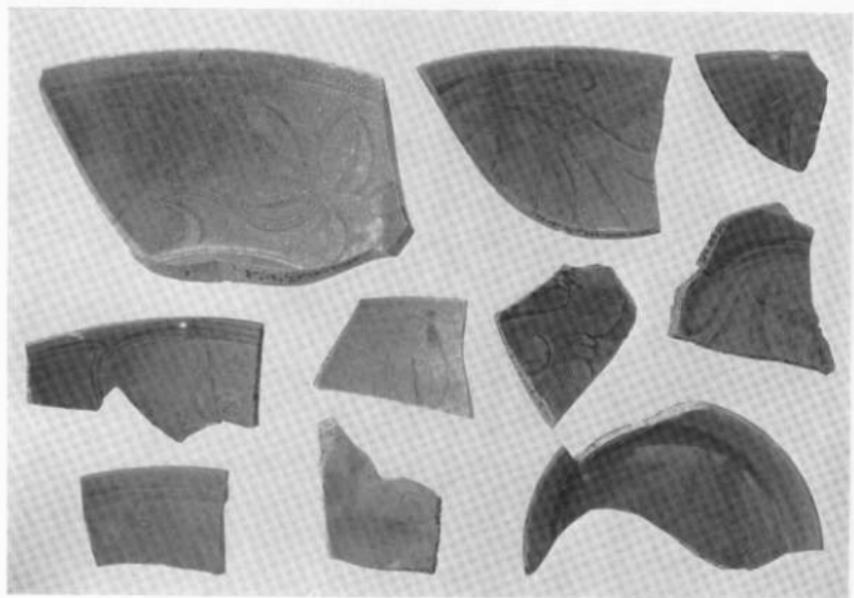
1. 白磁 4類



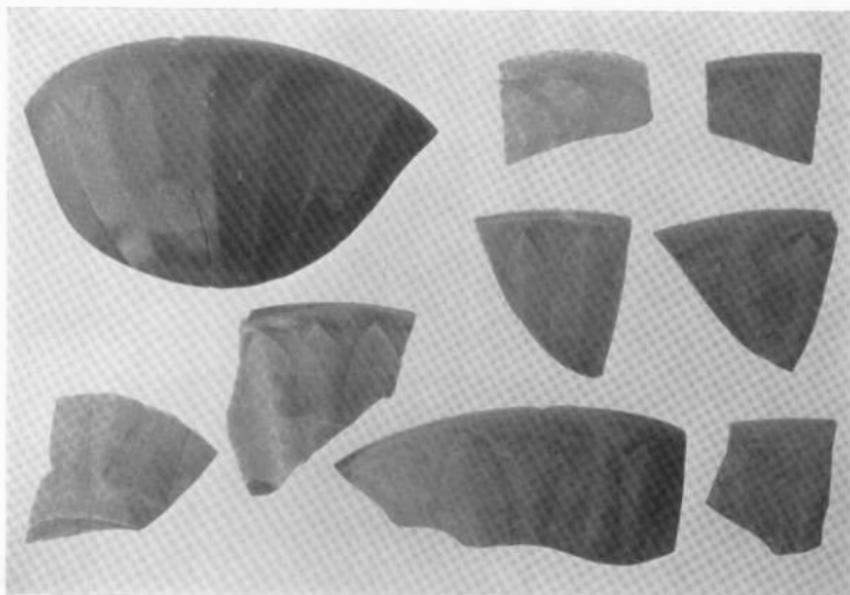
2. 白磁 5類



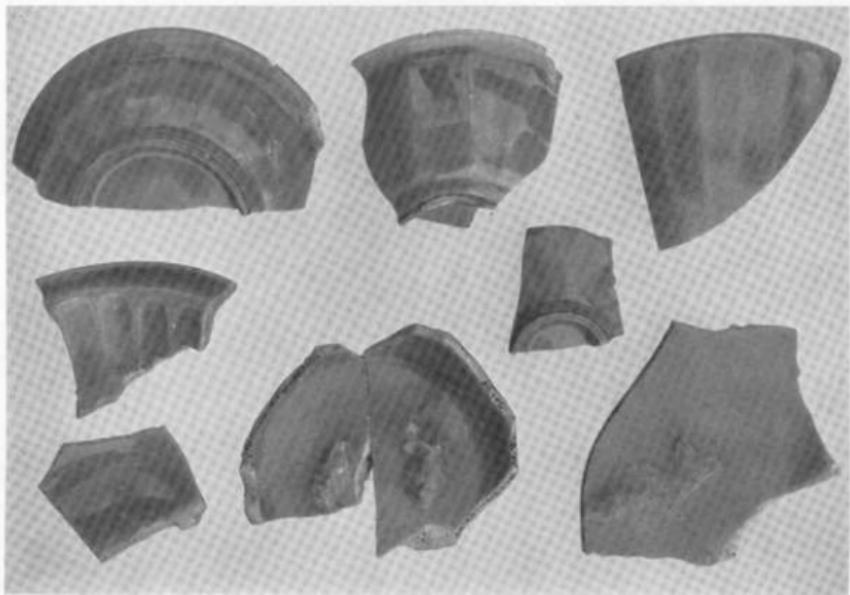
1. 白磁 6類



2. 青磁 7類(1)



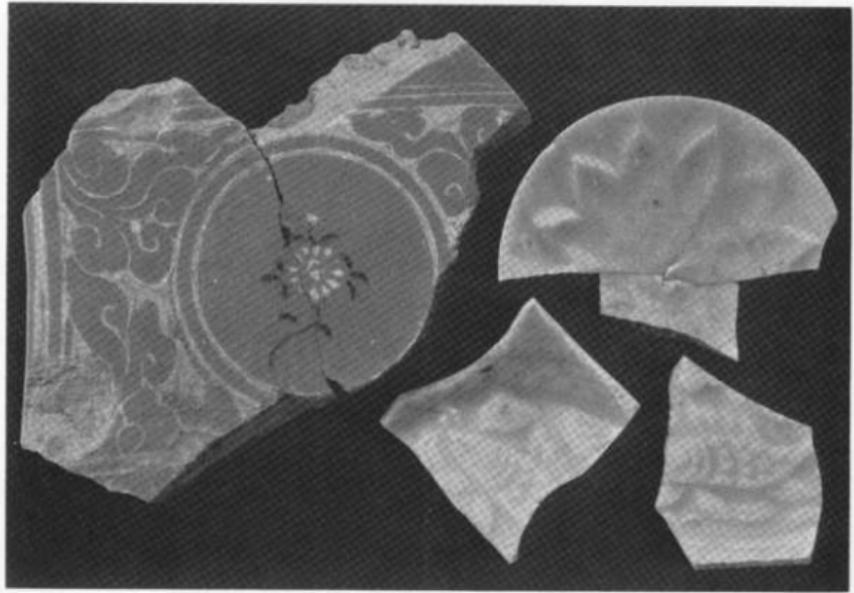
1. 青磁 7類(2)



2. 青磁 8類



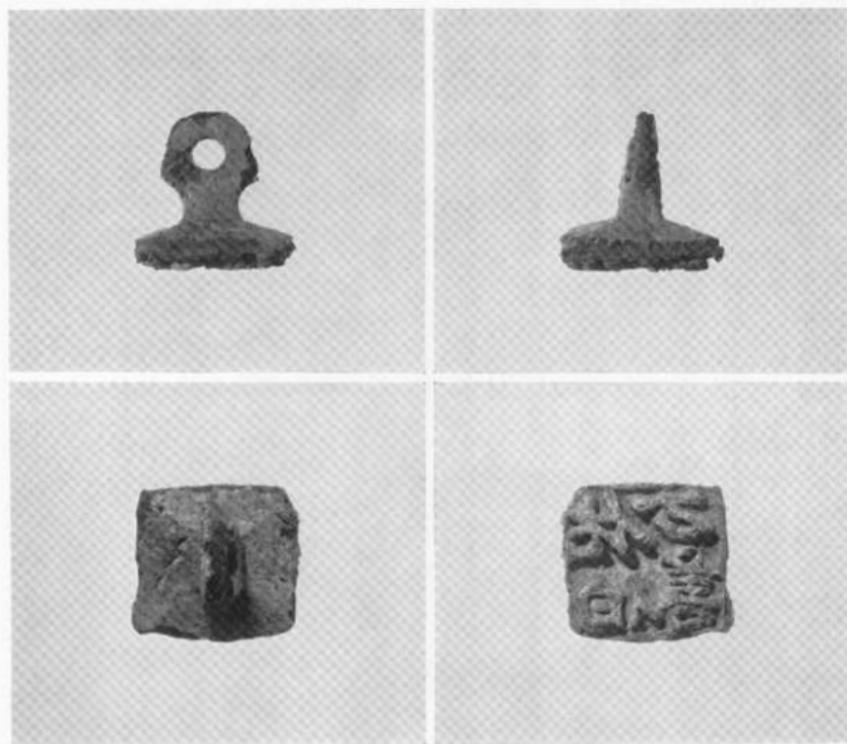
1. 青磁 9 類



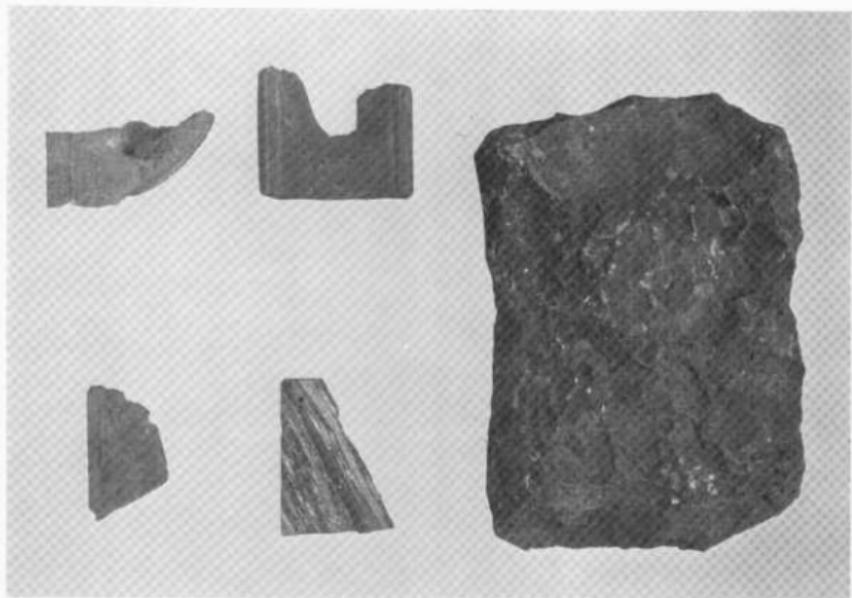
2. 高麗青磁, 青白磁



1. 軒瓦



2. 銅印（実大）



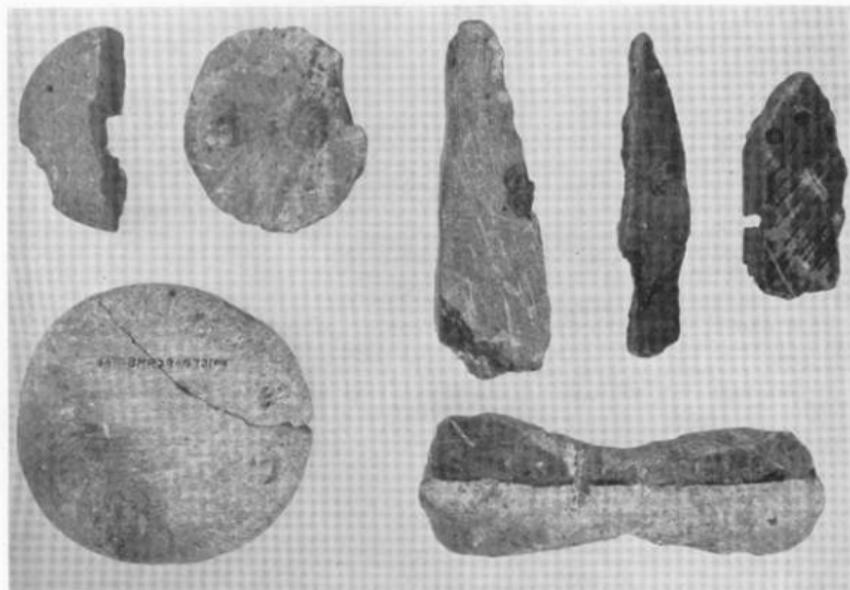
1. 石製品



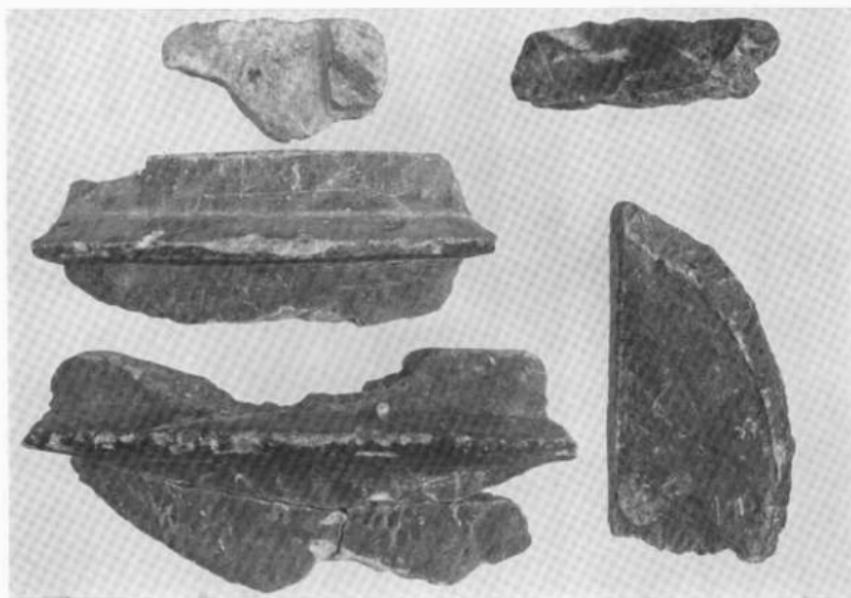
2. 滑石製品 (1), 破石



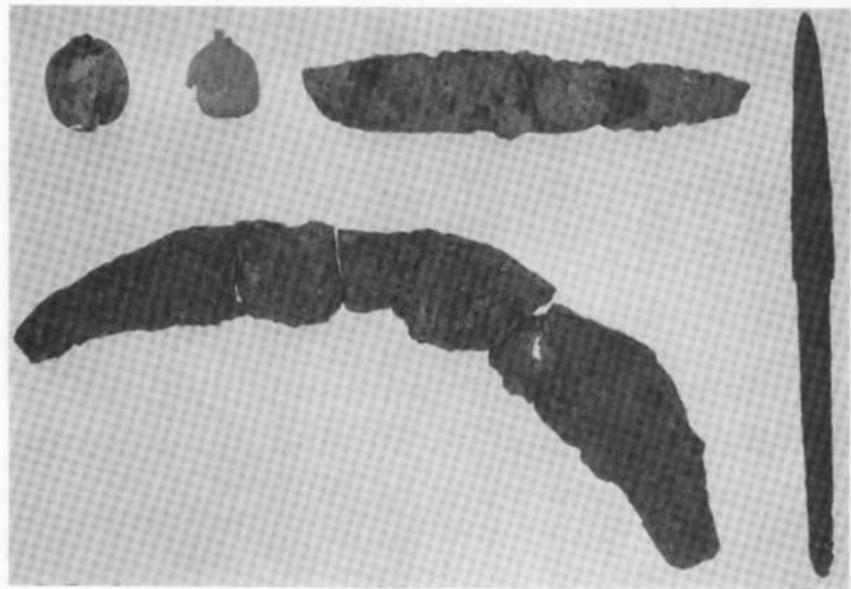
1. 滑石製品 (2)



2. 滑石製品 (3)



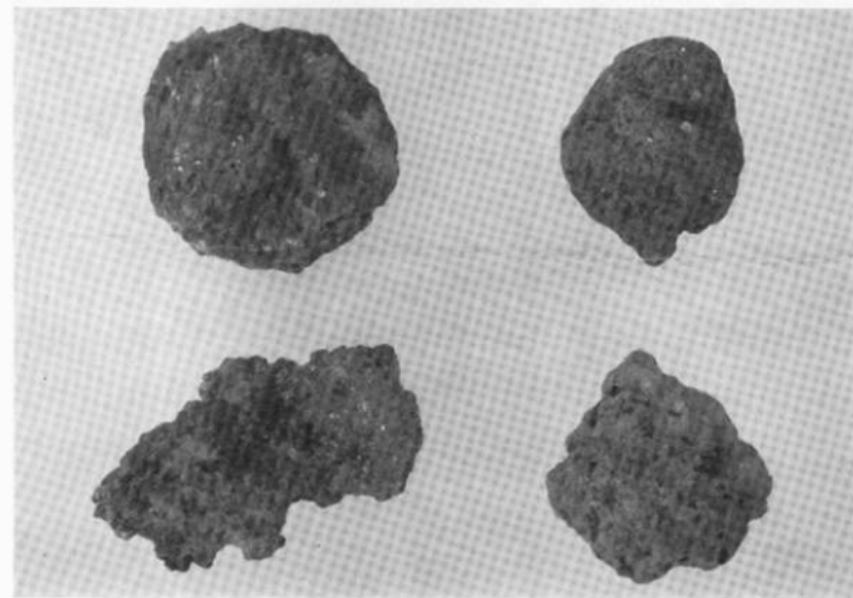
1. 石 鋸



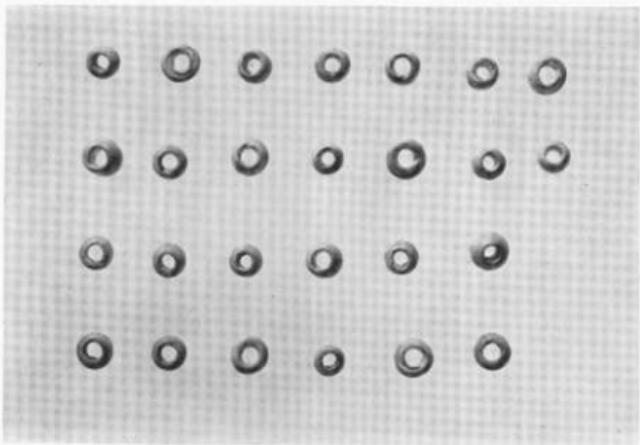
2. 金屬製品



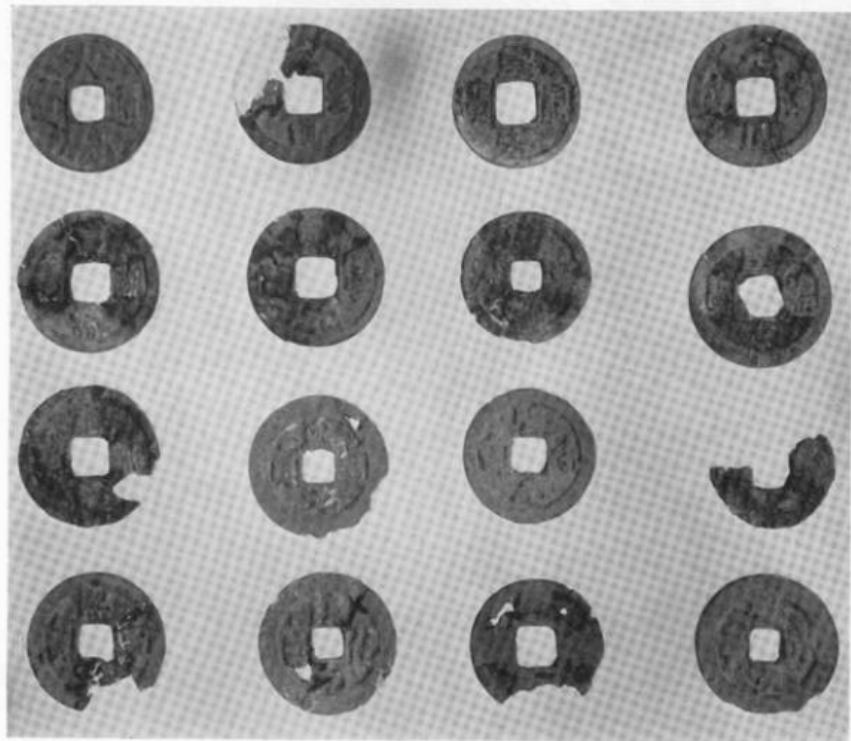
1.とりべ、鰓羽口



2. 鉄滓塊



1. ガラス製小玉（実大）



2. 銅錢（実大）

福岡県筑紫郡太宰府町御笠川南条坊遺跡から出土した  
木製品の樹種名と材質について

九州大学農学部

松 本 務  
林 弘 也

出土木製品ごとの樹種名一覧表は別表として示す。

この調査結果を木工文化的に考察すると、出土品が鎌倉中期の木製品と考えられるだけに、金属製木工具の発達普及とともに、木材の使用目的に対する樹種と材質についての知識が豊富であり、それに伴った木工技術も、この時代には一応確立されていたと考えられる。

以下各樹種ごとに若干の考察を示す。

### I 針葉樹材

#### 1. ヒノキ

ヒノキ材はわが国では勿論、世界でも有数の優良材質で、木理通直で肌目はこまやかで切削その他の加工性は最もよく、仕上げ面也非常によく、さらに芳香と光沢を有する。したがって建築材をはじめ、あらゆる方面に用途が広い。出土品は、井戸枠（曲物）、下駄および下駄の歯などである。

厚さ1cmの井戸枠曲物として使用されていたことは、ヒノキ材が長さ方向（繊維方向）の曲物として適しておるとともに、腐れにくく水湿に耐える特性を利用したものであり、サクランの樹皮でとめる技術とともに、当時は既にかなりの知識と技術とをもっていたことが推察できる。

下駄および下駄の歯は今日のキリ下駄やスギ下駄と比すれば、わずかに重いかもしれないが、細工が容易であることと摩耗が少ないとなどの理由によるものであろう。

当時のヒノキ材は天然林（九州以外の遠隔地？）から伐採して運ばれてきた大材であったであろうから、この大材からは主たる建築材や井戸枠などを採材し、その残りから下駄や下駄の歯などをとったものと思われる。

#### 2. クロベ（ネズコ）

樹木の外見はヒノキに似ており、ヒノキ天然林中にサワラなどと混生していたものを、ヒノキと一緒に伐採し、速く運んできたと想像される。材質はヒノキに比して幾分劣ることは今日では明白であるが、当時九州にはあまり存在しなかったと考えられるだけに、ヒノキ材と同様に使用されたものであろう。出土品は井戸の桶くれとして使用されている。

#### 3. スギ

材質はヒノキに劣り、肌目はあらいが軽軟で切削その他の加工は容易である。出土品は箸、

曲物の底板、履物状木製品であり、現代においても利用されている使用法である。

## Ⅱ 広葉樹材

### 1. イスノキ

わが国では最も重く硬い材質のもので強度も大である。今日では主として南九州に産するが、当時は北部九州でも天然林の中にいくらかは存在していたと思われる。

柱根としての出土は前述の材質から当然であると考えられる。切削その他の加工は非常に硬いので困難であるが、表面仕上げは良好である。

今日の木製櫛はツゲ材が主であるが、明治時代にあってはツゲ材に次いでイスノキ材の櫛が使用されていた。これはイスノキ材の道管配列が散在状であるとともに、その内腔径が割合に小さく、木部繊維の細胞壁が厚いために肌目は極めてこまかで、さらに心材の色が帯紅褐色乃至紫褐色であり、またその色が変色しないことなどが櫛として使用されたものであろう。

下駄の歯に使用されたことは、幾分重すぎる感じもあるが、明治時代においても、カシ、ブナ、ケヤキなどの重いものが、ホオノキのような幾分軽いものとともに下駄の歯として使用されていたことなどから、やはり摩耗しにくい性質を利用したものであろう。

### 2. アカガシ

材質は堅硬で強度もあり、そして保存性も中庸であるので、井戸杭として使用されたことは適正な利用と考えられる。

### 3. サカキ

サカキ材の道管配列は散在状で、肌目は割合にこまかであるので細工はしやすい。明治時代には木櫛や刷毛木地として使用されていたが、それよりも枝条を神前に供する宗教的意味が大きい。出土木製品は玉と目され、細工しやすいことからは理解できるが、それ以上の考察はむずかしい。

### 4. ニレ属

この属のものにはハルニレ、オヒョウ、アキニレなどがあり、いずれも材はやや硬く、道管の配列は環孔である。特にハルニレの材は強靭で割れ難い。このことから明治時代には曲木として、また木挽や独楽などに使用されていた。この樹木は九州の高地にも存在はするが、それより本州とくに北海道に多く産する。これに反して九州ではアキニレが多い。アキニレはイシケヤキとも称し、材は堅硬で車輪に使用されていた。

出土木製挽がハルニレであるかアキニレであるか不明であるが、明治時代の挽物としてはケヤキを最上としていた事実と、実際にハルニレが木製挽として使用されていたことは、アキニレ材においても木製挽が作られたであろうことが想像される。

### 5. アサガラ？

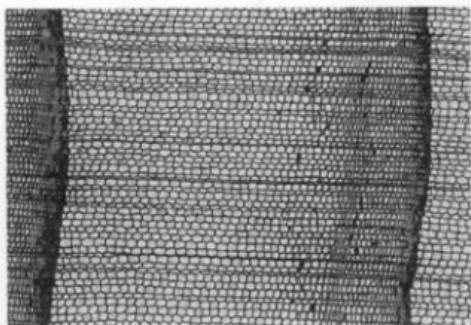
材の道管配列は環孔であり、明治時代にあっては櫛の呑口に使用されていたが、その他の特別な用途はない。

出土木製板が何に使用されたのか不明であるので考察できない。

なお、出土木材の顕微鏡写真（横断面、半径面、接線面）を別に掲載する。樹種識別にあたっては、顕微鏡観察によって行なった。

番号	出土地点	品名	樹種名
1	6AYEBL SE502井戸内	下歎齒	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> ? ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
2	" F2 柱穴内	"	イスノキ <i>Distylium racemosum</i>
3	" E14	下歎	ヒノキ ? ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
4	" B2	櫛	イスノキ
5	" SE506井戸	井戸櫛	クロベ(ネズコ) <i>Thuja standishii</i>
6	" SE503井戸内	木製椀	ハルニレ <i>Ulmus Davidiana</i> var. <i>japonica</i> ? アキニレ <i>Ulmus parvifolia</i> ? ニレ属であることは確実
7	" SE516井戸内	箸	スギ <i>Cryptomeria japonica</i>
8	" SE501井戸	曲物(井戸枠)	ヒノキ
9	" SE503井戸	曲物(井戸枠)	ヒノキ ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
10	" SE502井戸	井戸杭	アカガシ <i>Cyclobalanopsis acuta</i>
11	" SD501澗内	異物状木製品	スギ
12	" SE505井戸内	下歎	ヒノキ? ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
13	"	建築部材柱根	イスノキ
14	" C5	曲物底板	スギ
15	" SE501井戸内	板材	アサガラ <i>Pterostyrax corymbosus</i> ? エゴノキ科
16	" SD502澗内	下歎と齒	ヒノキ? ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
17	" SE501井戸内	木製玉	サカキ <i>Cleyera japonica</i>

木製品樹種名一覧表



SE 506井戸 桶板

クロベ

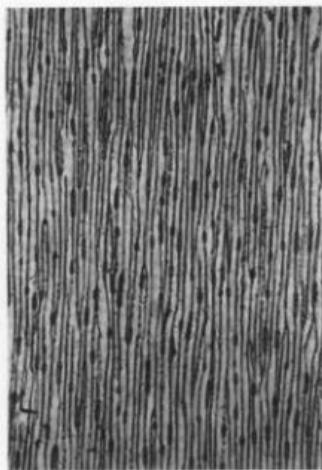
*Thuja standishii*

1. 横断面 ×31
2. 半径面 ×31
3. 接線面 ×31
4. 接線面 ×75

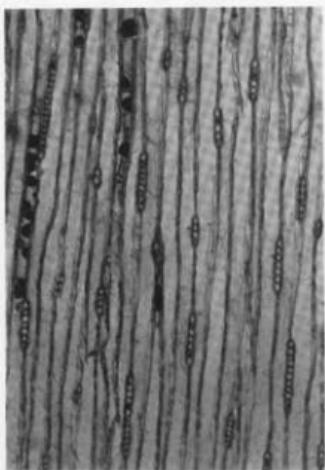
(木材断面顕微鏡写真)



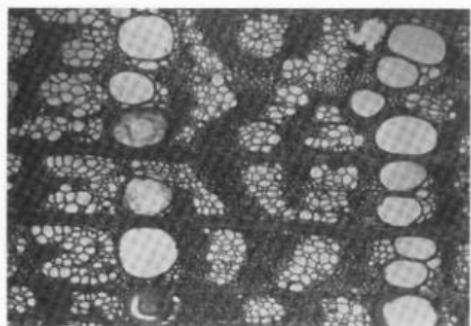
2



3



4



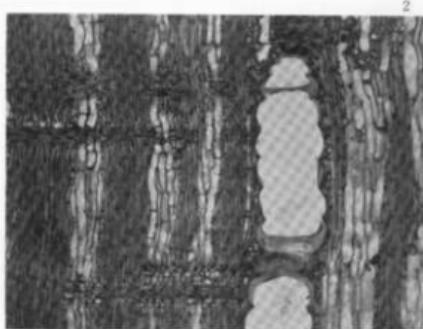
1

SE 503井戸出土 木製椀

ニレ属

*Ulmus spp.*

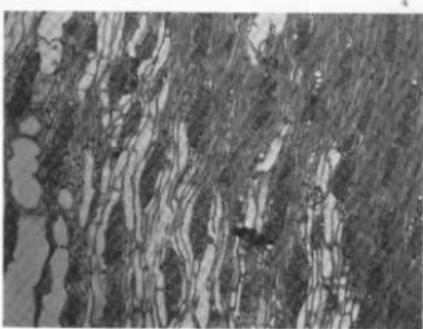
- |        |             |
|--------|-------------|
| 1. 横断面 | $\times 31$ |
| 2. 半径面 | $\times 31$ |
| 3. 半径面 | $\times 75$ |
| 4. 接線面 | $\times 31$ |
| 5. 接線面 | $\times 75$ |
- (木材断面顕微鏡写真)



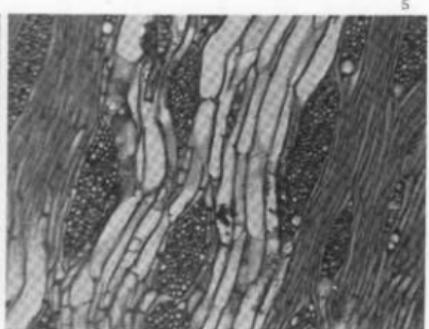
2



3



4



5



SE 502井戸杭

アカガシ

*Cyclobalanopsis acuta*

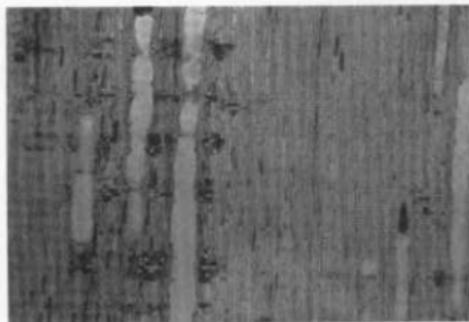
1. 横断面  $\times 31$

2. 半径面  $\times 31$

3. 接線面  $\times 31$

4. 接線面  $\times 75$

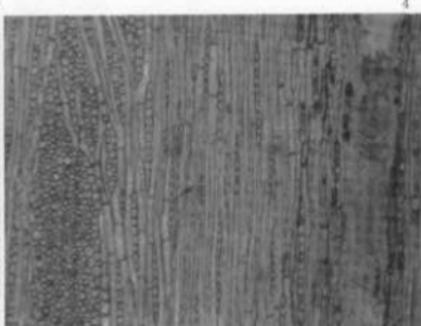
(木材断面顕微鏡写真)



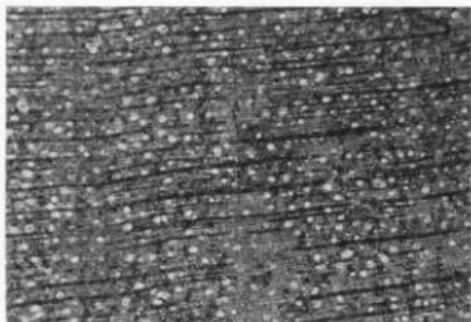
2



3



4



建築部材 柱根

イスノキ

*Distylium racemosum*

1. 断断面 ×31

2. 半径面 ×31

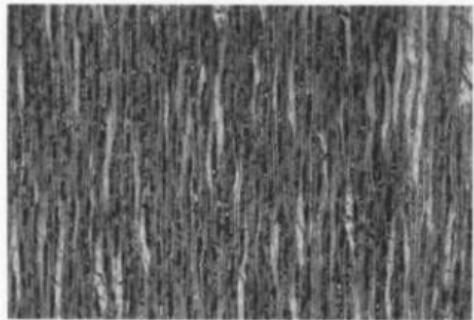
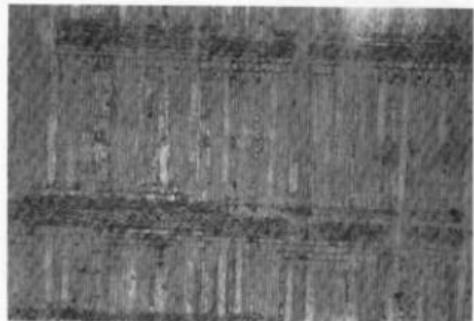
3. 接線面 ×31

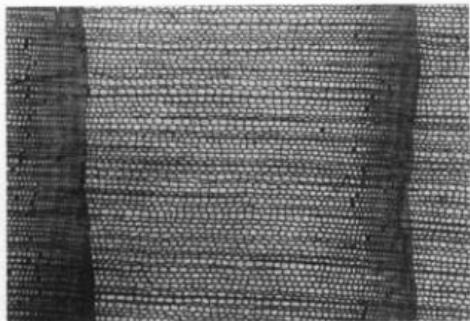
(木材断面顕微鏡写真)

1

2

3





LC 5 区出土 曲物底板

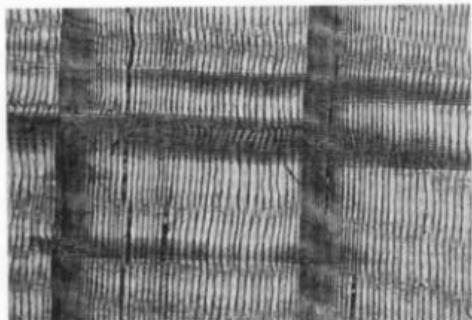
スギ

*Cryptomeria japonica*

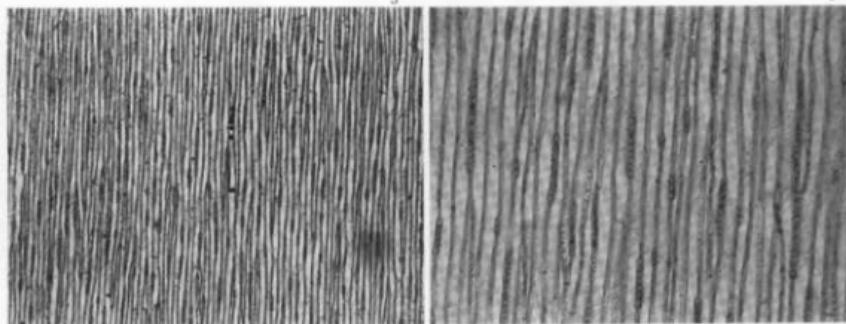
1. 横断面 ×31
2. 半径面 ×31
3. 接線面 ×31
4. 接線面 ×75

(木材断面顕微鏡写真)

1

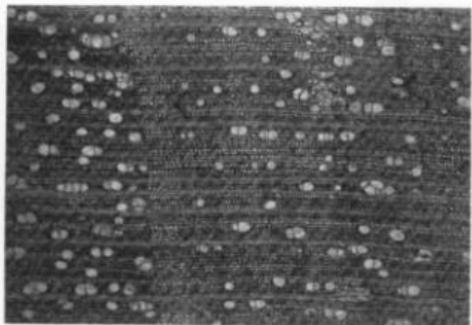


2



3

4



1

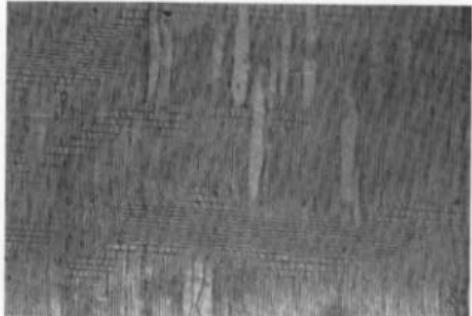
SE 501井戸出土 板材

アサガラ

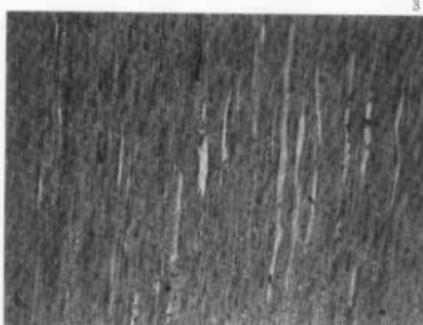
Pterostyrax spp.

1. 横断面 ×31
2. 半径面 ×31
3. 接線面 ×31
4. 接線面 ×75

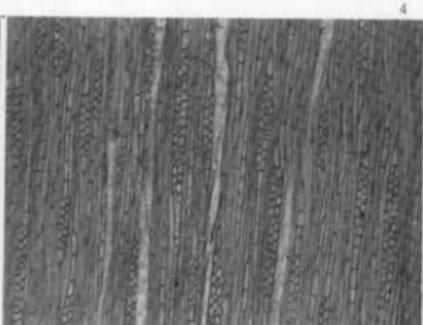
(木材断面顕微鏡写真)



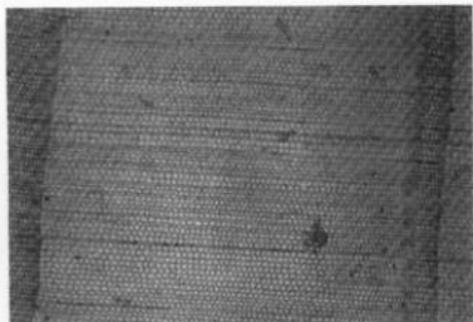
2



3



4



SD 502溝出土 下駄

ヒノキ

*Chamaecyparis obtusa*

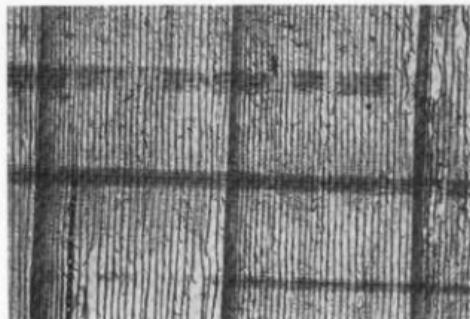
1. 横断面 ×31

2. 半径面 ×31

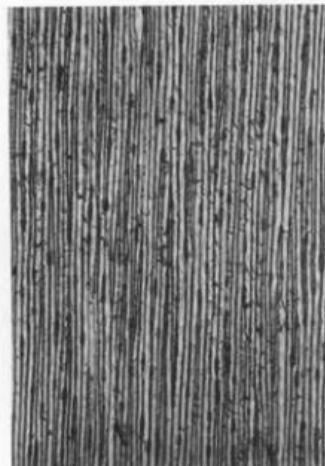
3. 接線面 ×31

4. 接線面 ×75

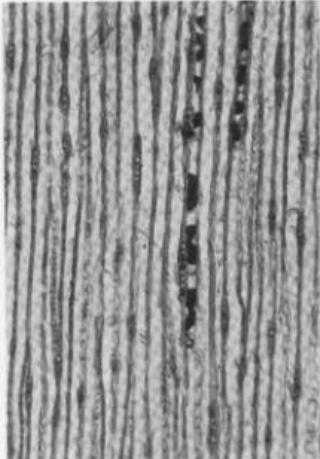
1 (木材断面顕微鏡写真)



2



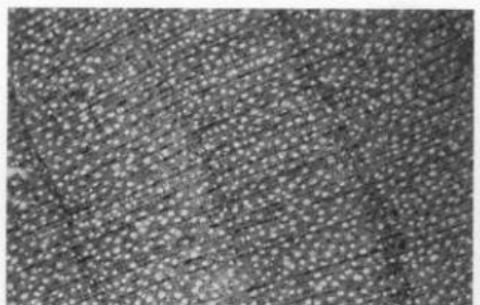
3



4

SE 501井戸出土 木製玉

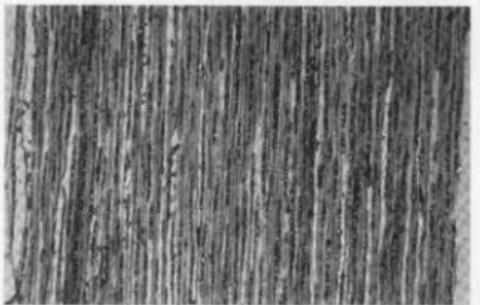
サカキ

*Cleyera japonica*

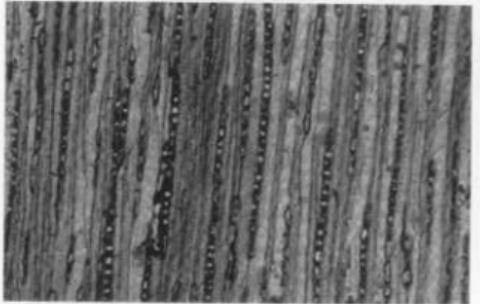
1



2



3



4

(木材断面顕微鏡写真)

**福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告**

**—第 3 集—**

昭和51年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 正光印刷株式会社

福岡市中央区赤坂1丁目2の21